
モノクロームの夢の中から

彩霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロームの夢の中から

【Nコード】

N0160V

【作者名】

彩霞

【あらすじ】

何度か見ている夢は、記憶にない場所の夢。
つていうかむしろ記憶喪失だし？
記憶がなくてもポジティブにがんばる日常を目指しています。

登場人物紹介（前書き）

随時更新予定…です。

最終更新日：10/10

登場人物紹介

ミア（ ?歳）

髪：シルバーグレイでストレートのロングヘア、お仕事中は後ろで束ねている。

瞳：黒

色白で、見た目は13〜4才くらい。

街道沿いの野原でボーっとしてたところをとある冒険者グループに拾ってもらった。

絶賛記憶喪失中の主人公。

白枝亭に住み込みで働いている。平服にエプロン常時装備。

マリー（ 32歳）

髪：プラチナブロンド、ストレートでセミロング。いつも後ろで束ねている。

瞳：アクアブルー

白枝亭の女将さん。主に接客と掃除を担当。

『ブリマ、ホワイト白の舞姫』と呼ばれていた…？

クルト（ 34歳）

髪：ココア

瞳：グレー

白枝亭のご主人。調理全般を担当している。料理の腕はなかなか。

リユート（ 18歳）

髪：ライトブラウン

瞳：ライムグリーン

酒屋の息子。新しいお酒を色々と考えている。

ユーリエ（ 17歳）

髪：ブルネット

瞳：ロイヤルブルー

薬草屋を営む。青色魔法を使える。

ゼルマル（ ）

魔法士。青色と緑色の魔法を使える。

フェリックス（ ）ラルフ（ ）アリサ（ ）エリカ（ ）レック
ス（ ）

白枝亭の常連の冒険者グループ『白を継ぐもの』。
ラルフは引退して鍛冶屋の跡取りとして再出発中。
代わりにレックスが参入。

アルフォンス（ ）メリンダ（ ）グレン（ ）

迷子の兄妹と、その父親。

ヴァルヴィック商会のえらい人。有名な商会。

シャルテ（ ）

タレイアのミルファム教会でシスターをしているお姉さん。
緑色魔法の使い手。

グンドルフ（ ）

衛兵隊の隊長さん。

リゼル（ ）

冒険者ギルドの受付のお姉さん。
顔が広くて頼りになるけど、ちょっと早とちり。

エステル（ ）レイア（ ）エメット（ ）

アンフィット大陸から来た冒険者グループの人たち。
レイアとエメットは妖魔族で、レイアは鱗妖、エメットは翼妖。

1 いつもの夢

真っ白な

どこまでも真っ白な世界に

あたしは立っていた

たくさんの黒い人の影たちに囲まれて

たくさんの視線を感じた

蔑むような

憐れむような

あまり感じの良くないその場に

あたしは立っていた

正面には1人の特に濃い影が見える

すぐ目の前にいるようで

でもずっと向こうにいるようで…

不意に言葉が響いた

声ではなく

直接身体の中に言葉が響いてきた

『……、……ミア………の力………、……び………ら………』

ざわめく周りの影たち……

その瞬間

世界が暗転し

体が落ちていくような感覚を生じて……

1 いつもの夢（後書き）

まだどんな方向へ転がるかはあんまり決まっていなかったりもしますが、お付き合いいただければ幸いです。

2 いつもの朝

ゴンっ

という鈍い音とともに目の前がちかちかした。

「~~~~~っっ!!」

すつつごく頭が痛い…

涙眼を開いてみると目の前には床が…

「何かすごい音がしたけど大丈夫かい？」

外から声が掛けられた。

この女将さんのマリーさんだ。

「だいじょぶです〜…」

ほんとはあんまりだいじょぶじゃないけど（泣）そう返事を返してとりあえず床に座りなおす。

ベッドから落ちたのね…とほほ

でもひとつだけいいことが。

いつもあの夢を見た朝は、何か緊張するときのような変な気分になっただけ

今日は床と頭のケンカのおかげでそんな変な気分にはならなかった。何かやなんだよね、あの気分。

とりあえず…

着替えてお手伝いに行かなきゃ。

ここは冒険者の宿と呼ばれる施設であたしはここに泊めさせてもらってる。

そもそも事の発端は、この宿の常連さんのグループがあたしを捨ててくれたところから始まる。

街道沿いの野原で、普段着で何も持たずにボーっとしているあたしを見かけたその人たちは

不思議に思っけて声をかけてくれたみたい。

そのときあたしは、いつもの夢から覚めてモヤモヤした気持ちにとらわれてた。

色んなことを聞かれたんだけど、頭がボーっとして何を聞かれてもちっとも思い出せなかったから

とりあえず街まで連れて行ってもらって、ここの宿に預けられた。

連れてきてくれた人たちの口利きもあって、居候させてもらえることにはなっただけ

タダってわけにもいかないと思っけて、従業員として働かせてもらってるんだ。

だっけて、お金も持っけてなかつたんだもん…。

着替えも終わっけて、下に降りたらいつもどおりマリーさんは笑顔で迎えてくれた。

「おはよう、ミア。今日もしっかり頼むよー！」

そう、ここに来て1週間。あたしが思い出したのは、自分の名前……たぶん。

夢の中でそんな風に呼ばれていた気がするだけなんだけどね。

「マリーさんおはようございます。今日もよろしく願いします」と、深々とお辞儀。

ここで働きたいと言ったとき、少しだけびっくりしたマリーさんが、一番最初に教えてくれたこと。

「うちはお客様相手の商売だから、挨拶がとても大事。元気な挨拶ができない子は雇うつもりはないよ?」

と言われたから、精一杯の声で「よろしくお願いします!」と挨拶をしたら、笑顔でうなずいてくれたんだ。

「さて、それじゃそろそろ早い人たちが起きてくるから、テーブルの準備からね。」

「はい!」

積み重ねたイスを降ろして、テーブルを拭いていく。拭き終わったところには、お泊りのお客さんたちが起きだしている気配が聞こえてきた。

「ミア、厨房に行ってクルトの方を手伝ってちょうだい。」

「はい!」

クルトさんはここのご主人さん。料理が上手でこここの宿で出されるものは全部クルトさんがつくってる。

「クルトさん、おはようございます。お手伝いしました!」

「おはよう、ミア。今日も忙しくなりそうだ…お皿の準備から頼む

よ。」

そう、いつもご飯時は大忙し。そんなに大きな宿じゃなかったから、ずっと二人で切り盛りしてたみたいけど、この忙しさを感じると、二人ともどんなにすごいんだろって思っちゃう。

「ミア、ボーっとしてないで、できたものから運んでくれよ?」

「あ、ごめんなさい、すぐいきます」

今日もいつものように、朝の食事戦争、開戦なのです。

3 一人でお使い

「やあっ！」

カコンッ

小気味良い音を立てて薪が真っ二つになる。
これはあたしのお気に入りのお仕事の一つ。

朝食時の片付けも終われば、次はもうお昼の準備に取り掛からなきゃいけない。

でもあたしは、料理はあんまり得意じゃなかったみたい…（あまりにも包丁の扱いが危なっかしくてクルトさんにすぐに止められたの…）

だから、チエックアウトした部屋のお掃除や薪割り、お買い物なんかでお手伝いしてる。

薪割りは、クルトさんのお仕事のようすを見てたときに、何となくできそうな気がしたからちょっと試させてもらったら、意外と上手くいったんだ。

以前にやっていたのかもしれないし、何か思い出せたらってことでさせてもらってる。

っていつても、あんまりたくさんはできないんだけどね。

割るのは楽しいのよ？でも…

ある程度の量を作ったら、薪を束ねて裏にそろえておかなきゃいけ

ないの。

実はこれが大変で、薪って束ねるとすっごく重くなる。

ふらふらしながら運んでいるのを見て、クルトさんは

「斧の扱いは割と様になってるのになぁ」って笑ってた。

一応女子だもん…力持ちの方だとは思っけど。

ま、包丁でケガするよりは運んでる方がいいし、がんばらなきゃね！

「ふい、おっしまい」

汲んでおいた水で手を洗って、お勝手から宿に戻ったら、クルトさんがお昼の仕込み中だった。

「薪割りかなりよーです！」

「はい、ご苦労様。戻ったらマリーが来てくれて言ってたよ。」

「はい。いつてきまーす。」

ととととカウンターの方に向かったんだけど。

マリーさんはいなかった。

「はれ？マリーさん！」

「あ、ミア来てくれた？ちょっと待ってね。」

上からマリーさんの返事が。待っているとすぐにマリーさんが降りてきた。

「もうお昼も近いし、クルトは手が離せないだろうし、あたしも出られないからちょっとお使いお願いね。」

「はい。何か買ってくるの？」

「いや、頼んでくるだけでもいいよ。こないだ一緒に行った市場の酒

屋さん、またいつものやつ1樽っていえばわかるから。」

「ん、それじゃいつてきますー。」

「お昼前には戻ってこれるようになちよつと急いでね。」

「はい。」

市場まではそんなに遠くないけど、だいぶお日様も高くなってるしちよつと小走りしていくことにした。

道も簡単だし、すぐに市場には到着。

「酒屋さんは…あつちの方だったかな？」

「ばつちり正解。ちゃんとありました。」

店頭には初めて見るお兄さんがいた。こないだはおじさんがいたのに。

「すみませーん。」

「いらっしやいませ。初めてですか？」

「えと、この前一度来て、白枝亭のお手伝いをさせてもらってて…」

とそこにこないだ見たおじさんが奥から出てきた。

「おう、嬢ちゃん、お使いかい？」

「あ、こんにちは。お願いします。」

そのやり取りを見てお兄さんがおじさんに声をかける。

「親父、この方は？」

「白枝さんとどここないだから手伝いしてるって嬢ちゃんだよ。」

とおじさんが紹介してくれたし、あいさつあいさつ。

「はじめまして。白枝亭のお手伝いすることになったミアです。よろしく願います。」

「そうですか。僕はリュートです。これからもごひいきに願います。」

深々とお辞儀をするお兄さん。丁寧な人だなあ。

リュートさんのあいさつが終わったらおじさんが声をかけてくれた。

「それで、注文は何だい？」

「あ、そうだった。えと…いつものやつ1樽お願いします。」

「届けるのもいつもの時間くらいでいいのかい？」

はれ？時間…?!なんて聞いてないよ…

「えと、えと…特に何も言われなかったからそれで大丈夫…かな？」

「おいおい、大丈夫かい？」

と酒屋のおじさんに笑われてしまった。

「ま、もし急ぎだったりしたらまた連絡に来な。こいつに運ばせるから。」

そういっておじさんはリュートさんの肩をバンバン叩いて笑った。

「ありがとうございます。それじゃお願いします。じゃ、ちょっと急ぐので…」

ぺこりと頭を下げて走る。

「ありがとうございます。」

背中からリュートさんの声が聞こえた。

ん〜、おじさんと全然違うなあ…

そんなことを考えながら走ってたから、宿に帰るまでここにしま

ったのは内緒…

うー…いたかった…

4 黒い来訪者

「にゃー」

朝、まだぼーっとしてるときに、ネコの鳴き声が聞こえた、ような気がした。

あたしはネコなんか飼ってないし、白枝亭でも飼ってないから、たぶん気のせい。

あー、でももう朝かあ…起きなきゃ…

「んしょ…ん…？」

起きようとして何か足元を感じる…

「にゃー」

「ひ…うあ?!」

黒い塊が何故かあたしのベッドに…

「き…!」

叫びそうになって、思いとどまる。まだ早いのに大声あげたらお客

様に迷惑だ…

かろうじて叫ぶのをこらえ、もう一度しっかりと黒い塊を見ると、まだそんなにおっきくないネコだった。

「キミ、どこから入ったのよ…もお…」

「にゃー」

小声で話しかけたけど、当たり前だけどまともな返事なんてなかった。

部屋を見回すと、窓が少しだけ開いていた。

「あれ…開けてたっけ…疲れてるのかなあ？」

「にゃ？」

何か、ネコに返事されたみたいでちょっとかわいかった。

けど、とりあえずこのまま居つかれても困るし、着替えて外に追い出すことにした。

とんとんとんと…と階段を降りていくと、マリーさんも朝の準備をしていた。

「マリーさんおはようございます。」
「おはよう、ミア。ん？」

あたしが手にぶら下げてる黒い塊を見て目を細める。

「あ、何か今朝起きたらあたしのベッドにいたんです。窓が開いてたから、昨日閉めずに寝ちゃったみたいで…」

「へえ…また若い娘の部屋に忍び込むなんて大したネコだねえ。」

「ひう、と、とりあえず追い出してきますね。」

慌てるあたしを見て笑ってるマリーさん。むう、からかわれてる？

外に出てネコを地面に下ろすと、ネコはその場にちょこんと座ってこっちを向いた。

「さ、もう間違えて入ったりしたらだめよ？」

「じゃー」

また絶妙のタイミングで返事されたみたい？
とにかく朝の準備もあるし、すぐに中へ入った。

「いけたかい？」

「すみません、放してきたから、すぐお手伝いします〜。」

マリーさんに返事をして、テーブルのセッティングを始める。

何か変な朝になっちゃったな…

朝の食事戦争も一段落して、ちょっと一息。
厨房で朝ごはん。っても、仕事がないわけじゃないから、順番に一人ずつ。

お昼の準備もあるし、チェックアウトしたお部屋の片づけもあるからそんなにゆっくりもしてもらえない。
チーズと菜っ葉がはさんであるパンにかぶりつく。

急いでご飯をすませたら、お部屋の片づけに行く。

マリーさんはもう始めてるはずだけど…

「あ、ミア。今日はちょっと少ないからあなたの部屋のシーツもまとめてやっちゃおうよ」

「はい、一緒に集めときますね。」

お客様の部屋を回ってベッドのシーツを集めてまわっていると、シーツの塊に背を抜かされることもある。

前にシーツの山を運んでるとき、クルトさんに「ミア、シーツのお化けみたいになってるぞ。」「って心配されたことがある。ちゃんとそのうちおつきくなるもん…」

今日はそこまで量は多くないけど、ちょっと視界は悪い。最後に自分のシーツを回収しようと、部屋に入ったとき…

「にゃー」

「へあ？」

聞こえた…朝と同じ声…

シーツを下ろすと、朝と同じようにベッドに黒い塊が…

「キミ、また来たの…?」

「にゃー」

あー、そういうえば窓閉めてなかったカモ…（汗）

「それにしたって、何度も窓からなんて、泥棒みたいじゃない…」

「にゃ？」

「とぼけてもダメ！シーツ集めるし、出てってね。」

ちよつとめんどくさくなって、窓の外に追い出す。窓から入ったんだし、屋根の上でも平気でしょ、きつと。
今度はちゃんと窓も閉めて、シーツを回収する。

「変わったネコだったにゃ〜…はっ、伝染った?!」

あわてて首を横に振り振り、シーツを運ぶ。
何か変に疲れちゃった気がするよ…

5 お友達

今日はお使いも兼ねて、ユーリさんのところにお邪魔してる。

ユーリさんは、あたしよりたぶん年上のおねーさん（っていつても自分がいくつかはわかんないんだけど、背もおっきいし、スタイルもいいし…むう）で、お茶とかハーブをうちに卸してくれてる治療士^{セラピ}さん。

ほんとにユーリエさんなんだけど、初めて来たときに、お友達になつてもらつて、愛称で呼んでねつてことでユーリさんって呼ばせてもらつてる。

ハーブじゃなくて魔法でケガや病気を治す専門の人たちもいる。

それは、白色魔法を使う治療師さんたちで、冒険者の宿にいと、白色魔法を使う人たちも結構来てるみたい。

でも、普段街でお世話になることが多いのはユーリさんみたいな治療士さんなんだ。（魔法つて使つてらうと早いけど、結構お金がかつたりもするみたい。）

「あ、そうだミアちゃん、また新しいのあるから試してくれない？」

「わーい、ユーリさんの新作？」

ユーリさんは、街の外までお茶の材料やハーブを採りに行つてるなかなか行動的なおねーさん。

遊びに来るたびにいろんなお茶をご馳走してくれるからそれも楽しみだったりする。

「今回は、川の上流のほうで採ってきたハーブを混ぜてみたんだけど…」

「ふあ、何かスーッとする香り？ん〜……………あう、何かピリピリ、スーする…」

「ちよつとミアちゃんにはきつかったかな…ごめんごめん。何か甘いもの取ってくるね。」

ペロツと舌を出して謝るユーリさん。ちよつと照れたような顔で苦笑いされると…何かあたしも照れちゃう。

でもいいなあ…あたしも街の外とかも見てみたいな…
最初に拾われたときのことなんてあんまり覚えてないし…

「何ぶつぶつ言ってるの？声に出てるわよ〜」

いつの間にか戻ってたユーリさんにツッコまれた。はう…（恥）
持ってきてもらったドライフルーツをかじりながらユーリさんに聞いてみた。

「ねえ、ユーリさん、街の外って危なくないの？」

「そうね〜…あたしはあんまり危ない所に行かないからね。一人で行くときは見晴らしのいいところか、街からそんなに遠くないところだけだし。ちよつと森の奥とかになるとやっぱり何かあったら怖いから、獵師さんと一緒に、とかかな？」

「ふみゅー…じゃ、街の近くならあたしでもいけるかな？」

「ん〜…さすがにミアちゃん1人じゃちよつと…あたしは一応こう

見えてちよつとは戦えるからね。」
「ええっ?! ユーリさんすごい...!」

照れたように笑いながら「まあ、あんまり当てにはならないけどね」
って言ってたけど、きつと魔物と戦ったこともあるんだろなあ...

「そうね... 今度また見回り強化期間になれば、あたしと一緒に
てみる?」

「ほあ?!」

ポーっとしてるところにすごい提案をされちゃった。

見回り強化期間っていうのは、街の周りを衛兵さんや自警団の人
たちが頻繁に回る期間で、人が大勢回るからあんまり魔物も近づか
くなるみたい。

その間ならってことでユーリさんが考えてくれたんだ。

「い、いきたいです!」

「あはは、まあまあそんなにがつつかなくても。わかった。約束ね。
あ、ただし、クルトさんとマリーさんがいって言うてくれたら、
だからね?」

「うん、帰って聞いてみるね。ユーリさんありがとー!」

思わず抱きついたら、頭をなでなでされちゃった。むう、こどもじ
やないもん...

5 お友達（後書き）

ちょっと修正しました。

6 再来

以前の侵入から数日後、宿の前を掃除しようとして外に出たあたしを出迎えてくれた子がいた。

「にゃー」

「うわ、でたっ！…ってお化けじゃないんだしひどいよね…ごめん。

」

「にゃ？」

そう、前にあたしの部屋にフホーシンニューしたネコだった。

それにしても会話になってるんだかなくなってないんだか…意外とあたしの言ってることわかってたりするのかなあ？

とりあえず宿の前を掃いていく。

その間、ネコはずっとおとなしく座ってあたしのことを見てるようだった。

「そんなに見てたって、キミを飼うことはできないよ？あたし、この居候だもん。」

「にゃ？」

「ん〜、だからあたしはここで世話になってるだけで、このご主人さまじゃないから、許可は出せないってこと。なんて難しいよね。」

「にゃー…」

あたしの返事に、何か考え込むような仕草がちょっとかわいかったりする。

でも、やっぱりダメだね。あたしじゃこの子にエサをやることだつてできないし。

あたしを飼う(??)だけでもマリーさんやクルトさんには十分迷惑をかけてると思うし…。

「ごめんね、やっぱりきつと無理なの。」

うう、そんなきよとんとした眼で見られても困るから！

ちょっとかわいいけど、しょうがない。掃除を終えたあたしは、宿の中に戻った。

お昼ご飯時は朝晩に比べると、人も少ないことが多いのでちょっとは気が楽なんだけど、それでもお客様がいないってことはない。

ただ、お昼からお酒をたくさん飲む人もあんまりいないから、お給仕はそれなりにスムーズにできる。

夜は人もいっぱい、お酒が入って盛り上がっちゃうこともあるから、気を抜くと運ぶの失敗したりするもんね。

とにかく今日のお昼ご飯も無事終わり、休憩がてら自分のお昼ご飯。

今日はうすつぱたく焼いたパンに、野菜のスープ
クルトさんのご飯っていつもおいしい。ほんとここでお世話になれ
たのってラッキーだなー。
なんて考えながら食べてたんだけど。

「ミア、スープこぼれてるよ。ニヤニヤして何か思い出し笑いかな
？」

「ひう？あうう…クルトさん今日もおいしいですっ！」

うう、恥ずかしいとこ見られてた…

クルトさん、後ろ向いてるけど、肩が震えてるよ…そんなに変な顔
してたのかなあ…ちよつと気をつけないとダメかも…

つと、また考えに入りこんで大変なことにならないようにまずはご
飯食べちゃおう。

「と、そうだ。私はこの後、ちよつと出かけてくるけど、ご飯が終
わったら食器だけ頼んだよ。」

「はい。どれくらいで戻られますか？」

「市場のほかに、鍛冶屋さんにも寄ってくるつもりだから、いつも
よりは少しかかるかな。」

「お手伝い行かなくていいですか？」

「大丈夫だよ。そうだなあ、マリーの方が何かあるかもしれないし、
あとで聞いてみてくれるかい？」

「りょーかいです。いつてらっしゃいます。」

お鍋と包丁を1つ箱に納めて、あたしがぶんぶんと手を振ってるの
に笑顔で答えてクルトさんは厨房から食堂の方へ出て行った。食堂

には、カウンターと正面玄関があるから、多分マリーさんに行つてきますをして、正面からお出かけたね。

「マリー、ちょっと行つてくるから。」

「あ、クルト、行つてらっしゃい。」

向こうの部屋から、いつものように交わされるあいさつが聞えた。マリーさんとクルトさんつてほんと仲がいいなあって思う。

それに2人ともとっても優しい。(もちろんあたしを置いてくれていることを差し引いても十分お釣りがくるくらいに！)

よっし、さっさとご飯食べて、食器片付けてマリーさんのお手伝いに行かなきゃ！

と思つてたらまた食堂の方からクルトさんのちょっと慌てた声が。

「うわっ、びっくりした。」

「どうしたの？大丈夫？」

「ああ、大丈夫。足元にネコがいたから、危うく引っかけてしまうところだったよ。」

「もう、気をつけてね？」

「わかつてるよ。いつてきます。」

んー、やっぱり2人のお互いを思う気持ちを感じるなあ。素敵なご夫婦

それにしても…ネコ…？ってあの子だよ、きっと。まだいたの…

？
(汗)

7 お願いつと

今日も晩ご飯のにぎやかな時間も終わり、後片付けも一段落した。いつものように、厨房でほっと一息のティータイム。

ま、この後は休むだけだから、普通のお茶じゃなく、ハーブティーだけ。

普通のお茶は、飲みすぎると寝付けなくなるんだって。

絶対そんなことないと思うんだけどなあ。いつもベッドに入ったらすぐ寝てるし。

「今日も無事終わったね。1日お疲れさん。」

「マリーもいつものでいいかな？」

「そうね、お願い。」

マリーさんが返事するよりも早く準備に取り掛かっているクルトさん。さすがだよー…。

「はい、おまたせ。」

「ありがとう。」

手際よくお茶を淹れたクルトさんもテーブルについて、今日のことをあれやこれやと話してる。

まったりと過ぎるこの時間もあたしは結構好き。

ぼーっとしてると急に話を振られたりもするんだけど。

「でも、ミアもだいぶ慣れてきたねー。」
「ふぁ？えー、まだまだですよー…料理ダメだし…」

マリーさんからの急な振りにちよとびっくりしつつ、でもやっぱりあんまりできてないんだよね、あたし。

「そんなことないよ。ミアが来てからお客様を増えても対応できるよつになってるからね。」

「そうよ。助かってるわ、ほんと。」

「はう、ありがとーございます。」

2人からそんなにいわれるとちよとと恥ずかしい…けど嬉しいかも。

「また明日も頼むよ。」

そう言ってくれたクルトさんも、マリーさんもとっても素敵な笑顔を向けてくれた。

「さてと、それじゃそろそろ片付けて休みましょうか。」
「そうだね、あまり遅くなるとまた朝が大変だろうし。」
「あ…ちよととだけいいですか？」

あたしから話を振ることはあんまりないから、2人ともちょっと不思議そうな顔をしてる。

実はこの間から、ユーリさんのお出かけをお願いしそびれてたから、今日こそって思ったんだけど。

「えっと…」

話を振ったけど、ちょっと詰まってしまった。さっきあんなにほめてくれたのに、お出かけをしいってというのは、お休みさせてくださいってことになるから。

まだまだへっぽこなあたしを優しく見てくれる2人に何だか悪い気がしてきたから。

固まってるあたしを心配そうに見ている2人に気がついて、あわてて言葉をつないだ。

「あ、ごめんなさい。また今度でいいや。えへへ…」

笑ってごまかしてカップを片づけに立とうとしたんだけど、2人もイスに座りなおしてる…。

「ミア。座ってちょうだい。」

「あう、でも…もう遅いし…」

「いいのよ。何かお願いでもあるんでしょ？」

「ふえ?!」

びっくりした。まだ何もしゃべってないのに。

よっぽど変な顔でもしたのかな…2人とも普通に笑顔でいたのに、びっくりしたあたしを見て声をあげて笑ってる。

「な、何で知ってるの?」

「伊達に客商売をしてないってことよ。」

ふふつと笑うマリーさん、その横でやっぱり笑顔のクルトさん。

2人ともほんとにすごいなあ…

「それで、どんなお願いかしら?」

「あう…えと、えとね、ユーリさんが今度の見回り強化期間に薬草採りにつれてってくれるって言うてくれたの。でもね、マリーさんとクルトさんがいいって言うてくれたら、なの。」

ふうむ、と軽く息を吐いたクルトさんを、マリーさんが見る。

「えと、忙しかったらまた今度にお問い合わせするから…」

「ま、いいんじゃないかな?マリーも構わないだろう?」

別にいいですって言おうとする前にクルトさんは口を開いてた。

マリーさんも笑顔でうなずいてる。

「ま、ユーリエちゃんが一緒なら問題ないだろうし。詳しい日取りが決まったらちゃんと教えるんだよ。」

びっくりするくらいあっさりの返事に、言葉が出ず首を縦に振り続けるあたしを見て、2人はまた笑ってたけど。

「それじゃ今度こそお休みましょ。ほんとに明日の朝、起きられなかったら、それこそ大変よ?」

「そうだね。あとは私がやっておくよ。マリーもミアも、先に休んで下さい。」

「あら、ありがと。それじゃお願いね。」

立ち上がった2人にあたしは後ろから思わず抱きついちゃった。

「マリーさんもクルトさんもほんとにありがとー!」

「あはは、ミアは何だか大袈裟だね。私たちだってがんばってるミアのお願いに応えることができてよかったよ。」

そう言って、頭をぽんぽんと叩いてるクルトさん。

「それじゃ、クルトに任せて先に休ませてもらっちゃいませよ。」

というマリーさんに連れられて厨房を出た。
真つ暗な食堂をランプで照らしながら階段を昇る途中で、あることを思い出してあたしは階段を降りた。

「ん？」

降りてくる気配に気づいたマリーさんが振り返った。

「マリーさん、おやすみなさい。」

ぺこり、と頭を下げたあたしに、マリーさんも「はい、おやすみなさい。」と返事をくれた。

街の外、今からドキドキしてる。

そして、マリーさんとクルトさんの気持ち、あたしの心をホコホコにしてくれた。

この宿に来ることができてほんとによかったな

8 魔法

「ユーリさん、こんにちはー。」

今日は、ちょっと休憩をもらって、報告も兼ねてユーリさんの所にお邪魔してきた。
「ただけど…そこには先客がいた。」

「あ、お客様、ごめんなさい。」

「あら、ミアちゃん、どうぞー。」

「い、いいの？お客様が…」

「いいのいいの。ね、先生？」

先生と呼ばれたその人は、クルトさんと同じくらいの年齢の男の人だった。

「構いませんよ。僕だっていらっしやっただお嬢さんと同じようなものですから。」

「ふえ？」

「この方はあたしの魔法の先生よ。先生、この子は白枝亭で働いてるミアちゃん。」

「なるほど、はじめまして。ゼルマルと申します。」

と立ち上がってお辞儀してくれた。

こんなあいさつされたことがなかったのでちょっとびっくり。

「はう、あ…み、ミアです。よろしくお願いしますです。」

慌てて返事をしたけど、噛んじやった…

「ふふっ、ミアちゃん緊張しすぎよ〜?」

「えええっ、でもでも…」

「あんまり硬くなられると先生も困っちゃうわ。」

「あう…スミマセン…」

「こちらら、あんまり困らせてはいけませんよ、ユーリエくん。ま、でもミアさんもあまり気負わずにお付き合ってくださいね。」

あたしが縮こまったのを見てか、先生ことゼルマルさんが助け船を出してくれた。

よかった、優しそうな人で…

「あの…何てお呼びすればよいですか?」

「ゼルでも先生でも、好きなように呼んでくださって結構ですよ。」

「ゼル…先生…:はい、ゼル先生。」

何となくくつつけちゃった。いいよね。笑顔でうなずいてくれたし。そういえば、魔法の先生…っていつてたけど…

「もしかして、ユーリさん魔法使えるの？」

「あれ、言つてなかったっけ？使えるわよ。青色だけだけどね。」

「青色だけ？」

「ミアちゃん、魔法のことあんまり知らない？」

「うん…」

「白枝亭なら魔法士も来るんじゃないの？」

と不思議そうに尋ね返されたんだけど、宿で魔法使ってる人なんか見たことないんだよね。

「まあ、冒険中でもないし冒険者が魔法を使うことも少ないでしょう。」

「そっか。さすが先生。何でもお見通しね。」

「それはあなたの先生ですから。」

「何か引つ掛かるわね…。」

言葉だけ聞いてると何だか怖いけど、2人とも笑ってるから大丈夫だよな…？

「ところで、ミアさん。魔法に興味があるのですか？」

「えと、あんまり良くわかんないです。ユーリさんが魔法使いだつたのもびっくりだし…」

「ふむ。ユーリエくんも魔法は使えるが、いわゆる魔法士ソーサラーではないのです。魔法の素質を持つ人は割といるのですが、1色のみの素質という方も少なくありません。もちろん、素質があればそれなりに魔法を行使することはできますが、2色以上を使いこなせて初めて

魔法士と呼ばれるのですよ。ま、白色だけは別ですが。」

「ちなみに、先生は緑色と青色の2色が使えるから魔法士なのよ。」

ふーみゆ…ゼル先生もすごいけど、ユーリさんもすごいんだあ…

「ところでミアちゃん、何か用事があったんじゃないの？ご注文？」

「あ、そうだった。びっくりして忘れるところだったよー。」

「なるほど、それでは私はこのあたりでお暇させていただきますよ。お茶、ごちそうさまでした。」

「あ、先生ごめんね。また来てね。」

「さ、さよならです。」

笑顔で手を振るユーリさんと、あたしに軽く会釈してゼア先生は帰って行った。

「それで、今日は何のご注文かな？」

「えと、注文はないんだけど…マリーさんとクルトさんがいって言うてくれたの！」

「ん、そっか。それじゃ計画立てなきゃね。今は…休憩時間が出てきたのよね？」

「うん。だからあんまり時間がかかると困るかな…晩の準備も始まつちやうし。」

「それじゃ今度、白枝亭に顔出すから、そのときに相談しましょ。」

「わーい、じゃ、お待ちしてますっ！」

とつてもわくわく 何だか大冒険(?)の予感がする...かも!

8 魔法（後書き）

ちよつと説明っぽくなってしまいました…
少し訂正

9 パーティー（前編）

今日の晩は大きなパーティーがあるってことで、朝ご飯後からいろいろ準備に大忙し。

ちよつと気合入っちゃう。だつてパーティーを開くのは、あたしを助けて（拾つて？）くれた人たちなんだもん。

実は有名な人たちだつて聞いてびっくりした。あたしほんとに運がよかつたんだなつて。

「しかし、ラルフが引退ねー。」

「正直、俺たちにも痛手なんだけどね。ま、あいつはずつとこつちが目的だつたから。」

「マリーさんと話してるのは、フェリックスさん。」

「今回の宴会の主催者さん。」

「でもまあ、盛大に祝つてやりたいからさ。マリーさんもほんとよろしく頼むよ。」

「まかせときな。あ、ミア。ちよつと来て。」

「はい。」

2人の方に向かって行くと、先にフェリックスさんが声をかけてくれた。

「おー、すっかり元気だな。」

「そのセツはおせわになりました。」

「がんばってるみたいでよかったよ。今日はよろしくな?」

「はいっ!」

あたしも気合が入ってるからつい大きな返事をしたら、頭をくしゃくしゃなでてくれた。

「こらこら、うちの娘に手を出すんじゃないよ?」

「うわ、マリーさんひでえ…俺がそんな風に見えるかよ?」

つていつても、軽口を叩き合ってる感じ。マリーさんとフェリックスさんと、ちょっと年が離れてるっばいんだけど、あんまりそんなのを感じないって言うか…あ、何か姉弟みたいな感じ?

「あはは、まあいいわ。ミア、ちょっとお使いお願いね。クルトも手が離せないから、ここに書いてあるものを揃えてきて。」

「はい。」

「でも、ちょっと量があるね…」

マリーさんが眉をひそめる。

そしたらフェリックスさんが何か思いついたように、マリーさんに耳打ちした。

マリーさんもうんうんうなずいてる。

「んじゃ呼んでくるわ。」って言って、フェリックスさんは出て行

った。何だろう？

「ミア、ちょっと待ってね。リックが応援呼んできてくれるから。」
「応援？」

リックってフェリックスさんのことだよ。それにしても応援って…
と思っただらほどなくしてフェリックスさんが、1人の女の人を連れて戻ってきた。

「お待たせつと。連れてきたぜ。」

「ご苦労さん。アリサ、お願いね。」

「まかせてください！。ミアちゃん、はじめまして！。でもないっけ。治療師のアリサです！。」

何かほわつとした人だなあ。

フェリックスさんたちのグループの人だそう。あたしを拾ってくれたときに一緒にいたからはじめましてじゃないってことみたいだけど…うう、あんまし覚えてない、ごめんなさい。

とにかく、アリサさんと一緒に市場へ出発した。

「そうですかー。ミアちゃん、まだ思い出せませんかー。」

「はい…。でもマリーさんもクルトさんも焦らなくていいからって

言ってくれてるから。」

「ちよつとだけ、いいですかー？」

「ふえ？」

「ミアちゃんに魔法を使わせてもらっていいですかー？」

あたしに？魔法？？

「それってどういう…？」「

「あ、心配しないでいいですよー。もしかしたら記憶喪失の原因がわかるかなーって。」

急なお話にびつくりした。

記憶が戻ればいろいろわかるかもしれないけど、今まで全然思い出せそうになかったし、マリーさんやクルトさんも優しくしてくれてたから、あんまり考えもしてなかった。でもちよつと怖い気もする…

「…マリーさんとクルトさんに相談して決めてもいい、ですか？」

「そうですねー。その方がいい気がしますー。ごめんなさいねー、急にこんなこと言いだしてー。」

「ううん、ありがとーございます。」

今まで解決しようとする積極的に動いてなかったし、やっぱり考えなきやだめだよな。

「それではー、お使い、急ぎましょー。」
「はーいっ！」

時間は待ってくれないし、まずは今晚の準備をがんばらなきゃ！

9 パーティー（前編）（後書き）

また人が増えてしまいました…
人物紹介も作ろうかと思っ
てます。

10 パーティー（後編）

「それでは、我らがラルフの新たな門出を祝して、かんぱい！」

パーティーは、フェリックスさんの乾杯の音頭で始まった。

今夜はもう、いつもと全然違う食堂だった。

たくさん人が来るからってことで、イスを片付けて立食形式にしてあるけど、それでもスペースに余裕はあんまりないくらい。

うちの常連さんたちはもちろん、主役のラルフさんはこの街の人だから、ご近所さんもたくさん来てみたいなんだ。

これだけたくさんの人があると、ご飯やお酒もすっごい勢いで減っていく。

クルトさんはある程度、作り置きをしていたけれど、もちろんそれで足りるわけがないから、今も厨房で調理中。

あたしもできたものを運んだり、空になったお皿を片づけたり厨房と食堂を行ったり来たりで大忙しだけど、パーティーの雰囲気はすごく盛り上がってて、楽しくお給仕してた。

「ミア、大丈夫かい？そっちのテーブルの隅に、飲み物と簡単につまめるもの置いてあるから、適当なところで休憩していいよ。」

何度目かに厨房に戻ったとき、クルトさんがそう言って奥のテーブルを指差した。

調理だけでも大忙しのはずなのに、あたしの分まで用意してくれるなんてクルトさんすごすぎる！

「ありがとです！でもまだ空のお皿とか結構あるから、もうちょっと運んでくるね。」

「今日のミアは、いつも以上に張り切ってるね？」

「だって、あたしの恩人の方たちだもん！」

「そうだったね。まあ、無理はしすぎないように頼んだよ。」

「はい！」

厨房から食堂に新しい料理を運んでいくと、フェリックスさんのお話にもみんなが注目してた。

「それでは本日の主役、ラルフからの皆様への挨拶です！」

「あー、どうも、ラルフです。今日はたくさんの方々が集まっています。ただきありがとうございます。」

ちょっと緊張した感じでラルフさんが喋りだした。フェリックスさんが「ラルフ、ガチガチだぞ〜」って言って、ラルフさんに叩かれる。

「今日をもって、俺は鍛冶に専念しようと思います。今までの冒険で得られた知識や素材を存分に活かせるようにがんばりたいと思います。」

リックたちもそうですが、お世話になった冒険者のみなさん、近所のみなさんたちに、1日も早く鍛冶屋としてお役にたてるようになりたいと思っています。

まだまだ親父がメインですが、うちの鍛冶屋を御鼻屑にお願いします。」

食堂全体から歓声と拍手が上がった。そっか、ラルフさんはお家の仕事を継ぐんだね。

隣にいるのはお父さんかな？ちょっとうるうるしてる…

「あ、それと」

思い出したように言葉を続けるラルフさん。食堂がまた静まりかえった。

「貴重な素材を手に入れた方もぜひ俺に！」

一瞬の静寂の後、今度は笑い声で食堂が満たされた。

「ちやつかりしすぎ！」とか「おめえじゃまだはええよ！」って声も飛んでた。

「それじゃ続けて、ラルフの鍛冶の師匠でもある、親父さんからっ
！」

フェリックスさんの案内でラルフさんのお父さんが前に立った。

「今日は卒のために、かくも多くの方々にお集まりいただきありがとうございます。」

後を継いでくれることは、親としてもとてもうれしく思っておりますが、あとは早いこと所帯を持ってほしいと思っております。」

また笑い声が上がリ、ラルフさんは赤くなっていた。

「みなさんのこれからに幸多きことを願いまして、乾杯させていただきます。」

乾杯っ！

2度目の乾杯も、すごく盛り上がってみんな楽しそうだった。

長く続いたパーティーが終わってしまつと、食堂はいつもと同じように静かになった。

今は、フェリックスさんたちと、マリーさんとクルトさんとあたししかない。

片付けも終わつて、ゆっくりお茶してるところなんだ。

「みんな、今日は本当にありがとう。正直こんなに大きなものになつてるなんてびっくりしたよ。」

ラルフさんが、ちょっと照れくさそうにフェリックスさんたちに話してる。

「マリーさんもクルトさんも、こんな無茶を聞いてくれてありがとうございます。」

「まあ、かわいい後輩のためだしね。」

「うちもお世話になつてるんだし、持ちつ持たれつだよ。」

頭を下げるラルフさんに、マリーさんもクルトさんも笑つて答える。

「それから、ミアちゃんも本当にお疲れさま。ありがとう。」

「あ、あたしも楽しかつたです！」

ラルフさん、あたしにまでお辞儀してくれてびっくりした。でも、ほんとに楽しいパーティーだなつてすっごい感じた。

みんながとっても楽しそうで、たくさんの楽しいが集まって、何倍も何倍も楽しい雰囲気になってた。
そして、今もまだその楽しいが残ってる気がする…

今日のお茶会は、いつもよりちょっと賑やかで、いつもよりだいぶ遅くまで続きそう、かな

10 パーティ（後編）（後書き）

いつもよりちょっと長めになりました。

でもいつもが短いからそんなに変ったように感じないでしょうか…

11 マリーさんの趣味

ラルフさんの引退パーティーの翌日、朝からみんなでお片付け。フェリッククスさんたちも手伝ってくれたおかげで、お昼までには全部終わっちゃった。

ほんとはもっとかかるんじゃないかってことで、クルトさんは明日から営業のつもりだったみたい。

ということ、今日の午後は、ゆっくりお休みすることになったの。

お昼もすんで、お茶とクッキーが用意されたテーブルを前にして、あたしは動けないでいる…

「フィッシュボーン、完成」

「わー、マリーさんすごいですー」

今は男子と女子で別れてて、一緒にいるのはマリーさんと、アリサさんと、エリカさん。

エリカさんもフェリッククスさんたちのグループで、エルフなんだって。

あ、そうそう、それで何で動けないかっていうと、マリーさんがあたしの髪を結ってくれてたからなの。

普段はマリーさん、自分の髪も後ろでまとめるだけだったけど、実は人の髪を触るのが大好きなんだって。

「いいなー。わたしも髪伸ばそうかなー。」といいながら、編みこまれたあたしの髪をなでてるアリサさん。

「アリサくらいでも大丈夫よ。じゃ、アリサ次はいつてみよつか。」
マリーさんにおいでおいでされて、あたしは座ってた席をアリサさんと変わる。

「そうね…左側に編み込んでまとめてみましょうか。」

「お願いしますー。」

鼻歌を歌いながら、櫛を使って髪をすくってきれいに編み込んでいくマリーさんの手際に思わず見惚れちゃった。

アリサさんの髪は、マリーさんの魔法のような手によって、あっという間に結われちゃった。

最後に紐でくくった上からバレッタで留められる。

「うん、上出来上出来。そのバレッタはアリサにプレゼントするわ。」

「えー、ほんとですかー。ありがとうございますー。」

嬉しそうなアリサさんを、あたしと一緒に見てたエリカさんが、ぽつりと「いいな…」ってつぶやいた。

そんな声が聞こえてたのか聞こえてなかったのか、当たり前のようにエリカさんにおいでおいでしてして。

「わ、私もいいの…?」

「いいのっていうか、あたしはさせてもらってる方だからね。嫌ならやめる?」

と聞かれて、首をぶんぶんと横に振ってるエリカさん。ちょっとかわい

「エリカは…んー、ミアと一緒にじゃ芸がないわね…そうだ」

髪を左右に分けて三つ編み。何か普通のおさげっぽい…？
って思ってたなら、三つ編みした髪を、ピンで後ろにまとめちゃった。

「どう？長かったエリカの髪が短くなったように見えない？」

「すごいすごい、短くなってる！」

「びっくりですー…」

当のエリカさんも、おそろおそろ髪を触ってる。

立ち上がってくるっとまわったりしても髪型は全然崩れなかった。

「何だか、不思議…マリーさん、ありがとう。」

「いやいや、あたしもだいぶ楽しませてもらったからね。」

うーん、と伸びをするマリーさんは、とっても満足げ。一仕事終わりましたって感じがしてる。

「さてと、そろそろ夕方だね。クルトたちも、夕ご飯の準備に戻ってくるころだね。」

「それじゃ準備行きますね。」

そういつて厨房の準備に行こうとしたあたしをマリーさんが、ちょっといたずらっぽい笑顔で止めた。

「せっかくだし、男性陣にお披露目するまでは待ってない？」

「え…何だか恥ずかし…」

「あははー、それも楽しそうですねー。」

赤らめたほほを両手でおおつエリカさんと、のほほんとしたアリスさんの間で、あたしもちよっと恥ずかしいなって思いながら、クルトさんたちの反応が楽しみだったりした

早く帰ってこないかなー…

11 マリーさんの趣味（後書き）

人物紹介ができてないのに登場人物はどんどん増えてる気がします
…

12 お買い物

今日はお昼のあと、マリーさんに誘われてお買い物に行くことになったの。

「ところで、何を買いに行くんですか？」

「ま、ついてからの楽しみね。」

なぜかマリーさん教えてくれなかった。

何を見に行くかわかんないけど、マリーさんとお買い物ものなんて久しぶりだし、楽しみ

マリーさんも妙に楽しそう、だよな？

歩いて行く先は、いつもの市場を越えた向こうの方みたい。道すがら、いろんな話をしてたんだけど…

「あ、マリーさん、今晚、ちょっと相談したいことがあるの。クルトさんにも。」

「ん？…何かあった？」

「えとね、この前、アリサさんに…、えと、記憶のことです。」

「そっか、さすがに立ち話っつてわけにもいかないね。とりあえずそれは夜に時間つくるわ。」

「はい、ありがとーです。」

「さて、もうすぐだよ。」

着いたお店は武器屋さんだった。

「……?」

「そうよ。さ、入りましょ。」

マリーさんに引つ張られてお店に入ると、カウンターにいたおばさんがびっくりしたみたいだった。

「もしかしてマリーかい？」

「ども、おひさしぶり。」

「急にどうしたんだい?と、その子は…新米かい?」

「あ、違うの。今、うちで働いてくれてる子。ほら、ミア。」

「は、はじめまして、ミアです。」

マリーさんに促されてあいさつしたら、おばさんも「ああ、よろしくね。」って返してくれた。

「で、冒険者でもない子連れてくる場所でもないと思うんだけどね?」

「冒険者じゃないんだけど、こんどちょっと外出るから、一応ね。」

「そういうことかい。じゃ、ちょっと寸法取らせてもらっよ。」

そういつて、おばさんはあたしのいろんな所を測っていく。

「マ、マリーさん…えと、えと?」

「おっと、動いちゃだめだよ。」

「ミア、落ち着いて。昨日、ユーリが来て、今度のお出かけのことで相談してたのよ。」

「え、そうなの?」

「ミアはちょうど、お使い出てる時だったから、あたしが話を聞いたってわけ。」

マリーさんの説明を聞いているうちに、おばさんは測り終わったみたいだった。

「それで、どうするの？」

「まあ、冒険者の服でいいかなって。」

「妥当なところかね。サイズ出してくるわね。」

「ミア、ごめんね。何が何だかって感じだったでしょう。」
「うん…」

「いくら強化期間っていつても、念には念を入れておかないといけないからね。」

「今日はお出かけの準備のお買いものだよ。」

「ふえ…？あう…あの…」

上手く言葉が出なかったところに、おばさんが戻ってきた。

「じゃ、ちょっとこれ着てみてくれるかい？」

そういつて渡された服は、いつもの服と違って分厚くて丈夫に作ってある服だった。

「試着室はそのカーテンの奥だよ。」

指差された先のカーテンを開けると小さな部屋になっていた。着替えているとマリーさんとおばさんの声が聞こえる。

「しかし、ほんとに久しぶりだね…あんたが冒険者の宿をやることになるとは思わなかったよ。」

「あたしだって思ってなかったわ。でも、楽しくさせてもらってるし。」

「『プリマ・ホワイト白の舞姫』がねえ……」

「ちよ、それはもう！」

「あの一、着てみました……」

盛り上がったるところに、ちよっと出辛かったんだけど……しょうがないよね……

「ミ、ミア、今の、聞い……」

「はいはい、ちよっと調整するよ。」

マリーさんが真っ赤になってる……のを尻目に、おばさんは袖や裾を折ったり、針で留めたりしてる。

「はい、終わりっつと。それじゃこれはまた詰めとくね。武器も見ろのかい？」

「えっと、マリーさん？」

マリーさん、口元を手で隠して、まだちよっと赤いけど、こっちは来てくれた。

「多分何も使ったことがないのよね。」

「んー…斧は？薪割りしてるよ？」

「薪割りとはずいぶん勝手が違うからね。まあ、使うこともないだろうし。服だけでいいわ。」

「はいよ。それじゃ2日後までには仕上げておくよ。」

「おねがいね。さてと、それじゃミア、次行くわよ。」

「はいー。おばさん、よろしくおねがいしますー。」

次はどこに行くのかな？

12 お買い物もの(後書き)

マリーさんの過去が…？

13 あったかい

「こんにちはー。」

「あら、いらっしやい。できてるよ。ちょっと取ってくるから待ってね。」

そういうと武器屋のおばさんは奥に入ってしまった。

注文の日からもう3日。もうできてるだろうってことで、今日はお出かけ用の服を取りに来たんだ。

「はい、じゃあこれね。合わせてくれるかい？」

服を受け取って、試着室に入る。

しっかりとあたしに合わせてくれてあるから、前よりも着るのが楽になってる。

「着れましたー。」

「よし、じゃその場でゆっくり回って…うん、右手を上げて…左手も…大丈夫そうだね。」

あたしが動くのをじっと見ながらおばさんは満足そうにならずいた。

「それじゃ、元の服に着替えてね。」

試着室に戻って、普段着に着替えてると、男の人の声が聞こえた。

「母さん、注文いつてくるね。」

「はいよ、気をつけて。」

息子さんかな？おばさん1人でやってるわけじゃなかったんだ。

着替えが終わって出ていくと、おばさんは冒険者の服をきれいにたたみ直してくれた。

持ってきた小袋おさいふに手を触れて、出てくるときのことを思い出した。

「ミア、今日はあたしはついて行ってあげられないけど、もう仕上がってると思うし、今から服を受け取りに行っておいで。」

「はい、いつてきますー。」

「じゃー、今日は手ぶらじゃダメよ。」

そういつて、小さな袋を渡してくれた。

受け取って持ち上げると、中で金属が触れ合ってチャリチャリなってる。

「あ、これ…。」

「うん、支払いもしなきゃね。」

「え、でも…あたしお金持ってなかったんだよね…。」

マリーさん…ごめんなさい。何も考えずにお出かけしたいなんて言ったから…。」

あたしが余計なこと言わなきゃ、無駄なお金を使うこともなかったんだ…。

そう思ったら、何か涙が出そうになった。そんな顔も見せたくなくて、うつむいてしまう。

あたしの頭を、ポンポンとマリーさんがなでて、そのままぎゅっと

抱きしめてくれた。

「ミア、あなたはほんとにいい子だね。でもね、このお金はあなたのお金だよ。」

毎日毎日、うちでがんばってたじゃない。」

「えっ、でも、ずっと泊めてもらってて…ご飯とか…。」

「もう、そんなことまで心配して…。」

大丈夫、あたしもクルトも、ミアが来てくれて本当に助かってるし、むしろ受け取ってもらえなきゃちょっと困るんだけど、ね？」

マリーさんがあたしの顔を覗き込んでにっこり笑ってくれた。

すっごく嬉しかったのに、どうしても涙が止まらなくなったあたしを、マリーさんはまたぎゅってしてくれた。

そのあと、落ち着くまでしばらく抱きついたまま、グスグスしちゃうったんだよね。

マリーさん、あったかかった…

「さて、できたよ。」

「はひ?! え、えと…おいくらですか?」

「あー、そうだね。マリーの注文みたいなもんだし、40でいいよ。」

小袋から、10枚銀貨を4つ出して、おばさんにわたす。

「はい、確かに。また何か入用になったら相談しにきてね。」

「ありがとうございます。」

「マリーにもよろしく伝えておくれよ。」

おばさんのお見送りを受けて、お店を出たあたしは、両手に服を抱えて歩きだす。

早く帰って、マリーさんとクルトさんに服を見てもらいたい、何だかそんな風に思ったから。

何だかちょっといつもより早足で宿^{しゆく}へ向かっちゃいました。

13 あったかい(後書き)

いつも時間がバラバラですみません…

14 黒の導き

今日は午後の休憩時間に、ユーリさんのところに行こうと思ってたんだけど、予定を変更して追跡中。約束してたわけじゃないし。

何を追跡してるかっていうと…

「じゃー」

そう、黒ネコさん。きつと前も来たあのネコ、だと思っただけど、今日はいつもと何か違ってた。

声に気付いてあたしを見ると、トコトコトコつと進んで、振り返る。何となく来てほしそうだったから、近づくとまたトコトコトコつと進んで振り返る。

こうやってあたしの追跡調査が始まった。

普段あまり行くことのない、市場と反対側の方向へどんどん進んでいくネコを追いかける。

知らない場所だったけど、あんまり不安は感じなかった。

そうやって何度か角を曲がった先の細い通りで、ネコは止まった。

あたしとネコの前には、あたしよりもだいぶ幼い男の子と、もうちよっと小さな女の子がいた。

女の子は泣いてるみたい…ふとネコを見ると、ネコもこっちを見てた。

わざわざここまで連れてきた、んだよね…不思議なネコ…

「もう泣くなよー、兄ちゃんがちゃんと連れて帰ってやるから！」

「うええ…おとーさん、おかーさん…ひっく、うう…」

…もしかして迷子かな？って思ったとき、ネコが同意するみたいに「にゃ」って鳴いた。

「誰だっ?!」

「あ…えっと…あたし、ミアだよ。」

「へ、変なやつっ!」

つつぱってるけど…膝ががくがくしてる…。お兄ちゃんががんばってるんだね!。

「どうしたの？迷子?」

「か、関係ないだろっ!」

「どこからきたの?」

「関係ないって言うてるだろ!あっちいけ!」

そっいつて女の子、妹かな?の前に両手を広げて立ちはだかる。

「送ってあげよっか?」

「お前なんか怖くな…へ?」

「んー、だから、送ってあげようか?」

「お前、僕たちの宿がわかるのか?」

何か急に食いついてきた…やっぱり迷子だね。

「宿の名前とか教えてくれれば案内できるかもしれないよ。」

「名前…おぼえてな…いや、知らない人に教えちゃダメなんだっ!」

むう、わかんないつか…。どうしよう…。

いろんな人が来るところで聞けばわかるかもしれないよね。

とりあえず、泣きやんでもらって…って思ってたら妹はもう泣きやんでた。

その両手のなかでネコがたわむれてる。

「おにーちゃん…にゃんこさん。かわいい」

「メリー、どこからそのネコ…」

「あ、だいじょうぶだよ。あたしをここまで連れてきてくれたネコだから。」

お兄ちゃんの目が丸くなる。あたしも自分で体験しなきゃネコがこんなことするなんて信じられるわけないけどね。

「さ、それじゃメリーちゃん？と、お兄ちゃんは何ていうの？」

「ばっ、こ、子どもあつかいすんなっ！」

「ごめんね、で、名前は？」

「…アル。」

「アルくん、ね。それじゃいこっか。」

「宿も知らないのにどこに連れてくんだよ…」

相変わらず突っかかるような言い方だけど、左手をメリーちゃんとないであたしについでくる。

メリーちゃんの左手は、ネコのしっぽと遊んでたけど。

「とりあえず、教会に行ってみようかな。近くに1こあるし。」

この間、近所のおばさんとお話したときに、教会にたくさんの人があるって聞いてたから、そこに行ってみようと思った。

うちだと、クルトさんもマリーさんも忙しくて、教会に行く暇がな

いんだよね…だからあたしも初めてだったりする。
教会の鐘楼は高いから、ちょっと大きな通りまで出れば割とすぐ見
つかる。

あたしは2人と1匹を連れて教会に向かった。

教会には無事ついたけど、そこからあんまり考えてなかった。
だって…勝手に入って怒られたら困るよね…。
入り口でうろろしてたら、お姉さんが声をかけてくれた。

「どうされたのですか？」

「あ、すみません。えっと、この2人が迷子なんです。」

「迷子じゃないぞ！」というアルくんの叫びを聞き流して、お姉さ
んに尋ねる。

「泊ってる宿も分かんないみたいなんですけど、どうやって探した
らいいのかなって。」

「そうですね。衛兵さんに尋ねてみるのはどうでしょうが。
もしかしたら連絡が入っているかもしれないですね。」

とりあえず、お2人も一緒に中に入りませんか？」

たぶん2人もだいたいぶろろしたんだろっし、ちょっと休ませて
もらった方がいいよね。

「それじゃお願いします。」

「ではこちらへどうぞ。」

お姉さんの案内に歩き出そうとすると、アルくんが止まった。

「どしたの？」

「だって、早く帰らないと…」

「うん、でもむやみに歩いたって疲れるだけだよ。今から衛兵さんの所に行つて、聞いてきてあげるから、休んでなよ。」

「…うん、わかった。」

たぶん、だいぶ疲れてるみたい。ちょっとほっとした感じになったアルくんの手を引いて連れて行く。

そのアルくんは、もちろんメリーちゃんの手を引いているから、ずらつとつながつたみたいになる。

「あ、にゃんこさんが！」

教会に入ろうとすると、ここまで着いてきてたネコが、パツと走つて行ってしまった。

「ううう、にゃんこさんが…」

あらら、また泣き出しちゃった…どうしよう…

そのとき急に誰かが教会へ飛び込んできた。

あれ、衛兵さん？お姉さんもびっくりして声をかける。

「あわててどうなさいました？」

「あ、シスター、実は子どもが迷子になっていて情報を聞いて回っ…あ~~~~」

衛兵さんの大きな声に、お姉さんも、あたしも、アルくとメリーちゃんもビクツとなった。

「…す、すみません…。」

衛兵さん、真つ赤になって縮こまる。でもすぐに、アルくとメリーちゃんの方にしやがみ込んだ。

「アルフオンスくんと、メリンダちゃんだよね？」

「え、何でぼくたちの名前…」

「君たちのお父さんから、搜索依頼が出ていたんだよ。…君が2人を連れまわしていたのか？」

立ち上がった衛兵さんは、あたしの方を向いて、ちょっときつい口調であたしに尋ねた。

「ええ？あたしはただ…」

「そのねーちゃんは僕たちを送ってくれたんだ。」

急なことに言葉が出なかったあたしに代わって、アルくんが衛兵さんにそういった。

「ねーちゃんがいなきゃ、僕たちまだ迷子だったと思う。ねーちゃんが悪くないぞ。」

「ふむ、そうか。いや失礼しました。依頼主から誘拐の疑いもあると聞いていたもので…申し訳ない。」

「すみませんが、話をお聞かせ願いたいので、ご同行していただけますか？」

「あ、でも…そろそろお仕事に戻らないと…」

「困ったな…どちらでお仕事されてるのですか？」

「白枝亭っていう冒険者の宿です。」

今までやり取りを聞いていたお姉さんが「ああ！」と声を上げた。

「大丈夫ですわ。白枝亭に新しく入った女の子ってあなたのことで
すね。」

衛兵さん、あとで白枝亭にお伺いされてはいかがですか？」

「ふむ、そうですね。それではそうさせていただけます。まずは子
どもたちを帰してあげないと。」

それでは後ほど、お伺いさせていただきます。」

そう言って、衛兵さんはあたしたちに敬礼して、アルくとメリー
ちゃんを連れていった。

「お姉さん、ありがとうございます。それじゃあたし、仕事に戻ら
なきゃいけないので。」

お姉さんにお辞儀して、教会を後にする。ん、ちょっと走って帰
らなきゃだめかも。

そして…今夜はいろいろと忙しくなるのでした。

14 黒の導き(後書き)

いつもより、長めになってしまいました。
うまくまとめられるようになりたいです…

15 忙しい夜 その1

「ミア、奥のテーブルの4人さんのところに、エール2つ追加お願い
！」

「はいっ！」

今日も夕食時の食堂はお客様でいっぱい。
あたしもジョッキやお皿を運んだり行ったり来たりしてる。

「料理上がってるから、それ終わったら頼むよ。」

「はいー！」

お酒をとりに厨房に戻ると、クルトさんがあたしの気配を感じて言
った。

台には湯気の立ってる料理が並んでる。

この時間帯が一番忙しい。もうちょっとすると落ち着いてくるんだ
けどね。

ある程度落ち着いてきたので、厨房に戻って汚れた食器の片付けを
していると、扉が開く音が聞こえた。

ちょっとして食堂の方から「ミアちゃん、お客さんみたいだよ！

」って常連さんの声が聞こえた。

誰だろ？クルトさんの方を見ると「いっておいで。」って言うてく
れたから、手を洗って食堂の方に向かった。

「あー、昼間の衛兵さん！」

「どうも、すみません、お忙しいときに来てしまったようで……」

衛兵さんが困ったように笑う。

「ミア、何かあったの？」

「あ、いえ。ミアさんにはお昼にお世話になりました、その時のお話を伺いに来た次第であります。」

マリーさんが、不思議そうな顔してる。

返ってきたのが結構ぎりぎりで、お話す暇、なかったんだよね…。

「えとね、お昼の休憩のときに、迷子の子を見つけて案内してたの。それで、そのときに話を聞きたいって言われたんだけど、時間がぎりぎりだったから…」

「走って帰ってきたのはそういうことだったのね。」

マリーさんも納得してくれたみたい。入口近くの常連さんたちが「ミアちゃんえらいぞっ！」って拍手してくれた。何か恥ずかしいなあ。

「そんなにかからないなら、今は落ち着いてるし、奥でお話すれば？
ここはあたしだけでもいけるから。」

そっいつてマリーさんは厨房を指差した。その入り口からはクルトさんも覗いてた。

気になって見に来てくれたのかな？

「はい、それじゃこちらへ。」

「すみません、それではお願いします。」

衛兵さんを連れて、厨房に入るとクルトさんがイスを用意してくれてた。

「クルトさん、ありがとーございます！」

「恐れ入ります。それでは時間もあまりないようですし手早く…」

衛兵さんからの、見つけた場所や状況なんかの質問に、答えられる限り答えていく。

ネコを追っかけて見つけたってところでは、衛兵さんも困った顔してたけど、事実だもんね…。

「ありがとーございました。お時間をとらせてしまつてすみません。」

「いえ、こちらこそお昼は時間がなくてすみませんでした。」

「それでは、これで失礼します。お仕事、がんばってください。」

そういつて衛兵さんは席を立てて敬礼してくれた。

「あ、もう一つありました。依頼者、あ、迷子の2人の父親ですが、明日、あいさつに來たいと言つてましたよ。」

午前中に寄せてもらいたいと言つておりましたが…」

「たぶん、ここにいると思います。」

「わかりました、伝えておきます。それでは。」

そういつて、今度こそ衛兵さんは帰つていつた。

さてつと、それじゃ仕事に戻らなきゃ！

何人かの常連さんは、迷子の話を聞いてきたりしたから、食器を運びながら説明した。

ネコの話をする、みんな「へえ。」つて驚いたり、「不思議なこともあるもんだ。」なんて言つてたけど。

そうこうしているうちに、お客様も帰ったり、部屋に戻ったりして、食堂も閉めることになった。

衛兵さんが来た以外は何もなく、今日も無事にご飯の時間は終わりました。

でも、今日はこれで終わりじゃない。

アリサさんが来てくれるんだ。

うう、どきどきしてきたよお…

15 忙しい夜 その1 (後書き)

今日は2本立てです。

一晩のことだから一気に進んでみました。

16 忙しい夜 その2

扉がノックされて、アリサさんが入ってきた。そしてもう1人、フレリックスさんも一緒だった。

「こんばんはー。遅くなりましたー。」

「こちらこそ、遅くにお問い合わせしちゃってすみません。飲み物を用意し来るので待っていてくださいね。」

「アリサ、遅くにごめんね。リックはどうしたんだい？」

「一応夜だし、ラルフんとこの手伝いで一緒にいたから送ってきたんだよ。」

アリサさんとフレリックスさんをテーブルに案内し、マリーさんにお任せして厨房に戻る。

厨房ではクルトさんがすでにお茶の用意をしてくれていた。

「クルトさん、ありがとー。」

「うん、それじゃ持って行ってあげようか。」

お茶の用意を持って、食堂に戻る。

もしかしたらこれであたしの記憶が戻るかもしれないって思うと、どきどきする。

けど何だか不安に感じてたりもして、何か落ち着かないよ…。

あの日、マリーさんとクルトさんに話してみたんだけど。

「それで、ミアはどうしたいの？」

「っていうマリーさんからの問いかけに、あたしは困ってしまった。いろんなことをいっぺんに考えようとしたのが悪かったんだって今なら思うんだけどね。」

そしたらクルトさんが「1つ1つ考えてみようか。」って提案してくれた。

「ミアは記憶が戻ってほしいのかな？それとも戻ってほしくないのかな？」

「それは…戻ってきた方がいい…って思う…」

「何かあいまいな言い方になってるけど、気になることがあるのかな？」

「ん…」

また詰まってしまう。

何か大事なことがわかるかもしれないから記憶が戻ってほしいっていうのはあたしの本心。

だけど、今の生活はとっても楽しくて、マリーさんやクルトさんや、他のいろんな人たちもやさしくしてくれてて。

今をなくしたくないっていうのもあたしの本心。

だから、記憶が戻ってほしいし、戻ってほしくない、なんて変なことを考えちゃってる。

「ミア、いろいろ不安もあると思うけど、あんたがここで過ごしてきた日々がなくなるわけじゃないんだよ。記憶が戻っても、戻らなくても、ミアはミアなんだから。」

「マリーさん…！」

前もびっくりしたけど、今度もびっくりだった。あたしの心なんか

お見通しなのかな…。

「ミアが望むなら、マリーも私も、ミアがここにいてくれるのには大賛成だよ。」

「クルトさん…」

2人やさしい微笑みが、2人のあたしへの気持ちがとても感じられたから、あたしは決心することができたんだ。

「さてー、それでは今から魔法をつかいますねー。」

この魔法はー、ミアちゃんがー、受け入れてくれないとー、効果が発揮できないんですー。」

気持ちを楽にしてー、受け入れてくださいねー。」

そういうと、アリサさんは着けていたペンダントを両手で包むようにして目をつむり、集中しはじめた。

アリサさんの両手が、柔らかな白い光に包まれていく。

「マインドサーチ
《精神探査》」

アリサさんの口が言葉を紡ぎ出すと、柔らかな白い光があたしの方に伸びてきた。

その光が到達した瞬間に、あたしの体全体が白い光に包まれる。

それをみてアリサさんがちょっと驚いたように目を見張ったような気がした。

そして次の瞬間。

光がパツと消えた。

「あららー？」

「どうしたアリサ、失敗か？」

「いえー、魔法自体は成功していたんですがー…」

ちよつと考えるようなそぶりを見せて、アリサさんがあたしの方に
向き直った。

「あ、ごめんなさいねー。ぼーつとしちゃって。

「は、はい、それで…」

「結論から言うんですけどねー…失敗しましたー。」

ふえ…?! ってことは…記憶戻らないってこと…?

あ…フェリックスさんがずっこけてる…

マリーさんとクルトさんも固まってる…

「ただー…」

「は、はい？」

「何か封印…か、呪い、のようなものが、関係しているみたいで
すねー。」

あたしの魔法よりも、強い力で遮断されちゃいましたー。

まあ、記憶以外にー、影響しているわけでもなさそうですよー。」

はあああ~~~~~つ、何か気が抜けちゃった…

マリーさんとクルトさんの方を見ると、2人とも疲れてる感じだっ
たけど笑ってくれた。

「封印か呪い、か…俺たちも何かわかったことがあれば、連絡する
ようにするわ。」

「ああ、それじゃ頼んだよ。アリサもまたお願いね。」

フェリックスさんの一言に、マリーさんが答えて、固まっていた場が動き出したようだった。

「それじゃ俺たち、ラルフんとこ戻るわ。」

「お役に立てなくて、すみませんー。」

フェリックスさんとアリサさんが席を立ったので、3人でお見送りに出た。

「アリサさん、わざわざありがとうーございました。」

「あ、わすれるとこでしたー。」

「はい？」

「ミアちゃん、白色魔法の素質があるみたいですよー。」

「ほへ…？」

「あたしの魔法にー、共鳴してたから、たぶん間違いないと思いますー。それではおやすみなさいー。」

さらっととんでもない一言を残してアリサさんはフェリックスさんと去っていったんだけど…

固まってるあたしの両手を、両側からやさしい手が包んでくれた。

そんな2人に、あたしも笑顔で答える。

これからもよろしくお願いします！そんな気持ちを込めて。

宿に入ろうとしたとき、いつの間にか聞きなれた「にゃー」という声が聞こえた。

16 忙しい夜 その2 (後書き)

少し量も多めになりましたが、これでこの晩のお話は一区切りです。
初の2本立てはなかなか忙しかったです^|^ ;

17 来客

「マリーさん、おはようございます!」

「おはよう。今日もしつかり頼むよ。」

昨日の晩は何かいろいろあったけど、今朝もいつもと同じように始まったみたい。

「それじゃテーブルの準備お願いね。」

「はい。」

さすがにもう慣れてるし、端のテーブルからイスを降ろして拭いていく。

マリーさんはカウンターの中でいろいろ準備中。

「終わりましたっ。厨房入りますね!」

「ご苦労さん、頼んだよ。」

いつも通りマリーさんは、顔を上げて笑顔で見送ってくれた。

「クルトさん、おはようございます!」

「おはよう、ミア。そろそろお客さんも来るころだね。がんばっていこうか。」

「はいっ!」

手早くお皿を並べていくと、クルトさんがどんどん盛り付けていく。今日も忙しくなりそうだね。がんばるぞっ!」

朝の食事の時間も終わり、片付けに入る。
まずはマリーさんと、食堂の方から。
床を掃いたり、テーブルを拭いたり。
それが終わったら、厨房で洗い物をしているクルトさんのお手伝い
に。

でも、クルトさん、お料理だけじゃなくて、洗い物も早いから、あ
たしが行くときには半分以上終わっちゃってることも多いんだよね。

一段落して、ちょっと休憩ってときに、扉がノックされて、1人の
男の人が入ってきた。

こんな時間にお客さんが来ることはあんまりないんだよね？

それに、その人は普段あんまり宿では見ないような、身なりのいい
感じのものだった。

「いらつしゃい。」

「失礼、こちらにミアさんというお嬢さんが居られると伺いまして
な。」

「ふえ？…あたし？」

何だろう、って思ったとき、また扉が勢いよく開いて、見たこと
ある男の子が飛び込んできた。

さらにその後ろからもう1人男の人が…。

「ねーちゃん！」

「アルくん…何でここに？」

「アルフォンス…馬車で待っていると言っただろう。」

「すみません旦那様、坊ちゃんが急に飛び出しまして…。」

少きつい口調で男の人に怒られたアルくんは、「だってえ…」つて、口をとがらせてる。

「まあよい。…お見苦しいところを見せてしまいましたな。

もうおわかりかもしれないが、私はアルフォンスとメリンダの父親で、グレン・ヴァルヴィックと申します。

昨日は、息子と娘がご迷惑をお掛けしたようです。」

「あ、いえ、そんな、ぜんぜん…」

グレンさんが頭を下げちゃうから、慌てて両手も首も横に振りまっくった。

「宿から出ないようにときつく言っていたのですが、どうも目を盗んで抜けだしたようで。」

「ふえ…」

「ミアさんには、あらぬ疑いも掛けてしまったようで申し訳ない。誘拐されたという可能性も捨てきれなかったもんでね…」

クルトさんとそんなに変わらなそうな歳だと思ったけど、そういったグレンさんはちょっと疲れてて、何か歳をとってるように見えた。大変そうだなあ…

「で、でも無事でよかったですね…」

「おまえもミアさんにきちんとあいさつをしなさい。」

「は、はい父上。ごめいわくをおかけしてもうしわけありませんでした。」

急に堅苦しいしゃべりになるアルくん…

「さあ、お前はもう馬車に戻りなさい。」

「ええ〜！」

「…戻るんだ。」

しぶしぶといった様子で、外に出ていくアルくん。おうち、大変なのかな…

「まったく…申し訳ない。それで、お礼の方なのだが。」

そういつて、お付きの人に合図すると、お付きの人が小袋を差し出した。

金属が触れ合う音がしてる。もしかしてお金…？

「ええっ?! そんなお礼なんてもらうようなことしてませんっ！」

またぶんぶんと手と首を横に振ってみただけど、お付きの人は困ってる…

グレンさんもちょっと眉をひそめてる。うう、機嫌損ねちゃったかな…

でも、お願いされてやったことでもないし、受け取りづらいな。困ってる、マリーさんがしゃべりだした。

「ヴァルヴィックつて、あのヴァルヴィック商会でしょう？」

払わずに済むのならそれでそれでいいのでは？」

「ふむ…まあ、私としては息子と娘が世話になったことに感謝を表すための手段の1つだったわけだが。」

恩人に、いらぬ恩を売るものでもないですな。

他ならぬ『プリマ・ホワイト白の舞姫』の助言、受け入れさせていたごう。」

マリーさんに軽く会釈したグレンさんは、手で合図して、お付きの

人を下がらせる。

あれ、何かマリーさん、ちょっとグレンさんにらんでる…？

「忙しいときに、邪魔をいたしましたな。それでは失敬する。」

「あ、す、すみませんでした！」

思わず頭を下げたあたしを見て、グレンさんの表情が少し崩れた。
敵めしい顔をしてたけど、今は優しいそう。

「あなたは…不思議な感じがするな。」

「ふえ?!」

何だかよくわかんないけど…ま、いいよね。

グレンさんについて外に出ると、立派な馬車が停まっていた。

お付きの人が扉を開けると、グレンさんが乗り込む。

閉められた扉の窓から小さな顔が2つ覗いた。

「ねーちゃん、ありがとうー。またなー！」

「おねいちゃん、ばいばい。」

笑顔の2人にあたしも手を振る。

「もう勝手に抜け出しちゃだめだよー！」

ところで…ぷりま・ほわいって何だろ？

18 はじめてのお出かけ その1

いよいよお出かけの日がやってきた。

つていつても、朝は忙しいのでいつも通りお手伝いをして、ちょっとゆっくり出発の予定。

片付けも一段落したから、部屋に戻って服を着替える。

下に降りて行くと、ユーリさんがもう来てて、マリーさんと何かしゃべってた。

「あ、ミア。準備できたのね。」

「ミアちゃん、おはよー。」

「おはよーございます!」

「いい天気でよかったね。」

そつえばそうだよ、雨なんか降ってたら、お出かけできなかったんだ…。

そんなこと全然考えてなかったや…。

「よかった。間に合ったようだね。」

クルトさんが厨房から、バスケットと布の包みを持って出てきた。

「これは、お弁当だよ。今の時間からだとお昼をまたぐだろうしね。」

「クルトさん、ありがとう!」

「ミアがお世話になるし、これくらいはね。」

ちゃんとミアにも背負えるようにしておいたから。それと、ミア、これも。」

そういつて布の包みを開けると、中から出てきたのはナイフだった。

「外では何かと役に立つかもしれないから、持って行きなさい。」

「は、はいい……」

「ちゃんと研ぎ直してもらってるから、特に問題ないと思うけど、ケガには注意するんだよ。」

それじゃユーリアちゃん、ミアを頼んだよ。」

「2人とも、気をつけてね。ユーリ、今日はうちで夕ご飯用意してくから。」

「ありがとうございます！それじゃ行きますか。」

「は、はいっ。お願いしますっ！」

マリーさんは、腰に短めの剣を差して、かごを背負ってた。

あたしもお弁当のバスケットを背負う。ひもの長さぴったり

「行ってきまーす！」

マリーさんとクルトさんに見送られて、あたしたちはいよいよ出発！
まずは門に向かって通りを歩いて行く。

「ミアちゃん、荷物重くない？」

「あ、はい、だいじょうぶです。」

「そう、途中で疲れたらすぐに言ってね。」

「はいっ。」

「ま、街を出てもしばらくは平坦だから大丈夫かな。」

お話しながら歩いて行くうちに、門までたどり着いた。

よく考えたら、あの日、外から来た時以来の門、なんだよね。

前の記憶あんまりないけど…

ユーリさんが、衛兵さんとちょこっとお話して、外に出ることになった。

「ふっわぁ…広い…」

「あはは、そっか。初めてだもんね〜。」

あたしがびっくりしてるのを見て、ユーリさんが楽しそうに笑う。でも、ほんとに広いんだよ。木は生えてるけど、建物がないから、見通しがすごくいいの。

草が生えてる中を、大きな道がすーっとのびてる。

何だか吸いこまれるような感じがして、道へと足を進めようとしたら、ユーリさんに呼びとめられた。

「ミアちゃん、勝手に引っちゃだめよ。」

「はう、ごめんなさい…」

「ま、今の時期ならいきなり危ないなんてことはないと思うけど、必ずあたしの後ろについててね。」

「はいっ。」

大きな道沿いを歩いていくと、途中で荷馬車の人達とすれ違ったりもする。

ユーリさんに聞くと、商人たちは基本的に大きな道を使っているみたい。

そのほかにも、旅をしている人たち、冒険者も移動には道を使ってるんだって。

たくさんの方が使えば、それだけ、危険も寄ってこないってことみたいだけど…。

そこそこ歩いてきたところで、ユーリさんが立ち止まる。

「ここからちょっと道を外れるから、一応足元注意ね。」

「一応？」

「ま、そんなにでこぼこもしてないから大丈夫だと思うけど…ね。」

ユーリさんについて歩いて行く。草もそんなに多くないし、とくに歩きにくいこともなかった。

途中、お花がたくさん咲いているところとかもあって、思わず「わあ！」って声をあげちゃった。

そしたらユーリさんも、「帰りにもつかい寄るから、ちょっと摘んでいく？」って言うてくれたの。
ん、楽しみ

ちよつとお腹がすいてきたかなって思いだしたころ、あたしたちは、川にたどり着いた。

「さてと、休憩にしましょ。だいぶ歩いてミアちゃん疲れたんじゃない？」

「はう、ちよつとだけ…」

えへへって笑いながら返事したら、ユーリさんも笑ってた。

「いい時間だし、お弁当にしましょ。」

「わーい、それじゃ準備しますー。」

バスケットを降ろして開けてみると、パンにお肉や菜っ葉がはさんであるのや、ゆでた卵や果物なんかも入ってる。

あとは…革？でできた袋…？何か水みたいなのが入ってる…

「あれ、ミアちゃんそれしらない？水袋。井戸とかなくて、お水汲

んだりできないところに行くときに、お水を入れていくのよ。」

「そっか…いつも桶で汲んだり、かめやたるに貯めてたから…」

「街中ではあんまり使わないわね。さて、それはともかくとして、いただきますよ。」

「はい、いただきます。」

クルトさんのお弁当は、いつものご飯と変わらずおいしかった。

ちなみに、水袋の中身は、ユーリさんところから買ってるお茶でした。

お弁当食べて元氣回復

この後、ユーリさんの探してるものを採りに行くみたいだし、がんばらなきゃ！

18 はじめてのお出かけ その1（後書き）

いつもつたない文章にお付き合いいただきありがとうございます。

累計1000アクセス突破、本当にびっくりしています。

これからもよろしく願います！

19 はじめてのお出かけ その2

「さてと、それじゃそろそろ行きましょっか。」

お弁当も終わってちょっと休憩もとって、リフレッシュできたし、
どんどんいけそう！

バスケットも、お弁当の中身がなくなって、水袋も中身が減ってる
から軽くなってるし。

「っと、そうだ。これつけといてくれる？」

そういつてポーチから出したのは小さなベルだった。

ユーリさんも自分のかごにつけてる。

「これ、なんですか？」

「森は見通しが悪いから、動物もあたしたちに気づかずに出くわし
てしまうことがあるのよ。」

出会っちゃうと…ケンカになることもあるからね。こっちから音
を出して、動物に注意してもらったためのものよ。」

「ほへ…」

わかったようなわからなかったような…とにかくバスケットにつけ
てみた。

動くたびに、カラコロ鳴ってる。

「ここから、しばらく川沿いに進んだら、ちょっと森の中に入るか
ら、足元注意してね。」

川に沿って歩いて行くと、川が分かれてるところまで来たんだけど、

ユーリさんはその川の細い分かれた方をたどっていくみたい。
生えてる木もだんだん増えてきて、ちよつと森っぽくなってきた。

「根っこに気をつけてね。変に踏むと、足痛めちゃうから。」

今までに比べると土は柔らかくて、たまに木の根っこが出てたりして結構危ない。

しつかり足元確認しなきゃ…

「いたっ！」

「ミアちゃん、大丈夫？」

ユーリさんが慌てて声をかけてくれる。

左手の甲に、赤い筋がついてた。枝を引っ掛けて、すっちゃったみたい。

下ばかり見てて気付かなかったけど、低い木の枝も結構出てる。

「あー…」

「あらら、下も木をつけないといけないけど、前も見てね。」

そういって、腰のポーチからきれいな白い布を出して手に巻いてくれる。

うー、迷惑かけちゃってる…

「ごめんなさい…」

「気にしない気にしない、っていうか、あたしもちゃんと注意してあげてなかったね。ごめん。」

「そんな、ユーリさんは全然悪くないもん。」

「ありがと。もうちよつとだから、がんばろうね。」

ふふっ、と笑ってユーリさんは歩き出した。

今度は前も注意しながらついて行く。もうケガしないんだから！前を見て気付いたのは、少し薄暗い木々の間から、木漏れ日が射していること。

風が吹くと、光もさやさやと揺れてる。何だか不思議な感じ。前を見て、下を見て、また前を見て…忙しい。けど、ちゃんといていける。

…あれ、もしかして、ユーリさん、ゆっくり進んでくれて…る？

「ユーリさんもしかし…」

「さあ、ついたわよー！」

あたしがしゃべろうとしたときに、ユーリさんがそう言った。

すこし開けたその場所は、泉になっていて、たくさん草が生えてた。

「すごい、きれい…水の上にも生えてるんだ。」

「ここで摘んでいくから、ちょっと待っててね。」

そういうと、ユーリさんはブーツを脱いで、裾をまくって泉に入っていく。

なれた手つきでハーブを選んで摘んでいく姿は、さすがって感じだった。

「あ、ミアちゃん、さっきのケガ大丈夫？」

巻いてもらった布を外すと、赤く筋になってはれてる…。でも、傷にはなっていないみたい。よかった

「だいじょーぶです。傷にもなってなかったみたい。」

「そっか、よかったね。こっちももうちょっとだから待っててね。」
「そういいながらも手早くハーブを摘み取ってはかごに入れていくユーリさん。」
「そのまま入れてるのもあれば、ぬれた布に包んでいるものもある。いろいろ違うんだねー…」

「これくらいでいいかなつと。ミアちゃん、おまたせー。」

ユーリさんは泉から上がると、手足を拭いてブーツを履いていく。持ってきたかごは、まだまだ余裕がありそうだけど…

「ユーリさん、まだまだ採れそうだよ？」

「あ、うん、でもね…全部摘んじゃうと、次から採れなくなっちゃうからね。」

「ちゃんと残しておかなきゃだめなのよ。採りすぎて使えなくなってももつたないし。」

「ふーん…」

「あともう1か所回りましょ。ミアちゃん、もういける？」

「いけまーす。」

泉を後にして、また森の中を進んでいく。

カラコ口となるベルのおかげか、動物たちに出くわすこともなかった。

「はい、次はここ。」

「ほえ？…ここ？」

今度は一見何もない森のはずれ近く…だけど。

「ほら、この木をよく見て…」

ユーリさんが指さしたあまり大きくない木には、青紫色の実がなっている。

これ、市場でも見たことがある…甘酸っぱいやつ？

「すごいでしょ。お茶の材料にもなるけど、ミアちゃんもお土産に少し摘んでつたらどう？」

「わーい、そうしますっ！」

いくつも生えてるその実から、おいしそうな大粒を選んで摘んでいく。

左手いっぱいになったところで、ちょっと困っちゃった。

「ミアちゃん…何してるの？」

「あ、もうもてない…です」

「…背中に背負ってるの何だっけ…？」

ユーリさん、必死に笑いをこらえてるけど…

あ。バスケットがあるんだった…

ユーリさんに照れ笑いで返しながら、バスケットを開けた。

ちょうど、お弁当を包んでいたナプキンがあるから、摘んだ実を包んでおく。

もうちょっとだけとって、終わりにしようかな。これも採りすぎるときにとだめだね。

あたしが摘み終わる頃には、ユーリさんも採った分をかごに詰め終わってた。

「さて、それじゃそろそろ帰りましょ。夕方までには街に戻れるわ。

「はい。」

帰りはそのまますぐに森を抜けて、原っぱを歩いてく。

たくさん歩いたけど、楽しかったなあ…

ボーっと歩いてたら、ユーリさんがふと思い出したように声を上げた。

「あ…」

「ユーリさん、どしたの？」

「帰りにお花摘んで帰るって言うてたのに、違う道で来ちゃったなって…ミアちゃん、ごめん！」

「あ…そういえば…」

うん、そんなこと言った気がする…けど、今日は盛りだくさんであたしもすっかり忘れてた。

申し訳なさそうな顔のユーリさんを見ると、何だかあたしの方が申し訳ないよ…

「ユーリさん、だいじょぶ。あたし、今日ほんとに楽しかった！」

だから、お花のこと忘れてたよー、えへへ。」

「そう？ほんとごめんね。今度また機会があれば連れて行くから。」

「え、いいの?!…あ、でもあたしと一緒にいろいろ時間かかったり大変じゃ…」

「ううん、あたしも楽しかったし、またミアちゃんで行きたいって思ってるから。」

もちろん、ミアちゃんが嫌じゃなければ、だけどね。」

そういつて微笑むユーリさんの腕にぎゅってして、あたしたちは帰

り道を歩いていきました。

マリーさんもクルトさんも、おみやげ喜んでくれるかな……？

19 はじめてのお出かけ その2 (後書き)

青紫色の実、イメージはブルーベリーです。

20 眠れない夜に

その日、あたしはなぜか寝付けない夜を迎えてました。

今日も1日、いっぱいがんばったから、体は疲れてるのに。

ちよっとお水を飲もうかなって思ったけど、水差しにお水を汲むのも忘れてたみたい。

しょうがないから、厨房まで行くことにした。

キキイ…

部屋の扉が音を立てて開く。

お客様もお休みだし、マリーさんもクルトさんももう寝てるはずだから、静かに行かなきゃダメなのに。

扉の音は意外と大きく鳴っちゃう。

あたしの部屋は2階の一番奥の、廊下の角を曲がったところにある一番小さな部屋。

マリーさんとクルトさんがここを買い取る前に、やっぱり従業員の人が使ってた部屋だっていった。

お客様が泊まるには、ちよっと小さすぎる部屋。

その奥の部屋から階段までは、お客様の部屋の前を通らなきゃいけない。

できるだけ音をたてないように、そろり、そろりと足を踏み出す。

無事廊下を通り、階段に差しかかる。

ギシ、ギシ…

普段はあんまり気にしてなかったけど、階段を踏み出すたびに音が

鳴る。

真っ暗な食堂は、それでも窓の隙間や、扉の隙間から、わずかに差しこむ外からの光で、ぼんやりとその景色が見えてる。

イスはテーブルに全部上げてあるから、引っ掛けることもないはず。テーブルの間を抜けて、カウンターの脇から厨房に入る。

厨房の扉から出た廊下の向かいには、マリーさんとクルトさんのお部屋や、物置のお部屋が並んでる。

音をたてないように…

お水をためてるかめは…これだよね。

ふたを開けてみると…

「あれ？からっぽ…？」

思わず口から言葉が出ちゃった！あわてて口を押さえてじっとする…
だいじょうぶ、誰かが起きた気配はないみたい。

それにしても、お水使いきったのかなあ…

どうしよう…っていつても、すぐくのどが渴いてきたし、お水なしでは眠れそうにない。

やっぱり井戸まで行くしかないよね…

厨房に水差しを置いて、代わりに桶を持ってお勝手口に向かう。

カチャ。

よかった、鍵はしっかり油も差してあるみたいで、そんなに大きな音もならなかった。

「ふわあ…」

扉を開けると、よく晴れた空にたくさんの星と、少し欠けてるお月

さま。

思ったよりも明るくて、これならあんまり怖くない…かな…
でもでもやっぱり、ちょっと走って井戸に向かう。

夜の街は、お昼と全然違う表情で、まるで別世界のよう。

淡い明かりの中を1人、すこし寂しいような、そんな気持ちも感じながら。

井戸をこぐとお水が出てくる。持ってきた桶に半分くらい。

そんなにもいらないかもしれないけど、こぼしたらやだし、半分くらい。

よおし、それじゃいそいで帰らなきゃ。

桶を持ち上げようとしたとき、不意に強い風が吹いて、寝間着の裾がひるがえる。

慌てて押さえて、目をつむる。

風がやんで、目を開けると、あたりは暗くなっていた。

「あ、れ？」

急に不安が押し寄せてきた。

見上げると、空に黒い雲がかかっている。

さっきまで晴れてたはずなのに…

お水を汲んだ桶を持って、あたしは走り出した。

宿のお勝手口が見えたところで、やっとちょっとほっとした。

そうだ、あんまり音をたてないようにしなきゃ…

…あれ？扉閉めなかったっけ…ちょっと隙間が開いてる。

そっか、たくさん星とお月さまを見て「ふわぁっ」「ってなって…
閉めるの忘れてた、かも？

厨房に入って鍵を閉める。

カチャリ。

部屋の中は外よりずっと暗い。しばらく目が慣れるまではじっとし
なきゃ。

ぼんやりと部屋の中のようにすが見えてきた。

桶からゆっくりと水差しにお水を注ぐ。

早く部屋にもどらなきゃ。

食堂を抜けて階段を上がってく。

やっぱり曇ってるせいかな、行きより暗い気がする。

ゆっくり、ゆっくり…ギシ、ギシ…

できるだけ音が立たないように。

あとは廊下を渡りきれば、部屋に帰れる。

そろり、そろりと進んでく。

角を曲がればあたしの部屋だ。

無事に部屋の前にたどり着いた。

あれ、扉閉めてなかったっけ…こんなのはっかりだ。

中に入って扉を閉める。

少し音が出たけど、きつとだいいじょうぶだよな。

隅の台に置いてたコップにお水を注いで飲む。
汲んできたお水は、まだ冷たくて、のどにしみこむみたい。
ふう、満足できたかな。
ちよつと動いたからかな、眠れそう…かも？
台に水差しとコップを置いてベッドに向かう。

ベッドに入ろうとしたとき…

あたしに向かつて…

何かが飛びかかってきた…

生あたたかい何かが…

「ミア、遅いわね…？」

いつもならもつとつくに降りてきているはずなのに、今日はどいつたのかしら？
ちよつと見に行きますか…

コンコン。

「ミア？起きてる？」

返事がない…あら、鍵がかかってないわね。
ガチャ。

そこでわたしが見たものは…

床で寝てるミアと…

ズミドにちよんんと座ってる黒いネコでした…

20 眠れない夜に（後書き）

せつかくなので怪談っぽく…
しようと思ったけれど難しかったですTT

21 眠らされた翌日

今日はちよつと朝から不機嫌なあたし。
原因は目の前にある、かわいい子。

朝、気がついたら、マリーさんに起こされてたの。

あたし、床で寝て…倒れてたみたい。

左のほっぺに、床の形がくつきりと残つてて、マリーさんが苦笑してた。

ぼーっとした頭で、こんなことになった原因を思い出そうとしたんだけど。

ふと眼をやると、あたしのベッドに黒いネコ…

食堂の準備をしながら、マリーさんに昨日の晩のことを思い出しながらしゃべってた。

のどがかわいてお水を飲もうとしたこと。

水差しに汲むのを忘れてたこと。

厨房のかめにもみずがなかったこと。（これ、実は毎朝新しい水をクルトさんが汲んできてたんだって。）

外に汲みに行ったこと。

そして部屋に戻ってお水を飲んだこと。

ここまでではわりとはつきり覚えてたんだけど…

「そのあと、よく覚えてないの…」

「いるはずのないネコくんは、びっくりしたのかしらね…」

それにしても、好かれてるわねえ。」

ふふつと笑いながらマリーさんがそういったけど、あのネコくんのせいで一晩床で寝てしまったのなら、何か悔しい気がする…

朝のご飯時間も終わって、今日はマリーさんとクルトさんが2人で出かけてる。

何でも、冒険者ギルドからの依頼を、うちの宿でも扱えるようになるっていうことみたい。

よくわかんないけど…

あたしはお留守番。

お昼もあたし1人じゃ何もできないから、今日はお昼の食堂はお休みにしてる。

休みでいいよって言われたんだけど…

誰もいない食堂で、なぜか黒ネコと一緒にいるあたし。

外したエプロンにじゃれついて遊んでるのを見ると、かわいいなっと思う。

アルくとメリーちゃんの子事件のときには、この子がいなきゃあたしは2人に会うこともできなかったし。

でもやっぱり…

「昨日のはひどいよねえ…」

ぼつり、と呟いても、返事をしてくれる人は誰もいない。

マリーさんは、このネコくんの関わった話を全部わかった上で、

「そんなになついているなら飼ってもいいんじゃない？」
って言ってくれた（昨日のことも含めていいっていうのは何だかな
んだけど）けど、あたしは迷ってる。
ネコを、っていうか生き物を飼ったことはない（少なくともオボエ
テナイ…）あたしでも、飼うのは大変だろって想像はできる。
ましてやここはお客様もくる冒険者の宿で、あたしは置いてもらっ
てるだけなんだもんね。

あたしがそんなに悩んでることを知ってか知らずか、ネコくんはい
つのまにかエプロンにじゃれつくのをやめて、エプロンにくるまっ
て寝てた。

「もー、キミのことを考えてるのにい。」

ふう、そろそろお昼だね。ちょっとお腹すいてきたし、ご飯にし
よう

ネコくんは寝てるみたいだし、このままでも大丈夫だね。

厨房に行くと、朝のついでにクルトさんがつくってくれたトマトの
スープと、薄く焼いたパンがあった。

温めて、っていつてたけど、1人分だし、火を起こすのももったい
ないからいいや。

…ちゃんと1人でも火は起こせるんだからね？

そのとき。

コンコン。

表の玄関をノックする音が聞こえた。

「はい？ちよっと待ってくださいねー！」

おっきな声で返事をして玄関に急ぐ。

あ、ネコくんがびくつとした。

扉を開けると、フェリックスさんたちがいた。

「よ、ミアちゃん。マリーさんたちうわあっ！」

急に叫んだフェリックスさんにびくくりしていると、駆けていくネコくん…逃げた？！

ま、いいよね…本人(?)の意思だし…

「びくくりした…わりい、逃がしちゃった？」

「ううん、いいです。それよりどしたんですか？」

「ああ、ちよつと挨拶にね。しばらく出かけることになったから。」

「にう…マリーさんとクルトさん、今日、冒険者ギルドにお出かけなんです。」

「あれ、そうなんだ。俺たちもさっきまで行ってたのになあ。」

振りかえった先で、アリサさんとエリカさんと…もう1人男の人が…誰だろ？

あたしの視線に気づいたのか、フェリックスさんが紹介してくれた。

「新しく一緒にやってくことになった、レックスだよ。」

レックス、この子はミアちゃん。ここのお手伝いな。」

「どうも、レックスつす。新しく『白を継ぐもの』に入れてもらっ
たつす。」

「は、はいいい…」

手を取られてぶんぶん握手されたもんだから、あたし目が回っちゃっ…

「レックスくん、ミアちゃんがふらふらですよー。」

「はっ、申し訳ないっす!」

「だ、だいじょうぶです…!」

アリスさんが助け舟出してくれてよかった…。

「しょうがない、夕方出直すわ。マリーさんとクルトさんによろしく伝えといてな。」

「はい、わかりました。」

「それではー、ミアちゃんまたですー」

アリスさんが手を振ってる後ろで、エリカさんも手を振ってくれた。

あたしも手を振って返す。

しばらく出かけるってことは、旅に出るのかなあ。楽しいかなあ？
また夕方くるみたいだし、どこに行くのか教えてもらおうかな。

と、そうだ。ご飯の準備中だったんだ。

…ネコくんはどこにいったんだろ？でもまたすぐに会える気もする、
ね。

21 眠らされた翌日（後書き）

昨日の続きです。

ネタばらし？ばねばねでしたよね ^ | ^ ;

22 しばしのお別れ

お昼ご飯を食べ終わっても、マリーさんたちは帰ってこなかった。お出かけしようかとも思っただけど、フェリックスさんたちの伝言もあるし、宿にいることにした。

でも、せっかく時間があるから、何かしよう

そだね…壁のランプって、普段あんまり磨く時間ないよね？

食堂の壁にかかっているランプくらいは…

背伸びしても…届かない…

どーせちっちゃいもん…

はあ…せっかくいい案だったのになあ。

あ、でもイスに立てばいけるかな。

イスを運びながら、アリスさんがあたしも魔法の素質があるって言うたことを思い出した。

背が高くなる魔法とかないかなあ…

そもそも魔法ってどうやって使えるようになるんだろ？

アリスさんに聞けばいいかな？あ、でもしばらく出かけちゃうんだよね…

ユーリさんならだいじょうぶかな？今度行ったとき聞いてみようかな…

カランカラン

扉のベルが鳴って、マリーさんとクルトさんが入ってきた。

「ミア、ただいま。…って、何で壁際に座ってるの…」

…マリーさん、固まっちゃった。クルトさんも、口開いてるし。あたしも何でイスを置いて座ってたかなんて説明はできないよ…？ランプとるためだったのに何で座ったんだろ…

気を取り直して、伝言を伝えないとね。

「お昼くらいにフェリックスさんたちが来たよ。」

「お出かけしてるって言ったら、夕方にまた来ますって。」

「ふうん、何かあったのかしら？」

「しばらくお出かけするって言ってたよ。」

「そっか。まあ、あの子たちが来てからまた聞きますか。」

そっいつて、イスを2つ引いて、クルトさんも一緒に座る。

「ミアにもちよっとお話ね。」

あたしも壁際に座ってたイスと一緒にテーブルまで移動して、お話体勢に入った。

「今度から、ギルド業務も一部請け負うことができるようになったの。」

「だから、お客さんが増えるかもしれないのよ。」

「業務って？」

「各種申請や、依頼の紹介なんかができるようになったんだよ。」

まあ、基本的にややこしいことはマリーか私がやるから、ミアは今まで通りがんばってもらえれば助かるんだけど。」

「そうね。いろいろ新しいこと聞かれるかもしれないけど、わたしたちに回してくれればいいからね。」

「うん、がんばるね！」

あんまりよくわかんなかったけど、お客様が増えるのはいいことだよな。

よっし、がんばるぞっ！

そのあと、いつものように夜に向けての準備をしてたんだけど、 Erickusさんたちがまた来たから、クルトさんも厨房から出てきて、一旦みんなで食堂に集まったの。

「マリーさん、クルトさん、今度新しく一緒にやってくレックスってんだ。」

「は、はじめまして、自分はレックスといいます！今後ともよろしくお願いします！」

「レックス、緊張しすぎだろ……」

「で、でもあの『ブリマ・ホワイト白の舞姫』っすよ？」

昼間よりも緊張してるのがよくわかるレックスさん。マリーさんに緊張してるみたいよね？

クルトさんは笑ってるけど、…あれ？マリーさん真っ赤つか…？

「そ、その話はもう終わり！いつまで古い話もちだすの禁止！」

「でもー、古いだなんてー、とんでもないですよー。」

マリーさんの叫びに、アリスさんが返す。エリカさんも、うんうんと首を縦に振ってる。

「マリーさんって、すごい人？」

思わず出ちゃったあたしの質問に、一瞬シーンってなったあと、みんながニヤニヤした。

あ、マリーさんだけ怖い…

「そりゃまあ…」

「リック…わかってるわね？」

「別にそれくらいいいんじゃない？…ミアちゃん、マリーさんはすごい人だよ。」

フェリックスさん、棒読みだよ…あれ、アリサさんも、エリカさんも、レックスさんも固まってる。

クルトさんは笑ってるけど。

「クルトも、もういいでしょ…」

…マリーさん、あいかわらず真っ赤っか。

…フェリックスさんたち、固まりっぱなし。

クルトさんの方を見ると、人差し指を口にあてて、シーってしてる。やっぱり聞いちゃだめなのかな。

何かちょっと変な雰囲気になったから別の話を振ってみようかな…

「んー、あ、そーだ。フェリックスさんたち、お出かけてどこいくの？」

「あ、ああ。そうだった。俺たち、しばらくタレイアから出る事になったんだよ。」

んで、マリーさんとクルトさんにあいさつに来たってわけで…」

あ、やっとマリーさんが普通になってきた。

「それで、今度はどこまでいくの？」

「ハルナソスまで商隊の護衛と、そこで別件がありそうなんだよな。呼び出し食らったから。」

「ふうん、王都かあ……。ま、気を付けて行ってくるんだよ。」

帰ってきたらまた顔を出しに来てちょうだい。」

「わかってるって。んじゃ、俺たち、打ち合わせもあるから、そろそろ行くわ。」

そういつてフェリックスさんたちは席を立った。

お見送りに行こうとしたら、夜の準備もあるだろうし、いいよって言うてくれたんだけど、マリーさんもクルトさんもお見送りする気満々みたいだし、あたしも玄関までついてく。

「それじゃ、気を付けてね。」

「へマするんじゃないよ？」

「またお話聞かせてくださいねー。」

3人で手を振ったら、フェリックスさんたちも元気に手を振ってくれた。

次に会えるのはいつかな？

「さて、それじゃ夜の準備しますか！」

「そうだね。」

「はい！」

今日もいっぱいお客様来るかな

22 しばしのお別れ（後書き）

タレイアは、この街の名前です。

ハルナソスはこの国の王都の名前ですね。

それにしてもマリーさんってば…

23 お祭りにむけて

今日は、クルトさんと市場に買い出しに来てるんだけど、何だかいつもより忙しそう。

「ん、ミア、どうかしたのかい？」

「クルトさん、今日は何だか市場全体が忙しそう。」

「ああ、きつと建国祭のためだね。」

「ケンコクサイ？」

「そう、このミューゼスの国の誕生日をお祝いするお祭りだよ。」

そつえば、洗濯に行ったときに、近所のおばさんたちもお祭りのこと、話してたなあ。

「まあ、うちは宿だから、これといって何かするわけじゃないけど、近所のお店でもお祭りに向けていろいろ準備しているところはあるんじゃないかな。」

「ふみゆ、楽しそうです！」

「タレイアでは2日間だけど、王都では10日間ほどかけて、お祭りがおこなわれるそうだよ。」

「えーっ？！すごいです…！」

よっぽど変な顔になったのかな…クルトさんがあたし見て笑ってる…でも、見に行く暇はないのかなあ。

そのあと、何件かお店を回って食材を注文したり、直接受け取ったりと市場を回ってきて、最後に酒屋さんに寄ったの。

今日はリユートさんだけなのかな。おじさんは見当たらないけど。

「ああ、クルトさん、いらっしやいませ。ミアさんもお久しぶり。」
「こんにちは。リユートくん、この間言ってた新しいお酒はどうなってるかな？」

「順調ですよ。建国祭で少し出してみようかと思っています。反応がよさそうなものを量産、ですかね。」

「そうか、うちも新しいのを入れてみたいし、またよろしく頼むよ。あと、いつものをまた届けておいてほしいんだけど。」

「すみません、お急ぎでしょうか？」

リユートさんの顔が曇った。どうしたんだろ？

クルトさんも、不思議そうな顔をしてる。

「実は、建国祭前で注文が立て込んでしまつてて…親父も手伝いの子も出ずっぱりなんですよ。」

「なるほどね。来れるとしたらいつくらいになるんだい？」

「夜にはお伺いできると思いますが…お忙しいですよね…」

「いや、それでかまわないよ。」

ただ、さすがに表からというわけにはいかないから裏口においてもらえればいい。

大変だろうけどお願いするよ。」

「いえ、それではそのようにさせていただきます。ありがとうございます。ありがとうございました。」

クルトさんもあたしも、荷物を抱えて宿への帰り道。

「みんな忙しそうです。でも何かにぎやかで楽しそう。」

「そうだね。この建国祭と新年祭は街中大騒ぎになるからね。」

「ふわぁ…早くお祭り見たいです！」

「ミアにとっては初めてのお祭りだね。」

「何だか今からドキドキしてきたあ…」

そんなあたしを見て、あははって笑うクルトさん。つられてあたしも笑っちゃった。

その日の夜も、いつもと同じように食堂はにぎわってた。

壁の掲示板を見に行く人もたくさんいた。（何かギルドからの依頼を貼りだしてるんだって。ギルドまで確認に行かなくても依頼がわかるってことみたいだけど。）

何度目かに厨房に戻ったときに、お勝手の扉がノックされた。きつとリユートさんだね。

「ミアごめん、手が離せないから頼む。出たところに置いてもらっていいから。」

「は、はいっ！」

火に向かっている最中のクルトさんが、いつもよりちょっと鋭い声で言うから、ちよっとしゃきつとなっちゃう。

ぱっと扉を開けると、リユートさんじゃなくて酒屋のおじさんがいた。

「わっ！」

「おっと、嬢ちゃんか。驚かせちゃったかい？」

「い、いえすみませんっ！」

「頼まれてたやつ、どうすればいい？」

「あ、えつとそこに置いてもらえればいいです。」

「そうかい、そりゃこっちも助かるな。」

そういって、はっはっはって笑うおじさんは、台車から陶器のビン

もとりだす。

「こいつは、今年の祭りで出すうちの1本だが、遅くなったお詫びだって、クルトに伝えといてくれ。」

「はい。わざわざありがとございました!」

おじさんの台車にはまだ樽やビンが残ってる。
配達って大変そう。

「おじさんもがんばってください!」

そういつて手を振ったら、おじさん、ガッツポーズで答えてくれた。厨房に入って、クルトさんにビンのことを伝えたら、「今晚、ちょっと試してみるかな。」っていつてた。

そういえばクルトさんがお酒飲むとこって、あんまり見たことないかも。

うちに来る人は、夜だとお酒頼む人もたくさんいるけど、お酒っておいしいのかな?

「ミアー、お皿下げてー。」

ポーっと考えてたら、食堂の方からマリーさんが顔を覗かせてた。

「は、はひっ!すぐ行きますー!」

いけないいけない、今はお仕事に集中しなきゃね。

24 いつもの朝？

「はれ…？」

いつもの朝。

いつものあたしのベッド。

いつものあたしの部屋。

いつものあたしの寝間着。

そう、おかしなところなんて何も無い。

昨日の記憶がないこと以外は…

…

…

うん、順番に思い出そう。

昨日もいつもみたいににぎやかな夜だったよね。

わたたと走り回ってお給仕してたよね。

酒屋のおじさんが配達に来てくれて、対応したよね。

そのあともお給仕したよね。

お客様が帰ったあとにお片付けしたよね。

あとはいつものようにお茶…

お茶したっけ？

とか考えながらちゃんと着替えてたんだよ。

準備完了！朝のお仕事いきますっ！

「あら、おはようミア。大丈夫？」
「おはよーございますマリーさん。」

…あれ？大丈夫って…？

「昨日は大変だったもんねえ…」

「マリーさん…」

「ん？やっぱり調子悪い？」

「……すみません、何があったか覚えてません…っていつか、あたし何かしちやいました…？」

マリーさんが苦笑い…してる、よね。

はうー、何だろ…

「ミア昨日、お酒飲んだの覚えてない？」

「おさけ…ってあのお酒、だよね…？」

「もちろんそうよ。それでね…」

「お茶持ってきましたー。」

「ミア、ありがと。今日もお疲れ様。クルトは？」

「もう来ると思います。」

ミアが言い終わるか終わらないかというところで、クルトも食堂から入ってきた。

カップと、陶器のビンも持ってきているけど、どうしたのかしら？

「クルトもお疲れ様。」

「待たせたかな。」

「それは？」

「ああ、酒屋の親父さんが持ってきてくれたんだよ。新しくつくったものの1つだそだよ。」

「なるほど。試してみるのね。」

笑顔で答えて、クルトが自分の分とあたしにビンの中身を注いでくれる。

カップの中身は赤く透き通って、割と嗅ぎなれた香りがする。

「これ、紅茶？」

「みたいだね。リユートくんのアイデアかな。」

「あ、甘いんだ。割と飲みやすいわね。女性にも受けそうねー。」

うん、女の子のお客様も来るし、こういうのがあってもいいわね。クルトもうなずいてるし、新メニューかも？

他の新作も気になるところだけど…

「クルトさん、あたしもちょっと飲んでみていい？」

「えっ？んー…ミアにはちょっと早い気もするけど…」

ミアの残念そうな顔に、わたしもクルトも弱いよね…

「ちょっとくらいならいいんじゃない？」

「そうだね。でも無理そうならやめとくんだよ。」

「はいっ！」

この子、ほんとにうれしそうなお顔するなあ…

っと、カップ2個しか持ってきてなかったのね。

「ごめんね、カップとりに行くのも面倒だし、わたしの残りでもいい？」

「わーい、いたたきますー。」

カップを両手で持ったミアは、まずくんくんにおいをかいでる。何となく、ミアって子犬っぽいところがあるのよね。素直でいい子だし。

あ、ちびちび飲んでる。

「わ、甘い。おいしーかも！」

もう、そんなにニコニコして…って一気に飲んじゃった？！

「ミア、そんなに一気に飲んだら…」

「クルトさん、これすっごくおいしーですよ！」

…割とお酒強いのかしら？

横を見ると、クルトもちよっと驚いてるみたい。

「ま、ミアも飲めるくらいだし、新メニュー候補、かしら？」

「そうだね。ま、今日はもう休もうか。片付けだけしてしまっよ。」

「あ、わたしも手伝っわ。ミアは先に休んでいいわよ。」

「えー、お手伝いしますよー？」

ミアの気持ちは嬉しいけど、初めてのお酒も入ってるし、休ませてあげた方がいいわよね。

もうやる気満々でカップ重ねてるけど…

「いいから、今日は先に上がってね。」

「うー、はあい。マリーさんありがとねす」

カップを取り上げたら（もちろんやさしくね？）、ミアも素直にうなずいてくれたし。

クルトも、先に持っていた分を洗ってるだろうし、洗うのと拭くのを手分けしてやったらすぐよね。

「よし、これで終わりつと。あれ、ビンは？」

「あ、まだ持ってきてないわ。取ってくるわね。」

ミアからカップだけ取り上げてそのまま持ってきてちゃったから…クルトがカップを棚に片付けてくれている間に行きますか。

「あれ、ミアまだいたの？」

テーブルに座ったままだったみたいだけど…

あれ、反応がない？

「ミア？」

「あ、まりーさん。ふあふあー。」

「ミア…ってあんた、酒臭い…」

「ごめんらさひー、びんがたおれね…」

よく見たら、テーブルの上に倒れたビン、ミアはお酒まみれで、酔ったってこと…？

「ミア、大丈夫？ちょっとべたべただし、流しに行ける？」

「かたづけましゅー…くうー…くうー…」

寝ちゃったし…やっぱりお酒は早かったかしら…

「で、体拭いて着替えさせて、クルトにベッドまで運んでもらったんだけど…」

「ううううめんなさいいいい…」

とんでもないことしてるあたし…
どうしよ…どうしたらいいの…？

「ミア、落ち着いて。大丈夫だから。ごめんね、わたしたちも飲ませちゃったんだし。」

頭痛いとか、胸がムカムカするとかない？」

マリーさんがぎゅってしてくれただから、ちょっとだけ落ちつけたみたい…

「だいじょぶです。頭も痛くないし、ムカムカもしないです…」

「それならいいわ。じゃ、今日もがんばりましょー！」

「は、はいー！」

次にあたしができることは…食堂まで駆けこむことだった。

「クルトさん！」

「あ、ミア、おはよう。大丈夫かい？」

「お、おはよーございます！だいじょぶです！」

クルトさんもマリーさんも、あたしの体調気にしてくれてる…ほん

とごめんなさい。

「昨日はほんとにすみません！」

「ミアが大丈夫ならいいんだよ。今日もしっかり頼むよ？」

「はい！あ、食堂の準備まだだから先に行つてきますね。」

まだテーブルとか準備してなかったから、食堂に戻ろうとしたら、クルトさんが呼びとめた。

「あ、ミア、1つだけ……」

「はい？」

「しばらくお酒禁止。」

あうう……しばらく飲みたいなんて言いません……

「ところで、頭痛かったりしない？」

24 いつもの朝？（後書き）

ミマちゃん、お酒に負けちゃうの巻でした。

25 お祭りの日に その1

「んー、よく晴れてるね!」

今日と明日は建国祭。もう大通りには、露店とかの準備で人が結構来てるみたい。

うちも忙しくなるのかな。

「マリーさん、おはようございます!」

「おはよう、ミア。」

「お天気もいいし、お祭り楽しそうですね!」

「ミアも楽しそうね。」

ふふっと笑ってるマリーさんも何だか楽しそう。

「クルトさん、おはようございます。」

「ミア、おはよう。今日は楽しそうだね。」

「だって、朝から大通りもお祭りって感じがしてて」

なるほどね、ってうなずいてくれるクルトさんもやっぱり楽しそう
な気がするな!。

朝のご飯時間も、お片付けも一段落したところで、ちょっと休憩で
お茶することになった。

いつもはお昼の準備もあるのに、どしたんだろ?

「ん？ミア、どうかしたのかい？」

「あ、今日は何かのんびりかなって…」

「言っただけだったっけ？昼はうち閉めるんだよ。」

「ふえ…？」

聞いてないよね…うん。聞いてなかったよね…？

「今日はお昼に開けてても、お客様は来ないんだよ。みんな、お祭りの方に行ってしまうからね。」

「そーなんだあ…」

「お茶が終わったら、準備しようか。」

「じゅんび…？」

ポカンとしてたら、いつの間にか後ろに来てたマリーさんが肩をポンとたたいた。

「お祭り、ミアも行くでしょ。一緒に、ね。」

「え、う、うん！」

忙しくて行けないと思ってたけど、行っていいんだ！

お茶をすませて、部屋に戻ったあたしは、エプロンだけ外して、下に降りてく。

おさいふは今日は持っていかなくていいっていわれたんだけど…

「さて、それじゃ行こうか。」

クルトさんの一声で、いよいよお祭りに出発！

玄関を出ると、いつもよりもずっと人が多いのがすぐにわかるくら

い。
宿から大通りはちょっと歩くだけだから、まずは大通りまで出るみたい。

「うわぁ、うわぁ…たくさん屋台が出てる！」

お肉を串にさして焼いてるところ、いろんな果物が置いてるところ、揚げ物にお菓子…

見たこともないくらいに、大通りがにぎわってた。

「とりあえず、広場まで行ってみようか。」

クルトさんを先頭に、あたしとマリーさんが少し後ろをついてく感じで広場まで進んでく。

もちろんその道には屋台や露店がたくさん並んだ。

けど、広場の盛り上がりは、そこまでの道以上だったの。

広場の一画にステージがつくられてて、何かイベント中みたいだった。

人がいっぱいであんまり近づけないから、何やってるかはあんまりわかんないけど…

「あれって、何やってるのかなぁ？」

「今は早食い大会かな。出場者が並んでるところだね。」

この後も今日は、劇団の出し物や歌唱大会と腕相撲大会の予選もあるはずだよ。」

「いっぱいあるんだねー…」

「ミアも出てみるかい？」

「ええっ、で、でないです…」

「あはは、冗談だよ。」

もークルトさんってば、びっくりしたよ…

広場もぐるっと1周して、もっと向こう側の大通りもちょっとのぞいてから、引き返すことになった。

途中の屋台でいろいろ買って食べたりもして、酒屋さんの屋台にも寄ったの。

クルトさんは、新作を少しずつもらってみたいだけど、あたしは禁止…しよーがないけどね。

「リユートくんの新作は、親父さんとは全然違う方向だね。」

「ええ、親父のは親父ので需要がありますが、今まであまりお酒を嗜まなかった方にも飲んでいただけるようなものができたらなと考えたので。」

今回、人気のあつたものを量産してみようかと思っています。」

「そうか、またお願いすることになりそうだね。」

「今後ともご贖員にお願いします。」

そんな感じでいろんなところを回りながらゆっくり戻ってただけど、だんだん人が増えてきたみたい。

広場も行きに通ったときより、戻るときの方がたくさん人がいた気がするし。

うー、ちょっと歩きにくい…ちっちゃいとこういつとききついよ…

「ミア、大丈夫？」

「あうー、だいじょぶですー。」

「ん…ほら、手、つないど。」

「えっ…」

マリーさんが手を出してくれてるけど、何となく恥ずかしい…けど、ちよっと嬉しいな。

えへへって笑って、手をつなぐ。マリーさんの手、あつたかいな。大通りを抜けるまで、ずっとマリーさんに手をつないでもらって帰ってきたんだけど、脇の道に抜けると、だいぶ人も減ってた。もう宿まではそんなにかからないけど、ここならいいよね……ちよっと前を歩いてるクルトさんの左手を、開いてる右手でつかまえた。

クルトさんは、ちよっとびっくりしたみたいだったけど、笑って握り返してくれた。

宿の前まであと少しだけど、3人並んで歩いてたら、近所のおばさんに、ミアちゃん楽しそうねって言ってもらったよ。

マリーさん、クルトさん、こんな嬉しい気持ち、ありがとう！

この後もがんばるからね！

25 お祭りの日に その1 (後書き)

今日分だけは予約更新ですが、明日、明後日とちよつと更新がで
きなくなります。

また次話でお付き合いいただければ幸いです。――――<

8/21:次話に合わせて、題名をちよつと変更。

26 お祭りの日に その2

今日は建国祭の2日目。

昨日の食堂は、夜もいつもよりお客様が少なく、楽しかったけど、お泊まりは満室になったよ。

今朝は昨日からの続きで屋台の準備も早いみたいで、朝ご飯を取らずにお祭りに向かうお客さんもいるみたい。

おかげで朝の食堂も、いつもより少し余裕があったんだ。

「今日も、お昼は閉める予定だったんだけど、私はギルドに行かなければならなくてね。」

「そうなんだ…。」

「だから、今日はわたしと2人だけど、一緒に回りましょ。」

「せっかくのお祭りなんだし、そんなにしよげないように。私の分まで楽しんで来てくれればいいよ。」

「うん、ありがとークルトさん。」

ちょっと残念だけど、お仕事じゃしょうがないよね。

部屋に戻って準備して、降りてきたときにはクルトさんはもう出かけちゃったあとみたい。

マリーさんと、戸締り確認して、いざお祭りに出発〜！

今日もまずは広場まで行ってみることにしたんだけど、大通りに出ると、もうすでに大賑わい。

「昨日よりも、人が増えてる気がしますー…。」

「そうね。はぐれないように注意しなきゃね。」

マリーさんと手をつないで、大通りをゆっくりと進んでく。

屋台や露店も昨日より増えてるみたいで、みんなとっても楽しそう。広場につくと、ステージには『力自慢！腕相撲大会』の横断幕がかかってる。

何人もの人がステージ上に立ってて、台の上で腕相撲してるのを、司会の人盛り上げてるところだった。

「あの人、おっきい声ですねー。」

「んー、多分魔法で大きな声にしてるんじゃないかな？」

「あらっ？ミア、ちよっと前まで行ってみましょ。」

何かに気づいたマリーさんに引つ張られて、人ごみの中を進んでく前の方まで来て、マリーさんが指さす方向を見ると、知ってる人がいた。

「あ、ラルフさんだ！」

「出てたのね。わたしに内緒だなんて、どうしてやるうかしら。」

急な言葉にびっくりしてマリーさんを見たけど、いたずらっぽい笑顔だったから、一安心。

そうこうしている間に、ラルフさんの順番になった。

名前が呼ばれて、相手の人と組んだところで、マリーさんがつんつんとつついてきた。

「はひっ?」

「ミア、ラルフのこと、応援してあげよっか。ふふっ」

「え、う、うん。」

みょーに楽しそうなマリーさん。

でも応援してあげるのはいい案だよね！

おつきく息を吸って、ステージに向かって叫んでみた。

「ラルルーファーさーん、がーんーばってーん！！！」

声に反応して、ラルフさんがこっちを見てくれた。

司会の人がかわいい応援団も来ているようです！」「っていうと、会場がわーっとわきあがって…

あれ、ラルフさん、顔が赤くなった。てれやさん？

「ラルルー、負けたらわかってるわよね？」

っていうマリィさんの声に、今度はビクッてなるラルフさん。

「前置きが長くなってしまいましたか…」という司会の人的一声で、再びわきあがる会場。

そんなこんなで、勝負が始まったんだけど、ラルフさんは割と余裕で勝ってた。

そのあとも順調に2回勝ち進んで、次がいよいよ優勝決定戦っていうところまできちゃった。

相手の人はラルフさんよりごっつい人で、ちよっとラルフさんピンチな感じ…

「さあ、いよいよ今回のナンバーワンが決まるときがやってきました。冒険者を引退し、鍛冶屋として新たに邁進するラルフか、それとも前回チャンピオンのギツシングか。

注目の一戦、レディ…ファイト！！！」

司会の人のお合図で、勝負は始まったけど、2人の腕はほとんど動かなかった。

それでも、お互いに全力の力を込めてるのは、ぱんぱんに張ってる筋肉が小刻みに震えてるので、見てる人にも分かったんだと思う。会場は、今までにも増して盛り上がってるし、あたしも全力でラルフさんに声援を送ってるんだけど、当の2人はまだ動かないまんまふつと横を見ると、マリーさんは静かに勝負を見てた。けどその表情はちよつと困った顔…？

会場の声がさらに大きくなったから、ステージを見てみたら、ラルフさんが少しずつ押されてた。

そのきつそうな表情を見ると、何だかあたしまで緊張してきた。応援したいのに、声が出なくなっちゃったみたい…

そしてラルフさんはそのままじわじわと押されて、とうとう負けちゃった…

「勝者はギッティング、これで3連覇だ〜〜！おめでと〜〜う！
！」

司会の人の宣言で、会場はすごい拍手と歓声に包まれる。

ラルフさん、負けたのに笑顔で相手の人と握手してる。

悔しくないのかなあ？

表彰式も終わってラルフさんがあたしたちの方に来てくれた。

「マリーさんもミアちゃんも、応援ありがとうございました。

来てるとは思いませんでしたけどね。」

「まあ、いいじゃない。

それにしても、強くなつたわねー。あのころとは大違いだわ。」

ふふつと嬉しそうに笑いながら、マリーさんがラルフさんの腕をぽんぽん叩いていた。

2人とも、負けたことをあんまり気にしてないみたい。

「ラルフさん、負けたのにあんまり悔しくないみたいですね？」

「ん？ああ、今の俺の全力でぶつかった結果だからね。

悔しくないわけではないんだけど、それ以上に全力を出せたことがよかつたかな。」

「ふみゆー……」

「ま、もちろん次は負けるつもりはないけどね。」

そういつて、ラルフさんが見た先には、みんなに祝福され続けているチャンピオンのギッシングさんがいた。

そのラルフさんの表情は、とっても楽しそうだった。

マリーさんは、そんなラルフさんを見ながらうんうんとうなずいてる。

よくわかんないけど、悔しだけよりは、楽しい方がいいよね。

そんなラルフさんを見ると、何だかあたしもいろいろがんばるって勝手に思っちゃいました。

26 お祭りの日に その2 (後書き)

無事帰ってこられました。

累計2000PVありがとうございました！

お祭り、もうちょっと続きます。

27 お祭りの日に その3

腕相撲大会が終わったラルフさんとあたしたちは一緒に少しお祭りを回ることになった。

実はラルフさんも、鍛冶屋さんで出店してるんだって。だから、ご飯だけ一緒に食べようってことになったの。ラルフさんのお父さんも、腕相撲大会で優勝したことあるみたい。それで今回ラルフさんも参加することにしたんだって。

「まあ、じっくり鍛冶の修行しながら体も鍛えますよ。」

「それじゃ、次回はチャンピオンのラルフが見られるってわけね。」

「ラルフさんがんばってください！」

「はははっ、ちょっと気が早かったかな？」

そんな話をしながら、ラルフさんの屋台の方に向かってく。

途中の屋台で串焼きのお肉といろんな果物のジュースをみんなで分けたりもしたよ。

ちなみに、ラルフさんの屋台では、お父さんが包丁100本研ぎに挑戦中なんだって。

腕相撲といい、ラルフさんのお父さんは、何かに挑戦するのが好きなのかな。

そうこうしているうちに、ラルフさんの屋台についた。

周りには、近所のおばさんたちが輪になってるとこだった。

中心はもちろんラルフさんのお父さん、包丁を研いでる真っ最中。

「父さん、ただいま。」

「こんにちは。ご精が出ますねー。」

「ああ、おかえり。マリーさんもいらっしやい。」

ちらっとこつちを見ただけで、また包丁に集中してる。

「で、どうだったんだ？」

「あー、チャンピオンには勝てなかったよ。父さんの方は？」

「う、む。73本目だ。少しかかり気味かな…」

そんな会話をしながらも、ひたすら包丁を研いでる…すごい。

その横で、ラルフさんは販売の準備を始めてる。

おうちで使えるような簡単なものを安く出売るみたいで、すでに人が並びだしてた。

「あんまりじゃましても悪いわね。わたしたちも戻ろっか。」

「はい。ラルフさん、おじさん、またですー。」

「がんばってね。」

「すまないね、碌に鎌いもせず。」

「マリーさん、ごちそうさまでした。」

忙しくなったラルフさんとこの屋台を後にして、そろそろ宿に戻るうってなったんだけど、途中で1つやりたいことがあったからマリーさんに相談してみた。

「クルトにおみやげ？」

「うん、ちゃんと自分で持ってきたから…」

そういつて、持ってきた小袋おきこぶを懐から出して見せたら、マリーさん、ちよっと渋い顔になっちゃった…

「ミア、もしかして全部持ってきてる？」

「ふえ？…うん、全部。」

「んー… ちょっと中身が多くて怖いんだけどね…」

お祭りときは人が増えて、スリとかも多くなるからね… って、顔を曇らせたマリーさんを見てると、相談せずに持ってきちゃったの、大失敗… しょぼん。

「勝手に持ってきてごめんなさい…」

「ま、今日はわたしも注意してなかったしね。使わない分はわたしが預ければ大丈夫かな。それで、どんなおみやげにしたいの？」

マリーさんが頭をなでなでしながらそう言ってくれた。ありがとーマリーさん… ぎゅむっと抱きついちゃう！
… そーいえば。

「… 何がいいのかな？」

「考えてなかったのね…」

「はう…」

「そうねー… あ、昨日見た珍しい果物とかは？ クルト結構好きだし。」

「じゃあ、それにしますー！」

というところで、小袋おさいふの中身は1枚銀貨8枚と、あとは銅貨だけにして、残りはマリーさんに預かってもらうことに。

「屋台の場所、覚えてるわよね？」

「だいじょうぶです。」

「わたしはちょっとこのままうちに戻るから、気をつけて行くのよ。」

マリーさんは、夜の準備があるから一足先に帰ることになったけど、屋台はそんなに遠くないし、あたしも遅くならないようにしなきゃ。確か、広場からちょっと行ったところが変わった果物いっぱいあったよね。

広場まで来ると、相変わらずの大賑わい。

ちょうど美男美女コンテストっていうのをやってるみたい。

腕相撲大会のときよりも人がいっぱいいるよー…

何とか人ごみを抜けて、ほっと一息。

ついたときに、前から来た人にどんって当たっちゃった。

「きゃうっ！」

ぶつかった衝撃と、びっくりしたのとでちょっとよろけちゃった…

「ぎゃっ！」

「にゃー！」

「くそっ、このネコ何しやが…いだっ！」

「にゃにゃっ！」

ちよっと先のところで、あたしにぶつかった人…だよ、と黒ネコが争ってた…

あれ、もしかしてあのネコくん…？

周りの人も、その争いを不思議そうに見てる。

そうこうしてるうちに、ぶつかった人はネコくんを振りはらって走っていった。

ネコくんは、あたしの方に向かってくる。

「どしたの？」

しゃがんで声をかけたあたしの目の前で、ネコくんは啞えてたものを放した。
チャリン。

「あれ…それ…？あー！ー！」

懐にあつたはずの小袋は、なぜか目の前に…。
もしかして取り返してくれたのかな…？
ネコなのに？！

小袋を拾い上げてあたしとネコくんを中心にちよつとした人だから
ができてただけけど、なぜか急に拍手が起こった。

「いやー、優秀なネコだ。」「使い魔だったりして？」「あんな小さな子が魔法士かあ？」などとよくわからない周りのお話に、ちよつと居辛くなつたあたしは、ネコくんを抱っこして逃げることにした。

ネコくんもおとなしく抱っこされてくれる。

「す、すみません通してください！」

広場の端まで走って、ちよつと一息つく。

あ、ネコくんがちよつとぐつたり…ごめん、走ったときに揺れちゃつたんだね。

ゆっくり降ろしてあげると、ちよこんと座った。

「ネコくん、あたしのおさいふとり返してくれたの？」

「にゃー。」

「ありがとね…」

「にゃ。」

言葉はわかんないけど、気持ちは伝わったかな…

このまま帰ろうかと思ったけど、もう屋台もすぐだし、お金持っているのも何となく怖いから、予定通り果物を買っていくことに決めて歩きだしたら、ネコくんもついて来てくれた。ちよっと心強いかも。

結局、屋台で変わった果物をいろいろと買い込んで、お金をほとんど使いきっちゃった。

屋台のおじさん、結構たくさん買ったから、あたしが持てるか心配だったみたいだけど、何とかいけぞ。

「ネコくん、帰りにうちまで来る？お礼にミルク頼んであげるよ？」
「じゃ。」

たぶん、「いいよ」っていったんだよね。
それじゃ、落とさないように帰らなきゃ。

何とか宿まで帰り着いたんだけど、途中までついて来てたネコくんは、どこかではぐれちゃったのかな…
それとも、返事は「いらない」だったのかなあ…
今度来てくれたら、しっかりお礼しなきゃね。

27 お祭りの日に その3 (後書き)

ミアちゃん、危機一髪。

ネコくん大活躍?!の巻でした。

28 魔法が知りたいの その1

お祭りも終わって、またいつもの日々に戻ったら、朝もお昼も晩も、食堂が盛況です。

今日も元気にお昼の食堂営業終了！

「それじゃ、ユーリさんのところ行ってきますー！」

「はい、気を付けて行ってらっしゃい。」

小さなバスケットを持って、いざしゅっぱーっ！

カランコロン。

扉を開けると、少し傾いたお日様が、元気に照ってる。今日もいい天気だね。

今日はユーリさんのお店で、人に会う約束してるの。

一昨日行ったときに、魔法について知りたいなっていったら、ユーリさんがゼル先生を呼んでくれるって言ってくれたの。

ユーリさんところに向かって歩いてくると、聞きなれた声が聞こえた。

「にゃっ。」

「ネコくんこんにちは。」

お祭りの日以来、外に出るとよく会うんだよね。

今日はあたしの持つてるバスケットに鼻を近づけてくんくんしてる。

中身はクルトさんが焼いてくれたクッキーなんだよね。

ユーリさんとゼル先生へのおみやげなんだけど…

「1枚だけだよ？」
「にゃー。」

食べやすいようにちよつと割ったクッキーを、手のひらにのせて差し出すと、ネコくんはぺろりと平らげちゃった。

おなかすいてるのかな…クルトさんのクッキーがすごくおいしいからかな？

食べ終わったけど、次を催促するわけでもなさそうだね。

「あたしこれからおでかけなの。それじゃまたねー。」

手を振って歩きだしたら、ネコくん着いてきちゃった。

ま、いいよね？

そんなわけでネコくんをお供に従えてユーリさんのお店まで一緒にてくてく。

「ユーリさん、こんにちはー。」

「あ、ミアちゃん、いらっしやい。ちょうど今、先生も来たところ

よ。」

「ミアさん、お久しぶりですね。」

「ゼル先生、こんにちはー。今日はありがとーございます。」

一通りあいさつが終わったところで、バスケットの中身を取り出したら、ユーリさんはお茶を入れてくるねって行っちゃった。

ゼル先生と2人きり。うー、前に一回お話しただけだからまだキンチョーするかも…

「そういえば、ミアさんは魔法のどんなことを知りたいんですか？」

「はひっ…えと、あの…」

どう説明したらいいんだろって悩みながら、前に魔法を使ってもらったこと、記憶が戻らなかったこと、封印か呪いのようなものが関係していること、白色魔法の素質があるって言われたことを説明した。

「ふむ、何かと魔法に縁のありそうな話ですね。

まずは簡単に魔法とはどのようなものを説明してみましようか。

「あら先生、さっそく授業ですか？」

笑いながらお茶を持ってくるユーリさん。

クッキーとお茶を嗜みながらゼル先生がお話してくれる。

「魔法とは、このセルフアリアの世界に満ちるマナと呼ばれる力を、自らの持つマナによって導き、様々な形で具現化するものと言えます。」

そして、6つの色でその性質が分かれています。

我々が魔法を使うときは、各個人のフィルターを通して、世界に満ちるマナに色をつけるようなイメージですね。

ですから、素質、言い換えれば、その色を持つ者でしか、魔法を発現させることはできません。

我々人族は、黒を除く5色を、妖魔族は白を除く5色を使うことができる可能性がありますね。」

せんせー、むつかしいです…

「今のは概念なのであまり深く考えなくてもいいですよ。

次に封印と呪いのことを少しだけ…

封印、あるいは呪いは、白色もしくは黒色の魔法で扱える属性です。ね。

アリサさんが越えられなかった強さだとするとよっぽどですね。」

「アリサさん知ってるんですか？」

「ええ、魔法士ギルドに所属していますし、『白を継ぐもの』といえばそれなりの知名度ですよ。」

『白を継ぐもの』って……つまりフェリックスさんたち全員が有名なんだ。

そしてまた新しい言葉がでてきちゃったよー。

「魔法士ギルドって何ですか？」

「ああ、名前の通り魔法士が所属しているギルドですね。」

以前もお話したとおり、2色以上の魔法を扱う者を魔法士ソーサラーと呼びます。

そういった人たちは、魔法士ギルドに所属することで、ギルドから魔法を学ぶことができますのです。

もちろん私も所属していますよ。」

「あたしはギルドには所属していないから、先生から習ってるだけなのよ。」

「ユーリエくんのように、1色みの素質を持つ方は、ギルドに所属することはほとんどありません。」

色を組み合わせる使えないために、覚えられる魔法に限りがあるからです。

ただ、そういった方には、ギルドに所属する魔法士が私塾などで教えることになっていました。」

「だからユーリエさんの先生なんですね。」

「はい、その通りです。ただ、例外がありまして、白色だけは、他と素質を併せ持つことがないのです。」

そして、白色はそれだけで割と覚えられる魔法がたくさんあるた

めに、ギルドに所属する価値もある、ということになります。」

それでアリサさんもギルドにいるのかあ。

あれ、それじゃもしかしてあたしもギルドに入れば魔法が覚えられ
たりするのかな？どきどき…

28 魔法が知りたいの その1 (後書き)

今回もちよつと説明ばっかりです。

センサー、説明難しいです……

題名変更しました。

29 魔法が知りたいの その2

「ただ、問題がありました…ギルドに入るには会費を納めなければいけません。これが結構高額なのです。」

もしくは特待生として受け入れてもらう方法もありますが、この場合、高い素質はもちろん、知識もしっかりしていないとその試験に通ることは難しいですね。

魔法を使う場合、ルーンワード魔法語の読み書き、正しい発音も必須ですので、まずはそこから勉強していくことになるでしょう。」

「…お金持ちになるか、すっごく勉強するかしか方法がないってこと…?」

「どっちも無理っぽいです…」

「あたしはルーンワード魔法語完璧じゃないけどね。使うものが限られてるし。」

「ユーリエくんのように、1色であればそれでもいいのですが、限られてるとはいえ、簡単にできることはありません。ユーリエくんは私が教えている中でも、非常にまじめな生徒でしたよ。」

「先生だったら、おだてたって何も出ないわよ?」

「ユーリさん、口調はきつめだけどちょっと照れてますね?うふふ。」

「あれ?もしかしてゼル先生に習ったらダメなのかな?宿のお手伝いしながら何とかならないかな?」

「残念ですが、私は青と緑の魔法しか教えることができないのです。ですから、ミアさんが魔法を使いたいならば、ギルドに所属するか、ヒールラー治療師の方に直接習うか、になりますね。」

「ヒールラー治療師で暇してる人なんてほとんどいないわね…」

教えてもらって言ったらやっぱりギルドの治療師ヒーラーになるかしら。

「そっかあ」

「ただ、魔法語ルーンワード だけなら、私が教えることは可能ですよ。これには色は関係ありませんから。」

そういつて、ゼル先生は持ってきていた本を開こうとしたとき、足もとから黒い塊があたしの膝の上に飛び乗ってきた。

「にゃー。」

「あれ、ネコくんも入ってたんだ？」

「この子、ミアちゃんのお友達？」

「んー、そんな感じ、かな？」

あたしの上に乗ったネコくんは、ゼル先生が開いた本を見てる。まさかネコくんが読めるわけないよねー…

「はれ？…これが魔法語ルーンワード ですか？」

「ええ、そうですが…？」

あんまりにもすっとんきょうな声を出しちゃったからなのかな。

ゼル先生が不思議そうに尋ねてくるし、ユーリさんも同じような顔してる。

でも、それくらいびっくりしたんだもん。だって…

「あたし、これ読めます…！」

「「ええっ?!」」

ゼル先生とユーリさんが全く同じ反応をした…。見事なハモリです！

「だってミアちゃん、これ全部 魔法語マジックワード なのよ？」
「よくわかんないけど、知ってるみたい…？」

2人ともまだ信じられないみたいだけど、ネコくんはじつとこっちを見て何か言いたそう。

「んー、あ、読んであげればいいってこと？」

なんて思ったらタイミングよくネコくんが両目をぱちっとなつむったから、ちよっとおかしかった。

でも、読めば分かってもらえるよね？

「えっと、 ははなるあおきつみやさしくつつみまもりとなれ？」

「読めて…ますね。 たしかに…意味は取れてないようですが大したものですよ。」

意味を理解して読むことができれば、魔法を使うこともそんなに難しくないかもしれませんね。」

「意味を理解したら魔法が使えるの?!」

思わず立ちあがっちゃったらネコくんがぴょんと跳びおりて、そのまま逃げちゃった。

…ごめんね。驚かせちゃって…

「まあ、ミアさんは白色の素質があるようなので、私の本では勉強できませんね。」

私は青と緑しか使えませんから。

あとは魔法の発動体が必要ですね。」

「発動体…？」

例えば…と言いながら、ゼル先生は短杖トングを取り出した。

先っぽに青い石と緑の石がはまってて、何かかわいい感じ。

「私の場合は、青と緑を使いますので、それに合った発動体を持っているわけです。」

「ですから、ユーリエくんなら…」

「このペンダントね。」

そういつて胸元の石を見せてくれた。もちろん青い石。ユーリエさんは青色魔法が使えるんだもんね。

アリサさんも、魔法使うとき、ペンダント握ってたよね。

「あれ、そーいえばアリサさん、ルトンワード魔法語使ってなかった気がする…」

「魔法に慣れてくると、詠唱しなくても発動することが可能になるのですよ。」

もちろん、意識として、詠唱と同じようにルトンワード魔法語を連ねることとは必要ですし、その魔法の核となる名前は、声に出さなければ発動しませんね。

先ほどミアさんが読んだものは、プロテクション《保護》という魔法の詠唱です。ただ、詠唱なしになると、発動が非常に早くなるので、非常に有用でしょうね。」

「そっかぁ…」

アリサさんは魔法に慣れてるってことなのね。でも、今のままじゃ魔法習うのは無理かなあ…
アリサさんがいたら教えてもらえるのかな？
今度来てくれたときに聞いてみようかな

29 魔法が知りたいの その2 (後書き)

今回も説明っぽいです。

ややくしなくてごめんなさい。

筆者の頭も、うにうにになりそうです…

.....

ふう……

久しぶりにあの夢を見た。

白枝亭に来た当初は何度も見た夢。

最近はしばらく間が空いてただけど…

窓を開けるといつもよりずいぶん早く起きちゃったみたい。

あんまり気分も良くなかったし、朝の準備の前に、おさんぽに行くことにした。

着替えて外に出ると、空がほんのり明るくなりだすところだった。

広場の北側にある、街中の川まで行っても大丈夫かな。

まだ静かな街の中を、てくてく歩いてく。

こんな時間でも、煙突から煙が上がるところがある。

ここはパン屋さんだね。焼きたてのパンの匂いがお店の外までただよってくるね。

朝の広場は、昼間とは全然違って、とつても静か…

まだ鳥も起きてないのかな？

噴水の音がいつもよりも大きく聞こえる気がしちゃう。

「にゃー。」

「あれ、ネコくん。おはよー。」

噴水のところにちょこんと座ってるネコくん。

何か待ち合わせてみたい？

もう何だか当たり前のように、ついてきてくれるネコくんと一緒に、広場を越えて歩いてく。

こっち側は大きな通りがないから、ちょっと狭くなった道をどんどん進んでく。

川辺まで行くと、だいぶ空も明るくなってきてる。

そろそろお日様が昇ってきそうだね。

川に沿って歩くと、ちょっと涼しい気持ちになるね。

あ、人がいる。あの人もおさんぽかな？

ゆっくりしてたい気もするけれど、そろそろ戻らなきゃ朝の準備に間に合わないかな？

来た道をそのまま引き返してもいいけれど、ちょっと別の道を通ってみようかな？

「にゃん。」

いつの間にかあたしの前に出てたネコくんが、こっちを振り返って鳴いた。

何だかついて来いって言ってるみたい？

小走りのネコくんを追っかけて、通ったことのないちょっと細い道をてくてくてくてく。

まわりのおうちの人も、起きてる人が増えてきてるね。

煙突から煙が出てたり、声が聞こえたり。

だんだん街が、起きていくみたい！

ネコくん連れられて、細い道を抜けた先は、広場よりも宿に近い

大通り。

こんな風に抜けることもできるんだね。

ちよつど昇り始めたお日様を背中に感じる。

ネコくんもあたしも、とつても長い影をつくってる。

ここから宿まであと少し。

ちよつぴり駆け足。ネコくんと勝負！

つて思つたんだけど、ネコくんはあつという間に先に行ってしまった。

足、速すぎるよー。バイバイもしてないのに…

宿に着いたけど、表の玄関はまだきつと鍵がかかっているから、裏に回ってお勝手に。

カチャ。

中に入るとクルトさんがもう準備を始めてる。

「クルトさん、おはようございます。」

「あれ、ミア、どこかいつてたのかい？」

「ちよつと早起きしたからおさんぽにいつてきました。

気持ちよかったです!」

「ははは、元気いっぱいだね。それじゃマリーも待つてるだろうし、今日も準備の方、しつかり頼むよ。」

「はーい!」

食堂に入ると、厨房から入ったあたしに、マリーさんがちよつとびつくりしてる。

「マリーさん、おはようございます。えへへ。」

「もう、今日はちよつとお寝坊さんかなって思ってたなら、そっちか

ら来るなんて。」

「ちよつとおさんぽ行つてたんです。」

「そう、何だかとっても楽しそうね。」

「とっても気持ちよかったです！さあ、がんばるぞー！」

起きたときは何だかちよつといまいちな気分だったけど、おさんぽのおかげでとっても元気。

いつもよりがんばれそうな気がするね！

食堂の準備もばっちりになったころ、お泊りのお客様たちが降りてきた。

「おはよーございます！すぐにご用意しますね！」

「お、ミアちゃん今日も元気だねー。何だかこっちまで元気になるよ。」

それじゃよろしく頼むよ。」

「かしこまりましたー！」

お客様にも喜んでもらえたり、また早起したらおさんぽ行こうかな

31 風邪

「うん、やっぱり熱があるわね…風邪かしら？」

「あー…」

「あとでユーリちゃんに来てもらうから、眠たくななくても目を閉じて横になってるのよ。」

「はい…ごめんなさい…」

「大丈夫よ。さ、部屋に戻って休んでて。」

今朝、起きたら何だか体がすごくだるかった。

昨日もちよっと暑くて寝つけなかったし、寝不足なのかなって思ってた。

着替えて降りてったら、マリーさんが「ミア、どうしたの、顔真っ赤じゃない！」って。

そのままおでこに手をあてたマリーさんに促されて部屋に戻ってきたところ。

お手伝いできなくて迷惑かけるけど、このまま行っても役には立てないよね…

ちゃんと寝て治さなきゃ…

もっかい寝巻に着替えてベッドにもぐりこむ。

横になっても、体が何だか重たくなつた気がする…

「…………ア、…………ミア。」
「ほえ…？」

まだ何かぼーっとしてるけど、声がする方を向いてみた。
マリー、さん…？

何だか声がぼんやりしてるし、まぶしくて見えないよ…

「封…………乱れ…………な…、…憶を…………せる…………し…………」

よく聞えないよ…

それに体が動かない…の…

マリーさん…！

「ごめんね、起こしちゃって…」

「あれ…マリー、さん…？」

あたしはベッドに寝てた。

隣りにマリーさんが座ってる。

おでこがちょっとひんやりしてた。

「大丈夫？タオル替えたところだけど、ちょっと汗もかいちゃったみ

たいね。

1 回着替えた方がいいわ。いける？」

「ん…」

ベッドの上で体を起こすと、寝巻が体にぺっとりくっついてた。

ちよつと脱ぎにくくてもぞもぞしてたらマリーさんが手伝ってくれる。

「ありがとうございます。」

「うづん、ちよつと体拭いちゃうからじつとしててね。」

動けるほどの元気もなく、ぽーっとベッドの上に座ってたら、マリーさんが硬く絞ったタオルで体を拭いてくれる。

ちよつとくすぐったいけど、ぺとぺとしたのが拭ってもらえて、さっぱりする。

「はい、じゃこれ着てね。」

「うん…」

もぞもぞしながら、マリーさんに手伝ってもらって替えの寝間着に着換えることができた。

「それじゃ、もうちよつと寝てようね。ユーリちゃんももつすぐ来てくれると思うし。」

「ん…」

横になったら、マリーさんがお布団をかけてくれた。

そして、もっかい新しいタオルをおでこに乗っけてくれる。

「マリーさん…いそがしいときにごめんなさい…」

「ミア、気にしすぎよ。それに、あたしたちこそ、気付かなくて」「めんね。」

「うづん、そんなことない…そんなことないよう…」

そっと手を握ってくれたマリーさん。

ほっとした瞬間、涙が出てきて止まらなくなった。

「うー…うくう…ううー…」

「よしよし…もう少し休もうね。」

しばらくはここにいてから、心配しないで。」

「う…ん…ひっく…」

マリーさんがお布団の上から、ぽんぽんって叩いてくれてるのが心地よくて、少しずつ涙も落ち着いてきた。

目を閉じてても、マリーさんがずっといてくれるのがわかるから、とつても安心できる…

あれ…何かいる…

黒い…人影…？

いつの間にか周りに何人も…

見られてる…気がする…

どうしていつも…

「…アチャ、…アちゃん、ミアちゃん…」

「大丈夫？うなされてたみたいけど…」

「はれ…ユーリさん？」

夢…っか。

心配そうにのぞきこむユーリさんに、何とか笑顔で答えた。 ンだけ
ど…

「無理しないの。ちょっと確認させてね。」

そういつて、おでこや首をさわったり、口の中を見られたり…
一通り終わったところで、カバンの中からいくつかの包みを取り出
してる。

「お薬、持ってきてるから。飲めそう？」

「ん、だいじょぶだと思いま…ふい」

体を起こそうとしたらふらっとして、起きれなかった。

「急に動いちゃだめよ。ちょっと下で煎じてくるから待っててね。」

そういつて、ユーリさんがパタパタと走っていった。
いつのまにか寝ちゃってたんだね…
何かやな夢見たような気がするけど、さっきよりちょっとは楽にな
ってる…気がするかな…？

少し待つてると、すぐにユーリさんがマリーさんと一緒に戻ってき
た。

ユーリさんはカップを持ってきてる。
きつとお薬だよな。

「はい、じゃこれ飲んでね。
むせないように注意してね。」

カップの中身は、黒っぽくて、何か不思議な香りがした。
こく。

一口飲んだら…

「うー…」
「がんばって、ミアちゃん。」

とつても苦い…
鼻をつまんで一気に飲み込んだけど…苦いのが口の中に残ってるよ
う…

「はい、ミア。」
「うー？」

マリーさんが続けてカップを渡してくれた。
今度は何だろ…？

「心配しなくても、ただのお水だから大丈夫よ。」

よっぽど変な顔しちゃったのか、マリーさんもユーリさんもちょっと笑ってた。

もらったお水で口をゆすぐように飲んだら、ちよつとにがにがも治まった。

「あとは寝てれば、夕方にはだいぶ落ち着くと思います。」

「ユーリちゃん、わざわざきてもらってごめんね。」

「そんな、マリーさんたちにはうちもお世話になってるし、ミアちゃんのためですから。」

「ユーリさん、ありがとう…」

「うん、さ、あとはしっかり寝てね。」

「はいー。」

もっかいベッドに横になったら、マリーさんがお布団をかけ直してくれた。

そして…あつという間に…

「じゅー。」

あれ…ネコくん、いつの間にか…？

でも周りはぼんやりとしている。

もしかして夢かな…

っていうか、何かネコくん、白く光ってない？

あの時の…魔法使ってるアリサさんみたいに…

じつとこっちを見ているネコくんの目を見ると、何か伝わってくる気がする。

早く元気になって、っていつてるような…

何だか体が楽になっていく気がするよ…

ありがとうー、ネコくん。

みんなが優しくしてくれたから、きっと明日は大丈夫だよ…？

3 1 風邪（後書き）

風邪ってつらいですね…

夏風邪は特にしんどいって言うけど。

ちょっとミアちゃんをいぢめてしまった気がする…（…）（…）

32 できちゃった

「んあ…?」

見慣れた部屋の天井が、いつものように見える。

今日は、体のたるさもほとんどない感じで、元気いっぱい

昨日1日、迷惑かけちゃった分、今日からまたがんばらなきゃ!

コンコン。

服を着替えてエプロンをつけてると、扉がノックされた。

「はい。」

「あ、ミア起きてるのね。入って大丈夫?」

「だいじょぶですよー。」

扉を開けてマリーさんが入ってきた。着替え終わったあたしの頭のとっぺんからつま先までじーっと見てる。

何かちよつと恥ずかしい…

「おはよう。もう起きて大丈夫なの?」

「はい。元気ですっ!」

マリーさんが、あたしと自分のおでこにふれる。

「熱は引いたみたいね。でも昨日の今日よ?」

「でもでも、いつも通り元気ですよ?ぜんぜんしんどくないです。

ちゃんとお手伝いできます!」

「ふふっ、きつとお薬がちゃんと効いたのね。」

わかったわ。それじゃお願いするわね。」
「わあ…はいっ！」

よし、昨日迷惑かけちゃった分までがんばらなきゃ！

「ただし…」

「は、はひ？」

「ちょっとでも調子がおかしかったら無理しないこと。約束ね。」

「はう…」

「返事は？」

「は、はいです…」

あたしの返事に、マリーさんは笑顔でうなずいてくれた。
そのあと、不意にぎゅって抱きしめられてびっくり。

「ごめんね…」

「マリーさん…？あたしの方がごめんなさい…迷惑かけちゃって…」

「ううん、ミアが元気になってくれて本当によかったわ。」

こうやってると、何かもつと元気が出てくる気がする…
けど、そろそろ準備に行かないとね。

「ミア、もう大丈夫なのかい？」

厨房に入ったあたしを見て、クルトさんもマリーさんと同じように
ちよつとびっくりしてる。

「はい、元気いっぱいです！」

「そうか、それは何よりだね。でも、あまり無理して、またしんど

くならないようにするんだよ。」

「あ…はいです！」

クルトさんもマリーさんと一緒だ。

迷惑も心配もかけちゃってごめんなさい、ほんとにありがとうございます。

そのあと、いつものように朝ご飯の営業。

常連さんたちから「もうだいじょうぶ？」って声もかけてもらったの。

朝の営業も落ち着いた頃には、ユーリさんも来てくれたけど、あたしの回復ぶりにやっぱり驚いてた。

「2、3日続くかなって思ってたけど、元気になってよかったね。」

「はい、お薬ありがとーでした。」

「もう大丈夫みたいだけど、また調子崩しそうなら何か持ってくるから。」

「うー、にがいのもういいです…。」

ユーリさんにも、マリーさんたちにも笑われちゃったけど、ほんっとににがいんだから…

お昼も過ぎて、休憩してもいいって言われたんだけど、元気が有り余ってる気がしたから薪割りさせてもらうことにした。

宿の裏で、いつものように薪割りしていると、いつの間にかネコくんが横で見てた。

「あれー、いつ来たの？」

「にゃー。」

宿の軒下で、ちょこんと座って…一応あたしのこと見てる…んだよね？
カコン、カコンと割り続けて、ある程度の量ができたところでまとめることにした。
縄で束ねて、順番に運んでく。
やっぱり束ねると重いよねー。

最後の1つの束を運ぼうとしたんだけど、前の2つよりちょっと重くて、いったん持ち直そうとしたら。

「いたっ！」

薪のところがつてるところで、指を切っちゃったみたいで、血がにじんできました。

うー、ちょっとざっくりやっちゃったかも…じんじんする…
しゃがみこんで、切った指の付け根をぐっとにぎってみただけ、なかなか止まらない…

「にやっ！」

声に反応して顔を上げたら、ネコくんが目の前に。
じつとあたしの目を見てる。

…あれ？何かこんな状況見たことある気がする。
そうだ、昨日の夢…だったよね？

「また心配してくれたんだね…ありがとー。」

そういつてネコくんをなでてびっくりした。

昨日の夢のように、ネコくんがぼやっと光り出す…

ううん、違う、ネコくんだけじゃない。

あたしも…一緒に光ってるんだ…

何で?!

不意に頭の中に言葉が浮かんだ…

ゼル先生に見せてもらったのと同じ、

ルトワード
魔法語 …

「優しき光、包み込み、その傷を癒す助けとなれ…《ヒトリング負傷治癒》

」

体から何か少し抜けていくような感覚と、指の傷がほわつとあつた
かくなるような感覚を感じてあたしたちの光は消えた。

「今の、魔法…?できたの?

…ネコくん?!」

一瞬ポーンとして、指を見ると、傷はふさがつてた。

魔法、使えちゃった…!

慌ててネコくんの方を振り向いたつもりだったけど…ネコくんはどこに?

「ミア、ちょっといいかなー?」

お勝手口が開いて、クルトさんが呼んでるのが見えた。

魔法のことは気になるし、ネコくんの行方も気になるけど、また会えるよね…あつたら何かわかるかもだね、きつと。

「はい、この薪運んだらすぐ行きますー。」

今度はケガしないように慎重に運ばなきゃ
…

32 できちゃった(後書き)

ミアちゃん、才能開花？

33 できなかった？

実は今、ユーリさんのとこに来てるの。

魔法のことで誰かに相談しようと思っただけで、ゼル先生はユーリさんとここでしか会ったことなかったんだよね。

それに、マリーさんもクルトさんも魔法は使えないと思うし、頼れるのはユーリさんだけだったの。

お昼の食堂を閉めた後、ユーリさんとこに来て、朝あったことを話したんだけど。

「魔法が…使えたの?!」

「うん、指を切っちゃったんだけど、すぐに治せたの。」

「ん…疑うわけじゃないけど、ちよつと見せてくれる?」

「うん、あ、でも…ケガしてなくてもできるのかな?」

「そこは問題ないと思うわ。」

「それじゃやってみるね。優しき光、包み込み、その傷を癒す助

けとなれ…《ヒーリング負傷治癒》…」

朝と違って、ほわつとあったかくなる感覚も、何かが抜けていくような感覚もなかった。

「あ、あれ…?」

「…えつと、ミアちゃん。発動体はどこにあるのかしら…」

ハツドータイ…?そーいえばゼル先生もそんなこと言ってたよーな…

「さつきは何を使ってたの?」

「あたし、発動体なんか持ってないです…」

「へっ?」

そんなにびっくりされると、何だか変なことを言ってる気になってくる…

たぶん…変なこと言ってるんだろーけど…

「でもね…体から何かが抜けてくような感じがして、ケガしたところがほわーってあったかくなって、治ったんだよ？」

「うーん、その体から何か抜けてくような感じっていうのは、あたしが魔法を使ったときとたぶん同じなのよね。」

そのときは本当に魔法が使えたんだ…」

「うん…たぶん…そうだと思う…」

何だか自信がなくなってきた…

でもあれが夢ってことは…きつとないよね。

薪もちやんとできてたし、最後の薪にはちょっと血がついてたし。

「白色の素質があるって言われてたんだし、もしかしたらなくした記憶にその手がかりがあるのかもしれないけど…

あ、もしかしてその時何かに触ってたとかない？

偶然、発動体に…なんてありえないわよね…」

「んー…ネコくんに触ってた。」

「ネコくん？」

「うん、仲良しの黒ネコくん。こないだ来た時にもついてきてた子だよ。」

「そついえば来てたわね…」

でも、ネコは発動体じゃないわね。」

くすくす笑いながら、「しかも黒かったしね。」って付け加えるユーリさん。

そっかあ…ユーリさんのも、ゼル先生のも、使う魔法の色の石がつ

いてたもんね。

「ん〜、ごめん、お手上げ。あたしじゃわからないわ。」

「そーですかあ。」

「また先生に連絡取ってみるから、先生が来れそうな日がわかったら白枝亭にも連絡入れるね。」

「あ…はい。ありがとーです！」

ちょっと先延ばしになったけど、ゼル先生なら何かわかるかもだよ
ね。

ようやく気持ち落ち着いたところで、ユーリさんが用意してくれたお茶をいただいた。

「あ、これ…」

「気が付いた？そう、ちょっと新しいの出してみたの。」

「すっごく甘い香りです。」

「さて、何の香りでしょう？」

えー?!急にそんなこと言われても…

あれ、ユーリさん、みょーに楽しそうだね？

んー…あ、でもこの香り、どこかで…

「ミアちゃんも知ってるはずよ。」

「うん…この香り知ってます。何だっけ…」

「そうね〜、ヒントはお出かけ、かな？」

お出かけ…っていったら、こないだの連れてってもらったやつだよ
ね。

「あっ！帰りに摘んだあの実?!」

「はい、せいかりい！」

乾燥させて、茶葉に混ぜてあるのよ。

目の疲れとかもとれるみたいだから、本が大好きな先生みたいな人にもぴったりかなって。」

「ふえ…こんなお薬なら飲むのも楽なものになあ…」

「気に入ってもらえて何よりだね。でも、お薬も必要なときはちゃんと飲まないとだめだからね。」

「はうー…」

そのあとも、ユーリさんといろんな話をしてたんだけど、結構時間過ぎちゃった。

そろそろ帰らなきゃいけないね。

「ユーリさん、そろそろあたし帰るね。

相談乗ってくれてありがとうです！」

「あら、そっか。それじゃ、先生の予定わかったらまた連絡するから。」

あ、それと…」

ちょっとユーリさんの表情が硬くなった気がした。

「魔法のことは、先生に相談するまであまり誰にも言わない方がいいかもしれないわ。」

「え…?」

「魔法のことでミアちゃんが変なことに巻き込まれたら嫌だし…先生ならきつとしっかり考えてくれるから。」

「うん…そうするね。」

「それともう一つ、もしまた魔法が使えたとしても、むやみに使わないこと。」

魔法使ったときに、何か抜けていくような感覚ってあったよね。
あれって、体の中にあるマナなんだけど、限界超えちゃうと倒れるからね。

慣れてくると、自分の限界も分かるようになるんだけど…ミアちゃんはきつとまだわからないから。」

倒れちゃうんだ…それ、怖いかも…
うん、気をつけなきゃ…！

「それじゃ、気を付けて帰ってね。

またいつでも来てね。」

「はい、おいしいお茶、ごちそうさまでした！」

笑顔で手を振るユーリさんに、あたしも笑顔で手を振ってお店を出た。

ちよっと長居しすぎちゃったかな？

急いで帰らなきゃ、夕方の食堂の準備が始まっちゃうね！

33 できなかった？（後書き）

謎ばかり転がしてる気がします…

早くちゃんとまとめなきゃ…

昨日はいつもより1時間遅れになっちゃってすみません…

34 昔のことを勉強(前書き)

今回、ちょっと説明ばかりになります…

34 昔のことをお勉強

今日は教会に来てる。

昨日の午後、さっそくユーリさんが来てくれたんだけど、ゼル先生の時間がとれるのって明後日になるって言われたの。

そのときに、ちょっとだけ魔法の話してただけど、あたしが昔のお話っていうのも全然覚えてないのにびっくりされたんだよね。

それで教会に行ってみればってことになったんだけど、あたしが知ってる教会は、この前アルくんたちが迷子になったときにお世話になったところだけだった。

「そーいえば…、入ってもいいのかな？」

この前はお姉さんが声をかけてくれたからよかったけど…
あのお姉さん、またいないかなあ…

「あら、どうされましたか？」

「あ、えっと…あ！」

この前のお姉さん…！
よかったー…

「今日は迷子の方を連れて来てくれたわけではなさそうですね。」
「はひっ?!」

お姉さん、覚えててくれたんだ…
びっくりしたあ…

「それで、今日はどうなさいましたか？」
「は、はい、えと、その…」

今日ここに来た理由を何とか説明すると、お姉さんは教会の中へど
うぞっていつてくれた。

お姉さんについて、教会の中の部屋に入れてもらった。

「お茶を用意してきますので、お待ちくださいね。」
「え、そんな、おかまいなくです…」

って言ったんだけど、笑顔で部屋を出て行っちゃった。
何だか…お世話かけちゃてるかも…

ちよつと待つてたら、お姉さんがお茶を持って戻ってきた。

「すみません、何だか…」

「いえ…はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

えと…あたし、ミアっていいいます。」

「よろしく願いますね。わたしはここでシスターをしているシ
ヤルテと申します。」

「よ、よろしく願いますー。」

「それで、昔のことでしたね。」

どこまで詳しいことをお知りになりたいのかはわかりませんが、
わたしの知っていることをお話させていただきましたね。

このセルフアリアの世界は、光と闇の神によって創られたといわ
れています。

二柱の神は、その後、結ばれて何人も神々を産み出しました。

この教会に祀られている天候と農業の女神ミルファムも、その一人ですね。

そして神々は、この世界にたくさんの生命を産み出していききました。

人族と呼ばれる、わたしたち人間やエルフ、ドワーフ、妖魔、それに動物や植物…

神々によって、適した場所に住めるように導かれていったそうです。

しばらくは平和な時代が続いたそうですが、あるとき、光の神と闇の神が反発することになったそうです。

原因が何かはわかりませんが、このとき、他の神々は、光と闇の陣営に分かれて争うようになり、また人族もその争いに巻き込まれていったそうです。

しかしその争いは、ある日突然現れた、悪魔と呼ばれるものがセルファリアの世界に現れたことによって、終わりを迎えます。

悪魔たちは、神々が創り出したこの世界を壊すことを目的にしていたようでした。

神々は争いをやめ、悪魔たちと闘うことになったそうですが、悪魔たちの中には、神々に匹敵するような非常に強い力を持つ魔神と呼ばれるものと、相果てることとなり、肉体を失った神々は、天界と呼ばれる世界に、その精神を移したといわれています。

魔神たちは、神々によって滅ぼされたとされますが、残った悪魔たちは、人族が協力することで封印したそうです。

その後、神々を失った人族は、主たる2つの大陸に分かれて住むことになりました。

悪魔に対して協力して立ち向かったとはいえ、それ以前の争いで禍根は、深かったようです。

光の陣営に立った、わたしたち人間や、エルフ、ドワーフは、こ

のリュシア大陸に、闇の陣営に立つた妖魔たちは、アンフィット大陸に分かれたのです。

ただ、長い年月の間に、多少は関係が改善されたので、今日では交流を持っていますね。」

シャルテさんのお話をずっと聞いてきたけど…もともと知らなかったのか、覚えてないだけなのかはわかんないけど、始めて聞くお話だった。

あれ…でも聞きたいことが出てきてないよね…

「あの…」

「はい。どこかわかりづらいところがありましたか？」

「いえ、あの、えっと、その…魔法についてのお話ってありますか？」

「魔法ですか？」

そうですね…始めはすべての人種が魔法を使えたといいますが…わたしたち今の人間は、魔法の素質を持つ方もいらっしやいますし、持つておられない方もいらっしやいますね。

エルフは必ず黄色と青色の素質を持つそうですし、ドワーフは黄色と赤色の素質を持つことが多いそうです。

また、黒色は闇の陣営の人種にしか使えないということですが…それ以上のことは。」

すみませんと頭を下げるシャルテさんに、慌ててお礼を言う。あたしの方が時間を取らせちゃって謝らなきゃいけないのに。

「少しでもミアさんのお役に立てたなら幸いです。」

「シャルテさん、本当にいろいろとありがとうございます！」

「またいらしてくださいね。お待ちしております。」

「は、はいっ！」

魔法のことはあんまりわかんなかったけど、たくさんお勉強になっちゃったね。

明日はユーリさんにも報告しなきゃ！

35 ゼル先生の大予想 その1

今日はゼル先生との約束の日。

お昼の食堂営業のあとの休憩時間に、またユーリさんとここで会うことになってる。

「こんにちはー。」

「あ、ミアちゃん、いらっしやい。」

「先生はまだよ。」

「よかった、お待たせしてなくて。」

お茶を淹れてくるからと、ユーリさんが奥に行ったから、座って待たせてもらうことにした。

ぼーっと待っていると、入口からお客様。

先生かな？って思ったんだけど…知らない男の人だった。

「あれ、ユーリアさんはいない…？」

「えっと、今ちょっと奥に。たぶんすぐ来ます。」

「そうか、それじゃ待たせてもらうかな。」

きつとお店のお客様だよね。

ちよつとごっつい感じで、おひげがわさつと。

何となく…くまさん？

つて見てたら、目が合っちゃった。

「君も、お茶を買いに来たのかい？それともハーブの方かな？」

「えと…ユーリさんとお話しに来ました。」

「なるほど、ユーリエさんのお友達か何かか。」

ふむふむ、とお髭を触りながら納得してくれた。

君も、っていうくらいだから、この人もお茶を買いに来てるのかな？

「ミアちゃんおまたせ」。

あら、ランディさん、いらつしやいませ。」

「すまないね、小さな先客さんがいらしたんだが、少し急ぎでね。」

「いいえ、大丈夫ですよ。」

ミアちゃん、ちよつとごめんね。お茶飲んで待つてて。」

「はい。」

テーブルをちよつとわきに寄せて、先にお茶をいただくことにした。ランディさんは、いつもここにお茶を注文に来てるみたいだけど、聞こえてくる話ではどこかのお屋敷で働いてるみたい。

いつもは大体決まった間隔で来てたみたいだけど、何か問題があった、お茶が足りなくなったのかあ。

何か大変そう…

お話はすんなりまとまって、ランディさんは、茶葉を受け取ってそのまま帰ってった。

「ふう、おまたせ。」

「おつかれさまですい。」

「それにしても、先生遅いわね…何かあったのかしら？」

「ふみゆー…」

そつえばちよつと遅いかも…

だいじよぶかなつて考えてたそのとき、ゼル先生が入ってきた。

「いや、お待たせしてしまつてすみません。」

「いらつしやいませ。もー、何かあったかと思つたわよ。」

「ゼル先生、こんにちはー。」

「ああ、ミアさんもお待たせしてしまつて申し訳ない。」
「こちらこそ無理を言つちやつてすみません。」

あたしとゼル先生はお辞儀合戦みたいになつてる。

「でも先生にしては珍しいわよね。」

もしかして本当に何かあつたの？」

「いえ、そういうわけではないのですが、少し寄りたいところがありまして。」

そう言つて、椅子に座つたゼル先生は、改めてあたしの方を向いた。そして、テーブルに1つのブレスレットを置いた。

「ユーリエくんから聞いたのですが、ミアさんは魔法を使えたという事ですね。」

「あ、は、はい。」

「それで、ここで試したときはうまくいかなかつたと。」

「そうです。」

「では、これをつけてみてください。」

と、テーブルに置いたブレスレットをあたしの方に差し出してくれる。

よく見ると、ブレスレットには白い石がはまつてた。

ユーリエさんがはつとして声を上げる。

「先生、これって白色用の発動体…ですか？」

「そのとおりです。」

「でもどうして先生がこれを？」

「実は…ギルドの知り合いに頼んで借りてきたのですよ。」

ユーリエくんの話の聞いて、発動体があれば魔法が使えるのでは

ないかと思ひまして。

少し時間がかかってしまいましたか…」

あー、ゼル先生、すみません。迷惑掛けまくりです…

「さて、それでは試してみましようか。」

そう言つてゼル先生は自分の袖をまくつた。

あれ…ひじがすりむけてる…

「わざとではないのですが、丁度いいかと思ひまして…」

「先生…タイミングよすぎるでしょ…」

ユーリさんの冷やかな一言が決まつたところで、実際にプレスレットをつけて試してみる事になった。

何となく左腕につけてみたんだけど、あたしにはちよつと大きめだった。

でも、発動体としては問題ないからつていうことで、さつそく実験。ゼル先生のすりむいたひじに手を当てて、治そうとするイメージを持って…

「優しき光、包み込み、その傷を癒す助けとなれ…」ヒーリング《負傷治癒》

「

あの時と同じ感覚…体から何かが抜けるような感じがして、あたしの手がほんのり光りに包まれる。

そしてゼル先生のひじは、きれいに治つた。

「あ、できた！」

「ふむ、間違いないですね。」

「ほんとにほんとなのね…」

あたしとユーリさんは割とびっくりした感じだったけど、ゼル先生は落ち着いていた。

「これは私の想像ですが、もしかすると、ミアさんが以前に魔法を使ったときは、その触っていたネコが発動体になるようなものを身につけていたか、もしくは体内に飲み込んでいたのかもしれない。」

「ええっ?!」

ゼル先生の言葉に、あたしもユーリさんも思わず声をあげちゃった

…

35 ゼル先生の大予想 その1 (後書き)

何か中途半端になってしまいましたが、次に続きます。

36 ゼル先生の大予想 その2

「ネコくんが何で発動体を持つてたの?!」

「生き物の体内にあっても発動体って使えるんですか?!」

あれ…?

あたしとユーリさんの疑問は、どうやら別物だったっばい…?

「まあ、落ち着いてください。」

と、その前に、ミアさん、ブレスレットを返していただけますか？
申し訳ないが、借り物ですから。」

「は、はい…」

ブレスレットを返すと、ゼル先生は、布に包んで懐に仕舞った。

ユーリさんが、3人のカップにお茶を注ぎ足してくれる。

3人とも何となくお茶をすすって一息ついて、落ち着いたけど…

「さて、まずユーリエくんの疑問の方からいきましよう。」

これに関しては、小さな生き物であれば実証されています。

ペットが誤って魔石を飲み込んでしまったときに、ペットを通して魔石が反応したという実例が報告されていますから。

大きな動物では実例報告を聞いたことがありませんし、誰も好き好んでそんなことをしようとは思いませんからね。」

「何だか意外だね…」

「ゼル先生…魔石って何ですか?」

「ああ、すみません。魔石とは発動体に組み込まれる石のことです。ミアさんの疑問にも関わるところですが、魔石はつくることができません。」

それぞれのマナと相性の良い石、主にはその色の石になります。

それに魔法をかけることで作りだすことができます。

ただ、ある程度の力量のあるものでないとできませんが。」

「そっか、石が重要だったんですね。」

「でも先生、それがミアちゃんの問題とどう関係があるの?」

「はい、実は魔石は自然界でもつくられることがあるのです。」

「ええっ? そうなんですか?!」

ユーリさん、さっきから驚いてばかりだね。

あたし? だってよくわかんないし…

「あまり知られていませんが、長い時間をかけてマナが結晶化したものがあるそうです。」

まあ、ほとんど見つかることはない上に、質が高いので、希少価値も高く、目にすることはほとんどありませんが…」

「一般人には縁のない世界なのね…」

「そうですね。」

おっと、話が逸れてしまいました。

ミアさんの言うネコが、もしかするとそういったものを誤って飲み込んでいたという可能性はなくもないかと思ひましてね。」

「さすがにそんな偶然は… っっていつても、それくらいしか説明つかないかも…」

「ネコくん、だいじよぶかな…」

もしそんなの飲み込んでたら、ネコくん変なことになっちゃうとか…

「ミアさん、心配そうですね。」

大丈夫ですよ。魔石自体には害はないはずですから。

それに、飲み込んだものならそのうち出てくるでしょうし…」

「そっかぁ… よかったー…」

「…でてくるのよね、やっぱり。」

あれ、ユーリさんどうしたんだろ？
何か遠い目してる…

「ところでミアさん、もし本格的に魔法を使ったり勉強したりするならば、ギルドに入るなり、治療師ヒーラーに習うなりということになりますね。どちらにせよ発動体が必要になりますね。」

「あ、そっか。自分の発動体がいるんですね。」

「はい。ギルドでは使える魔法の発動体しか売ってもらえませんので、ミアさん自身が所属するか、ギルド所属の治療師ヒーラーにお願いするかありませんね。」

私では白色の発動体は買うことができませんので。」

ゼル先生だと、青色と緑色しか買えないんだね。

魔法、使えるのはわかったけど、使えそうにないかも…
お勉強に行く時間は取れそうにないもんね。

「ゼル先生、ありがとうございます。」

あたし、魔法が使えるのがわかっただけで十分です。

宿のお手伝いもあるし、今はギルドとかもいいです。」

「そうですね。今後何かお手伝いできることがあれば協力させていただきますよ。」

「ほんとにありがとうとーございます！」

ゼル先生は、この後借りてきてくれた発動体を返しに行くから、先に帰ることになった。

あたしもそろそろ、夕方の準備に行かなきゃいけないから、おいとますることにした。

「ユーリさん、あたしもそろそろ帰りますね。」

「うん、気をつけてね。」

あ、それから、一応確認が取れたし、クルトさんとマリーさんにはちゃんと報告してね。」

「はい。ユーリさんもいろいろとありがとーです！」

「いつでも頼ってね。あたしに協力できることならまかせといて。」

もしかしたら、魔法が使えることは、あたしの忘れちゃった記憶の手がかりなのかな。

でも、思い出せなくてもいいかなって今は思ってる。

だって、毎日とっても幸せだから。

帰ったらマリーさんとクルトさんに教えてあげるんだ

2人とも、びっくりしてくれるかな？

36 ゼル先生の大予想 その2 (後書き)

ちよつと中途半端でしょうか…

37 ちゃんと報告

ユーリさんところから帰ったら、すぐに夕方の食堂の準備に入ることになっちゃったから、2人に報告することができなかつたの。

食堂の片付けも終わって、いつものようにお茶の時間だし、ここで報告だよな。

クルトさんが淹れてくれたお茶は、甘い香りがする。

前にユーリさんが出してくれた、青紫色の実が入ったあのお茶を、クルトさんに紹介したら、すぐに注文してくれたみたい。

お茶をおぼんにのせて、クルトさんについて食堂に運んでいったら、マリーさんがテーブルの準備をしてくれてた。

「待たせてしまったかな？」

「ううん、大丈夫よ。クルトもミアもありがとう。」

「お茶ですー。」

カップを渡して、あたしもクルトさんも席に着いた。

前と同じ、甘い香りが立ち込めて、とってもいい感じ。

「ミアのお勧め、とってもいい香りがするわね。」

「うん、生で食べたときよりも、香りが強く出ている気がするね。」

えへへ、何だかほめられてるみたいで嬉しいな。

つと、報告しなきゃね。

「マリーさん、クルトさん、ちょっとお話しとかなきゃいけない」とがあるの。」

「あら、何かしら？」

「えっとね、あんまり驚かずに聞いてほしいんだけど…」

んー…何て言ったらいいんだろ…？
…悩んでもダメだよな。

「あたしね、魔法が使えたの。」

「……………」

「あの、えと…マリーさん？クルトさん？」

「ミ、ミア、魔法が使えたって…どうということよ？」

クルトさん、まだ固まってる…

やっぱりちゃんと順番に話さないためだよな。

薪割りしててケガしたときに魔法が使えたこと、身近で魔法が使えるユーリさんに相談したこと、ゼル先生が相談に乗ってくれたこと、順番に話してみた。

「そういえば、アリスもミアに素質があるって言ってたわね…ちょっとクルト、大丈夫？」

「ん、あ、ああ…驚いてしまっ…」

「それで、ミアはどうしたいの？」

「どうしたいって？」

「魔法、習ってみたい？」

「ん、別にいいです。使えなくても問題ないから。」

「そう、ミアがそう思うならわたしはそれでいいと思うわ。」

「私もミアの思う通りにすればいいと思うよ。もし、そのうち習いたいと思うなら習えばいいし。」

2人とも、あたしの気持ちを大事にしてくれてる。その心づかいが、ほんとにあっただかいなって思う。

「マリーさん、クルトさん…いつもあたしのこと考えてくれてほん

とにありがとーです。」

「何？改まって…ミアはうちのだいじな家族みたいなものじゃない。」

「そうだよ。ミアががんばってくれているから、私たちもすごく助かっているし、毎日がとても楽しいんだよ。」

「はづう…」

そんなに言われると何だか恥ずかしくなるよ…

テーブルの上につ伏してたらなでなでされてる。

あつたかくて気持ちいいな…

「ミアー…寝ちゃだめよ？」

「はひっ!？」

「目を閉じて、今にも眠ってしまいそうだったね。」

「ちょっと子ネコのようなだったよ。」

あたしが眠そうだったからかもしれないけど、今日はちょっと早めに切り上げることになった。

クルトさんは、片付けておくっていつてくれたけど、たまにはあたしもやらなきゃね。

つてことで、2人には先に休んでもらって、あたしが片付けることにさせてもらったの。

「それじゃミア、よろしくね。」

「先にながらせてもらうよ。おやすみ。」

「おやすみなさいー。」

2人を部屋に見送って、カップを洗っちゃう。

あとはひっくり返して置いておけばいいんだよな。

残ってるお水は一旦捨てるけど、お部屋に持っていく水差しに先に汲んでおかなきゃ。

残った水を流してしまつて、戸締り確認。
ばっちり大丈夫だね。

食堂も、もう真つ暗で静まり返つてる。

ゆっくり階段を上つて、静かに部屋へと向かつて、服を着替えると、
何だか眠気が…

今日は、魔法が使えることがしっかりわかつたし、マリーさんとクルトさんにもちゃんと報告できたし、いろいろあったね。
しっかり休んで明日に備えなきゃね。

それじゃ、おやすみなさい…

37 ちゃんと報告(後書き)

気がつけば4000PV、本当にありがとうございます。
毎日更新、できる限りがんばりたいと思います。
よかったらこれからも応援よろしくお願いします！

38 切るの？切られるの？

「……………」

「ミア、息が止まってるよ。」

「っ！ひゅうー…はぁー…」

とんでもない強敵を前に、あたしは息をするのも忘れていたみたい…
右手には、包丁。ただし一番小さいの。

左手には、じゃがいも。あたしたちのご飯になる予定。

もっとお手伝いできることが増えた方がいいって、前から思ってたの。

今日はちよつと朝の食堂が忙しくて、クルトさんも大変だったんじゃないかな。

そこで、あたしも料理ができるようになればお手伝いできるかも、ということ、クルトさんをお願いしたのが、朝の食堂営業後。

早くも心折れそうです…

「ミア、集中して…包丁が先に行かないように。」

「ん……………」

「じゃがいもの方を動かす感じで。」

たまに力が入りすぎて、包丁がサクッと動いちゃうと、もう冷や汗
出まくりです…

何とか1つめの皮むきが終わったけど、包丁を置いたら、くたつと
なっちゃう。

向けたじゃがいもを、クルトさんが手にとって見てる。

離れて見たって、やっぱりでこぼこかくかく。

クルトさんが向いたらまるっこくてきれいなのに。

「一番最初に包丁使ったときに、クルトさんがあわてて止めたのを思い出しちゃった。」

あたし、やっぱり向いてないのかもしれないかも…」

「まあ、最初からうまくできるなんてことはないからね。」

何度もやっているうちに上達するはずだよ。」

「何度もしなくちゃダメなんですね。」

「私だって、最初はぜんぜんダメだったんだからね。」

「えー、クルトさんが？何か信じられない…」

もう一つ、やってみようかな…

次のじゃがいもを手にとると、クルトさんがなでなでしてくれた。よっし、がんばるぞっ。

「包丁をそんなに握りしめてはいけないよ。」

…

「もう少し肩の力を抜いて…」

…

「うー、やっぱり難しい…」

「大丈夫、さっきよりはだいぶ早くなってるよ。」

って言ってるクルトさんの目の前にはすでに4つのきれいなじゃがいもが…

あたしのようすを見ながらもその早さですかっ！

…練習しかないよね。

「ま、6つもあればいいかな。」

ミア、そのじゃがいもを適当に小さく切ってくれるかな。」

「適当って…」

「小さくなればいいよ。」

あ、こっちの大きな包丁を使いなさい。」

そう言っつて、朝のメニューのスープが残ってるおなべを火にかけてる。

よし、切るぞー。

まな板にじゃがいもを置いて、包丁を当てると、コロんと転がった。

「きゃっ!」

「左手でじゃがいもを押さえて。」

「は、はい…」

「こんな風に軽く指を曲げて、包丁を添わせるように。」

指を切らないように注意するんだよ。」

注意深く包丁を進めていったおかげで、ケガはせずにすんだけど、何かとつても疲れちゃった…

小さく切ったじゃがいもをまな板ごとおなべのどこまで持つていくと、クルトさんはそのままおなべにじゃがいもを投入した。

「あとは…スープにじゃがいもを使ってしまったし…あ、あのパンが残っていたはずだね。」

「もしかして、この前食べたおつきいやつですか?」

「うん、あのパンは割と日持ちするけど、早めに食べることにしましたことはないからね。」

ちよつと取ってくるから、鍋の方は頼んだよ。」

「はい。」

おなべのようすを見るのは、何度も手伝ってるし大丈夫。
ぼこぼこ泡ができるようになったら、ちよつと火を弱めてあげれば
いいんだし。

まあ、クルトさんはすぐに戻ってきてくれたから、あたしが火を調
節することもなかったけど。

戻ってきたクルトさんは、おなべの様子を見ながら、パンを切り分
けてる。

「ミア、マリーを呼んできてくれるかな。」

「はい。」

厨房から食堂に入ったら、マリーさんはいつもどおりカウンターで
お仕事してた。

あたしに気付いてマリーさんが顔を上げる。

「あら、ミアどうしたの？」

「ご飯できましたー。」

「そう、すぐ行くわ。先に食べててね。」

「はい。」

厨房に戻ったら、もうパンが用意されてた。

入ってきたあたしの顔を見て、クルトさんがスープをよそってくれ
る。

「マリーさんもすぐ来るって言ってました。」

「ミアは先に食べてていいよ。」

「はい、いただきます。」

これも実はいつものこと。

あたし、ちょっと食べるの遅いんだよね。
だって、おいしいから急ぐともったいない気がするんだもん。

「おまたせ。ごめんね。」

「全然待つてないよ。」

今日はミアも手伝ってくれたからね。」

「じゃがいも切っただけだけど……」

「がんばってるじゃない。」

そのうちミアの手料理が食べれるのかしら？」

「うー…がんばる……」

でもいつかほんとにちゃんと料理して食べてもらえたらいいな。
ちよっとずつやってみなきゃね！

39 おひさしぶりです

「ありがとうございます。」

今日のお昼の食堂ももう終わり。

今のお客様が最後だから、お見送りついでに、玄関の表の札を準備中に替える。

「ミア、食器お願いね。」

「はい。」

マリーさんもカウンターでいろいろ後片付けしたり、帳簿付けたりしてる。

カウンターに残ってた最後の食器を、厨房に運ぶ。

厨房ではクルトさんが、片付けを始めてたから、あたしも水場で洗い物を始める。

あたしが洗い物を終えるころには、クルトさんはあたしたちのちよつと遅いお昼の用意をしてくれてた。

今日はじゃがいもをゆでてつぶして味付けしたのに、グルストがついてる。

お客様用のお昼メニューの簡易版だね。

「ミア、マリーにも声をかけてきてくれるかな？」

「はい。」

食堂に入ると、マリーさんのほかに何人かいるみたい。

お客様かな？でもお昼終わってるし、あたし、ちゃんと準備中の札出してきたはずだから、ご飯とは関係ないかな？

「よう、ミアちゃん、久しぶり。」

「あ、フェリックスさん！お久しぶりですー。
アリサさんもエリカさんもレックスさんも
いつ戻ってきたんですか？」

「まあ、ついさっきだよ。」

「ところでミア、どうしたの？」

「あ、そだ。ご飯の準備できたって伝えにきたんだった。」

「ありがとう、先に食べてね。ちよつとリックたちと話があるか
ら。」

「はい。」

みなさんにお辞儀したら、アリサさんとエリカさんが手を振ってく
れたので、あたしも振り返って厨房に戻った。

「遅かったね？」

「フェリックスさんたちが戻ってきてたんです。」

「そうか、しばらくぶりだね。」

「私もちよつと挨拶してくるよ。」

「いつてらっしゃいます。」

クルトさんも食堂に行っちゃったから、あたしは先にご飯をいただ
いちゃうことにした。

料理を盛り付けてある横に、お茶まで用意してあった。

クルトさんありがとうーです。いただきまーす。

食べ終わる頃になってもクルトさんもマリーさんも戻ってこなかっ
たから、お話が盛り上がってるのかな？

お茶、淹れていこうかな…

包丁も使わないし、だいじょぶだよね。

ということ、お茶の準備に取り掛かることに。
クルトさんが沸かしてくれてた（たぶん、お昼のお茶用の）お湯をそのまま使えば、すぐにできるよね。

「なるほどね…何か嫌な感じがするわ…」

「ああ、俺たちもそう思って、まあ戻ってきたついでって言ったなら
なんだけど、報告に来たんだ。」

「隊商なんかに影響が出そうだね…」

「実際、もうやられてるっていう噂も聞いたつすよ。」

「ありゃ…何か難しいお話してたかな…」

「あんまりお茶って雰囲気じゃなかったかも…」

「あ、ミアちゃんー。」

「アリサさんが気づいて手を振ってくれたんだけど、両手でトレーを
持ってたあたしはもちろん振り返すことができなかった。
でもその声でみんながこつちを見たから…何か変な状況に…」

「あ、ミア、もしかしてお茶淹れてきてくれたの？」

「何だか時間がかかってそうだったから…」

「ありがとう。それじゃみんなに配ってあげてね。」

「はいっ！」

「お茶を配り終わると、アリサさんが隣にイスを用意してくれてて、
おいでおいでってしてたから、せっかくなので、お隣に座らせても
らった。」

「ミアちゃん、魔法が使えたって聞きましたよー。」

すごいじゃないですかー。」

「ほえっ！」

「マリーさんが、教えてくれたんですよー。」

驚いてマリーさんの方を見ると、「ごめん、先に言っちゃった」って…

別にいいんだけど、使うこともなさそうだから、ちょっとそのこと意識してなかったや…

「おっと、マリー、お昼を忘れてたね。」

「あらやだ、ほんと。」

「あー、すみません、俺たちが変なタイミングで来ちゃったから。」

「いやいや、私たちに情報を急いでくれたんだから、むしろこちらがお礼を言わなきゃいけないくらいだよ。」

「わたしたちの方からも、ギルドに情報入ってないか確認しとくわね。」

「お願いします。あ、あと今晚からしばらく泊まれるかな？」

「今朝発つたところがあるからいけるわね。」

ミア、ご案内お願いね。」

「はい。」

マリーさんとクルトさんは、厨房でご飯。

フェリックスさんたちには待つてる間に、お茶してもらおうと思ってたんだけど、アリサさんとエリカさんは予定があるみたいだから、お荷物だけ預けてもらって、お出かけしてもらうことになった。

お部屋の準備をして降りてきたら、フェリックスさんとレックスさんが、アリサさんとエリカさんの荷物も持って上がるうとしてた。お荷物運びますって言ったんだけど、「ちょっと重いものもあるだろうから、俺たちが運ぶよ。」って持ってっちゃった。

確かにあたし、ちっちゃいし、あんまり力ないけど…

お客様に気を使わせちゃってるよね…

もっと頼られるようにならなきゃ！

でも、フェリックスさんたち、しばらくお泊まりしてくれそうだし、いろいろお土産話とか聞かせてくれるかもしれないよね。
ちよっと楽しみ

40 白色のプレゼント

「ミア、ちょっと来てくれるかい？」

お昼が終わった後、食堂の方でクルトさんがあたしのことを呼んでる。

クルトさんもマリーさんも先にご飯をすませて、食堂の方で何かしてただけ。

ごちそうさまして、食器を水場に持って行ってから食堂にいくと、テーブルでマリーさんとクルトさん、そしてアリサさんが待ってた。

「座ってくれるかな。」

「はい。」

何だろ…

何かあったのかな…？

クルトさんとマリーさんが並んで座ってるから、向かいのアリサさんの隣のイスに座ることにした。

んー、いつもみたいなお話じゃなさそう…？

って思ってたなら、アリサさんがイスごとあたしの方に向いた。

「ミアちゃん、あたしに魔法を習ってみる気はないですかー？」

「……ナラウ？」

ナラウって、習うだよね…魔法を？

あ、そっか、アリサさんは白色魔法が使える治療師ヒーラーさんだっけ。でも急に…？

「ミア、大丈夫？」

「は、はひっ?!」

「落ち着いて、そんなに固まらないでね。」

「はい…、だいじょぶです。」

「ま、急に何でって思ったかもしれないけど、ミアがやってみたいなら、どうかなくて。」

「でも、でも…宿のお手伝いもしたいから、習ってる時間は…」

魔法に興味がないかって言ったら、そんなことない。

使えたときはびっくりしたし、ちよつと嬉しかったもん。

けど、今一番やりたいのは、宿のお手伝い。

マリーさんと、クルトさんと一緒にがんばりたいから。

「ミアちゃん、実はですね!」

わたしの考えなんですけど、ギルドで習うとかになると、時間がかかっちゃういますよね!」

でも、ミアちゃんは魔法がもう使えるみたいですし、そんなに時間をかけずに、少し使えるものを増やせるんじゃないかって思ってます!」

「そう…なんですか?」

「やってみなくちゃ、わかりません!」

だから、試してみませんか?」

ん、もし休憩時間とかにできるなら、やってみたいかも…

マリーさんたちの方を見ると、2人ともにつきりとうなずいてくれる。

「それじゃ、休憩時間とかにちよつと…っていうのでもいけますか?」

「もちろんですよ!」

わたしも、いつもできるとは限りませんが、お互いに時間が

取れたときにー、やってみましょうー。」

「ありがとうございます！よろしく願いますー！」

何だかすごいことになってきたけど、わくわくもしてきた。

マリーさんとクルトさんも嬉しそう…っていつか何かほっとしてる感じもする…かな？

ちょっと気になったんだけど、あたしの前にアリサさんが布の包みを差し出してくれたから、考えるのそこで止まっちゃった。

「これは…？」

「うふふー、実は昨日のうちにー、買ってきてたんですよー。」

無事、ミアちゃんにプレゼントできますー。」

包みを開けると、中からアリサさんのとよく似たペンダントが出てきた。

そう、白い石がついてるペンダント…

「これ、発動体…ですよね…？」

「はいー、そのとおりですー。」

どんな形がいいかー、迷ったんですけどー…」

「あたしに…？」

「そうですねー。あ…もしかして別の形のほうがよかったですかー…？」

ちよっと困ったような顔でアリサさんに尋ねられたけど、首をぶんぶん横に振って違うって主張する！

「ありがとうございます。うれしいですっー！」

「喜んでもらえたならー、よかったですー。」

あれ、もしかしてマリーさんたちがほつとしてたのはこのプレゼン
トのことだったのかな…
きつとそういうことだよな。

「それではー、わたしもいろいろとー、準備をしておきますのでー。
よかつたらー、明日の午後からー、始めましょうかー。」

「ふに…クルトさん、明日の午後って、だいじょぶですか？」

「ああ、問題ないと思うよ。」

「ありがとうーです。それじゃアリサさん、明日からよろしくお願
いします！」

「はいー。がんばりましょー！」

アリサさんが準備があるからって出かけた後、マリーさんとクルト
さんと3人でちょっとお茶することになった。

今回のことはきつと、あたしのために2人がアリサさんをお願いし
てくれたんだと思う。

ありがとうーっていったけど、2人も「何のこと？」って笑ってるだ
けだったけど。

ともかくにも、こうして、明日からあたしは魔法を習うことがで
きるようになった。

いっぱいがんばって、いろんな魔法覚えたいな

もちろん、宿のお手伝いだってばっちりがんばるんだからね！

41 初授業

「それではー、さっそく始めましょうー。」

ここはあたしの部屋。

小さなテーブルに向かいあって、イスに座ってるアリサさんと、ベツドの端っこに座ってるあたし。
いよいよ今日から魔法を習うの。

「よろしくお願いします!」

「あまりー、かたくならないでくださいねー。」

アリサさんはそういうけど、やっぱりちよつと緊張しちゃつ。
どんなふうに教えてもらえるのかな?

「まずはー、わたしたちが使える白色魔法についてー、少しお勉強
してみましょうー。」

ミアちゃんはー、魔法についてはー、どれくらい知っていますか
ー?」

「えつと…6色あって、人によって使えるものが決まってるんです
よね。」

あと、ルインワード魔法語 が使えないとダメで…
発動体がないと使えない…くらいです。」

あたりまえだけど、ゼル先生に教えてもらったことしかわかんない。
い。

教会でも少し聞けたっけ…?

「はいー、今ミアちゃんが言ったことはー、全部合ってますよー。」

これはー、少し予習もしていたみたいですねー。
ところでー、魔法が使えたということはー、ルーンワード魔法語 がー、あの程度理解できてる感じですよねー。」

「あ、はい、読めたし、話すこともできました。」
「わかりましたー。」

それでは次に白色魔法の特徴を少しお話ししますねー。
魔法は色ごとにその特性を表した力を持っていますー。
白色は大きく3つの特性を持っているのですけどー…」

そこで言葉を切ったアリサさんは、ペンダントに左手を当てて集中し始めた。
そして右手の人差し指をすっと伸ばしてる。

「ライト《光》」

アリサさんが、ルーンワード魔法語 を唱えると、伸ばした指の先に、明るく光る玉が生まれた。

そして、指を動かすと、光の玉が動いていく。

「すごい…」

「1つめは、光という特性ですねー。」

光源になるような光もあればー、強い光で目くらましのように使えたりもしますー。」

あとはー、悪魔たちに対抗する力にも成り得ますー。」
「ほへ？悪魔って…封印されたんじゃないんですか？」

教会に行ったときに、そんな風に聞いたよね。
シスターのシャルテさんがお話してくれた…

「んー…確かにー、大昔にー、魔神や悪魔の中でも強力なものたち

はー、多くが封印されたそうですー。

ところがー、中にはー、封印を逃れたものやー、封印するまでもなく倒されようとしていたところを逃げだしたものがー、現存する悪魔たちですねー。」

「それって…それってすごく危なくないですか?!」

「そうですねー。ただー、古くからある遺跡やー、洞窟なんかにー、潜んでるからー、普通に街で暮らしてたりするとー、会うことなんてないですけどねー。」

そっか…世界を壊そうとしたようなやつらになんか会いたくないもんね…

あれ、でも遺跡とか洞窟とかって、うちのお客様なんか行くんじゃないの…?

っていうか、アリサさんもあったことあるんじゃない…

「アリサさんは、悪魔に会ったことってあるんですか…?」

「ありますよー。」

さらっと答えられちゃった…

アリサさんたちって、実はやっぱりすごい人たちなんだ…

「あー…」

「ど、どうしたんですか?」

「まだ1つ目の説明でしたねー。あと2つも行きましょうー。」

びっくりした、何か変なこと思い出したのかと思っちゃったよ。

うん、だいじょぶ、きつとあたしが会うことはないよ。うん…

「2つ目はー、前にわたしがミアちゃんに掛けた魔法のようにー、心にはたらくという特性ですー。」

「あ…記憶が戻せないかっていうときの…」

「そうですねー。」

それから3つ目ですけどー、ミアちゃんも使ったー、治癒の特性ですねー。

白色魔法を使う人たちがー、治療師ヒーラーと呼ばれるのはー、この特性の魔法のせいですねー。」

あたしの魔法って、切っちゃった指を治すくらいなんだけど…それでも治療師ヒーラーって呼んでもらえるのかな…

でもがんばったら何かの役に立てるようになるよね、きっと。

「さてー、それではちょっとー、実践的なことでもしてみましようー。」

最初はー、自分の限界をー、感じることですー。」

「自分の限界…?」

「はいー、魔法を使うときー、自分が持っているマナを使っちゃいますー。」

そのときー、自分の限界を越えて使っちゃうとー、倒れちゃうんですよー。」

あ、それって前に聞いたよね…

ユーリさんからだっけ?

「倒れるっていつてもー、眠っちゃうようなものですけどねー。」

ほらー、体が疲れたらー、眠っちゃうのとー、一緒ですー。」

「眠っちゃうんですか。」

あ、でもそっか、お外で魔法使って眠っちゃったら大変だ…」

「うふふ、その通りですー。」

それではー、やってみましようー。」

コツさえつかめばー、すぐですからー。」

アリスさんが言う通りに、目を閉じて体を楽にして座り、魔法を使ったときと同じような感じで意識を集中させる。

あたしは1回、魔法を使ってるから、意識の込め方とかはわかりやすいはずっていわれたんだけど、それでもなかなか感じる事ができなかった。

「うー…難しい…」

「そうですかー。わたしも最初はー、ちょっと時間がかかりましたからー、焦らずに行きましょうー。」

「はいー…」

んー、結構大変なのね…

コンコン

もう1回、集中してみようかと思ってたときに、扉がノックされた。

「はい？」

「ミア、入っていい？」

マリーさんの声がしたので、いいですって答えると、トレーを片手に入ってきた。

「がんばってる？」

お茶持ってきたから、適度に休憩してね。」

「ありがとーですー！」

「わー、いただきますー。」

「アリスもありがとね。」

晩にでも、今日のこと教えてね。」

そういって、マリーさんは降りて行った。

ちよっとお茶をいただいて、リフレッシュして、もっかいがんばる

ぞー！

42 お仕事中は集中しなきゃね

結局、休憩の後もあたしは自分のマナの量を感じることができなかった。

アリスさんは、「一度ー、これってわかればー、あとはもう自然にできちゃいますからー。」っていったけど。

最初が難しいのね…

コツ、かあ…

「ミア！」

「はひっ?!」

「今、ボーっとしてたね。大丈夫かい？」

「あ…」

クルトさんの声に、意識が手元に向いた。

あたし、お皿を持ったまま、水場を通り過ぎてた…

これじゃダメだよ。

今はしっかりお仕事に集中しなきゃ。

「ごめんなさい、だいじょぶです。」

「わかった。それじゃ、できてるやつ運んでいって。」

「はいっ！」

夜の食堂は、一番忙しい。

宿のお客さん以外にも、ご飯を食べにきたり、お酒を飲みにきたりするから。

できあがった料理を、食堂に運んでいくと、マリーさんも急がしそくに動いてた。

お客様のイスの間を抜けて、注文されたテーブルに料理を運ぶ。

「お待ちせしました。日替わりプレート2人前です！」

「おー、ミアちゃん、待ってたよ。」

「今日のも美味そうだなっ！」

常連さんはあたしのことをミアちゃんって呼んでくれる。

すっかり定着しちゃった感じかな？

慣れてないうちからいろいろと声をかけてくれるお客様が多くて、がんばる元気一杯もらったしね。

厨房に戻るときは、空いてるお皿やカップを回収していく。

重ねて積んでくれてたりすると、回収しやすいんだよね。

いくつかのテーブルやカウンターを回って回収したら、また厨房に戻る。

そして、水場の桶につけていく、っていうのが一連の流れかな。

席が埋まってある程度過ぎれば、少し余裕が出てくるんだけど、そのときに、マリーさんと交代で、ちよつとずつ水場の食器を洗っていく。

全部貯めちゃうと、後で大変なんだよね。

でも、ずっと洗ってるわけにはいかない。

だって…

「ミア、テーブル空いたから、お願いー。」

食堂からマリーさんの声。

お客様がお帰りになったら、テーブルのお掃除。

忙しいときは次のお客様がすぐに入ったりもするから、手早くしな
いとね。

食堂の空いたテーブルの食器をかためて、布巾でテーブルを手早く拭き上げる。

待ってるお客様がいるみたいだね。

食器を厨房に運んだら、ご注文を聞きに来なきゃいけないかな？
食器を持って動きだしたあたしにマリーさんが声をかけてくれる。

「注文はわたしが受けるから、水場、お願いね。」

「はいっ！」

戻って水場で洗い物していると、マリーさんから注文が届いた。

つていつてもつくるのはクルトさんだから、あたしはお皿を用意したりするだけ。

早く料理もがんばらないとだめだよね…

何だかやることいっぱいだよー！

「はい、上がり。ミア、頼んだよ。」

「はいっ！」

できあがった料理を運んでいくと、新しいお客様は知ってる人たちだった。

「あ、フェリックスさん、エリカさん、レックスさん。

おかえりなさいですー！

お料理お待たせしましたー！」

「ただいま。

ミアちゃん、すっかり慣れたなあ。」

「えへへ、ありがとーございます。

そいえば、アリサさんは？」

「何か用事があるって、別行動。

ま、そのうち帰ってくるだろうけど。」

「そですか。
それではごゆっくりですー。」

そのあとも、空いた食器を回収して厨房に戻ったんだけど、今夜の山は越えたみたい。

テーブルもカウンタ―もだんだん空いてきてる。

ここまで来たら、食堂の方はマリーさんにお任せして、あたしは水場に専念だね。

「はい、今日もお疲れ様でした。」

「お疲れ様。今夜も繁盛してたわね。」

「おつかれさまでしたー。」

片付けも一段落して、お茶で休憩。

今日も忙しかったけど、食堂もにぎわってたからいい感じだよね。

「そういえばミア、魔法の方は調子どうなの？」

「んー、むずかしーです。なかなかうまくいきかないです。」

「そうかー、最初にあっさり使えてしまったみたいだから、簡単なのかと思ったんだけどそうでもないんだね。」

「はいー…あれ、そいえばアリサさんって帰ってきたのかな？」

「アリサ？そっいえばあの子、リックたちが食事し終わったところに来てたわね。」

「ご飯、食べてないのかな…」

「どうかしら…外ですませてきてるかもしれないけど。」

気になるなら、あとで果物でも持って行ってあげる？

お世話になってるしね。」

「はいっ。そーしてみますー！」

あたしだけ、お茶をちよつと早めに切り上げて、クルトさんに用意してもらった果物を持っていくことにした。ほんとはあたしがやるべきんだけど…あたしがやると時間かかりすぎるもんね…

「あとは私たちで片付けておくから、ミアはそのまま部屋に戻っていいよ。」

「ありがとうございます。」

「それじゃ、おやすみなさいです。」

果物をのせたトレーを持って、階段を上がってく。喜んでもらえたらいいな

42 お仕事は集中しなきゃね(後書き)

5000PV越え、ありがとうございます！
無事に魔法が使えるようになるでしょうか…

43 もしかしてこれが

真っ白な

どこまでも真っ白な世界に

あたしは立っていた

何となく、これが夢だっ
てことがあたしにはわかつた
でも

今日の夢はいつもと違ってた

目の前には黒いネコ

ネコくん、夢でも来てくれるんだね

とととつと歩いてくるのを、しゃがんで待ちつける

ネコくんは、あたしのすぐ前でとまって、右手（前脚？）をちよいと差し出した

何となくその手を握ってみる

にくきゅう、ぷにぷに

夢だけど、何だかりアルな感触

そうやって遊んでいると

ふいにネコくんが走り出した

追いかけるあたし

逃げるネコくん

何だかうまく追いかけれなくて

全然距離が縮まらないけど

不安は感じない

ネコくんはあたしをどこかへ連れて行くことしてる気がする

気がつけば真っ白だった周りが暗くなってた

もう夜よりも暗い感じだけど

なぜかネコくんははっきり見えてる

そしてとうとうたどり着いたのは

闇に浮かぶ大きな姿見の前

こんなに大きなものは見たことがないかも

あたしの全身が映ってた

でもよく見るとそれはあたしと少し違う

背の高さも

髪の長さも

着てる寝間着も一緒だったけど

姿見の中のアたしは眼の色が深い赤色

あなたは…だれ？

問いかけの返事はもちろんなかった

けどあなたは示してくれた

言葉ではなく

態度で

両手を重ねて胸の上に置き目を閉じる

それを見てあたしはなぜか自然に同じ姿勢をとっていた

あたしの中にほわつとしたあつたかさを感じる

そしてあたしはふわつと抱きつかれた

目を開けるとあなたが抱きついてきてる

とっても懐かしくてとっても安心する感じ

ああ、あたしはあなたを知っている

自然と目が閉じる

そのときあたしはあたしの中に

大きな力を感じた

これが…あたし…

目を閉じているのに

まぶしくて

暗い

まぶしい…

まぶ…しい？

「はひっ?!」

…ベッドの上。…雨戸、ちよつと開いてる。
昇りはじめたおひさまの光が雨戸のすき間から差しこんで、ちよつとあたしの枕もとを照らしてた。

「そっか…夢、だよね。」

そう、夢だったんだけど、できた気がしたんだよね。
あたしの中のマナを感じることもが。

両手を胸に当てて目を閉じて、そう、夢の中で抱かれていたときの
よつに心を穏やかに…

「……………あ。」

あたしの中にある大きなほわつとした、だけど力強くある何かを、
はつきりと感じる事ができる。

これがあたしのマナ…

…なのかな？

確かアリサさんは、マナを感じながら魔法を使うと、マナが減るのがわかるって言ってたけど…

ケガしてないのに、魔法使えないよね。

今日もアリサさんが来てくれるはずだし、そのときに聞いてみようかな。

「あ、早くいかなきゃ！」

ちよこちよこやってるうちに、おひさま少し昇りはじめてる。

慌てて着替えて降りようとしたんだけど、慌てるとなかなかうまくいかない…

何とか着替えて、髪を束ねて結んで、準備完了！

まだお客様は寝てるかもしれないから急ぎたいけど、静かに歩いて階段を降りてくと、もうマリーさんが食堂の準備はじめてる。

「おはよーございます。遅れてごめんなさいー。」

「おはよう、ちょっと疲れてた？」

「ううん、起きてからちよっとぼーっとしちゃって…」

すぐお手伝いしますー。」

「じゃ、テーブルどんどん拭いて行ってね。」

「はい。」

厨房に入ると、クルトさんももう作業中。

「おはよーございます。」

「はい、おはよう。」

邪魔にならないように、端っこを通って水場で布巾をしぼる。
念のために2つ持っていていこう。
食堂に戻ったら、もうイスは全部降ろしてあった。

「あ、ミア、布巾もう1つ持ってきてくれる？」

「えと、2つ持ってきてます。」

「あら、ばっちりね。」

それじゃ1ついい？わたしはカウンターから拭いていくから、ミアはテーブルからお願いな。」

「はい。」

端っこのテーブルからどンドン拭いていく。
今日は何だか朝から調子いいかも。

「ミア、何だか楽しそうね？」

何かいいことあった？」

「んー…」

あ、夢を見たの。」

「夢？どんな夢？」

…ちょっと説明難しいよね。

「えつと…何か変な夢？」

「…それなのに楽しいの？」

「えへへ…」

マリーさんは笑ってるあたしを見て、不思議そうだったけど、あたしは今から、アリサさんの授業が楽しみなんだもん
でも、お仕事するときは集中しなきゃね。

今日も元気にいっちゃうからね！

44 2回目の授業

コンコン

部屋の扉がノックされた。
きつとアリサさんだね。

「はい、どうぞー。」

声をかけると扉が開いて、予想通りアリサさんが入ってきた。

「こんにちはー。」

「いらっしやいませ。今日もよろしくお願いします！」

アリサさんに入ってもらって、昨日と同じように椅子とベッドに分かれて座る。

あたしは待ちきれなくなって、報告することにした。

「アリサさん、あたし、できたかもしれないです。」

「はいー？」

「自分の中のマナを感じるんですが、です！」

「あらー、早かったですねー。」

「もしかしてー、夜も練習してたんですかー？」

「実は不思議な夢を見て…。」

その中で自分の中の大きな力のようなものを感じたこと、そして朝起きて同じようにやってみたら、感じる事ができたことを説明した。

アリサさんはあたしの話をふんふんと聞いていてくれたんだけど。

「不思議なこともあるのですねー。」
「…は、はい。」

全然不思議そうに見えないんですけど…
とにかく、実際に魔法を使って試そうと思ったら、使える魔法がなかったってことを追加で報告。

「そういえばー、《ヒーリング負傷治癒》だけでしたねー。」
「はい。ケガもしてないから使うこともなくて。」
「そうですねー。それではー、簡単なものからー、覚えてみましょうかー。」

アリサさんが胸のペンダントに触れて少し集中して、前にも見せてもらった《フライト光》を使った。
前と同じように、明るく小さな光の玉が空中に生まれる。

「まずはー、これにしましょうー。」
白色の中でもー、一番イメージしやすくてー、マナもそんなにー、使わない魔法ですからー。」
「はい。」

アリサさんは光を消して、荷物から、本を取り出した。
ゼル先生と同じように、アリサさんも本を持っているんだね。

「えー…あー、ここですねー。」
これを見てくださいー。」
「はい。」

テーブルに開かれた本は、ルンワード魔法語 が書き込まれてる。

アリサさんが指さしたところには、《^{ライト}光》の説明が書いてあった。

「魔法を覚えるときはー、イメージを間違えないようにするために、基本的にはー、書かれた文字をー、読んでいくことになるんですー。」

「じゃあ、この本があればいろんな魔法が使えるんですか？」

「そうですねー…人によるとは思いますがー、本の文字だけよりもー、誰かがー、イメージをサポートしてくれた方がー、早く理解できると思いますー。」

アリサさんに促されて、まずは読んでみることになった。

「礎となりし片割れ、我が手に輝け」

「問題ないですねー。」

光はー、この世界を創ったといわれるー、二柱の神々のー、一柱そのものですねー。

ですからー、この世界の誕生時からー、ずっと存在しているわけですー。

そのイメージを持ってー、今度は実際に使ってみましょうー。」

イメージ、世界の始まりからあつた光…

きつとずーつと世界を見守ってくれてるんだよね。

「やってみます。」

礎となりし片割れ、我が手に輝け《^{ライト}光》」

その瞬間、あたしの前に光の玉が現れた。

「できましたっ!」

「はいー、問題ないですねー。」

それでー、マナはどうですかー？」
「えっと…あれ、減って…ない？」

《^{ヒーリング}負傷治癒》のときほどじゃないけど、何か（たぶんマナ）を使った感覚みたいなのはあつただけど…

「んー、おかしいですねー」。

ミアちゃんから聞いた感じではー、合ってるような気がしたのですがー。

もう一度使ってみましょうー」。

アリスさんに言われて、2回目の《^{ライト}光》を使ってみたけれど、やっぱり減ってる感じがしなかつた…

「アリスさん…ダメみたいです」。

「そうですかー…」

しょうがないですねー、少し無茶かもしれませんが…」

アリスさんの案は、《^{ライト}光》をさらに使い続けることだった。

《^{ライト}光》はマナをあんまり使わないから、初心者でも10回くらいは使えてしまうことがあるみたい。

「もし疲れて倒れてしまってもー、何とかしますのでー、張り切つていきましょうー」。

「は、はい…」

もうこうなつたらやるしかないよね。

あたしは《^{ライト}光》を使い続けた。

3回目、4回目、5回目…

7回目、8回目…

「あ…」

「だいじょうぶですか…?」

「はい、ぜんぜんだいじょうぶです。」

あの…ちよつと減ってきたかも…」

「ちよつとだけですか?」

うん、まだほんのちよつとだけど、減ってるっぽい感じがする。

よかった!…あたしの感じてたのはマナで間違つてなさそうだよな。

「これは…もしかすると、ミアちゃんは記憶を失う前は、治療師^{セラピ}だったのかもしれないね!。」

とてもたくさんの方を、中に持っているようです!。」

詳しくはわかりませんが、わたしと、同じくらいかも?」

「はひつ?!」

そ、そぞ、そんなことぜつたいないでしゅよ…」

「あくまで、想像ですけどね!。」

アリスさん、笑いながらいつてるけど…まさかそんなね…

うん、絶対ないない…

とにかく、あんまりにもびっくりしすぎて集中力も途切れちゃったので、今日はここまですなっただけだ。

まさか、ね?

44 2回目の授業（後書き）

何だか大変なことになってきました…

45 お外に行ってみる

今日はアリサさんが都合が悪いので、魔法の授業はお休みなの。つていうか、お仕事みたいでフェリックスさんと朝一番で出ていっちゃった。

明後日には戻れるっていったけど、今日と明日は予定が空いちゃった。

ちよつと残念だけど、昨日も一昨日も、ほとんど宿からでなかったし、「ちよつとくらいお日様を浴びてきなさい。」っていうマリーさんの勧めもあって、今日の午後はお出かけすることになった。

とりあえず、いろいろな報告も兼ねて、ユーリさんとこに遊びに来ただんだけど、扉がしつかりしまってる。

あ、扉にプレートがかかっている。

『採集に行っています』

『本日休業』

あう、残念…だけどしようがないよね。

また街の外にも行ってみたいけど、何か出たら戦えないし、見回り強化期間でもないとムリだね。

「川まで行ってみようかな。」

つて口に出して言ってみる。

返事を期待したわけじゃなかったけど、返事が返ってきてびっくりした。

「にゃー。」

「ひえっ！」

…何だ、ネコくんかー。

びっくりしちゃったよ。」

しゃがんでのどのところをこしょこしょすると、目を細めて気持ちよさそう。

これはネコくんとお散歩決定かな？

「一緒に行く？」

「にゃー。」

歩き出すとついてくるから、たぶん一緒に来てくれるんだよね。

大通りに出て、広場を目指して歩いてく。

今日もとっても天気がいいから、ちょっと暑いかな。

広場にはいくつか屋台も出てたけど、その中で果物売りがあった。

「そーだ、何か買っていこつと。」

あ、でも屋台のは、もうカットしてあるんだよね。

川まで持っていくのは大変かな。

市場なら、何かいいもの見つかるかも。

つてことで、急ぎよ市場に寄り道決定！

市場は広場よりもちょっと戻ったところにあるから遠回りになっちゃうけど、まだまだ時間も大丈夫だし。

宿からの注文を聞いてもらってるお店を目指して歩いてく。

市場は色んなものが見られるから、歩くだけでも楽しいんだ。

そうこうしてるうちに、お店に到着。

「こんにちはー。」

「はい、いらっしやい。」

ああ、白枝さんどこかい。

今日は何だい？」

「今日は宿の注文じゃないんです。」

「はあ、どういうことかい？」

「川まで遊びに行こうと思って、おやつを買いにきました。」

「ははは、そういうことかい。」

「じゃあ、何にする？」

「つて言われても、実はあんまりわかんない。
でもだいじよぶ。」

「クルトさんもいつも言ってるもん。」

「今日のお勧めをっ！」

「何でえ、旦那にそっくりじゃねえか、はっはっは。」

「よし、じゃあこいつだ。」

「おじさんがさしたのは、握った手よりふたまわりくらい小さな、濃い赤色の果物。」

「1つのかごに7個か8個くらい盛ってあるけど、そんなにいらんないかも…」

「皮をむかなくても食べられるし、瑞々しくて、甘酸っぱくていいぞ。」

「ま、ちよつと種がでかいけどな。」

「うー、でもそんなに食べれない…」

「ああ、バラでかまわねえよ。」

「いくつ欲しい？」

「2つくらいなら食べれるよね。」

「あ、でもネコくんも食べるかな？」

「ネコくんを見ると、赤い果物をじっと見てる。」

うん、食べるかもしれないね。

「じゃ、3つでお願いしますー。」

「あいよ。銀貨1枚と半だ。」

服の中を探つて小袋おさいふを取りだす。

前の一件で、すっかり隠しとかなきゃダメってわかったからね。

1枚銀貨と、銅貨5枚をおじさんに渡して、果物をもらった。

手に持つてるのもなんだし、エプロンのポケットに入れとこ。

「ありがとーです。」

「毎度あり、川に行くんなら、川の水で冷やしてやるのもありかな。」

「はい。」

市場からだど、川までのいちばん近い道はちょっと細い道を抜けてくことになる。

でも、川に行くなら迷うことはないから、そのまま行っちゃおう。

この辺りはお家ばかり。

お庭とかがないところが多いから、家の間に張ったロープに洗濯物が干してあったりして、宿のあたりとはちょっと雰囲気が違うかな。

あたしよりも小さな子たちが、細い道で追っかけっこしたりしてる。

そこを抜けると一気に開けて川に出る。

川は街の東の方に向かって流れてるから、お洗濯とかで使いたい人は、東の方の決まった場所だけでやることになってる。

だから、西側の方はお水がきれいなんだよね。

今日はちよつと暑いから、水浴びしてる子たちとかもいるけど。

あたしもちよつと足つけてみようかな。

靴を脱いで、川に足をつけると、冷たい川の水が足にしみこんでき

そう。

「んー、気持ちいいー」

ネコくんは、あんまり水が好きじゃないのかな。あたしの後ろで丸くなってる。

こんなに冷たくて気持ちいいのよね。

果物も冷やしちゃおうと思ったんだけど、よく考えたら流されちゃうよね。

袋とかあつたらよかつたんだけど…

ま、そのままでもいいか。

ガブリツとかじりつくと、口の中に甘酸っぱい汁があふれてとってもおいしい。

ちよつとぬるいけど。

1つをネコくんに差し出してみる。

「食べる？」

ネコくん、果物をつついたり匂いを嗅いだりしてるけど、食べようとはしない。

あ、もしかしておつきすぎるのかな…？

あたしのかじった後なら、ちよつと食べやすいかも。

ということ、かじりかけのをネコくんに差し出すと、端っこをへるり。

そして…ぷいってした！

こんなにおいしいのに…

結局、3つとも食べちゃったあたしは、ちよつと食べすぎ状態で宿のお手伝いに戻ることになりました。

おいしかったんだよ？ほんとに…

45 お外に行ってみる（後書き）

ちよつと魔法関係お休み。

出てきた果物のイメージはプラムです。

46 かみさまのおみちびき その1

今日も午後の予定がないからお出かけの予定してたんだけど、ユリさんは今日も採取にいつてるみたいなんだよね。

お昼の片付けをしながら何しようかって思ってたんだけど、意外なお客様が来てくれたんだ。

「ごめんください、わたし、ミルフアム教会でシスターをしておりますシャルテと申しますが…」

「あ、シャルテさん、いらっしやいませ。」

「こんにちは、ミアさん。」

よかった、お店が違ってたらどうしようかと。」

シャルテさんがほっとした感じでそう言った。

買い出しに行った帰りにうちに寄ってくれたみたいだけど、どうしたんだろ？

「以前、教会に来ていただいたときに、魔法について知りたいと仰っておられましたよね。」

「は、はい…」

「実は教会の方で、魔法に関して書かれた古い本を見つけることができましたので、お知らせしよう。」

「ほう！わ、わざわざすみませんです！」

あわわわ…こんなことでお手をわずらわせるなんて罰あたりかもしれない…

っていうか、シャルテさんすごいそがしいんじゃない…

どどどどどどしよー…

「あの…ミアさん？」

「は、はひ?!」

「どうされました…?」

「ミア、お客様の前で固まったりしてどうしたの？」

マリーさんが後ろから頭をポンポンってしてくれて、ちょっと落ちて着いたけど。

あたしが勝手に聞きに行ったことで、ここまでしてもらうのは悪い気がする。

「すみません…お忙しいのにあたし何かのためにわざわざ来ていただいて…」

「いいえ、ミアさんがわたしのところに来てくださったのは、きつとご縁があつたからですよ。」

それはとても大切なこと、ですからぜひにでも訪ねたかったのですよ。」

きつと忙しくないはずはないけれど、こんな風にいつてもらえると何だか少し心が安らいだ感じがする。

教会にたくさん人が訪れるのは、きつとシャルテさんみたいな人たちがいるからだよね。

「ただ、その本は持ち出すことはできないので、もしよろしければまた教会まで足を運んでいただければと。」

「あ、ありがとうございます。」

マリーさんの方を見ると、「せっかくのお誘いだし、いつてらっしやい。」って言うてくれたから、片付けがちょっと残ってたけど、マリーさんにお任せして、一緒に教会に向かうことにした。

「そういえば、ミアさんはどうして魔法のことを調べていらっやるのですか？」

「あ、実はあだし、白色魔法が使えるんです。」

「まあ、治療師ヒーラーさんだったのですね。」

…あんまり言っちゃだめだった気がする。

何かシャルテさんのおしゃべりの雰囲気に乗ってすらっと出ちゃった…

だいじょぶだよね…

「え、えとでもあんまり誰にも教えてないって言うかその…」

「すみません、変なことを聞いてしまいました。」

「いえ、あの、その…」

「では、わたしも告白してしまいますね。」

実はわたしも魔法が使えるのです。緑色だけですが。」

「これで、お相手ですね。」って笑ってるけど…

その笑顔を見てると何だかだいじょぶな気がしてきた。うん。

教会までいろいろおしゃべりしながら歩いてく。

冒険者の宿のことや、あだしがどんなことしてるかとか、どうして白枝亭で働いてるかとか。

あだしが記憶喪失だっというところで、シャルテさんの表情が曇っちゃった。

「すみません、辛いことを聞いてしまいましたね。」

「あ、いえ、そんなことないです。」

あだし、今がとつても幸せだから、もし記憶が戻らなくても平気だし、記憶がなくなっただからみなさんに会えた気がするんです。」

あたしのそんな答えに、シャルテさんはちょっと驚いた表情をしたけど、すぐに笑顔で「そうでしたか。」って言ってた。そうこうしているうちに、教会にたどり着く。

今日も教会はたくさんの人が出入りしてるみたい。

入口近くで、シャルテさんはたくさんの人にあいさつされてた。こんなに優しい人なんだもん。

みんな大好きなんだね、きつと。

中に入ったところで、いったん待つことになった。

すぐに戻ってきたシャルテさんは、鍵の束を持ってきてた。

「おまたせしました。それでは行きましようか。」

「はい、よろしくお願いします。」

シャルテさんについて、脇の細い通路を通って教会の奥に進むと、上上がる階段の奥に、頑丈そうな扉が見えた。

シャルテさんが鍵を差し込むと、扉の鍵はカチャリと音を立てて開く。

「よいしょ。」って声をかけて開けるほど、扉は重そうだった。

すっごく分厚くて、あたし何か開けれるのかな…？

中は真っ暗だったんだけど、シャルテさんは入ってすぐのテーブルの上に並んでる、小さなガラスのビンのようなものを1つ取り上げた。

「それは…？」

「これは「ライトクリスタル光水晶」です。

見たことはないようですね。」

シャルテさんが見せてくれたビンには、水晶のかけらみたいなもの

が入ってるけど…「光水晶」って言う割に光ってないよね？
って思ってたら、シャルテさんが ルーンワード魔法語 を唱えた。

「光よ」

その瞬間、ビンの中の「光水晶」が光りだした。

そう、あたしが ライト《光》で出したあの光と同じみたいな。

「シャルテさん、白色魔法も使えるんですか?!」

「これは魔法具の1つですね。自然にあるマナをとりこんで、簡単なキーワードで発動することができます。」

ただ、たまっているマナを使いきると、またたまるまでは使えません。」

ここは、火で灯りをとるわけにはいきませんので…」

シャルテさんが差した先は、「光水晶」からの明かりで照らされる。

階段を少し下った先にはたくさんの本棚にぎっしりの本。

こんなに本があるの、初めて見た…

「さあ、参りましょう。」

少し入ったところですからついて来てくださいね。」

47 かみさまのおみちびき その2

シャルテさんについて、奥へと進んでいく。

明かりはシャルテさんが持つてる「光水晶」ライトクリスタルだけだから、離れると大変なことになりそう…

って思ってたんだけど、よく考えたら、あたし光出せるんだよね。それは置いといて、とにかく進んでく。

思ってたより割と広いんだよね。

と、シャルテさんがある本棚のところまで止まった。

「あ、ここですね。」

明かりを持っていただけますか？」

「はい。」

「光水晶」の入ったガラスのビンを受け取って、本棚が見えやすいようにかざしてみる。

シャルテさんはそこに並んでいる本の背表紙を確認して抜き出した。

「今回はこちらの本を見ていただければと思います。」

「この本はどんな本なんですか？」

「そうですね、この間お話したような創世期のことを記したものです。」

とはいうものの、創世期からあるものではないのですが。

おそらく、後世になってから、口伝のようなものを編集したものではないかと考えています。」

…そーせーきのくでんをへんしゅうしたものですか。

うん、よくわかんないや。

「簡単に言ってしまうえば…昔話をまとめたものでしょうか。」
「ふーん。あれ、これって ルーンワード 魔法語…とちよつと違うのかな…？」

シャルテさんが開いた本の中には、魔法語 とよく似た感じの文が並んでる。

けど、同じようなところもあれば、全然違うところもある。

「これは アルカイクワード 古代語 です。」

神々が人族に与えたと言われる原初の言葉だと言われています。」

「んー…読めそうで読めないような感じですよ…。」

「大丈夫です。」と言って笑顔になるシャルテさん。

パラパラとページをめくっていつて、あるところで止まった。

「それでは、お話していきますね。」

「は、はひっ?!」

「すみません、説明不足でしたね。」

ミアさんの代わりにわたしが読んで、内容をお話させていただくということですよ。」

ひー、何から何まですみません！

もう、体が縮こまっちゃっよ…

そんなあたしを見て、不思議そうなシャルテさん。

ほんとにすみません…

「コホン、では参りますね。」

まず、魔法についてですが、もともとは神々が用いていたようですよ。
す。

神々はその司るものを具現化するような力を持っていたと伝えら

れていますね。

わたしたち人族は、神々の争い…これは以前にお話しした、光の陣営と闇の陣営の争いのことですね、このときに、それぞれの神々から、与えられたと記されています。

光の陣営についた人族は黒色以外の、闇の陣営についた人族には白色以外の素質が与えられたようですね。

しかしこのときはまだ、人族の魔法はあまり強くなかったようです。」

「強く、ない？」

「ええ、詳しく記されているわけではないですが、1色ずつでしか使えなかったようですね。」

そういえば、2色以上が使えないと魔法士ソーサラーって呼ばれないんだっけ。でも、どうしてそうなんだっけ…聞いたかな？聞いてなかったかな？んー、覚えてないや。

「1色だと強くないんですか？」

「え…あ、ご存じありませんでしたか。」

複数の色を合わせて行使することで、様々な力を行使することができるのですよ。

たとえばわたしの使える緑色は、風、奪うといった特性があります。

青色は水、守るといった特性があるのですが、この2色を合わせて行使することで、雷の力を扱えるようになるのです。」

「ほえ…」

組み合わせによっていろんな力が使えるようになるから、色がたくさん使える人じゃないと魔法もたくさん使えないってことみたい。でもあたしは1色だけだし…ちよっと残念かも。

「あらまあ…そんなことはないと思いますよ。
白色はもとから多くの特性があるので、魔法もたくさんあるよう
ですし。」

さて、すこし話が逸れてしまいましたね。

実はこの後、素質を持った者同士が結ばれることで、複数の素質
を持つ者や、逆に素質を失ってしまう者なども生まれてきたという
ことです。」

「あ、それで今は…」

「そういうことでしょうかね。」

ただ、その力が大きく開花するのは、悪魔との闘いで、悪魔たち
が行使する力を同じように使うことで対抗しようとしたから、とい
うことです。」

ふーん…何だかすごいお話だね。

神さまや悪魔が魔法に関係してたんだ。

「さて、非常に簡単な説明で申し訳ないですが、これで魔法の始ま
りに関することは少しわかっていただけましたか？」

「はい、ありがとーございます。」

「そうですね、わざわざ来ていただいた甲斐がありました。」

う…元はと言えばあたしが急に聞きに行っただけで、シャルテさん
は好意で調べてくれただけなのに。
どっちかっていうと、あたしが自分で探さなきゃいけないようなこ
となのに。

ほんとにお世話になりまくりです…

「あら、どうなさいました？」

急に元気が…立ちっぱなしで疲れさせてしまったでしょうが…」

「いえ、そんなこと！」

あの…ほんとにありがとうーございます。
お忙しいのにこんなに協力していただいて。」
「そういつていただけで十分ですよ。
それにわたしは本が大好きですから、ミアさんのおかげでわたしも楽しかったですよ。
だつて…」

そういつてたくさんの本たちを振りかえり、「こんなにたくさんの本、何か目的がなければどんな風と呼んだらいいかなんてわかりませんから。」つて楽しそうに言うシャルテさんは、ほんとに本が好きなんだなつてあたしにも感じられた。

さすがにお世話になりっぱなしだし、何かできることがあればつて思つて、「あの…何かお礼を…」つてあたしが言いかけたところで、トラブル発生…

「わたしが好きでさせていただいたことですから、お礼なんて…
と思つたのですが…」

先日使つたばかりの「光水晶」を持つてきてしまつたみたいですね…

できれば…明かりをいただけませんか？」

真つ暗で見えないけれど、きつとシャルテさんは少し困つた顔で笑つてたに違いない。

何だかそんな感じがしたから。

あたしは、発動体ペンダントに手をかざし、感謝の気持ちを込めて唱えた。

「礎となりし片割れ、我が手に輝け…《光》ライト！」

「よかつた。一応、造りは覚えているのですが…ここ、手探りで戻るのはなかなか大変なんですよ。」

あはは…あたし、白色魔法が使えてほんによかった…

47 かみさまのおみちびき その2（後書き）

たまに投稿が遅くなってしまうこともありますが、いつもお付き合
いいただきありがとうございます。

毎日、たくさんの方が見てくださっていて、PVが6000を越え、
ユニークも1000を越えることができました。

できる限り、こまめな更新を続けていきたいと思っています。
今後ともミアちゃんともどもよろしくおねがいします。

48 不安な報告

「マリーさん、ただいま。」

「あら、エリカ、とレックス。おかえり。」

「こんにちはッス。」

「お2人とも、おかえりなさいですー。」

お昼もそろそろお客様が帰りはじめたところに、エリカさんたちが帰ってきた。

「昨日の朝一番で出発したから、何となく帰ってくるの夜かになって思ったけど、早かったんだね。」

「にしても、2人だけ…？」

「フェリックスさんとアリサさんはついてきてないみたいだけど…マリーさんも同じこと考えてたみたい。」

「そういえばリックとアリサは？」

「あ…リックはギルドの方に…アリサも魔法士ギルドです。」

「ちよつと報告に…あとでマリーさんにもお話すると思います。」

「…何かあった？」

「はつきりと、ではないですが…気にかかります。」

「何だか急に難しそうなお話に…マリーさんの表情も何だかちよつと険しい感じ。」

「あ、あつちでお客様が呼んでる。行かなくちゃ。」

「すみません、おまたせしました。」

「あ、いやいや、いいんだよ。」

「お勘定頼むわ。」

「はい、ありがとうございます。」

お代金を受け取って、挨拶して見送ったら、食器のお片付け。厨房に持っていきこうとしたら、マリーさんが「ランチ4人分通しておいて。」って。
きつとみなさんの分だよね。

「クルトさん、4人分追加です。」

「こんな時間に珍しいね。」

「たぶん、フェリックスさんたちのかなって。」

「今、みなさん帰ってきたところです。」

「なるほど。」ってうなずきながら、すでに準備に入ってるクルトさん。

行動、早いです！

その後も何度か食堂と厨房を往復して片付けてる間に、フェリックスさんとアリサさんも合流してた。

「よし、できた。」

私も2つ持つから、ミアはあと2つを頼むよ。」

「はいー。」

もう新規のお客様も入ってないから、クルトさんと2人でみなさんの分を運んでいくことになった。

食堂に入ると、フェリックスさんたちがテーブルについて、マリーさんも一緒に座ってた。

「お待ちませ。」

「どうぞです。」

みなさんの前に、ランチのプレートと並べていく。少し遅めのお昼だったから、みなさんおなか減ってたみたいで、すぐにご飯に取りかかっている。フェリックスさんたちならいいからって、マリーさんにいわれて玄関のプレートを準備中に替えてきた。

戻ってきたら、クルトさんがいなかったんだけど、マリーさんに座っててって言われたから、フェリックスさんたちの隣のテーブルに座ってることにした。

ランチは量がそんなに多くないから、フェリックスさんたちのご飯もそんなに時間はかからなかった。

ご飯が終わるころに、クルトさんがみんなの分のお茶を準備してくれてみたいで、そのままみんなでお茶することに。

人数が多くて、大きめのポットで淹れるみたいだから、その間にあたしとマリーさんと、食器を水場に運んでおく。

うん、連携プレー。

「さて、みんな揃ったわね。

それで、いったい何があったの？」

「ああ、実は今回俺たちは護衛だったんだけど、少人数で割と急ぎたいのと、貴重品だからってことで指名があったんだよ。」

マリーさんが切りだして、フェリックスさんが答えてお話が始まった。

何となく雰囲気を楽しむそうじゃないんだよね…

一体どうしたんだろ？

「護衛自体は問題なく終わったんだけど…」

前に話したことがあったと思うんだけど、どうも噂どころじゃな

いかもしれないんだ。」

「前って…あれよね。」

「ああ、今回、行きがほぼ1日で、帰りが若干早かったけど…
こんな短い行程で、2回遭遇、しかも街道沿いでだよ…

偶然だとはちよつと、な…」

何か変なものに会ったのかな…

あれ、わかってないのあたしだけかな…

でもこのままじゃ何だかよくわかんないし。

「あの…遭遇って？」

「ん、ああ…悪魔族だよ。」

そんなに強くはなかったけどね。

あれ、こないだミアちゃん話に入ってたっけ…」

あくま…って…

何でそんなのがでてるの…？

普通に暮らしてたら会わないっていったのに…

「ミア。」

「ひうっ…」

隣りに座ってたクルトさんが、あたしの手を握ってくれた。

でもあたし、自分の手をぐっと握っちゃってて、うまく開くことが
できない…

何だろう…怖いような、許せないような、何か緊張してよくわから
ない…

クルトさんがゆっくり手を開いてくれたけど、あたしの手の下には
自分でつけたつめあとがくつきり残ってる。

「大丈夫だよ。」

「ここにいるわけじゃないんだから。」

「うん…」

「さ、ちょっとお茶のお代わりを淹れに行こうか。」

「ん…」

きつとまだお茶は残ってると思うけど、あたしはクルトさんの提案に甘えさせてもらうことにした。

だって、みんな心配そうな顔してる。

だいじなお話なのに、あたしが止めちゃだめだから。

「ご、ごめんなさい。」

「ちょっとびっくりしちゃいました。」

「おいしいお茶淹れてきますね。」

それだけ言っつて、クルトさんと一緒に厨房に向かった。

だいじよぶだよね…

何も起こらないよね、きつと。

そう思いたいけど、どうしても一度膨らんだ不安は消えてくれない…

厨房に入ったけど、クルトさんはお茶を淹れようとはせず、あたしをイスに座らせて、隣りに座ってくれた。

クルトさんが繋いでくれる右手だけが少し安心してる気がする。

うん、きつと、きつとだいじよぶだよね。

48 不安な報告（後書き）

少しいつものほん雰囲気ではありませんが…

49 ふくらむ不安

結局、あのお話のあと、あたしはずっと厨房にいることになった。1つには、食堂でのお話がなかなか終わらなかったから。

もう1つは、休憩時間だけど、外に行きたくないし、1人にもなりたくなかったから。

さすがにクルトさんにずっと手をつないでもらってるのは無理だから、手は放したけど。

一度だけクルトさんは、食堂に新しいお茶を運んだ以外はずっと一緒にいてくれた。

夕方の準備が始まる時にはだいぶ落ち着いたから、ちゃんと準備に加わったの。

マリーさんもクルトさんも、休んでもいいよって言ってくれたけど、さすがにそれは悪いし…

部屋に1人で休んでたくなかったから。

ということ、マリーさんと食堂の準備中。

「テーブル全部できました！」

「準備完了ね。」

クルトの方の様子見てきてくれる？」

「はいっ！」

厨房をのぞくと、クルトさんはお鍋のようすを見たり、野菜の仕込みをしたりしてた。

すぐにあたしに気づいて、声をかけてくれる。

「あ、もしかして食堂は準備できたかな？」

「はい、だいじょぶです。」

「了解。こつちももうだいたい行けてるから、いつでも開けてもらっていいよ。」

「わかりましたっ!」

食堂に戻って、マリーさんに伝えたら、玄関のプレートを、営業中に替えて、営業開始。

今日もお客様たくさんくるといいな。

食堂を開けてすぐは、まだちょっと早いから、お客様もちらほらし
か来ない。

けど、いつもこの時間に来てくださる常連さんもいるんだよね。
だんだん増えてくるから、今のうちに、クルトさんの準備で手伝える
ことをやっておかなきゃね。

「いらっしやいませ!」

「お、ミアちゃん、今日は一段と威勢がいいねえ。」

「ありがとうございます!」

あちらのお席が空いてます!」

お客様もだんだん増えてきて、今日も食堂は大盛況。

マリーさんやクルトさんはもちろんいつもどおり、ときはき動いて
お客様の対応や調理に取り掛かってる。

あたしも食堂と厨房を行ったり来たりで大忙しかった。

「ごちそうさま。」

お勘定、置いてくよ。」

「ありがとうございます!」

お気をつけてお帰りください!」

最後のお客様を見送って、扉のプレートを外してしまう。
あとは片付けだけ、っていつても、運ぶのは大体終わってるから、
洗いものと、食堂のお掃除に取り掛かる。
お客様がいなくなると、急に食堂が広く感じる。
今までそんなこと思ったことなかったのに…

「ミア、テーブルからお願いね。」
「はいっ、布巾しぼってきますね。」

厨房ではクルトさんがも片付け始めてる。
邪魔にならないようにさっと布巾をしぼって、小さな桶に水を汲んで一緒に持っていく。

マリーさんがカウンターから、あたしはテーブルから、いつも通りにきれいにふきあげる。

それが終わったら、食堂はマリーさんに任せて、今度は水場で洗い物。

クルトさんがもう始めてたから、横に並んでどんどん洗っちゃおう。

気のせいか、いつもよりも早く片付けもすんでしまっって、お茶の時間になった。

最近、ちよっと夜が涼しくなってきたから、お茶のあったかさがほっとする。

いつもと同じはずなのに、何だか今日のお茶会は静かに過ぎていく気がする…

「ミア…大丈夫？」
「え…はい、だいじょぶですよ？」
「そっ…ならいいけど。」

マリーさんが気にかけてくれたけど、だいじょぶだと思う。
そろそろお開きになることになったから、みんなでお片付け。
クルトさんがやっとうかかって言ってくれたけど、すぐだしお手伝
いしたいって言って、一緒に水場で洗い物をしちゃう。

「はい、じゃあこれで終わりっつと。」

「お疲れさまでしたー。」

「もう食堂の方は明かりを落としてるから、気をつけて戻るんだよ。」

「だいじょぶですよー。いつもちゃんと戻れてるし。」

明かりをつけてた厨房から食堂に入ると、真っ暗で何も見えなくな
る。

けど、ちょっと待ってればぼんやり見えるようになるんだよね。

食堂の明かりが消えるまでに進めるだけ進んでおくと楽になるから、
階段の近くまで行っちゃおう。

ちょうど階段の下にたどり着いたくらいで、食堂の明かりも消えて
真っ暗になる。

手すりを伝えれば階段は上れるけど、もしこけたら大変だし、いつも
どおり、目が慣れるのを待とうかな。

真っ暗な中でじつとすると、風の音や床か何かがきしむ音がやけに
大きく聞こえてくる…

どうしてか、今日はそんな音が怖くなってきて、あたしは我慢でき
ずに階段を上ってた。

上がった先の廊下も、真っ暗な闇に吸い込まれるような感じでどん
どん怖くなってくる。

そして、ぴつとひらめいた。

「ライト《光》」

淡い光があたしの周りを照らしてくれる。
少しほっとするけど、廊下の先はさつきより暗く見えてしまう。
できるだけ変なことを考えないように、足もとを見て前に進んでく
と、突き当たりのあたしの部屋の扉が見えた。

「よかった…何も起きるわけないよね。」

そこで明かりがとぎれてちょっとドキツとしたけど、魔法が切れた
だけだった。

中に入って着替えると、テーブルにペンダントを置いてベッドにも
ぐりこんだ。

でも、不安ばかりがおつきくなっていく…

どうしよう…眠れそうにないよ…

そのとき、コンコンって音が…

誰…こんな時間に…

「ミア、まだ起きてる？」

「マリーさん?!今開けます!」

マリーさんの声を聞いてちょっとほっとしたから、慌てて鍵を開け
に行った。

扉を開けると、明かりを持ったマリーさんが立ってた。

「ミア…ちょっと入っていいかしら?」

「はい。」

入ってきたマリーさんが、明かりをテーブルに置いてベッドに腰掛
けて、あたしを手招きした。

扉を閉めて、マリーさんの横に座ると、マリーさんがぎゅってして

くれる。

マリーさんにひつついたほつぺたが冷たかった。
いつの間に涙なんて出てたんだろっ…

「ごめんね、ミアにも少し知っておいてもらった方がいいかと思っ
てたんだけど、不安にさせちゃっただけになっちゃったわね。」

「え…?」

マリーさんはあたしをぎゅってしたまま、背中をとんとんと叩いて
くれる。

それだけで、今までの不安だった心がちよつとずつ落ち着いてきた
…気がする…よ。

「本当にごめんなさい。」

ミアの力が、万が一のときにミア自身のことを守ってくれるって、
そう思ったから。

どんな万が一があるかは分からないけれど、今、この世界で起こ
っている異変を知っておいてもらおうって…」

「マリーさん…」

やさしくぎゅってしてくれてるそれ以上に、マリーさんのあたしを
思ってくれる気持ちが痛いくらいに伝わってくる。

あたしのことをこんなに心配してくれる。

それだけで十分です。

あたしはだいじょぶです。

マリーさんとクルトさんがいてくれるから！

でも今夜だけは…マリーさんと一緒におやすみなさい…

50 不安をなくすいい方法

結局昨日はマリーさんが一緒にいてくれたこともあって、あのあとってほとんど覚えてないくらいにすぐ寝ちゃったみたい。

悪い夢を見ることもなくて、すつきり目が覚めたんだけど、マリーさんはもういなかった。

今は明るいいし、1人でいても、不安は全然ないかな。

あ、あんまりぼーっとしてたら準備に遅れちゃうから、手早く着替えて降りなきゃね。

今日も1日、がんばるぞー！

朝の食堂で、アリサさんが今日の午後、また時間取れるなら魔法のお勉強したいって言うてくれたから、今日は午後の休憩は授業してもらえることに決定。

その分午前中の休憩は短めにして、できることやっとなきゃね。

何だか、元気も湧いてきてた気がしたから、薪割りをがんばったんだよ。

お昼の食堂営業が終わって、軽くご飯すませたら、今日はあらかじめ、お茶の用意をして部屋に戻った。

窓を開けっぱなすと、さわやかな風が吹き込んでくる。

今日はお外も気持ちよさそうだね。

しばらくすると、コンコンと扉がノックされて、アリサさんの声が聞こえた。

扉までお迎えに行つて、いつもどおりアリサさんがイスに、あたしがベッドの端っこに座つて、今日の授業が始まった。

「さてー、今日はー、一度に2つの魔法をー、教えちゃおうー思っていますー。」

「一気に2つですか?!」

あんまり魔法を一気に教えるようなことはない感じだったんだけど、どうしたんだろ。

アリサさんはあたしを見て、クスツと笑うと、理由を説明してくれた。

「それはですねー、ミアちゃんがー、ある程度の魔法ならー、きつと簡単にー、扱えてしまうと思うからですねー。」

「この前のー、様子を見てるとー、きつと今日も大丈夫ですよー。」

そういえば、前のときも、《^{ライト}光》の魔法はすぐに使うことができたんだよね。

でも、だんだん難しくなると大変そうだな。

今日もちゃんと使えるようになれるかな？

「それとー、もう1つはー、ミアちゃんのー、不安が解消できればとー、思っていますー。」

「え、と…?」

「以前にー、光という特性がー、悪魔に対抗する力にー、なるって言いましたよねー。」

使うことはー、きつとないでしょうけどー、使えればー、不安が少しでも解消できるかなーって思っていますー。

ただー、少しこちらはー、マナの消費量も多くてー、扱いが難しいかもしれませぬー。」

アリサさんたちも、昨日のあたしの様子が変なことに気付いてたん

だね…
でも、もしかしたらこれでもっと不安解消できるかもしれないよね。それならちよつとくらい難しくても、覚えてみたいなって思ったから、あたしはアリサさんに「よろしくお願いしますっ！」ってお辞儀した。

「はいー、それではー、まず1つめですー。」

この間覚えてもらったー、《光》の魔法がー、ありましたよねー。
《光》はー、しばらくは持ちますがー、明るさはー、さほどなかったですよねー。」

「そいえば、昨日、夜に明かりにしてたら途中で消えました。でも、ちゃんと周りが見えてましたよ？」

「ロウソクのー、灯りくらいにはー、明るいですからー。」

この魔法はー、光が長持ちしますよー。」

っていうことは、昨日みたいに途中で切れてびっくりしたりはしないってことよね。

とっても便利かも？

またアリサさんの本を見せてもらって、ルーンワード魔法語 をなぞる。

そしてそのイメージ、光がそばにあって照らし続けてる感じ…

「さっそくいつてみましょうー。」

「はい。」

光よ、我に寄りそいて照らし続けよ…デュラブルライト《持続光》

ほわんと指先に光の玉が現れる。

見た目は《光》と同じだけど…違うんだよね？
たぶん…

「これはー、だいたいー、半日くらいは持ちますねー。」

あとー、物に対してかければー、そのものの一部が光り続けますよー。」

「夕方に使ったら、朝までいけちゃうんですね。」

「そうですねー。」

とりあえず今ある光を消しましょうー。」

消すのはー、術者がー、念じるだけでできますー。」

言われた通り、消えてって思ったたら、光はすつと消えてしまった。ほんとに便利な気がする。

《光》がなくてもいけるのかなって聞いてみたら、マナを使う量が《光》よりちよつと多いから、使い分けた方がいいんだって。

「それでは次に行きましょうー。」

実はー、この魔法がー、ミアちゃんの不安をー、やわらげてくれるかもー、しれないですー。」

「悪魔に対抗できる魔法…?」

「はいー、ただー、中でもー、一番弱いーものなのですがー、それでもー、今までのものよりー、マナの消費はー、多くなりますのでー、注意が必要ですー。」

さっきのところから少しページをめくって、開かれたところにある魔法語 を読んでみる。

今までよりも少し長い感じがする。

真白き光、清らかなるもの、世界に仇為す邪悪なるものを押しとどめる力となれ《聖光》ホーリライイト

こんな風につづられていた。

「この魔法はー、悪魔が現れた後になってー、使われるようになったー、魔法だといわれていますー。」

悪魔はー、現れた時からー、この世界のー、敵ですしー、それ以

前はー、必要のないものですからー、きつとー、そうなんでしょうねー。

「このようにー、前に手をかざしてー、唱えてみてくださいー。」
「はい、やってみますね。」

真白き光、清らかなるもの、世界に仇為す邪悪なるものを押しとどめる力となれ…《聖光》」

そうすると、かざした手のひらから、真っ白な光がふわっと輝いた。すぐに消えてしまったけど、今までの光よりもたしかに清らかな感じがする…気のせいかな？

そして、マナの減りもちよっと感じられるかなっていうくらいだけど、《光》や《持続光》よりも多いかな？

「ミアちゃんやっぱりすごいですねー。」

この魔法もー、一発で成功だなんてー。

やっぱりー、以前はー、魔法が使えてたのかもー、しれませんが

「ー。」
「ありがとーございます。」

でも、こんなので効くのかなあ…？

「これはー、一番初歩のー、魔法ですからー。」

でもー、ちゃんとー、効果はありますよー。

もちろんー、使うことにはならないとー、思いますけどー。

これでー、少しはー、安心してもらえるとー、うれしいですー。」

そっか、そっかだね。

使うことはないと思うけど、覚えてたら安心だね。

何だっけ、こういうの誰かが言ってたよね。

備えれば嬉しい…だっけ？

何か違うかも…

とにかく、こうしてまた1つ、不安をやわらげるための優しい気持ち

ちを感じる事ができたんだ。
アリサさん、ほんとにありがとうです！

51 夜のおでかけ

アリサさんに新しい魔法を教えてもらったあと、2人でお茶してたら、フェリッククスさんが訪ねてきた。

夜にみんなでちょっと出かけないかっていうお誘いだったんだけど。

「あたし、お仕事終わるの結構遅いですよ?」

「ああ、でも問題ないっていうか、むしろそれくらいの方がいいかもしれないんだよ。」

えと、どういうことだろ?

よくわかんないけど、クルトさんやマリーさんも誘ったら、あたしを連れて行ってあげてほしいって言われたんだって。

「別に街から出るわけじゃないし、もし何かあっても俺たちがいれば大丈夫だよ。」

「うん：お出かけは楽しそうです。」

行きたいですけど：どこに行くんですか?」

「ま、それは夜のお楽しみってことで。」

もしかしたら、街の人も結構来てるかもしれないけどね。」

何かある：っていう話なんて聞いてないよね。

いったい何だろー：

でも結局フェリッククスさんははぐらかしてたし、アリサさんまで「楽しみにしてくださいー。」って。

うー、気になってきた：

そうやってお話してるうちに、そろそろ夜の食堂の準備をしなきゃいけない時間になって、2人といったんお別れすることに。

お茶のセットを持って降りていくと、食堂には誰もいなかったけど、厨房にはクルトさんがもういた。

先にこれだけ洗っておかないと、後で水場あふれちゃったら困るから、今のうちにやっちゃおう。

そうこうしているうちに、マリーさんがお外から戻ってきた。お買い物に行ってたんだって。

みんな揃ったところで、準備を始めることになった。

今日もお客様はいつもどおりたくさん来てくれて大盛況。

最後のお客様をお見送りして、玄関のプレートを片付ける。

食堂に残ってるのは、フェリックスさんとマリーさんとあたしだけ。

さっさとお片付けしちゃおうと思って、食器を運ぼうとしたら、マリーさんが代わりに持ってくれた。

「今日はもうこっちはいいから、お出かけしてきなさい。」

「え、でも…」

「リックたちを待たせるのも悪いでしょ。」

「こっちはわたしとクルトで何とかなるから大丈夫よ。」

って言われちゃったので、片付けはお任せすることになった。特に準備もなかったし、部屋に戻らずそのまま出発することになった。

「そいえば、そろそろどこに行くか教えてくださいよー。」

「まずは広場まで、だな。」

こんな遅くに広場って何だろう…

とにかくフェリックスさんとレックスさんが前に並んで、アリサさんとあたしとエリカさんが後ろからついてく感じで進んでく。アリサさんが右手をつないでくれたから、左手はエリカさんとかなつて思っただけだ…

エリカさんの右手をつかんだら、「ひあっ！」って驚かれちゃった。でも、あたしの方を見て、ちゃんとつないでくれたんだけどね。

「やっと来たのか。」

呼び出しておいて遅れるなよ。」

「悪い悪い、ちょっとミアちゃんの仕事が終わるの待ってたんだよ。」

「広場で待ってたのは、ラルフさんだった。」

「フェリックスさんたちが約束してたっぽいね。」

「っていうか、あたしが待たせちゃったのね…」

「遅くなっちゃってごめんなさい。」

「ああ、ミアちゃん久しぶり。」

「ミアちゃんのせいじゃないから。」

「リックが時間を考えなさすぎ、っていうかそんな責任の押し付け方していいのなあ？」

「すまん、マリーさんには内緒で。」

「まあいいけど…川まで行くんだろ？」

「何だかよくわかんないまま、川まで行くことになった。」

「前を歩く男子3人は何か近況報告しあってるみたい。」

「あたしたち女子3人も最近のこととかお話しながら歩いてくと、気がつけばもう川辺まで来てた。」

「あれ、人がたくさんいる…」

「今夜はー、ちょっと特別なー、夜なんですよー。」

「特別？」

「そうですねー。」

あ、リックたちがー、場所決めたいみたいですねー。」

前を歩いてたフェリックスさんたちが、いつの間にか大きなシートを広げてる。

暗くてあんまり気にしてなかったけど、まわりに来てる人たちも、シート広げたりして、座ったり、寝そべったりしてる人もいる。

「私たちも、早く行こ…？」

「行きましようー。」

アリスさんとエリカさんに引つ張られて、フェリックスさんたちが広げたシートの上に寝そべる。

何でお外でみんなで並んで寝てるんだろう…って思ったんだけど、みんなが何をしてたかそのときやっとわかった。

「いつ今っ！」

「お、さっそく見えたみたいだね。」

「う、うん…あっ、またっ！」

今夜はよく晴れてたんだけど、お月様が見えなくてちょっと暗かったんだけど、空には満天の星。

そして、そこを横切る光の筋が、また1つ。

「今夜はー、流星群がー、来てるんですよー。」

「流星…くん？」

「はいー、流れ星をー、たくさん見ることができちゃいますー。」

聞いている間にも、流れ星がいくつも…
何てすごいんだろう…まるで…

「魔法みたい…」

「魔法ですかー？」

「そういえばー、星を降らせる魔法がー、あるそうですがー…」

…ほしをふらせるまほう？

何てとんでもない…

「っていうか、アリサさん、何か答えがずれてる気がします…」

「アリサって…いつも楽しい答え…だよね。」

「そうですかー？」

「そんなことないと思いますけどー。」

エリカさんはクスクス笑いながら言ってるけど、アリサさんは不思議そうに答えてるし。

「まあ、魔法でも何でもいいんじゃないか？」

「こんなにきれいなものを見られるんだからさ。」

「それに、これだけ流れれば、願掛けもできそうだよ。」

「がんかけ？」

「あら、ミアちゃんは知らなかったか。」

流れ星が流れてる間に願掛けすれば、願い事が叶うって言われてるんだよ。」

「そうなんだ…ラルフさん物知りだね。」

「次流れてきたらちよっとやってみようかな？」

「でも何をお願いしよう…って悩んでたら、グーって音が聞こえてきた。」

みんなが音のした方を見る…と、フェリックスさんのあきれたような声が聞こえた。

「おい…レックスのやつ、寝てるぞ…」

51 夜のおでかけ（後書き）

お話に、たまに自分の願望が混じったりします。
ゆっくり流星群とか見に行く機会とかないかな…

ちょっと確認わすれてたら、PV7000越えててびっくりしました。
本当にいつもありがとうございます。

52 大騒ぎの日 その1

「魔獣が出やがったー！」

そんな叫び声が響いて、平和だったお昼の食堂に緊張が走った。冒険者のお客様たちは、ご飯をさっと平らげて、部屋に戻ってく。そして、お昼だけ食べにきてたご近所の常連さんたちはご飯を食べる手も止まってる…

「マリーさん、魔獣って…？」

「普通の動物たちよりも変に大きかったり、体の一部だけが歪に成長してたりする獣よ。」

それにしても、街の近くまで来るなんて…」

つていうことは、普通じゃない状況なんだ…

何だかちよつと…大変なこと…だよな？

クルトさんも厨房から、こっちに来てた。

「クルトも聞えたのね。」

「ああ、こっちも聞えたみたいだね。」

それにしても、ここしばらくなくなかったんだけどなあ…

みなさん、とりあえずは落ち着いて待っていてください。

何か動きがあれば、対応はさせていただきます。

下手に外の状況を考えずに出てしまうと、騒ぎに巻き込まれたりすることがありますので。」

クルトさんがまだ食堂にいるお客様たちに呼びかけて、少しみなさん落ち着いたみたい。

そうこうしてるうちに、部屋に戻ってた冒険者さんたちが装備をそ

ろえて降りてくる。

みなさん、マリーさんやクルトさんに、様子を見にいつてくるって出ていく。

フェリックスさんたちも降りてきたけど、行っちゃうのかな？

「俺たちも行ってくるわ。」

まあ、あれだけ行けば出番はないだろうけど。」

「気をつけてね。」

「ってまあ、今のあんたたちならわたし何かが心配しなくても大丈夫だろうけど。」

「気持ちが悪むと…どんな相手にも負ける可能性があります。」

マリーさんの言葉に、エリカさんが答えて、みなさんは出て行った。魔獣って強そうだけど、悪魔より強いのかな…？

だったら怖すぎる…

「ミア、大丈夫だよ。」

冒険者たちはみんな強いから、魔獣なんてあつという間にやっつけられるさ。」

「そっか、そだよね。」

うちだけでもあんなにたくさん冒険者さんたちが向かったんだから、きっと大丈夫だよね。

それからしばらくは静かで、さっきの騒ぎは何だったんだろって気がしてくる。

残ってたお客様たちも、落ち着いたみたいで、ご飯の残りを食べ終わってる人たちもいたから、クルトさんの案で、お茶をサービスすることになったの。

「どっぞー。」

「サービスですー。」

「お、こりゃありがたいね。」

「お茶がついてくるなら、たまに魔獣が出てもいいかもなあ、ははは。」

「何て軽口を飛ばせるくらいに、落ち着いてきてたんだけど…
ボタン」

「って急に表の扉が開いて、また食堂のみなさんがびっくりする。
あたしもマリーさんもびっくりしたけど。」

「飛び込んできて、荒い息を整えようとしてるのは、教会のシスター
のシャルテさんだった。」

「ミアさん…！よかった…少しお願いしたいことが…」

「大丈夫かい？ちょっと座って落ち着いて…」

「す、すみません、急に…」

イスに座ったシャルテさんに、まだ残ってるお茶を出した。

「シャルテさんは苦しそうだったけど、少しにっこり笑って、お茶に
口をつけてくれた。」

「はあ…すみません、実はミアさんにちょっと教会の方まで来てい
ただけないかと…」

「ふえ?!」

「どういこと?」

「今は魔獣騒ぎで危ないでしょう?」

シャルテさんの言葉に、あたしよりもマリーさんが反応した。

「それにしても、何か急いできたみたいだけ。」

「はい…実は、ファングボアが…」

「また厄介なのが…」

「はい、それで、負傷された衛兵の方がミルファム教会に運ばれてきたのですが、少し傷が深いのです。」

治療師ヒーラーの方をお探ししようと思ったのですが、冒険者の方はみなさんフアングボアの方を追いかけて行かれたみたいで…」

フアングボアっていうのが魔獣のことなのかな？

って、ぼーっと考えてたら急にシャルテさんに両手をつかまれてびっくり。

「ミアさん、治療師ですよね？」

お願いします、どうか一緒に来てください！」

「え、ええっ?!」

急に言われて、混乱しちゃって思わずマリーさんを見たら、マリーさん頭をなでてくれたから、ちょっと落ち着いた。

「ミアはどうしたい？」

「え…と…あたしで力になれるなら…って。」

「うん、それじゃ行きましょうか。」

クルト、ちよっところち頼むわね。」

「やれやれ、まあ、君らしいな。」

気をつけていくんだよ。」

何だか、マリーさんも一緒に来てくれるみたい？

シャルテさんありがとうございますって、あたしとマリーさんの手をとってお辞儀しっぱなしだけ…」

「さあ、そうと決まれば早く行かなきゃ。」

ミア、ペンダントはつけてるね?」

「はい、だいじょぶです。」

「シスターさんは、いける?」

「ありがとうございます。」

大丈夫です。」

こうして、大騒ぎの街を、ミルファム教会へ3人で向かうことになった。

早くケガした人のところへ!

52 大騒ぎの日 その1 (後書き)

何だか…事件です…
無事解決に導けるかな…

53 大騒ぎの日 その2

マリーさんとシャルテさんと3人で、教会へ急いでく。広場の方が騒がしい感じで、この辺りは今は割と落ち着いてる気がするんだけど。

マリーさんとシャルテさんの表情は曇ってる。

「入られたみたいね。」

「はい、門で止められなかったようです。」

あまり被害が大きくならなければよいのですが。」

2人の話を聞けば、あたしにだって魔獣が街に入っちゃったってことはわかってしまう。

どうか、こつちに来ませんように…

しばらく細い道を進んで、大通りに出たら、魔獣の暴れた痕跡のようなものを見ることができた。

壊れた台車やタルの破片みたいなのがあったり、水か何かがたくさんこぼれたような跡があったり。

道沿いに被害が出てるみたい。

早足で進みながらマリーさんに聞いてみた。

「マリーさん、フアングボアってどんな魔獣なの？」

「簡単に言っちゃえば、大きなイノシシよ。」

ただ、名前の通り、牙が特に大きくてね。

その牙で突進して体当たり何かされたら、そりゃもう大変なのよ。」

「実は教会に運ばれてこられた衛兵の方も、門を破ろうと突進してきたフアングボアに引っかけられてしまったということだ。」

シャルテさんの言葉を聞いて、マリーさんがうわあ…って言うてる…
どうしよう、大変そうなんだけど…
その後も、いくつもの被害跡を見ながら、教会にたどり着いた。

「シスターシャルテ、おかえりなさい。

お目当ての方は見つかったようですね。」

「はいシスター、引き受けていただけました。」

シャルテさんに声をかけたのは、シャルテさんと同じような服を着てる、だいぶ年上のおばさんだった。

おばさんは、マリーさんの方を向いてお辞儀したんだけど、シャルテさんがあわてて耳打ちしてる。

そしたら、おばさんびっくりしたみたいになって、あたしにお辞儀した。

「申し訳ありません、早とちりしてしまい失礼しました。」

「え、ええっ?!」

おばさんと一緒に、シャルテさんも頭を下げちゃったから、どうしていいか困っちゃったんだけど、マリーさんが声をかけてくれて、2人とも頭をあげてくれた。

「とにかく、今はそれどころじゃないんですよ。」

「は、はい。ご案内します。」

シャルテさんについて、奥に向かうと、ベッドがたくさんある部屋についた。

そして、そのベッドの1つで、衛兵さんがうめいてる。

まわりには、衛兵さんや、教会の人たちがいて、腕を布で巻いたり、

汗を拭いたりしてる。
布はだいぶ赤く染まってて、ケガがひどいのがすぐわかった。

「すみません、前を空けてください！」

シャルテさんがそういうと、周りにいた人が隙間を空けてくれる。マリーさんに背中を押されて、空いた隙間にあたしが進むと、周りにいた人たちは、ちよっとおどろいてるみたいだった。

けど、そんな余裕はあたしにはもうなかった。
大きなケガを前にして、体がすくんでしまって、声もうまく出せない……

どうしよう、って思ったとき、この場には何だか合わない、でも聞きなれた声が聞こえてきた。

「にゃー。」

「ええっ、ネコくん?!」

周りの人も、急なネコくんの登場に固まってる。
けど、あたしはネコくんの声で少し落ち着くことができたんだ。
ネコくんは、横のワゴンからぴょんと飛んで、あたしの肩に器用に飛び乗ってきた。
何だか、がんばれって励まされてるみたい。

「うん、だいじょぶ、できるよ。」

「にゃ。」

そのとき、いつもよりたくさんマナを込めなきゃっていう考えが不意に浮かんできた。
いけるよね、きっと。

衛兵さんの傷口に、布越しに手をかざして ルーンワード 魔法語 を紡いでく。

「優しき光、包み込み、その傷を癒す助けとなれ…」
《ヒトリング負傷治癒》

「いつもよりマナを込めたからか、いつもより強い光が傷を包んでいく。」

マナを使ったつていう感覚もいつもよりもおっきい。

光がおさまると、衛兵さんはぐったりしてしまった。

びっくりしたんだけど、教会の人が、様子を見て、寝てるようですつて言ってくれた。

「きつかったんだろうね。」

ケガが治って、気がゆるんじやったのよ、きつと。」

マリーさんがそう言ってくれて、ちょっと納得した。

教会の人が巻いた布を確認しながら外したけど、傷は見当たらないつて言ってくれた。

ちゃんと成功：したんだよね。

周りもほっとした雰囲気になってる。

あたしもちよつとほっとしたら、何か急に力が抜けちゃって、その場に座り込んだじゃった。

その拍子にネコくんは飛び降りてどこかに行っちゃった。

「ミア、大丈夫？」

「うん：何かほっとしたら力抜けちゃいました…」

「ミアさん、本当にありがとうございます。」

あとはわたしたちの方で看ますので。」

シャルテさんも、さっきまでの緊張した感じがなくなって、ほっとしてるみたい。

うん、力になれてよかった。

一緒にきてた衛兵さんが、お礼をって言ってたけど、別にそんなの
いらないうっていいとおいた。

シャルテさんも、お茶を用意するから、少し休んでいったらうって言
ってくれたけど、宿も気になったから、せっかくだけど、遠慮させ
てもらったの。

教会の外に出ると、そこら中で片付けが始まった。

さっきまでの緊張感がだいぶ薄れてる、かな？

マリーさんは、もう決着がついたんじゃないかって言ってた。

すこし落ち着いた街をマリーさんと手をつないで宿へ向かってく。

あたしは、よかったっていうことしか考えてなかったんだけど。

あとで、このことに絡んでちょっといろいろあったんだよね…

54 今夜はおつかれさまパーティー

今日の夜の食堂は、みんなでパーティーみたいになってる。
主役は冒険者のみなさん。

そしてメインディッシュはフアングボアだったりする。
分厚く焼いたお肉が盛り付けられたお皿がいくつも出てる。
クルトさん、珍しい材料だからって張り切ったみたい。

冒険者さんたちは、基本的には依頼を受けてお仕事するんだけど、
街に被害が出そうなときとかは、衛兵さんたちや、王都だと騎士団
にも協力するのが当たり前になってるんだって。
うちに泊まってる冒険者のみなさんも、そういうことで、慌てて準
備して出て行ったんだね。

結局、大通りを広場まで走る間に、何軒かの建物に突っ込んで、壊
したりしたみたいだけど、弓とか魔法で止められたところを仕留め
られたんだって。

それで、参加した人たちで、お肉を分けてきたみたいで…冒険者さ
んたちってワイルドだよな。

ちなみにフアングボアの牙は結構価値があるみたいだけど、こうい
うときは一番に駆け付けた人がもらうことになるみたいで、残念な
がらうちの宿のみなさんじゃなかったみたい。

ちよつと見たかったかも。

「ああ、そうだなあ…。」

あの大きさはなかなか遭わないな…。」

「そんなにおつきかったの？」

「俺たちより背が高くて…まあ小さな倉庫くらいはあったんじゃない
いか？」

まあ、よく怪我人だけで済んだもんだよ。」

うん、想像するだけでびっくりする。

フェリックスさんがいろいろ教えてくれたから、実際に見てないけど、ファングボアがすごいのだったってことは何となくわかった。広場がだいぶ汚れたみたいで、今日明日は、有志の人たちで、広場掃除になるんじゃないかってことだったけど、それも大変だよね…

「っと、ミアちゃん、もう一杯もらっていいかな？」

「あ、すみません！。すぐにお持ちしますね。」

飲み物の方は、クルトさんとマリーさんが相談して、冒険者のみなさんには今日はサービスってことにしてみたい。

フェリックスさんから空いたジョッキを受け取って、カウンターに持っていく。

「マリーさん、お代わりです。」

「はいはい、ジョッキ貸してね。」

注いでもらったお代わりをフェリックスさんのとりに持っていく間に、他のお客様からも呼びがかかったので、残念だけとお話を聴けたのはここまでになっちゃった。

でも今日は、立食形式だから、お料理の追加も割と楽なので、実はいつもよりも余裕があったりするんだけどね。

そんな感じでお給仕してたら、新しいお客様が訪ねてきた。

「失礼、こちらにミアさんという方がいらっしやると伺ったのだが…」

その人は、衛兵さんたちと同じような格好をしてる、がっしりとした体格の人だった。

でも、いつも見る衛兵さんたちより、ちよつと立派な感じがした。何だか、ちよつとお客様たちも気になるみたいで、少し静かになっちゃった。

んー、そんな人があたしに用事…？

そのまま返事をしようとしたら、マリーさんが奥から先に返事をしていた。

「いらつしゃいませ。

失礼ですけど、ミアが何か？」

「ああ、お忙しいときに申し訳ない。

私は衛兵隊をまとめている隊長のグンドルフと申す。

この度は部下が世話になったようで、お礼に上がらせていただいたのだが。」

「グンドルフ…？」

隊長さんの名前を聞いて、マリーさんが何か考えてる。

有名な人なのかな？

お客様たちは、隊長さんが来た理由がわかったみたいで、もう元通りにぎやかに楽しんでる。

「奥さん…？」

「…どつかで聞いたことあるような気がするんだけど…」

ま、いいわ。

ミア、ちよつと来て。」

マリーさんに呼ばれていくと、隊長さんはこんな小さな小な子が…って驚いてる。

ぺこりとお辞儀すると、隊長さんは、オホンと咳払いをした。

「あー、この度は、我々の仲間を助けていただき、大変感謝してい

る。

あの騒ぎの最中、わざわざ治療師ヒトラーの方に来ていただいただけでも申し訳ないが、あのままでは、彼はどうなっていたかわからない。

ついてはこれを受け取っていたかどうかと思う。」

そういつて、隊長さんは外に声を掛けた。

そしたら、衛兵さんが何か袋を持って入ってきて、隊長さんにその袋を渡したんだけど、隊長さんはそのままあたしにその袋を渡そうとする。

「これって…?」

「うむ、治療師の方に無料で魔法ただを使わせたとあっては困るのでな。その分も含めたものだが。」

つてことは…お金?

うー…そんなつもりで助けにいったんじゃないんだけど…

「あのー…あたしは別にそんなつもりじゃなくて、シャルテさん…

あ、シスターさんに頼まれて言っただけですから…」

「しかしですな…我々としても、無料で治してもらったとあっては

…」

「あー…!」

あたしも隊長さんもどうしようって感じになりそうなときに、マリイさんが叫んで、あたしも隊長さんも、そして食堂のお客様もみんな静まり返っちゃっ…

みんなの視線を受けたマリイさんは、ちょっと赤くなって、後ろのお客様の方を向いて、何でもないから続けてって言うてる。

もちろん、そんなこと言われたってお客様たちも元の雰囲気急に戻れないよね。

こつちを気にしつつ、でもパーティーの方に向いてくれようとはしてる。

当のマリーさんは、お客様の方からまたくるっとまわって隊長さんに向き直る。

「あなた、王都の詰め所にいたグンドルフでしょ。」

「う、む？確かに私は王都で勤務していたが…何故それを？」

「覚えてないかしら…わたし、マリーですけど。」

まだちょっと顔が赤かったマリーさんに対して、マリーさんの名前を聞いた隊長さんは、少し青ざめた気がする。

そんな2人が向き合ってしゃべってるから、何かすごく色の違いが…って、外から袋を持ってきた衛兵さんも同じこと考えたのかな？

2人の顔を交互に見て、最後にあたしと目が合った…

「なぜ『プリマホワ白の舞』」

「ちょっと！その呼び方もうなし！」

「は…？あ、ああ…」

ますます赤くなっちゃったマリーさん、ますます青くなっちゃった隊長さん…

何なんだろう…相変わらずちんぷんかんぷんなのはあたしと衛兵さん。

マリーさんも隊長さんも、何か変だよー。

あ、忘れてたけど、きつちりお断りしなきゃ。

「あー、とにかく、あたしはお金をもらつようなことはしてないので、すみませんがそれは受け取ることができません。

ほんとにごめんなさい。」

ぺこりとお辞儀したんだけど、あたしを見た後、ちらっとマリーさんの方を見て、隊長さんは、はぁーって溜息をついた。

「わかった。

それではこれは持って帰らせていただく。

忙しいときに邪魔をして申し訳ない。

後日、また本人がお礼に上がると思うが、そのときはまたよろしく頼む。」

つて、それだけ言つて、すんなり帰っちゃった。

扉が閉まって振り返ると、お客様たち、こつちを見てる…けど、マリーさんが近づいていくと、みんな何事もなかったかのようにパーティーを再開したんだよね。

…ま、いつか。

まだパーティー続きそうだし、お給仕しっかりやらなきゃね。

55 街中みんなでお片付け

フアングボアが大暴れした次の日、朝の食堂も終わって休憩に入ったんだけど、あたしは広場のお掃除に参加したいってマリーさんたちをお願いしてみた。

衛兵さんたちや、冒険者さんたちががんばってくれたおかげで、被害も小さかったって聞いたけど、広場でフアングボアをやったから、だいぶ汚れてしまったっていつてたし。

マリーさんもクルトさんも、お掃除に行くことには反対しなかったんだけど、だいぶすごい状況になってるかもしれないから、大丈夫かなって心配してる。

「わたしはクルトがついていければいいんだけど…」

「1人でも行けるよ？」

「あー、えっとね、そういうことじゃないのよ…」

何となく歯切れが悪い感じ…

あたしもどんな風をお願いすればいいかわかんなくなってきた…そのとき、上からお客様が降りてきた。

「あれ、エリカ、1人で出かけるのかい？」

「はい、広場の片付けに…」

私の魔法…たぶん役に立つ…から。」

「そうかい、冒険者は片付けに参加しなくても誰も文句なんて言わないけど、こういうときエリカは手伝いに行くこと、多かつたわね。」

ふーん、冒険者さんたちは、街を守る方がんばるってことなのかな。

確かにあたしじゃフアングボアにはかないそうにないし…見てないけど。

あ…そうだ。

「エリカさんと一緒に行くのはダメ？」

「ええっ？」

エリカに迷惑かけてしまいかもしれないでしょ。」

急に言われて、エリカさん、不思議そうな顔をしてたけど、マリーさんが説明して納得したみたい。

ちよつと考えて、あたしも一緒に行ってもいいって言ってくれたんだけど、マリーさんは何か歯切れが悪い。

でも、エリカさんの口添えもあって、何とか許可を出してもらったとができた。

「…じゃあ、迷惑になりそうだったらすぐに帰ってくるよ。」

いいわね？」

「はい！」

ということ、さっそく出発しようとしたら、マリーさんにデッキブラシを渡された。

エリカさんは手伝うとなると、魔法を使うことになるけど、あたしはそうはいかないもんね。

でも、魔法で手伝うってどうということだろ？

広場に向かう途中の大通りでは、たぶんフアングボアが当たって、いくつか壊されてる建物があった。

そんな建物で、何人もの人が、修繕を始めてる。

衛兵さんたちも手伝ってるんだね。

広場につくと、たくさんの方がお掃除に参加してた。台車にタルを乗せて、水を運んでくる人、ブラシで石畳をこすってる人、それぞれにがんばってるみたい。

「ミアちゃん…大丈夫？」

「はひ？」

「まだ何もしてないですよ？」

「えっと…臭いとか…」

臭い…そういえばちよつと変な臭いするよね。

どっかでかいだことのある気がする臭いも混じってるけど。

「んー、これって何の臭いですか？」

「たぶん…血…とか…腐敗臭、かな？」

マリーさんも心配…してたけど、昨日のうちに…だいぶ片付け…進んでたみたい。」

そっか…マリーさんが気にしてたのって、そのことなんだね。

でも、がまんできないほどのものじゃないし、ちゃんとできそう。

エリカさんは、こすつても取れにくい汚れを、水を勢いよく飛ばす魔法で落とすからって、別行動することになった。

とりあえずあたしも、見よう見まねで石畳をこする人たちに加わる。川から水をくんできてくれる人たちが、どんどん水をまいて、そのあとをあたしたちがこすつていくみたいな感じで作業は進んでく。でこぼこしてるから、結構大変だったんだよね。

まわりの人たちは、お知り合い同士が多いみたいで、作業しながらいろいろお話してる。

でも、あたしの知ってる人はいないみたいだね…

「おや、ミアさんもお手伝いに来ていたのですか。」

「はひ？」

「あ、ゼル先生、こんにちは。」

急に声をかけられてそっちを向くと、タイミングよく知ってる人発見で何だかちよつとうれしくなっちゃった。

ミアさんも、っていうからゼル先生もきつとお手伝いに来てるんだろうつて思ったんだけど、ブラシも何も持ってないみたい。

そんなあたしの視線に気づいてか、ゼル先生が笑ってこういった。

「私たちギルドの方からは、主に魔法を使つてのご支援をさせてもらうことになってるのですよ。」

風を使つて、悪臭を吹き飛ばしたり、水で汚れを落としたり、といった感じですよ。」

「そですか！。」

「街中でお手伝いなんです。」

「はい、みんなの街ですから、みんなで協力しませんと。」

話をしたら、ゼル先生、別のところで呼ばれてる。

お互いがんばりましょう、って言つてそっちに走つて行っちゃった。

そんな感じでしたら、お掃除に参加してたけど、まわりの人たちの話を聞いてたら、エリカさんの言つてた通り、昨日のうちにだいたい片付けしてみたいで、思つたよりも早く片付けちゃった。

あたしも、途中で抜けてお昼の準備かなつて思つてただけど、十分間に合いそう。

何となく噴水のところにみんなが集まつてたから行つてみると、1人のおじさんが噴水の縁に上つて、集まつた人たちの方に向かって「みなさん、お疲れさまでした！」って言った。

そしたら、集まつた人たちも、口々にお疲れさまーって言い合つて、みんなで拍手大会みたいになっちゃった。

何だか、みんなでがんばるのって、楽しいね。
これでお掃除はお開きになったみたいで、集まっていた人たちも、ばらばらと帰り始めたみたい。

「ミアちゃん…も、お疲れさま。」

大丈夫…だった？」

「あ、エリカさん。」

はい、ちゃんとできました！」

「そう…良かったね。」

それじゃ…帰りましょう。」

少し人ごみを離れると、離れたところにゼル先生が見えた。
ぺこっとお辞儀したら、ゼル先生も気づいてたみたいで、手を振ってくれた。

あたしもちよつとは街のお役にたてたかな？
帰ったら、お昼の準備もがんばらなきゃね！

56 うわさを聞きたいの

「変な植物？」

「うん、ミアちゃんそこならそんな話出てないかなって。」

今日は久しぶりにユーリさんどこに来てる。

っていうのも、フェリックスさんたちが急ぎの仕事のご指名が入ったみたいで、授業もなくなったからなんだけど、ちよつとユーリさんが声をくれたんだ。

ユーリさんも最近は忙しかったみたい。

商隊が襲われたりして、お茶が少なくなった分を、外にいろいろ採りに行ったりしてたんだって。

それで、そのとき変な植物に出会って…っていうお話だったんだけど。

「変っていつても…あたし、植物詳しくないよ？」

「あ、そんな難しくないのよ。」

動く植物なんて、普通見ないでしょ？」

「動くの?!」

うん、びっくりはしたけど…何かかわいくないかな？

どんなだろ、お花が踊ったりとか…？

「ミアちゃん…何か変なの想像してない…？」

うっとりしてるけど…そんないいものじゃないのよ？」

「ほへ？」

お花が踊ったりしてるとか…」

あ、ユーリさんがずっとこけてる…違ってたみたい。

想像もつかないや…

「そうね…、植物の魔物っていうのもいるのよ。」

「魔物？魔獣じゃなくて？」

「あら、そっか。」

魔獣っていうのは一昨日暴れてたフアングボアみたいなやつのことよ。

普通にいる獣の、ちよつと強いようなやつ、かな。」

そいえば、マリーさんがそんな風に説明してくれてたっけ。

でも、結局フアングボアがどれくらいおっきいか見てないんだよね…ちよつと残念。

「それで、魔物っていうのはね、明らかに自然じゃないやつ、っていうのかな…

ちよつと曖昧だけど。

植物の魔物だと、蔓を鞭みたいにして叩いたり、巻きついたり、拳句、動物とか人まで捕食するようなやつもいるんだけど…」

「ひう…」

か、考えてたよりだいぶ怖い…

そんなの生えてたらどうしよう…

「この前、採集に行ったときなんだけどね…

最近何だか物騒な話も聞くし、1人では出ないようにして、猟師さんたちと一緒に採集も行ったの。

あ、ちよつと話変わるけど、ミアちゃん、緑に縞々の模様の果物見たことある？

中は赤くてみずみずしくて、種が結構入ってる、これくらいの大ささのやつ。」

って言つて、ユーリさんは手で大きさをつくつた。
顔よりもおっきいのね。

んー…そんなのは食べた覚えも見た覚えもない…
だから、首を横に振って答えた。

「でも、その果物がどうしたの？」

「実はね…その果物っぽいのに、4つの肢が生えて走り回つてるのを見たのよ…」

「え…」

「別に怖くはなかったし、見ようによつてはかわいいっていう人も
いるかもしれないけど…」

とりあえずびっくりしちやつて、あたしも一緒に来てくれてた猫
師さんも固まつちやつてね。

それで、最近のことを聞いてると、何だか放つておいちゃだめな
のかなつて思つて。」

ということ、ユーリさんから聞いた変な話のうわさがないか、今
日の晩の食堂で聞いてみるつて約束をして、あとは採集に行つてた
ときのお話聞いたり、あたしの魔法の勉強の進み具合を話したりし
て久しぶりのおしゃべりを満喫できたの。

宿に戻つて、マリーさんやクルトさんにも聞いてみたけど、2人と
もそんな話は聞いてないつて言つてたから、まだあんまり誰も知ら
ないのかな？

また明日にでも冒険者ギルドの本部の方に聞いてみてくれることに
はなつただけ、冒険者さんたちの方がよく知つてるかもしれないな
いよね。

「…ということなんです。」

何かうわさとか聞いたこととかありませんか？」

「んー、僕は知らないなあ。みんなは？」

周りの方たちも、首を横に振ってる。

常連さんたちに、お給仕しながらいろいろ聞いてみるけど、みんな知らないみたい。

すごい珍しいのかなあ…

あ、またお客様が。

「いらっしやいませー。」

「ふう、ちよつと遅くなっちゃったけどいけるかな？」

「あ、おかえりなさい。」

カウンターでもよかつたらすぐにいけますが、テーブルなら少し待ってもらわなくちゃです。」

お泊まりの冒険者さんのグループが、いつもよりちよつと遅めのお帰りで、ちよつとテーブルが埋まっちゃってたんだよね。

リーダーの人が、グループの方と相談して、カウンターでいいってことだったので、ご案内。

ご注文をいただいて、厨房に急ぎ、他のお客様のできあがった分を運んでく。

配膳して戻るときに、今帰ってこられたお客様たちにも聞いてみようと思ったたら、マリーさんがもうその話を振ってくれてるところだった。

「…という話があるみたいなんだけど、あなたたち、何か知らない？」

「あー…帰りにギルドに報告行ったときに、たぶんその依頼出て

ましたよ。」

「依頼？」

「はい、何でも植物に魔力を込めて、意思を持たせたり、自由に動かせないかって研究してた人のところから、何匹か逃げだしたから捕まえてくれって…」

探すのが大変そうで、受けるつもりがなかったからあんまり詳しく見てないんですが…」

「そう、ありがと。」

うちでも明日確認してみるわ。」

横で聞いてたら、マリーさんが気づいてウィンクしてくれる。

これで何とかわかりそうかな？

って安心してたら、奥からこんな声が…

「ミアー、できてるよー。」

運んでくれるかなー？」

ひう…クルトさん、ごめんなさい！

急いで厨房に向かうことになりました。

それにしても、いろんなこと研究してる人がいるんだね…

ちゃんと捕まるのかな？

56 うわさを聞きたいの(後書き)

夏も終わりそうですね。

スイカに手足が生えたらうりぼうっばいになっていう変な発想が…
目とか鼻とか貼りつけてみたいかも…

57 かんちがい？

「もっとおつきいと思ってたけど…うちの宿よりちっちゃいや…」
「ま、宿と比べちゃだめよ。」

今日は、ユーリさんと冒険者ギルドに来てる。
何でこんなことになったかかっていうと、話は今朝に戻るんだけど…

朝の食堂も、お客様もいなくなって片付けていうときに、玄関の扉がコンコンとノックされた。
こんな時間にくるお客様なんてほとんどいないから、マリーさんと顔を見合わせる。

扉が開いて、ひょっこりと顔をのぞかせたのはユーリさんだった。

「おはようございます。」

もしかして変な時間に来ちゃいました？」

「おはよう、ユーリ。」

今から朝の片付けだけど…昨日の件かしら？」

「あ、マリーさんも知ってるのね。」

うん、何かわかったかなって思って。」

ユーリさんは昨日あたしに言ってた変な植物の魔物のことを聞きにきたみたい。

ばっちり情報は手に入ってるもんね。

「えっとね、昨日…」

「あ、そうだミア、ちょっとお使いお願いしていい？」

ユーリさんに話そうとしたら、マリーさんが急にそんなお願いしてきた。

突然どうしたのかなって思ったんだけど…

「ユーリに説明するにしても、まだしっかり確認できてないじゃない。」

「だから、直接冒険者ギルドに行ってきたらいいわ。」

「へ？でも…お片付けは？」

「うん、だからついでにギルドの新しい依頼聞いてきてもらうのと、ここで頼まれた分を受けてもらえるかを報告してきてもらえば、ちよんどのいいじゃない。」

そう、だから、お使いだったんだ。

マリーさんたちで片付けの方をやっておくから、ユーリさんと行ってくればいって提案してくれたから、2人で冒険者ギルドまで出かけることになった。

マリーさんから、うちに持ち込まれた依頼の詳細を書いたメモを預かって、さあ出発ー！

って思ったら、冒険者ギルドの場所をあたしが知らなかったり…

結局地図まで描いてもらったんだけど、ユーリさんも大まかな位置ならわかるってことで、今度こそギルドに向かうことになった。

ユーリさんがいたし、地図もわかりやすく、ギルドまでは特に問題なくついたらんだけど、あたしのイメージではもっとおっきいのかなって思ってたってわけ…

「とにかく入ってみましょ。」
「はい。」

入ってみると、結構人がたくさんいてちよつとびっくりした。みんな冒険者さんなのかな？

入ってすぐのところが広くなって、奥のカウンターで、何人かの人
が代わる代わるお話を聞いてるみたい。

右側の壁にはいろんなメモが貼ってあって、何人もの人たち（冒険者さんだと思う）がメモを見てたり、そのメモをはがしてカウンター
の列に並んだりしてる。

とりあえずは、マリーさんに言われたことを先にしなきゃね。

「ユーリさん、あたし先にマリーさんに言われたことをすませてるね。」

「あ、うん。」

「じゃ、あたしは植物の魔物の依頼探してるね。」

ユーリさんと別れてカウンターの列に並ぶと、前に6人ぐらい並んでる。

でも、カウンターの人も2、3人してるから、きつとすぐだよね。少し待ってたら、列は1人、また1人と用事をすませて減っていった。

カウンターの人たち、テキパキしててすごく早いよ。

そして、いよいよあたしの前には誰もいなくなった。

「次の方、どうぞ。」

「あ、はい。」

呼んでくれたお姉さんのところに行ってイスに座って、マリーさんから預かったメモを出す。

「あ、依頼の方ですね。

ギルドカードはありますか？」

「ほへ？カード？」

「お忘れだと受けられませんか……」

カードって何だろ……マリーさんそんなこと言わなかったよね？
でも受けてもらえないと困るんだけど……

「あの……カード持ってません……」

「あら、すみません、それでは登録からですね。

こちらの用紙に記入をお願いします。」

お姉さんが紙とペンを渡してくれる。

名前とか、種族とか……職業？

名前は……ミア、と。

種族って……人間、でいいんだよね。

職業って何……？

「あのー、すみません、職業って何を書いたらいいんですか？」

「何って……あなたの職業ですが……」

「宿のお手伝い、でいいのかな？」

「いえその……例えば戦士とか……ではなさそうですね。

もしかして魔法士とか……」

「あ、白色魔法使えます。」

「治療師だったんですね。」

それではそのように書いてください。」

ふみゆ……治療師って。

これでいいのかな？

お姉さんを見ると、紙をチェックしてうなずいてる。

「はい、それではこれでお受けしますので、しばらくそちらのベンチに掛けてお待ちくださいね。」

「できましたら、お呼びいたしますので。」

「あ、はい、ありがとうございます。」

何とかかなりそうかな？

とりあえずベンチで待たせてもらおうと。

「ミアちゃん、いけた？」

「あ、ユーリさん。」

うん、何とかかなりそうです。」

「何か？何か面倒なことでもあったの？」

「…よくわかんないけど、たぶんだいじょぶだと思います。」

「そっか。こつちも見つけたよ。」

「ちょっと詳しいこと聞きたいから、並んでくるね。」

そういつて、ユーリさんも列に並んだ。来たときよりちょっと人も減ってて、列も短い。

すぐにユーリさんの番になって、カウンターでお話を聞いている。

そのとき、「ミアさん」って、さっきのお姉さんが呼んでくれた。

「はい。」

「お待たせしました。」

登録が済みだったので、こちらをお渡ししておきますね。

ギルドは各国共通なので、この身分証カードでどのギルドでも依頼を受けることができます。

また、登録がタレイアギルドになりますので、何かあればこちらの方に連絡が回るようになっていきます。」

「は、はい…」

何か大変なのね…依頼を受けてもらうって。

「それでは先ほどの依頼をお預かりしますね。

分かっていますけど、一応形式ですので、依頼を受けるときは身分証も一緒にご提示くださいね。」

今もらったばかりの身分証と、マリーさんから預かってきたメモと一緒にお姉さんに渡した。

お姉さん、メモの内容を確認してくれてただけだけど、急にびっくりしたみたい…どうしたんだろ？

「ミアさん…これって…」

「あ、えと、依頼です。」

マリーさん…じゃないや、白枝亭に持ち込まれた分ですけど、引き受けていただけるか確認をお願いします。」

マリーさんに教わった通りに伝えただけど…お姉さん固まってる…お話が終わったのか、ユーリさんがこっちにきてた。

「ミアちゃん、どうしたの？」

「お姉さんが…」

「あう…その…ごめんなさい、わたし、勘違いしてました…」

ミアさんは、白枝亭に持ち込まれた依頼を受けてもらえるかということでいらっしやっただけですわね？」

「え…そです…けど？」

「きゃー！すみませんー！！」

お姉さんが急にがばつと頭を下げて…ゴチンって…カウンターに…

うあ…すっごい痛そう…

周りにいた人もみんな見てるよ…

あ、お姉さん、おでこを両手で押さえてカウンターの上がうずくま
ってる…

「~~~~~っ!!」

「だ、だいじょうぶですか?!」

ユーリさんもびっくりしてるし…

あ、そだ、こんなときにも魔法かな?

うずくまってるお姉さんのおでこを押さえてる両手の上から手をか
ざして意識を集中した。

「ヒーリング
《負傷治癒》」

ほわっとあつたかい光があふれる。

上手く行けたかな?

「うっ…重ね重ねすみません…」

「だいじょうぶですか?」

「はい、ありがとうございます…」

そういったお姉さんの目には涙がにじんでたけど…とりあえずおで

こはだいじょうぶっぽいかな?

それにしても、どうして大慌てしたんだろ?

「あれ…ミアちゃん、その身分証って…」

「あー、すみません…」

実はミアさんが冒険者に登録して依頼を受けたいのだと勘違いし
てしまって…」

「冒険者登録されちゃったのね…」

ほへ？かんちがい…？

つてことは、依頼を受けてもらうのに登録とかいらなかったんだ…でも、何か困ったことになったわけじゃないしいいよね。

お姉さん、すっごい落ち込んだし、気にしないでくださいって言うて、せっかくなので身分証ももらって帰ることにした。たぶん使うことなんてないだろうけど。

依頼の方は、中身を確認してまた連絡くれるっていうことで、ユーリさんも、気になるお話はちゃんと聞けたみたいだしそのまま帰ることにした。

帰ってからユーリさんと2人で、マリーさんとクルトさんにギルドでのことを話したら、2人もすっごい笑ってた。

お姉さん…ふぁいと！

57 かんちがい？（後書き）

でびゅー…？

58 いろんなお客様

「いらっしやいませー…あ、ギルドのお姉さん！」

「ミアさん！」

はわわ…あ、あの…こんにちは…」

お昼の営業も真ん中くらいかなってときに、お昼前にギルドでカウンターにいたお姉さんが来てくれた。

最初見たときはテキパキしてる人だなって思ったけど、急にあわあわなっちゃってるよね…

あたしのせいかなあ…

「すみません、お忙しいとは思ったのですが、先ほどの依頼の件をお伝えしたくて…」

「マリーさんいらっしやいますか？」

「はい、いますよー。」

「カウンターへどうぞ。」

お客様も減りはじめてたとこだし、カウンターの開いてる席へとお姉さんを案内した。

今ならあたし1人でもいけそうだし、マリーさんはお姉さんとお話してもらってだいじょぶだよね。

もう、来てるお客様みんなに配膳終わってるから、お勘定と食器の片付けくらいだし。

って思ってたんだけど、新しく注文が。

「ミア、ランチプレート1つね。」

「はい。」

お姉さんが、注文してくれたみたい。
急いで厨房に戻って、クルトさんに追加をお願いする。
持っていくのはクルトさんがしてくれるってことだったから、また食堂の方に戻ってくと、マリーさんがだいぶお勘定すませてくれてたみたいで、空いた席も増えてた。
食器をまとめて水場に運んだり、テーブルを拭いたりしてたんだけど、いつの間にかお客様はお姉さんだけになってた。

「ミア、ちょうどいいからちょっとこっち来て。」
「はい。」

だいたい片付いたところでマリーさんに呼ばれて、カウンターの中に入る。

何かなって思ったんだけど、お姉さんを紹介したかったみたい。
お姉さんが、ご飯を食べる手を止めてこっちを向いた。

「ミアもこれから行く機会増えるかもしれないから、挨拶しとかなきゃね。」

「こちらは、ギルドの職員のリゼルさんよ。」

「よろしくお願いします。」

「こちらこそよろしくお願いします。」

「先程は本当にすみませんでした。」

だいぶ気にしてるみたい…別にあたしは何もなかったのにね？
マリーさんも笑ってるし。

「いつも白枝亭の分は、マリーさんかクルトさんが来ていただいていたし、ミアさんはわたしが見たことなかったから、てつきり新しく登録に来た冒険者の方だと思ひ込んでしまっ…」

「リゼルさんは、人の顔や名前を覚えるのがとても早くて、仕事も

「 テキパキこなすんだけど、たまにこういうことあるわよね、うふふ。」

「 リゼルさん、赤くなっちゃってるし…」

「 何でも、普通はこっちから依頼を受けてもらえるかを確認に行くはずなんだけど、さっきのことがあったから、わざわざお昼の休憩を使ってきてくれたんだって。」

「 それでマリーさんがご飯を進めたってことみたい。」

「 まあ、そういうことで、今度からミアが行くこともあるから、よろしくね。」

「 はい、わかりました。」

「 あ…もしよかったらミアさんもギルドの依頼を受けていただければって思います。」

「 危険なものは進められませんが、治療師ヒールへの依頼って、それなりにありますので。」

「 ふえ?! あたしなんて何もできないです…!」

「 急にそんなこと言われても困っちゃう…」

「 宿のお手伝いもあるし…」

「 あ、もしも空いている時間でするものがあれば、っていうことですので、そんなに深く考えないでくださいね…」

「 そうね、もしかしたらミアにとってもいい経験になるかもしれないわね、危なくないものならばいいかもしれないわね。」

「 何か、マリーさんの方が乗り気な気がする…」

「 とにかくそんな感じで、ギルドのお姉さん、リゼルさんとマリーさんとお話してたら、玄関の扉がノックされて開いた。」

「ごめんください、ミアさんはいらっしやいますか？」

入ってきたのは衛兵さんだった。
何かあったのかな？

マリーさんは衛兵さんを見て、「今日はいろんな人が来るわねー。」
って言ってるけど。

とりあえずカウンターから出て玄関の方に向かう。

「はい、ミアはあたしですけど、何かご用でしょうか？」

「は、はじめまして！…じゃなくて…」

あの、自分はフアングボアにやられたときにミアさんに助けを
いただいたエーリツヒであります！

その節は本当にお世話になり、ありがとうございました！

ミアさんが来ていただけなかったら自分はどうなっていたかわか
らなかったそうです。「

「は、はひ…」

衛兵さん、元気そうなのはよかったけど、声もすつごく大きいし、
勢いのある人だったのね…

思わず後ろを向いたら、マリーさんもりゼルさんも、さらには厨房
の入り口からクルトさんまでこっちを見てた…

「助けていただいたのに、お礼に来るのが遅くなって誠に申し訳な
いであります！

できる限りのお礼をさせていたきたいのであります！

何か自分にできることはないでありますか？」

「え、そんなお礼なんて…」

別に普通のことしかしてないです。」

「いえ、命の恩人に何もしいなんて、そついうわけにはいかない
のであります！」

ひう…お礼なんていいのにー！
勢いに負けそうになってたあたしの横に、いつの間にかリゼルさんが来てた。

「エーリツヒさん、お久しぶりですね。」

「これはギルドのリゼルさん、お久しぶりであります。」

「ところで、どうなさったのですか？」

ミアさんも何だかお困りのようですけど…」

尋ねられたエーリツヒさんが、リゼルさんに説明してる。

あ、隊長さんが来たときにお礼を受け取ってもらえなかったことまで…

「そうだったのですか。」

とにかくエーリツヒさんが無事で何よりです。

ところで、こちらのミアさんですが、ギルド所属の冒険者さんなんですよ。

ミアさんもお礼は結構だと仰られていますし、今回はミアさんのご厚意ということでのよいのではないのでしょうか？」

「しかし…」

「ギルドが間に立つてもよいのですが…そちらの方にもご迷惑になると申し訳ないですし、できればわたしからのお願いとして収めていただければ…」

エーリツヒさんは、リゼルさんに言われて少し考えてたけど、あなたの方を向いてお辞儀した。

「すみません、自分の気持ちばかりを押し通そうとしてしまい、ご迷惑をおかけしてしまっただけであります。」

今回の件は、ミアさんのご厚意をいただいたというところでよいで
ありますか？」

すっかり変わっちゃった…

固まってるあたしの肩がとんとんって叩かれる。

横を見るとリゼルさんがウインクしてた。

「は、はい。」

えと、その…いつも街を守ってくれてる衛兵さんに協力できて、
あたしもよかったです。

これからもがんばってください！」

「いえ、お忙しいときに失礼しました。

自分は仕事に戻ります。」

そういつて敬礼してエーリツヒさんは帰っていった。

何か…すごかった…

それにしても…リゼルさんの方を見ると、あたしが見てるのに気づ
いて、ちよつと照れ笑いしてた。

「仕事柄、いろいろな人と面識があるんですよ。

少しはミアさんにお詫びできたのなら幸いです。」

うん、とっても助かりました！

リゼルさん、ありがとう！

58 いろんなお客様（後書き）

普段使わない口調だと、どっぴうぶつに言うのかがわからなくなっ
てしまいます。

言い回しとかおかしいとこるいっぱいありそつですな…

59 なかまがふえました

「ミア、終わったらちよつと来てくれるー?」

お昼の食堂も終わって、食器を洗っているときにマリーさんの声が食堂の方から聞こえた。

「はいー、ここ片付けたらすぐ行きますねー。」

あたしもおつきな声で返事をして、洗い物を続ける。

今日はクルトさんがお昼の後、急ぎの用事で市場に行っちゃったから、食堂の方はマリーさんが、洗い物はあたしが担当することになった。

ちよつと時間はかかったけど、洗い物完了!

マリーさんが呼んでたから、食堂に行かなくちゃ。

食堂に入ると、マリーさんはお掃除してる

そしてもう1人、テーブルについてる人がいた。

「ミアちゃん、こんにちは。」

「ユーリさんだー。いらつしゃいです。」

「あ、ミア、ごめん、お茶お願いしていいかしら?」

「はい、すぐ淹れてきますね。」

厨房に戻って、お茶の準備。

ポットに茶葉とお湯を注いで、カップとストレーナーを一緒に持っていく。

食堂に戻ったときには、マリーさんもテーブルについて、お話して

た。
テーブルで3つのカップにお茶を注いで差し出す。
そしてあたしも席に着いたんだけど…
何かお話があるのかな？

「それで、何とかかなりそうなの？」

「はい、昨日も同じとこで見た人がいるそうなので、明日また行ってみようかなって。」

マリーさんとユーリさんが話してるけど…どこに行くんだろ？
って思ってたら、ユーリさんがあたしの方を向いた。

「実はね、昨日冒険者ギルドに行ったじゃない？」

あのとこ調べた植物の魔物のことだけど、依頼主に直接お話を伺いに行ったの。」

「ほえ…」

ユーリさんの聞いてきたところによると、依頼主の魔法士ギルドに所属する人が、植物を動かす魔法の研究をしたみたいんだけど、何か条件がおかしかったのか、魔法が変にはたらいちゃって、できた植物が、動物みたいになって逃げ出しちゃったってということだった。

「それで、とくに害はないみたいなんだけど、原因の解明になるかもしれないし、みんなを驚かせちゃだめだろうってことで、冒険者ギルドに依頼を出したっていうことみたいなの。」

「そうなんだ…」

魔法って失敗することもあるんだね…」

「そうね…ミアちゃんが使ってた癒しの魔法みたいにすぐ効果があるものは、失敗することはほとんどないみたいだけど、長い時間を

かけてかける魔法とか、いろんな触媒を使うときなんかは、失敗することもあるみたいだけど…

あたしもそういう魔法は知らないから、よくわからないんだ。」

あたしも、まだまだ知らないことだらけだもんね…

今度アリサさんかゼル先生に聞いてみよっかな？

「っと、ちょっと逸れちゃったね。

この間あたしが見た魔物も、そのとき逃げ出したものに間違いなさそうなんだけど、今朝もう一度、冒険者ギルドに行ったときに、昨日もあたしが見た場所と同じようなところで、その魔物を見た冒険者がいたって聞いて、もしかして捕まえられないかなって思ってたね。」

「ユーリさん、捕まえに行くの…？

危なくないの？」

フェリックスさんたちも言ってたけど、他の冒険者さんたちも、悪魔が出たと言ってたし…

ちょっと心配かも…

って思ってたんだけど、ユーリさんがテーブルの上に何か出したんだ。

「…あれ、これってギルドの身分証^{カード}？」

「うん、何だか自分でやってみたくなくなっちゃって。」

実は今まで、冒険者ギルドでもっと怖いところになって思ったんだけど、ミアちゃんと一緒に行って、割と信頼できそうかなって登録しないと依頼を受けられないからね。

それで、うちのお店に来てくれる知り合いの冒険者で手が空いてる人が、一緒に行ってくれるから、大丈夫よ。」

ユーリさんの言葉を聞いて、マリーさんが苦笑してる。

「やっぱり、冒険者の一般へのイメージって偏ってそうね!。」

「あはは! マリーさんとか、個人的にお付き合いのある人たちはみんないい人ばかりなんですけどね。」

それで、さっそく明日、行ってみようかっていうことになって。「なるほどね。」

急みたいだけど、準備はしっかりしておくこと。

あとは、いくら注意してもしすぎるってことはないから、簡単そうだとか、気を抜かないようにね。」

「はい、ありがとうございます。」

それじゃ、ちよつと準備もあるし、ミアちゃんにも冒険者仲間になったって報告できたから、今日はこれで帰りますね。」

そっか、ユーリさんわざわざ来てくれたのって、そのためだったんだ。

もしかしたらいつか一緒にお仕事することもあるのかな?

何て考えながら、玄関までユーリさんを見送りに行く。

「お茶、ごちそうさま。ありがとね。」

「気をつけて行ってきてください!。」

「うん、また報告に来るね。」

それじゃ。」

あたしも手を振って、ユーリさんを送りだした。

うまく捕まるといいな!。」

捕まったら見せてもらえるかな?

60 マーケット

今日は久しぶりに大きな商隊が来たみたいで、広場が大きなマーケットみたいになってるみたい。

普段、宿に必要なものを買い出しに行く市場は、広場から少し入ったところにあるんだけど、商隊が来たときは、市場に露店が並ぶのがいつもの形になってる。

それでも今回は、普段の商隊より、規模がすごく大きいみたいで、お泊まりのお客様たちも、お昼前にはみんな出て行っちゃった。

そんなわけで、今日はお昼の食堂がとってもお客様の少ない日になっちゃった。

厨房の片付けは少なかったからすぐ終わっちゃったし、食堂の掃除をしているマリーさんのお手伝いに行ったんだけど、こっちも使わなかったテーブルとかあったから、あつという間に終わっちゃった。

ということで、いつもより早めに休憩に入って、ゆっくりお茶の時間。

そこで、クルトさんがこんな提案してくれた。

「せっかくだし、マーケットを見にいつてみるかい？」

夜はお泊まりのお客様も戻ってくるだろうから、いつもの時間には仕込みに入らないといけないけど、時間は十分あるよ。」

いつもよりおっきな商隊ってことだから、何か珍しいものとか見られるかもしれないよね。

見たことない果物とか…

「ミア、嬉しそうね。」

「お口、緩んでるわよ?」

「へあっ?!はわわ…」

マリーさんに言われた通り、あたしの口は開いてたのだ…
うう、恥ずかしい…

「それで、どうする?」

「あたし、行ってみたいです。」

あたしの答えに、クルトさんはうんうんとつなずいてる。
でも、マリーさんは少し考えてるみたい。

「んー、ちょっとわたしは留守番してるわ。

2人で行ってきたらどうかしら?」

「ふえ?マリーさん行かないの?」

「ごめんね。」

でもせっかくだから、楽しんできてね。」

ふみゆ…ちょっと残念。

とゆことで、クルトさんとお出かけすることだ。

一度部屋に戻って準備して、すぐに出かけることになった。

「いってきまーす。」

「いってらっしやい。」

「それじゃ、すまないけど留守中頼んだよ。」

マリーさんに見送られて、広場に向かって出発。

大通りまで出ると、確かにいつもよりも人が多いような気がする。
気のせいかもしれないけど…

「うわぁ…お店いっぱいだ…」

人もいつぱいだ…」

広場につくと、お祭りのときくらいに露店がたくさん出てたから、びっくりしたんだけど、クルトさんはあたしを見てあははって笑ってる。

広場いっぱい露店があつて、人もたくさんだから、はぐれないようにクルトさんの左腕につかまって歩くことにした。

ほんとにいろんなものが出てるんだね。

街ではあんまり見ることのない、海でとれるお魚の干物や塩漬けを並べてるお店では、クルトさんもいろいろ見てて、いくつか買った。

他にも香辛料や、貝でつくったアクセサリ、きれいな石とか…

あ、知ってる人発見！

「ラルフさーん、こんにちはー。」

「あ、ミアちゃん、クルトさんもこんにちは。」

「こんにちは、ラルフくんは何かお目当てのものが？」

「はい、これだけの規模ならって思ったんですけど、ありましたね。」

そういつて指差した先にはいろんな武器と一緒に四角い塊が並んでる…金属の塊？
いろんな色があるんだ…

「質のいいインゴットなんて、普段は並ぶことなんてないですからね。」

そういつてるラルフさんは、もう並んでる金属の塊に集中してた。
すごい一生懸命に見てるし、邪魔しちゃうだめだねってことであ

さつしてお別れした。

その先でも、いろんな薬を売ってるところや、いろんな油を売ってるところや、革細工を置いてるお店なんかもあった。

「ほんとにいろいろ売ってるね。」

「あつ！果物屋さんだー。」

「ミアはほんとに果物が好きだね。」

「野菜も置いているみたいだね。」

クルトさんもそういいながら、やっぱり食材は気になるみたいで、2人でいろいろの物色してみる。

普段見ることのないような、変わった果物もたくさんあったから、何か買ってみようかな？

黄色くて細長い実がたくさんつながってるのとか、オレンジ色の卵みたいな形のやつとか、こい緑色で卵みたいな形だけど、表面がちよつとでこぼこしたのとか…まだ熟してないのかな？

「いらつしゃい、こんなのあんまり見たことないみたいだね？」

「はい、果物好きだけど、どれもみたことないです。」

「この緑色のつて、まだ食べれないんじゃない？」

「ああ、これはね、この色でもう食べれるんだよ。」

中に大きな種があつてね。

種に沿ってナイフで切つてあげればきれいに2つに分けられるか

ら。

「ふーん。でも緑色だと甘くなさそう…」

「そうだよ、これは甘くない果物なんだ。」

甘くない果物なんかあるんだ…

それって、おいしくなさそうなんだけど…

つて思つてたら、おじさんが笑つて黄色くて細長いのを進めてくれ

た。

「こっちは甘いし、皮も手で剥くことだってできるから、お勧めだよ。」

「それだといくらですか？」

「1本なら銀貨1枚だな。」

うにゆ… ちょっと高いかも…

珍しい果物っぽいから高いのかなあ…

迷ってたらいつの間にかクルトさんが後ろに立ってた。

「まあ、こういうものは運んでくるだけでも大変だからね。」

その小さな房でまとまってるのを買うなら少し負からないかい？」

「まとめてもらえるならこっちもありがたいんで、6本だけど、4枚ってところでどうですかい？」

「じゃ、それでいただこうかな。」

結局、クルトさんが買ってくれたんだけど… いいのかな？

クルトさんはさっき買ったお魚を持ってたから、果物はあたしが持つことになったんだけど、じっと見てるあたしに気づいたクルトさんは、見上げてるあたしの頭をポンポンと叩いて笑った。

「私も食べてみたかったし、マリーにもお土産になるからいいんだよ。」

さ、とりあえず今日はここまでにしよう。

明日か、もしかしたら明後日くらいまではこのマーケットは続くだろうからね。」

そう、気がつけばお日様がちょっと傾いてきてた。

ちよっと急ぎめで戻った方がいいかもしれないかな？

夜の食堂の準備もしないといけないもんね。

それにしても、この果物も楽しみだよね！

60 マーケット（後書き）

いろいろ出しちゃいました。

商隊は暖かい海辺の方から来たということだ。

61 おいしいおみやげ

今日はマーケットの2日目。

休憩時間に行ってみようかなって思ってたんだけど、ユーリさんが来てくれたから、お茶会に変更になったんだ。

「これ、おみやげね。」

「わ、おつきい…」

ユーリさんが差し出したのは、緑色で黒いしましまになってるおつきくて丸いもの。

あれ、どこかで聞いたことなかったっけ？

「ユーリ…これが動いてたってことは…ないわよね？」

「え…あー、違いますよ。」

これは依頼者からのお礼ですから。

動いてた方はちゃんと引き渡してきましたよ。」

…そっか、そういえばユーリさんが見たっていう魔物が緑色で黒いしましまだったっけ。

それでマリーさん心配したんだね。

でも、これが動いてるとか、ちょっとかわいいかも？

「ま、せっかくだしいただこうか。」

クルトさんはちゃっかり包丁を用意してるし。

こんな大きなもの、どうやって切るんだろって思ったんだけど、クルトさんが包丁の刃を差し込んで、そのままぐるーっと1周させたら、きれいに半分になった。

「わー、ほんとに中は赤いんだ…」

何か不思議…外と中がこんなに違うんだー。」

「そう言われてみればおもしろいね。」

さあ、食べやすい大きさまで切ってしまうから、覗きこむのは一旦終わりだよ。」

そういうとクルトさんは、どんどんと切っていく。気がつけば三角形がたくさんできてる。

「たくさんできちゃったね…」

「そうだね、でも意外と食べられるんだよ。」

それじゃ、いただこうか。」

切り終わった三角形をてっぺんからかじってみると、じゅわっと果汁がしみだして口いっぱい広がった。

でも、結構あっさりした甘みで、どんどん食べれそう？

「はうっ…何かガリッてした…」

「種は取るか出すかしないとだめよ。」

うー…見える種は取ったのに、中にあったのかな…

ちよつとずつ、気をつけて食べなきゃ…

って思ってたんだけど、みんな食べるの早い…

食べてから、あとで種を出してる…のかな？

っていうかクルトさん、種だしてくない？

いろいろ気になったけど、結局みんな口数少なく食べ続けてる。

「んー、さすがにもう入らないわ。」

「そうですねー。」

マリーさんとユーリさんがそう言って食べるのを止めてしまって、ゆっくり食べてたあたしも、クルトさんも、後に続いてしまった。まだ残ってるけど…

「残りもリキュールにつけて、あとで食べられるようにしておくよ。ユーリちゃんも持って帰ったらどうかかな？」

「え、いいんですか？」

「それじゃ少しだけお願いします。」

ユーリさんの返事に笑顔で答えて、クルトさんは残った果物を持って厨房に向かった。

あたしも一緒に行って布巾を取ってくる。

結構テーブルの上が水浸しみたになっちゃったんだよね。

布巾をしばって戻ってきたら、マリーさんとユーリさんが、散らばってた種を集めてくれた。

テーブルを布巾でふき上げて、種を包んで厨房に持っていく。種は裏に捨てちゃっていいよね。

もしかして生えてきたりするかな？

ちよっとおもしろそうだから、そうしてみよっ。

「ミア、ユーリちゃんが持って帰れるように、ちよっと深めの器出してくれるかな？」

「はい。」

ふたのあるやつ？」

「ああ、それがいいね。」

布巾を洗って干してたら、クルトさんも作業終了したみたい。器を持っていくと、そこにさっきの果物を小さく切ったのをいくつ

も入れて、上からたまつてた汁をかけていく。

「それじゃ持っていこうか。」

「うん。」

「そっちは？」

「これはあとでうちでもいただこうと思ってね。」

ユーリさん用の他に、まだ残ってる果物が結構あつたけど、夜にまた食べれそうだね。

それにしても、おなかたばたばになっちゃった。

たくさんお茶飲んだときみたい。

食堂に戻ったら、ユーリさんが昨日のことをお話してた。

「ボアの子どもも、この果物みたいに縞模様があるんだけど、何となく似てるかなって思って、前に見たところに網を張って待ってたらね、きつちりそこを通ってきたのよ。」

「へー…」

「それであつさり捕まっちゃって、あたしたちも驚いてたんだけど、ほつとしてたらまた同じのがでてきたのよ。」

「1匹じゃなかったんだ？」

「いっぱいいたら…食べきれな…じゃなくて…大変そうだよね。」

「そうなのよ。」

結局、全部で4匹捕まえたんだけど、連れて帰るのが大変だったわー。

網が、予備も合わせて2個しか持って行ってなかったから、2匹は力のある人で抱えて帰ることになったんだけど、足をばたばたさせて抵抗してたわ。」

ユーリさんが身振りもつけて説明するから、あたしもマリーさんもクルトさんもおもしろくって思わず笑っちゃった。

「街に連れて帰ってきたときの周りの反応もおもしろかったけどね。みんな目を丸くして固まってるんだもん。」

うん…何も知らずにそんなの見たらびっくりするんだろね…
でも、無事に帰ってきてよかった。

って言ったら、ユーリさん、「そういえば他に何も出なかったわね…」「って、思い出したようにいってたけど…」

あ、そろそろ夜の食堂の準備しなきゃいけないね。

今日はマーケットいけなかったけど、楽しかったからし、おいしかったし、こんなのもいいよね

61 おいしいおみやげ（後書き）

ポーンとしてる間に100000PV越えてました！
ほんとにいつもありがとございます！

62 雨の日の過ごし方

マーケットも3日目って思ってたんだけど、今日はもう開かないみたい。

昨日でだいたい商品が売れちゃってるのが1つの理由で、もう1つは…

「しかしよく降るわねー。」

「こんなに降るのも久しぶりだね。」

「夜中からずっとだもんね。」

お昼も終わって、マリーさんとぼーっと窓の外を見てる。

今日はズーッと雨が降ってるんだ。

しかも、結構強い雨。

この雨のせいかな、今日のお昼はお客様がとっても少なかったの。

お泊まりのお客様も今日は出歩かずに宿にいるから、そのお客様たちくらいで、他はほとんど来なかったんだよね。

「やれやれ、こんなに降るなんてね。」

「とりあえずお茶にしようか。」

「あら、今日はちよっと贅沢ね。」

「シナモンだなんて。」

クルトさんが持ってきたお茶をカップに注いでくれた。

ちよっと甘くて不思議な香りがしてて、とってもおいしそう。

でも、香辛料って高いから、普段のお茶とかに使うことはないんだけど、今日は特別ってことだね。

クルトさんが淹れてくれたお茶には、もうミルクが入ってるみたいだった。

「あれ？もうミルクも入ってるの？」

「お茶と一緒にシナモンを入れて沸かして、そのあとミルクを入れて温めたからね。」

甘さは自分で調節したらいいから。」

こうしてしばらく、ちょっとぜいたくなお茶会を楽しんでただけ
ど、雨は一向にやむ気配がない。

どうしようかな…何ができるかな？

料理の練習は…ちょっとこないだ怖かったし…

お掃除も割とちゃんとしたもんね…

あ、魔法の練習かな…？

慣れると口に出して唱えなくてもいいって言ってたもんね。

これなら1人でもできるし。」

「この後、あたし、部屋に戻ってもいい？」

「ん？別にかまわないよ。」

夜の準備はいつもくらの時間に始めるつもりだから、そのとき
また降りて来てくれるかな？」

「はい。」

「ごちそうさまでした。」

先にカップだけ片付けようと思ったんだけど、クルトさんがまとめ
てやってくれるってことだったから、お願いして部屋に戻ることに
した。

2階の廊下を歩いてると、部屋の中から話声が聞えたりする。
お客様たちも、やることなく大変かもしれないね。

部屋について、扉の鍵を開けて入って、明かりをつける。

ベッドでいいかなって思ってたなら、何だか窓がカリカリ音がする…

もしかして…って思っつて、ちよつとだけすき間を開けてのぞいてみたら、黒い塊が。

「うあ…ちよつと早く入りなよ…」
「こゃ…」

ネコくんが通れるくらいのすき間を開けて呼んだら、返事して入つてきてくれた。

少し開けてただけなのに、床がちよつとぬれちゃつてる。

やっぱり雨が強い。

だいぶぬれて、ネコくんいつもよりしぼんでるみたい。

布でくるんでふいてあげた後、膝の上で毛布をかけてあげたら、そのまま丸くなつちやつた。

「もうだいじよぶかな？」
「にゃー。」

毛布の上からなでてあげると目をつむつたまま答えるネコくん顔だけが毛布から出ててかわいいなあ。

でもこのままじゃ、ちよつと練習できないし、ベッドで休んでてもらうことにして、抱き上げた。

ネコくんは嫌がるでもなく、おとなしくだっこされてくれたので、そのままベッドの真ん中に寝かしてあげる。

「さてつと、やってみよつかな。」

あたしが今、使えるのは4つ。

でも《^{ヒーリング}負傷治癒》は、ケガしてないしダメだよね。

それに、たぶん簡単なのから始めた方がいいような気がする。

つてことは、《^{ライト}光》から、かな？

「あ、発動体忘れてたや…」

ちゃんとペンダントをつけて、と。
意識を集中して、心の中で魔法語ルーンワードをなぞっていく。

「《光》！」

差し出した指先に、ほわっと明るい光の玉が現れた。

んー、できちゃったみたい。

心の中でなぞるのを、ぱっとできるようになれば、すぐに使えるようになるのかな？

光を消して、そのあと何回か試してみたら、何となくうまくできるようになってきた気がする。

この調子なら、他のもできるかな？

時間もまだ少しいけるみたいだから、ちょっと背伸びして、ホーリーライト《聖光

》の方を試してみることにした。

もしも、ほんともしもだけど、何か変なのに出たら、ぱっと使えないとだめだもんね。

…っていうか、時間かかってたらその間にやられちゃったりしたら怖いし。

「会うわけないんだけどね…うん。」

「…にゃ？」

「あれ、口に出てた…ごめんね、まだ寝てていいよー。」

んー…練習しよう。

えっと、何だっけ、これはちょっと長かったよね。

真白き光、清らかなるもの、世界に仇為す邪悪なるものを押しと

どめる力となれ だよね。

これ、魔法が増えると思いだせなくなりそう…

アリサさんもゼル先生も、本を持つてるのはそういうことなのかな…
あたしも今度つくった方がいいかもしれないし、アリサさんに相談
してみよう。

それはともかくとして…やってみよう。

また意識を集中させて、しっかりイメージを持って心の中でなぞっ
ていく。

「《聖光》！」

ネコくんがまぶしくないようにって思っで、ベッドと反対側に手を
かざしておいたんだけど、今度もちゃんと成功したみたい。

前にやったときと同じように、真っ白な光がふわっと広がった。

でも、ちよつと時間がかつちよつたかな？

これも慣れればぱつとできるようになるかな。

もうちよつと練習しようと思っただけど、そろそろ準備の時間も近そ
うだし、今日はここまでにしておこつと。

ネコくんはまだ丸まっでたからそのままにして部屋を出て鍵をかけ
ようと思っただけど、お仕事の途中で起きたらかわいそうだよね…
んー、ちよつとだけ部屋の扉開けておこつか。

もし降りて来ちゃつたら、そのとき何とかすればいい…よね？

それじゃ、準備がんばるぞつと。

63 雨上がりの朝

昨日の雨がウソみたいに今日は青空でとってもいい天気。

結局ネコくんは、あたしのお仕事中ずっと部屋にいたみたいで、戻ったら出迎えてくれた。

お腹すいてるかなって思って夜の残りをちょっと持ってきたんだけど、お水少し飲んだくらいであんまり食べなかったんだよね。

でも、元気だったからだいじょぶなのかな？

そのままあたしの部屋で一泊して、朝には窓をかりかりしてたから、開けてあげるところち向いて「にゃ。」と一声鳴いて、出て行っちゃった。

今日は朝の食堂も、常連さんが来てくれたりといつも通りのにぎわいを見せてる。

昨日来てなかったお客様も、声をかけて入ってきてくれて、何だかほっとするよね。

そんなこんなで朝の食堂も終わろうかかってときに、大通りの方が何だかにぎやかになってる。

「何かあったのかな？」

「たぶん、商隊が出発するのよ。」

食堂の掃除をしながら何気なくつぶやいた言葉に、マリーさんが答えてくれた。

商隊の人たちも大変だよね。お天気が悪いとお店出せなかったり、すぐに移動しなくちゃだめだったり。

でも、いろんなとこにいけるのはちょっと楽しいのかな？

片付けも一段落したから、次はどうしようかって思ったんだけど、

クルトさんは市場でいろいろ探してくると、マリーさんは冒険者ギルドに顔を出したといってことだったので、お留守番することになった。

この時間だと、特に忙しいこともないから、あたしだけでもだいじよぶなはず。

ただ待つてるだけじゃつまんないし、魔法の練習とかしてみようかなって思ってたなら、玄関の扉がノックされた。

「はい？」

「マリーさん、いますか？」

「あ、ラルフさんこんにちは。」

マリーさんは今、冒険者ギルドに行ってます。」

「ああ、ミアちゃん、こんにちは。」

そうか…どうしようかな。」

あら、急用なのかな？

あたしが聞いてわかることならいいんだけど…

「どんなご用ですか？」

「ん？ああ、うちの店でマリーさんから注文受けてただけで、それについて相談をね…」

「ラルフさんのところで…うー、それはあたしじゃわかんないですね…」

しよぼんってなったら、ラルフさんは笑って「しょうがないよ。」って言うてくれた。

一応、お昼の準備までには戻ってくると思うけどっていうことを伝えたら、また来てくれるっていうことで、ラルフさんは一旦帰ることにしたんだけど、そのときまた玄関がノックされた。

「ただいまー、って何でラルフがいるんだよ？」

「おわ、リック?!」

開いた扉から入ってきたのはフェリックスさんたちだった。

後ろにアリサさんもエリカさんもレックスさんもいる。

とりあえず入ってもらうことにしたんだけど、フェリックスさんがラルフさんを引きとめて、ちょっとお話があるみたい。

「それじゃ、奥のテーブル使ってください。

たぶん、もう誰も来ないと思うけど…一旦厨房に行きますので、誰か来たら教えてください。」

そう言うと、みなさんうなずいてくれたので、一旦厨房に戻る。

お茶くらいならあたしでも何とかなるはず。

って思ったんだけど、よく考えたら火がないんだ。

クルトさんが出るときにたぶん消しちゃってるよね。

しよがないから、お水にしよ…

いつもクルトさんが、ご飯のときにそえてる、果物が入ったお水。

この黄色い果物、そのまま食べると酸っぱいけど、ちょっとお水にしぼってあげるとさわやかになるんだよね。

5つ用意して、トレーに乗せていざ食堂へ。

「あれ、マリーさんお帰りなさい。

帰ってきたの気付かなかったよー。」

「こっちから声かけてみたんだけど、届かなかったみたいね。」

いつの間にか帰ってきてきたマリーさんがテーブルについてるんだけど、人数は5人のまま…ラルフさんがいなくなってる？

「あれ、ラルフさんは？」

「ラルフなら、マリーさんに相談することが終わったから、帰ったよ。」

フェリックスさんの説明に納得。

そういえばその用事でできてたんだもんね。

つと、お水配らなきゃ。

せつかく5つあるし、マリーさんにも。

「ミア、気がきくわね。

さすがうちの看板娘だね。」

「はう…」

マリーさんがほめてくれたんだけど、何だかちょっと照れくさい…
トレーを置きに厨房に戻ろうとしたんだけど、その前にマリーさんからお仕事が。

「リックたち、またうちにしばらくいるみたいだから、部屋の準備だけお願いするわね。」

あ、トレーはわたしがやっておくから。」

「はい。」

それじゃすぐ準備してきますね。」

トレーをテーブルに置いて、2階へ向かう。

これでまた、アリサさんに魔法習えるかもしれないって思うと、ちよっと楽しみで、お部屋の用意も快調に進んじゃうね。

それに、またいろんなお話聞けるかもしれないし、何だかとってもうきうきしてくる。

あ、でもうきうきしすぎてお仕事失敗しないようにだけは注意しなきゃね！

64 発表って何だろう？

昨日はあのあと、宿のお手伝いをずっとしてた。

アリサさんたち、帰ってきてすぐだったから、疲れてたら悪いなって思っ、授業はお願いしなかったんだ。

今日は時間があればお願いしてみようかな。

朝の食堂が終わって片付けしてたら、何だか表が騒がしい。

思わずマリーさんと顔を見合わせちゃう。

「何かあったのかしら？」

「ちょっと見てきます。」

扉を開けると、近所の人たちが集まって何か話してた。

こんな道の真ん中でどうしたんだろ？って思ってたなら、近所のおばさんが声をかけてくれた。

「ミアちゃん、聞いた？」

「えと、何…でしょうか？」

「広場で何か発表があるそうよ。」

お昼前ってことだけど…」

「ほへ…マリーさんたちにも伝えますね。」

「でも宿も忙しいだろうし、うちの人が行ってくれるから、あとで連絡回すわね。」

「あ、ありがとーございます。」

おばさんたちにお辞儀して宿に引っ込んだんだけど、よくわかんないや。

とりあえずマリーさんに報告したら、ちょっと考えて、とりあえず

クルトさんとも相談することになった。

厨房で同じことをクルトさんにも説明したら、クルトさんもちょっと考えてるみたい。

お昼の準備の時間っばいもんね…

「とりあえず、マリー行ってきたくれるかい？」

厨房は私がないとだめだし、食堂の方は、ミアに入ってもらおう。

そんなに長くはならないだろうし、逆にいえばお客様も広場に集まってるだろうから、急ぎ目に戻ってくれば、十分間に合うさ。」

「そうね、それじゃミア、わたしが行っている間、ここよろしくね。」

「は、はい…」

急に大役が回ってきちゃった…

ドキドキして固まってるあたしに、2人ともそんなに心配しなくていいからって言うってくれるんだけど…

でもがんばらなきゃね。

マリーさんが出発するまでに、食堂の準備を前倒しで進めておいたおかげで、いつもより早めに終わっちゃった。

あとは厨房でお手伝いしてたんだけど、そろそろマリーさんが出かけることになったので、あたしは食堂に戻ってカウンターに入った。

「それじゃミア、あとはよろしくね。」

「はい、いつてらっしゃいですー。」

マリーさんが出かけていった後、1人でカウンターの中になると、何か不思議な気分、っていうかやっぱり落ち着かないよー。

でもよく考えたら、お泊まりのお客様もだいたいお出かけしてるし、

やっぱりこの時間に来る人は少ないよね、きっと。

しばらくは誰も来ることなく、じーっと待ってるだけの時間が過ぎていった。

もう、広場での発表は始まったっぽいよね。

っていうかもしかしたらそろそろ終わってるのかな？

なんてことを考えてたら、玄関の扉が開いて、常連さんがいらっしやった。

「あ、いらっしやませー。」

「おろ、今日はミアちゃんが仕切ってるのかい？」

「えと、マリーさんが広場での発表を聞きに行ってる、その間だけです。」

「広場での発表…：そういや、朝何かそんな話聞いたなあ…：」

そう言いながら、いつものカウンターの席に座る常連さん。まずは注文の確認だね。

「いつものでいいですか？」

「ん？ああ、頼むよ。」

「はい、少々お待ちください。」

ぱつと厨房に走って、クルトさんにランチプレート1つをお願いします。

そのまま走って戻って、またカウンターに。

んー…マリーさんとクルトさん、2人でやってたときってすっごく忙しかったんじゃないかな…

「それで、広場での発表ってどんなものなんだい？」

「はひ？えと…：あたしも知らないんです…：」

発表があるっていうことだけ聞いただけなので…」

「そうかい、それじゃマリーさんが帰ってきたら聞いてみるとするよ。」

「はい、おねがいします。」

常連さんとそんな話をしてたら、また扉が開く音が聞こえた。

今日はお客様の出足が早いかも…って思ったんだけど、入ってきたのはマリーさんだった。

「おかえりなさいー。」

「ただいま。」

あら、今日はちょっと早めにいらっしやっただんですね。」

カウンターに来てた常連さんに気付いて、マリーさんが声をかける。常連さんも軽く手を挙げて返事してる。

やっぱりマリーさんがいないと、だよね。

マリーさんがそのままカウンターに入ってくれたので、あたしは厨房の方へ、お料理を取りに行くことにした。きつとそろそろできるころだよね。

「あ、ミア、ちょうどよかった。」

今持っついていこうかと思っただところだよ。」

「じゃ、持っついていきますね。」

マリーさんも今帰ってきました。」

「了解、それじゃいつもと同じように頼むよ。」

「はい。」

お料理を持って食堂に戻ると、お客様も少し増えてきた。

マリーさんが注文は聞いてくれたので、厨房に伝えるに戻る。

さあ、忙しくなりそう。

ここからが本番だね！

それにしても、広場での発表って何だったのかな？

お客様に聞かれてもだいたいじよぶなように、あとで教えてもらわなきゃ。

65 マリーさんの報告

お昼の食堂の時間が終わったけど、フェリックスさんたちは朝に出かけて行ったつきり、戻ってきてない。

アリサさんに授業してもらえるかって思ってたんだけど、忙しいみたいだね。

ちょうどいいからって、お茶しながらマリーさんが聞いてきた発表の内容を、クルトさんと一緒に聞くことになった。

「まあ、あんまりいい報告ができるわけじゃないんだけどね。

王都から国中への通達だったわ。」

「国中ってまた大事じゃないか。」

「ええ、この間から、頻繁に悪魔が見られるようになったとか、リックたちも言ってたでしょ。」

それとも関係があるみたいなんだけど、クオート公国の小さな村が襲われたらしいのよ。」

「なるほど、たしかに急を要するわけだ。

クオート…というと、グラキナの向こうだね。」

ここからはだいぶ遠いが、そこまで活動的になっているとは…」

2人の会話を聞いてたけど、大変なことになってるっぽいのはあたしでもすぐわかる。

普通は遺跡とかに隠れて住んでいるようなやつらが、そんなことするんだもん…」

「それで、最近のいろいろなことも含めて、もしかしたら、魔界につながる道の封印が弱まってるんじゃないかっていうのが、王都の見解らしいんだけど…」

「私たちには何か指示があったのかい？」

「そこまで嚴重なものではなかったけど、できるだけ不必要に外に出ないとか、外に出るときはできる限り集団でとか、街道を外れないようにとか、そういったことをもっと注意してほしいってことだったわ。」

「まあ、今までとそこまで大きく変わるわけでもないようだね。」

物流とかに影響は出そうだけど…」

「あ、でも各地の衛兵とかは派遣数を増やすみたいよ。」

ふむ、とうなずくクルトさん。

クルトさんの言い方だと、そんなに心配しなくていいのかな…？

あ、でも…

「街はだいじよぶかな？…襲われたりしない？」

「うん、ここは大きな街だし、そう簡単には手出しができないさ。」

悪魔は魔獣なんかと違って悪知恵が働くからね。

無謀なことはいらないと思うよ。」

「そうね、それにここは襲われた村からずっと遠くだし、衛兵もいるし、冒険者もたくさんいるから安心よ。」

そっか…でも小さな村とかの人は大変なことになりそう…

それにしても封印が弱まってるってとんでもないことなんじゃないのかな…？

「封印って、昔の人たちがしたんだよね？」

「そうだよ。」

私たちのご先祖様たちが協力することで、魔界へ続く道と言われている洞窟に封印したんだ。」

「洞窟ってどこにあるの？」

「一応この大陸にあるんだけど、詳しい場所が分かってないんだよ。」

「

答えてくれたクルトさんもちょっと困った顔してるけど、詳しい場所が分かんないって、どゆことだろ？
秘密なのかな？

「それっぽいって言われている洞窟がいくつかあるのよ。
自然にできてるようなものもあれば、何かの遺跡のようなものもあるし…」

でも、魔界へつながっているって確かめられたことはないの。」「
「ふえ…どしてですか？」

「奥までたどり着いた人がいない、ってことみたいね。
だから、どの洞窟がそうなのかもわからないし、もしかしたら全部違ってるかもしれないわ。」「

何だか変な話…
それなのに封印がどうなってるかとかわかるのかな…」

そんな話をしたら、フェリックスさんたちが帰ってきた。
この時間ってことはお昼は外で済ませてきたのかな。
あら、何だかお疲れ気味っぽいけど…」

「ただいま。」

「堅苦しい話は疲れるわ…」

「みんなお帰り。」

「お昼は済んでるわよね。」

「お茶淹れるから座ってて。」

マリーさんが答えたときには、あたしとクルトさんがもう動き出した。
てた。

振り返ったマリーさんがちょっと驚いて、そのあと笑って、よろし

くって言ってくれた。

クルトさんにポットの方を任せて、あたしはカップの用意をする。つていつても棚から出すだけなんだけどね。

ポットの方が準備できたから、クルトさんと一緒に食堂に戻って、みなさんにお茶を注いで回った。

全部そろったところで、あたしとクルトさんも座ってお話の続き、かな？

「ギルドの方にも、国からの依頼って形でいろいろ来てたよ。

魔界への道も進めるって話が出てるみたいだし。」

「へえ…本格的に進めるのね。

大丈夫かしら…」

フェリックスさんたちは冒険者ギルドに行つてたみたいだった。

何だか結構有名みたいなんだよね…ご指名の依頼とかもあったし。そんな人たちに魔法を習つたりしてるあたしは、ぜいたくなことしてるのかな…

「そーいえばー、マリーさんはー、わたしたちと組む前にー、行ったことあるですよねー？」

「ええ、それはそのとき見つけたものだし。」

マリーさんが指さしたのは、フェリックスさんの剣だった。

つていうか、マリーさん、フェリックスさんたちと冒険者やってたんだ…

じーっとマリーさん見てたら、気づいてくれた。

「ミア…どうしたの？」

「マリーさんって、フェリックスさんたちと冒険者してたの？」

「あら、言っていなかったっけ？」

「聞いてなかったと思う…」

あ…『フリマ・ホワイト白の舞姫』って言う名前だけは…」

って言ったたら、マリーさん、顔が赤くなってガクっとなっちゃった…
そいえば前もこんなことがあった気がする…

はうー…失敗しちゃったかも…

「ミア、今度ちゃんと教えてあげるから、その二つ名だけは言わな
いで…」

はひい…ごめんなさい…

66 マリーさんの昔話 その1

「さてと、何から話したらいいかしらね…」

「じゃあ、どうして冒険者になったの？」

「そこから?!」

「まあいいわ…」

今度つて言ったマリーさんの昔のことをどうしても聞きたくて、夜にお願ひしたら、寝るまでのちよつとだけならいいつて言ってくれたんだ。

だから、お茶しながらって思つてただけど、クルトさんはお茶だけ用意して、クスクス笑いながらごゆつくり、つて部屋に戻つちやつた。

「わたしはこの出身じゃなくて、マルハウつていう港町で育つたの。」

父は商隊を率いる商人で、うちにいる方が少ないような人だったわ。

だから、いつも母と、兄が2人いたから、3人で暮らしてるような感じだったの。」

「お兄ちゃんがいたんだ。」

「ええ、でもいつも母は1人で家を切り盛りしてたから忙しくて、2人の兄がよくわたしの面倒を見てくれたから、影響を受けたのかしら？」

「割とおてんばだったのよね。」

ふーん…マリーさんのお兄ちゃんとか、どんな人なんだろう？

似てるのかな? だったらかっこいいのかな…

お母さんも、きっと美人さんだよな。

「それで、兄たちも大きくなって、家族で集まって、この先どうしていかって言う話をしたことがあったの。」

父は、兄たちのどちらかに仕事を継いでほしいって思ってたんだけど、上の兄は自分にはあまり向いてないって言って、辞退したの。それで、下の兄が仕事を継ぐことになったんだけど、上の兄もずっと家にいるわけにはいかないからって、自分で自信のあった剣の腕前を生かして、冒険者になるって言ったのよ。」

「マリーさんじゃなくて、お兄さんが冒険者になったんだ…」

「先に言いだしたのは兄だったわ。」

父はそんな不安定なものはだめだって言ってたんだけど、兄は家を出ても冒険者になるって言ってきかなかったの。

それで、結局いろいろあったんだけど、最終的に父も認めてくれたのよ。」

冒険者って危険とかもあるから、お父さんも心配したのかな…

「ところがそれで終わりじゃなかったのよね…」

しばらくして、父はあたしに縁談を進めてきたの。」

「えんだん？」

「そうね…簡単にいえば、結婚相手を勝手に探してきたのよ。」

「ふえ…」

「急にそんなこと言われてもピンとこなかったし、わたしは断ろうとしたんだけど、父もなかなか退いてくれなくて…」

「もしかして、それってクルトさん？」

「え？あー全然違う人よ…知らない人。」

むー、そっか…

もしマリーさんがその人と結婚してたら、あたしがここに来ることもなかったんだよね…

何か変な感じだけど、ほっとした気がする…

「それで結局、父とケンカみたいになっちゃって、半分家出みたいな感じになっちゃったのよ。」

「ええっ?! 大変…!」

「全然当てもなかったものだから、どうしようかって思ったんだけど、冒険者になってた上の兄が、面倒見てくれることになって、そのとき冒険者になったの。」

「そなんだ…冒険者になるぞーってなったんじゃないかな。」「きっかけとしては変なものだったわね…」

でも、結局後から聞いたら、父が心配して兄に面倒見てやってほしいって頼んでくれてたみたいなんだけどね。」

「ケンカしててもお父さん、心配だったんだね…」

やっぱりマリーさんのお父さんなんだね…

「さて、これでいいかしら?」

「ふえ、もう終わり?」

「そのあとどうなったの?」

「ミア、そろそろねむくなったりしないの?」

「まだだいじょぶだから…もうちょっとだけ!」

ほんとにまだ眠くないし、続きが知りたかったから、一生懸命お願いした。

マリーさん、ちょっと考えたけど、しょうがないわねって続きを話してくれたの。

「しばらくは兄と一緒にいた冒険者のグループで、いろいろ依頼をこなしたりしてたわ。」

もちろんいつもうまくいったわけじゃないけど、それなりにっ

て感じかしら？」

「依頼ってどんなのがあったの？」

「街の近くに住みついた魔獣をやっつけるなんてのもあれば、旅をする人たちの護衛なんかもしたわ。」

「学者さんに頼まれて遺跡に行ったりもしたわね。」

「いろんなことするんだね。」

「そうね、冒険者って割と何でもやさんだから。」

「それであるとき、魔界につながる道っていわれてる洞窟の1つに挑戦してみることになったのよ。」

「ええっ?!」

「どうしてそんなとこ行くことになったの？」

「だって、魔界って悪魔がいるんだよね…」

「そんな怖いとこ行っただってしょうがないの？」

「わたしたちが行ったのは遺跡のようなところだったんだけど、宝物なんかも見つかることがあるから、挑戦する冒険者も結構いるのよ。」

「そーなんだ…」

「悪魔とかもいたの？」

「そうね、何体も出会ったし、戦ったわね。」

「やっぱりすっごい怖いとこだ…」

「宝物があるって言ってもそんなの…危なすぎると思う…」

「でも、結局わたしたちも途中で引き返すことになったの。」

「広すぎて手に負えなかったのよね。」

「ただ、そのときに1つの剣を手に入れたの。」

「剣…もしかして、フェリックスさんが持ってる剣かな？」

お昼にそんな風に言ってたよね。

「っと、その顔はわかったってことよね。

そう、今リックが持っている剣がそのとき見つけたもの。

ミアは実際に見たことはないわよね。」

「うん、フェリックさんが戦ってるそこなんて見たことないから。」

「あの剣の刀身は、真っ白なの。

きつといいものに違いないってことで、魔法士ギルドで鑑定をしてもらったんだけど、そのときに名前がわかったのよね。」

剣に名前がついてるんだ？

作った人がつけたのかな…剣が大好きな人…？

「古い時代に作られたものの中には、今では再現できないようなものもあるんだけどね、隠された名前がつけてあったりするのよ。

魔法をかけたたりして調べるみたいね。」

「ほへ…」

インセント・ホワイト

「それは「無垢なる白」という名前の剣だったんだけど、いろいろ相談した結果、わたしが持てばいいってみんなが言ってくれて、わたしが使うことになったのよ。

さ、それじゃ今日はここまでね…もう遅いしそろそろ休まないといけないわ。」

「え…」

「また今度続きは話してあげるから、今日はちゃんと休みなさい。でないと、約束してあげないわよ？」

「あう…ちゃんと休むから、今度またお願いします…」

うー、早く次のお話の機会をつくってもらわなきゃ！

67 その本の名前は

「さてー、それでは始めましょうかー。」

今日は久しぶりにアリサさんが時間があるからって授業してくれることになった。

あ、でもちよつと聞きたいこともあったんだ。

「よろしくお願いします！」

アリサさん、ちよつと聞きたいことがあるんだけどいいですか？

「いいですよー、何でもしようかー？」

「アリサさん、魔法のこと書いてる本を持っていますよね。」

「はいー、これのことですなー。」

そう言っただけでアリサさんが取り出したのは、ぶあつい本。

この間も見せてもらったものだね。

「その本ってアリサさんがつくったんですか？」

「えっとー、本の中身のことですよー…？」

…うん、さすがに本自体をつくったとは思ってないですよ？

でも、実はアリサさんつくれそうな気もしてきた…

「本っていうかー、忘れないようにー、記録するものでー、魔法書っていうんですー。」

魔法をー、たくさん使うようになるー、忘れてしまったりするかもしれないのでー。」

これはー、ギルドで売ってるんですよー。」

そう言つて、魔法書を閉じてあたしに差し出してくれた。
表紙もごつとくてもがんにしようそう。
あれ…開けられない…？

「アリサさん、これ?!」

「はいー、開かなかつたでしょー？」

魔法書に署名をした人がー、認めればー、ちゃんと開くことがー、
できるんですー。」

「ふえ…」

アリサさんはあたしから一旦魔法書を受け取つて、軽く念じて、ま
たあたしに渡してくれた。

もう一度ゆつくり開いてみると、今度は簡単に開いちゃった。

「うわぁ…すごい!」

「魔法書の持ち主よりー、強い魔力を持っていればー、無理やり開
くこともできるんですけどねー。」

昔の魔法士ソイサラーやー、魔導師ウイザードたちのー、魔法書が見つかるー、忘れ
られていた魔法がー、載つていたりもするみたいですよー。

開くのがー、大変みたいですけどねー。」

ふーん…やっぱり魔法も忘れられたりするんだね。

ところで…魔導師って何だろ？

魔法士と違うみたいだけど…

「アリサさん、魔導師って何ですか？

魔法士は聞いたことあるけど…」

「魔導師はー、魔法士なんですー。」

「はひ?」

「2色以上のー、素質を持っている人がー、魔法士になれるのです

がー、他と合わせ持つことのできないー、白色とー、黒色のー、素質以外のー、赤色ー、青色ー、緑色ー、黄色のー、4色の素質をー、持っている人がー、魔導師と呼ばれていてー、たくさんの魔法をー、扱うことができるんですー。」

4色も使えるってなると、魔法の数もすごいことになりそうだね…そんな人の魔法書なら、たくさん魔法が載ってるよね、きっと。

「まあー、4色も素質がある人なんてー、やっぱり少ないですからねー。」

「そっかー…魔導師ってすごいんだね。」

「例えばー、見つかった魔法書もー、最後のページまでー、魔法がー、ぎっしり書かれていたそうですよー。」

そう言っつて、アリサさんはまた自分の魔法書を開いて見せてくれる。最初の方からずーっといろいろ書いてあるけど、真ん中くらいで何も書かれてないページが出てきた。

それでも、ぶあつい本だから、たくさん書いてあるんだと思うけど…

「わたしはー、白色だけなのでー、本が埋まることはー、ないと思いますー。」

「それでもたくさん書いてありますよね…」

あ、そうだった…本のこと聞いたのは、あたしも本をつくった方がいいのかなって思って、それでこんな質問になっちゃったんです。

「そうですねー…この本はー、ギルドに入るとー、もらえるんですがー…」

ミアちゃんはー、ギルドに入る予定がー、ないみたいなのでー、どうしましょうねー…」

あ、そつか…ちゃんと保護されてる本じゃないとダメなのかな…
とりあえず忘れないようにメモを取るくらいはしていけばいいかも
しれないよね。

「またー、何かいい方法をー、思いついたらー、お知らせしますね
ー。」

「はい、ありがとーございます。」

「それではー、少し時間が短くなってしまいましたかー、今日の授
業をー、始めましょうー。」

「よろしくお願ひします！」

今日はどんな魔法を教えてもらえるのかな？
って思ってたんだけど、今日はちょっと違ってた。

「今覚えている魔法にー、まずはしっかりー、慣れていきましょ
うー。」

「ふえ…。」

「慣れていくとー、その魔法をー、時間をかけずにー、使うことが
できますしー、その魔法を前提としたー、次の段階の魔法をー、使
いこなすときにー、必要になりますからー。」

そつか、ちゃんと基礎的なことができてないと、難しいことはでき
ないんだね。

じゃ、がんばって慣れるぞー。

「どんな風にしたらいいですか？」

「はいー、何度も使って慣れていくのがー、やっぱり一番早いです
ねー。」

「それ、前にちょっと自分で試してみました。」

「そうだったんですかー。」

ミアちゃんはー、結構鋭いですねー。

それではもうーっー、治癒魔法のようにー、使う機会が限られるものでもー、声に出してー、詠唱を繰り返すのはー、割と訓練になりますよー。」

そっか…《ヒーリング負傷治癒》って練習できないもんね…

今日はアリサさんに見てもらいながら、いろんな練習させてもらおうと

68 職業（クラス）選択の自由？

昨日の夜、部屋で冒険者ギルドの身分証カードを見ててちよつと考えてたんだけど、職業クラスってみんなどうやって決めてるんだろ？

あたしは白色魔法が使えるから治療師ヒーラーって言われたけど、ユーリさんはどんな職業で登録したのかな？

フェリックスさんたちのも実は知らないよね…
そう思うと、何だかとっても気になっちゃった。

それで今日、朝の食堂でご飯を食べてるフェリックスさんたちにちよつと聞いてみたんだよね。

他のお客様も少なかったし…だいじょぶだったよね？

「え、登録した職業？

俺は戦士ファイターだよ。

魔法の素質もなかったし、力には自信があったからな。」

「でも…力押しばかりじゃダメって…マリーさんに…よく言われてた。」

フェリックスさん、エリカさんに言われて、えーってなってる。
でも戦士っていうのは予想通りかも。

「じゃあ、エリカさんは？」

「私…？私は…野伏レンジャー…だよ。」

エルフだから…森とか自然の中で活動するのは…得意だったから。

「野伏は、野外での活動に長けているような人になるもんだからな。」

エルフで冒険者だと、多いよな。」

「うん…魔法士ギルドに入ってれば…魔法士ソーサラーでも…よかつただけ

ど…

森で…ある程度習ってきてたから…」

ふーん…エルフって森の中に村をつくったりしてるとどこかで聞いた気がする。

でも、結構自由に選べるっぽいのかな…？

「アリサさんは…治療師だよね？」

「そうですよー」。

白色魔法が使えますしー、ミアちゃんと一緒にですー。」

うん、もちろんそうだよね。

白色魔法が使える人で、治療師以外もいるのかな？

もしかしたらみなさん知ってるかも？

「白色魔法が使って、治療師じゃない人っているのかな？」

「どうなんでしょうー？」

わたしはー、知らないですねー。」

他の3人も首を横に振ってる…ってことはないのかな？

そいえば、レックスさんは何だろ…やっぱり戦士？

「レックスさんは何ですか？」

「自分は格闘士クラッブラーですよ。」

武器を使わずに戦ってるっす。」

何だかちょっと変わった感じなのかな？

でも、レックスさんもごっついから強いんだろな…

「ミアちゃん、詳しく知りたいならギルドで直接聞いてもいい

んじゃないか？」

「あ、そつか…今度行ったとき聞いてみます。」

「まあ、職業なんて、仲間組むときにどんなことが得意かって言う自分のアピールだから、あんまり変なもんはないだろうけどね。」

うん…そう言えばそつだよね。あんまり変な職業だと、誰も一緒に冒険したりしないよね…。

一番自信があるものにしてるのが普通だよね。

つと、あんまりお話ばかりしていると、お仕事おろそかになっちゃう。

「ユーリさん、こんにちはー。」

「あれ、ミアちゃん？いらっしやいませ。」

お茶、足りなくなっただ？」

「あ、今日はちよつと聞きたいことがあって来ただけなの。」

「ふーん、あ、時間ある？」

「うん、しばらくはいけるよ。」

休憩の時間に、ユーリさんとこに来てみたんだけど、あたしの返事を聞いてユーリさんはお茶を入れてきてくれるって、奥に行っちゃった。

聞きたいのって、ユーリさんの身分証の職業だけなのに…

でもユーリさん、すぐに戻ってきた。

もうお茶も持ってきてくれてる…早いよー。

「あ、実は自分で飲もうと思って、お店の準備しながらお湯も沸かしてたのよ。」

「そっか、忙しいときにごめんなさい。」

「ううん、大丈夫よ。」

それより聞きたいことって？」

「えっとね、この間ユーリさんも冒険者ギルドに登録したでしょ。」

そのとき職業ってどうしたのかなって気になっちゃって。」

あたしの質問に、ユーリさんはさつと身分証をだして見せてくれた。身分証の職業のそこには、ハーバリスト薬草士って書いてある。

「これって…？」

「うん、どうしたらいいかって相談したんだけど、治療士ヒーラーってダメなんだって。」

たぶん治療師とややこしいからだと思うんだけど。

それで、薬草を採集したり、使って治療する人たちを、まとめてそういう区分にしているみたい。」

「ふえ…そなんだ…」

「でも、もうちょっと武器を使ったりするのが得意なら、戦士でもいったのかもしれないわ。」

外に薬草採りに行ったりしてると言ったら、野伏とか狩人ハンターとか、弓が得意なら射手アーチャーでもいけますよ、なんて言われたし。」

ふーん…いろいろ聞けたけど…やっぱり自分が得意なものじゃない
とまいちよくわかんないかも…

これじゃギルドに聞きに行ってもしょうがないかな…

「そんなに職業に興味があるなら、ミアちゃんとか、冒険者の宿なんだから、お客さんに見せてもらえばいいんじゃない？」

「ふにゅ…そだね。」

「また聞けそうなら聞いてみることにするー。」

うん、ギルドに聞きに行ってもたぶんよくわからないことになりそ
うだもんね…

機会があったらお客様に聞いてみよつと。

68 職業(クラス)選択の自由?(後書き)

少し訂正しました

69 今日は何特別？

今日もいつも通り目が覚めて、いつも通りの朝が始まった。窓を少し開けると、さわやかな風が感じられる。んー、今日もいい天気になりそうだね。

服を着替えて下に降りると、ちょうどマリーさんも食堂に入ってきたところだった。

「おはようございますー！」

「おはよう、今日もバッチリみたいね。」

「バッチリです！」

「それじゃ、準備に取り掛かりましょ。」

「はい。」

布巾をしばらく厨房に入ると、クルトさんももう仕込みの真っ最中。

「おはようございますー！」

「ああ、おはよう。」

今日もミアは元気いっぱいだね。

しっかり頼むよ。」

「はい。」

返事しながら布巾をしばって、食堂に戻る。

テーブルとカウンターを布巾でふきあげれば、ここは準備完了だね。

「はい、じゃあとはわたしやっておくから、クルトの方を手伝ってきてね。」

残り少しをマリーさんに任せて、厨房に戻る。

クルトさんがあまり動かなくてすむように、お皿とかの準備を先にしちゃおうかな？

そう思つて棚に向かつて、いつものお皿を準備した。

「あ、ミア、今日はもう一つお皿を出してくれるかな。」

「もう一つ？」

「うん、その上の右側のところに片付けてあるやつにしようか。」

朝にこんなに食器並べることないのにどうしたんだろ？

今日は特別メニューかな？

「さて、そろそろお客様が降りてくるころだね。」

「こっちはいいから、食堂の様子を見てきてくれるかな？」

「はい。お客様が来たら、運ぶ方に回るね。」

そう言つて食堂に戻ったけど、今日はおお客様があんまり来てないみたい？

いつも常連さんがこのくらいには来てる人が何人かいるのに少ないよね…

「あ、ミア、順番にお願いね。」

「手が足りなくなつたらわたしも回るから。」

「はひ…？」

いつもならマリーさんが運ぶ方に回することはほとんどないのに、お客様が少なそうなのにどうしたんだろ…

とりあえず、厨房に戻つて順番に運んで行くこととしてびっくりした。いつものお皿に、いつもよりたくさん盛り付けてあつて、さらに別のちよつと小さいお皿にも…

「今日はちょっと運ぶのが大変だろうけど、頼むよ。」

「クルトさん、これって…?!」

「ん?…あ、そうか。」

ミアはもしかして日食のことを覚えてないのかい?」

日食…って、とりあえずそれ以外もだけど覚えてないよ…

むーってなってるあたしに、クルトさんはとりあえず運んできてっ
て。

うん、お客様を待たせちゃだめだよな。

食堂まで運んでいくと、お客様もだいぶ増えてて、いつもと同じ感
じになってた。

あ、そっか、今日のメニューだと、あたしだけじゃきつと運ぶの間
に合わない…

マリーさんが言ったのはこのことなんだね。

とにかく、できるところまではやらなきゃ!

結局、途中からマリーさんにも運ぶのを手伝ってもらって、何とか
配膳できた。

お客様も今日は少し遅い感じがするけど、みんなたくさんのご飯を
しっかり食べてる。

そして、いつもより少し時間がかかる感じで朝の食堂営業が終わり
になった。

「ふう、お疲れさま。」

わたしたちも早く食べてしまいませよ。」
「ああ、厨房の方に用意してあるよ。」

みんなで厨房に行くと、お客様に出したのと同じ料理、だから量もいつもと違ってすっごく多い。
食べられるかな…？

「今日はどうしてこんなにたくさんご飯あるの？」

「そうだ、日食のことがミアはわからないだったね。」

今日は昼間に太陽が隠れる日なんだ。」

「ええっ?!それって…!」

「心配することはないよ。毎年あることだから。」

でもでも、おひさまが隠れるって…

それに、このいっぱいのご飯との関係もわかんないし、って思ってたらマリーさんが説明してくれた。

「おひさまが隠れてるときはね、お仕事とかせずに、家でじっとしているのが習わしなのよ。」

だから、今日はお昼ご飯を誰もつくらないから、朝にたくさん食べるのよ。」

「そーなんだ…じゃ、ちゃんと食べないとだめなんだね。」

お昼がないって思うと、食べれそうな気がしてくる…
でも、家でじっとしてるとって退屈そう。

「日食のときは何もしちゃだめなの？」

「そうね…仕事はしないけど、それ以外に特に何かしちゃだめってことはないわ。」

もちろん緊急のときや、休んでられないような仕事する人もいる

わよ。

衛兵もそうよね。」

そっか…衛兵さんが休んでるときに何かあったら街は大変だもんね。それじゃ何でお仕事休むんだろ…？

「別に夜にお仕事する人もいるから、お日様隠れてもお仕事してもいいと思うのに。」

「なるほど、ミアの言うことはもつともだね。

だけど、これにはちよつと理由があつてね。

実は日食は神々の争いのときに始めて起つたと言われているんだ。

」

「ほへ…神さまがしたのかな？」

「そうかもしれないね。」

あるとき、昼間に力が強くなる光の神に対抗するために、闇の神が月に頼んで太陽を隠したんだそうだよ。

そうして昼間でも夜のように闇の力が強まるようにしたそうだ。」

「じゃあ、闇の神さまがどんどん強くなつちゃうの？」

「ところが、月はあまり長い間、太陽を隠していることができなかったみたいで、次第に太陽が見えるようになってしまったんだ。

そうすると今度は、日食の間、しっかりと力を蓄えた光の神が有利になつたって言われているんだよ。

その逸話から、闇の神の陣営に属した者たちにとっては、日食中はとても神聖なものとしてその一時を過ごし、光の神の陣営に属した者たちは、日食が明けるまで力を蓄えるという意味で、その一時を安らかに過ごすようになったということなんだよ。」

「ふーん…」

何だかすごいお話だよね…お月様動かしちゃうなんて。

とにかくゆっくり過ごしてればいいみたいだし、それまでにご飯食

ぐちゃわないとね。

「あら、ミア、あんまり急いで食べると…」

「うぐっ…」

「ほら、のどに詰まっちゃったじゃない。

はい、これゆっくり飲んで…」

マリーさんにお水をもらって、ほっと一息。

はー…急いでもちちゃんと落ち着いて食べないとダメだよね…

69 今日は特別？（後書き）

いつも読んでいただいております。

7月から初めて、2ヶ月ちょっと、昨日でユニークアクセスが2000を突破していました。本当にありがとうございます。

これからもマイペースなお話になると思いますが、お付き合いいただければ幸いです！

70 夜みたいな昼に来たのは

ご飯を食べて、片付けしてしまってから、お客様の部屋を全部回って、明かりの確認。

夜みたいに暗くなるみたいだから、ないと困るみたい。

マリーさんとクルトさんと3人でお泊まりされてる部屋を手分けして回ってく。

あたしも2つ回ったけど、どっちの部屋にもちゃんと明かりが灯ってた。

「さて、それじゃしばらく休むとしようか。

ミアはどうする？」

「んー…部屋でお休みとききます。」

「そうか、私もマリーも、下の部屋にいるから、もし何かあったら来てくれればいいからね。」

夜の食堂の準備の前にはまた明るくなるから、いつもくらいの時間にまた準備を頼むよ。」

マリーさんとクルトさんはそのまま、階段を降りて行ったから、あたしは廊下の一番奥の自分の部屋に戻ることにした。

窓を開けてみたけど、まだ全然暗くなってる。

でも、いつもより街は静かな気がする。

もう出歩いている人も少なそう。

それにしても、何したらいいのかな…

部屋でじっとしてるのもつまんないよね。

っていつてもあたしの部屋って、何にもない。

あ…本とかあったらよかったのかなー。

こないだ連れてってもらったミルファム教会は本がたくさんあったよね…

そんなことをぼーっと考えてたら、何となく外が暗くなってきたみたい。

窓から外を覗いてみると、空の下の方が夕方みたいで、上の方がぼんやり暗くなってきた。

「うわあ…何だか不思議な空…」

ずっと見てると、ほんとにゆっくりだけど、暗くなっていつてるみたい。

しばらくその不思議な景色を見てただけど、急に声をかけられてびっくりした。

「にゃー。」

「ひえっ…ってネコくん？」

ネコくんは屋根からぴょんと跳んで、窓から入ってきた。

そのままベッドの上で丸くなってる…

何だか自分の部屋みたい？

「ま、いつか。」

一人で何しようか困ってたところだし。」

窓を閉めて、《デユラブルライト持続光》の魔法を使う。

あたしの部屋は、魔法の練習も兼ねて、明かりは魔法でつけるようにしてるんだ。

小さな石に明かりを灯せば、暗くしたいときも箱の中じゃいたりすればいいから、使いやすんだよね。

「さつて、ネコくん…つて？」

魔法をかけた石をテーブルに置いて、ベッドの方を振り返ると、何かネコくん、寝てる…？

遊びにきてくれたんじゃないの？！

「勝手にきてくつろぐだけなんて、ちょっとずるいよー。」

ベッドの端に座ってネコくんに声をかけたら、耳だけがぴくぴく動いたけど、丸くなったまんまだし。

もー、しよーがないなー…

ネコくんと一緒に、ベッドにごろんと寝転んで、ネコくみをなでると、最初ちよつと顔をこつち向けたけど、すぐに目を細めてしまった。

たぶん飼い猫じゃないだろうけど…毛並つやつやささらさらだ…

もしかしてあたしのとこみたいに、いろいろ遊びに行ったりしてるのかな？

そうやって、ネコくんの毛並を楽しみながら、あたしも何だか眠くなってきてただけど、急にネコくんが動いたから目が覚めちゃった。

ネコくんは窓のとこまで歩いて行ってこつち向いてる。

「外に出るの？」

「にゃ。」

帰っちゃうんだ…残念。

窓を開けると、入ってきたときみたいにぴよんと跳ねて、器用に窓辺に着地した。

そのまま屋根の上にて、真上を見上げて、またあたしの方を向いた。

「にゃ。」

「ん？どうしたの？」

上を見たけど、空が真っ暗になってて…あ、星が見えてる！
ほんとにお日様隠れちゃったんだ。

「すごいねー！

星まで見えるなんて…」

「にゃっ！」

空に見とれてたら、ネコくんがまた鳴いた。

今度は器用に右手で手招きしてる。

屋根に出てこいってこと？

暗いし、ちょっと危ない気がするけど、ネコくんはじっとこっち見てるし…

そっか、明かりを持ってくればいいんだ。

「ちょっとだけ待ってね。

明かりを持ってくるから。」

「にゃにゃー。」

あれ、今度は首を横に振ってる…

何かネコくんとお話できてる…よね？

「明かりはだめなの？」

「じゃ、ちょっと目が慣れるまで待ってね。」

今まで部屋の中ちょっと明るかったから、急に暗いところは見えな
いんだよね。

光ってる石を箱の中に入れて、窓辺に戻ると、ネコくんはまだちゃ
んと屋根の上に来てくれた。

そのままちよつとだけ待つてると、暗いけどだんだんと屋根の様子
とかが見えてくる。

これならいけるかな？

窓枠に足をかけて、屋根の上にゆっくり降りる。

あんまり勢いよく降りたら音がして、マリーさんたちがびっくりし
ちやうもんね。

ネコくんのとこまで行って、しずかにしゃがみこむ。

「おまたせ。

次はどうしたらいいの？」

「にやっ。」

また上を見るネコくん。

そんなに変わらないと思うけど…

そう思つて見上げたあたしは、びっくりしちゃつて、そのままぺた
んと座っちゃつた。

「何あれ…ゆらゆらしてる…」

頭の上の方で見えたのは、白いもやつとしたものがあつて、その真
ん中にくつきりと黒い円盤みたいなもの。

部屋の中からだと見えないとこに、こんなものがあつたなんて…

「ネ、ネコくん…これ見せてくれようとしてたの…？」

「にやー。」

上を見ながら声をかけたけど、ネコくんは返事してくれた。
あれが隠されたお日様…だよきつと。

その神秘的な空を、あたしは屋根の上であおむけになって見てた。
どうしてかわからないけど、心が研ぎ澄まされていくような感じが
する…

「にゃ。」

また不意にネコくんが鳴いた。

よく見ると、しろいもやもやが、かたよってきてる気がする。
つて思った瞬間、黒い円盤の端っこ、もやもやが増えてきてたところ
が急に強く光った。

「ひゃう、まぶし…」

目がくらんで、光から目をそらして目をつむる。

何かちよつとちかちかするけど、だいじょぶだよね。

ゆっくり目を開けると、少しずつ光が増えてきてるみたい。
お日様、出てくるんだね。

「すごいねー、こんなの初めて見たよー。

ってあれ、ネコくん？」

周りを見てもネコくんはいないみたいだった。

どこ行っちゃったんだろ？

帰っちゃったのかな…

んー…まあ、お礼は次のときでもいいよね。

そういえば、夜の準備もあるんだっけ…

とりあえず落ちないように部屋に戻って、ちよつと休憩したら準備

に行こうかな。

だんだん明るくなってきた、さっきとは違うけど力がわいてくるみたいなのがする！

夜もきつと、お客様たちおなかペコペコでくるよね。

忙しくなりそうだし、しっかり準備しなきゃね！

71 お客様の秘密 その1

今日は初めて見るお客様が来た。

夜の食堂の準備をそろそろしようかなってくらいの時間に、5人組の冒険者さんたちが来たんだ。

そのうち2人はフードの付いたマントを着てる。

片っぱの人は、何かおっきなものを背負ってるのかな？

「いらっしやいませ、お泊まりですか？」

「ああ、できれば2部屋頼みたいんだが…」

「少し待っててくださいね。」

マリーさんが厨房の方に行ってたから、急いで呼びに行こうとしたんだけど、扉のところで戻ってくるマリーさんとぶつかりそうになっちゃった。

「きゃう、ごめんなさい！」

「大丈夫？わたしもよく見てなかったわ。」

「あら、お客様がいらっしやったから、呼びに来てくれたのね。」

「うん、お泊まりで2部屋使いたいです…」

「わかったわ、あとはわたしがやるから、ミアは部屋の準備の方を願ひね。」

「奥の2つ、隣り合わせのところね。」

そう言うとマリーさんはお客様の方に向かった。

あたしはそのまま2階に上がってお部屋の準備に。

「お待たせしました。」

それでは2部屋で用意させていただきますね。」

「ああ、それで…」

何かいろいろ相談してたみたいだけど、上にあがっちゃうとあんまり聞こえないんだよね。

とにかく2部屋だし、急いで準備しなきゃ。

準備が終わって階段を降りてくると、お客様たちはテーブルについてた。

やっぱりちょっと時間かかったかな…お待たせしちゃったみたいだね。

フードをかぶってた人たちも、フードを脱いでお茶してた。

「すみません、お待たせしました。」

「お部屋の準備できました。」

「ミア、お客様のご案内もお願いするわ。」

「はい、それではお部屋に案内いたします。」

「こちらへどうぞ。」

お客様をお部屋まで案内してくと、男の人3人と女の人2人に分かれて部屋に入っていく。

鍵を渡して戻ろうとしたら、マントを着てるお姉さんに声をかけられた。

「あの…夜に少し宿を出たいのですが…よろしいですか？」

「夜っていうと…ご飯のときとかでしょうか？」

「いえ、それよりも遅くに、ですが…」

ん…前にフェリックスさんたちと流れ星見に行ったときは普通にお出かけしたけど…

ちゃんと聞いてきた方がいいよね。

「すみません、ちょっと聞いてきます。

待っていてください。」

「はい、それではお願いします。」

お辞儀して下に向かってるときに、何かちょっと気になった。
んー、何だろ？

とにかく、急いでマリーさんに聞いてみようと思って、階段の途中からマリーさんと呼んでみた。

「マリーさん！」

「ごくろうさま、あとは食堂の準備をしましょう。」

「あ、えっとね、お客様が夜に、ご飯の後でお外に出られるかって……」

「ん？あ…そうね、出るときと戻ったときに声をかけてくれればい
いって伝えておいて。」

「はい。」

そのままお客様のお部屋に向かう。

コンコン、とノックすると、さっきのお姉さんが出てきた。

「さっきのことですが、お出かけするときに、戻ってこられたとき
に声をかけていただければだいじょうぶです。」

「そう、ありがとう。」

「それではごゆっくりです。」

そういってお辞儀して戻ろうとしたら、お姉さんがまた声をかけてきた。

「あの…わたしのこと…あ、いえ、ごめんなさい。」

「はひ…？」

「ごめんなさい、お仕事の邪魔をしてしまって。」

「それでは少し休ませていただきますね。」

お姉さんはそういつて扉を閉めちゃった。

どうしたんだろ…？

そいえばまた何か気になったような…

結局何が気になったのかはよくわかんないまま、食堂の準備も終わって、そのまま夜の食堂の営業が始まった。

今日もいつも通りのにぎわいだっただけど、ちょっと落ち着いたところでマリーさんがあたしを呼んだ。

「ちょっと運ぶの手伝ってくれる？」

「ふえ？」

「今日いらっしやっただお泊まりのお客様、お部屋でお食事したいってことだから、上まで運ばなきゃいけないのよ。」

「そなんだ、でも食堂はだいじょぶなの？」

「あたし1人でも運べるよ？」

「まあ、2人でさっで行きましょう。」

マリーさんが3人分、あたしが2人分を持って2階に上がる。

あたしはさっきのお姉さんがいる部屋に持っていくことになった。コンコン、とノックすると返事が返ってきた。

「お食事をお持ちしました。」

「はい、すぐ開けるからちょっと待ってね。」

かちゃかちゃっと鍵を開ける音が聞こえて、扉が開いた。

出てきてくれたのはさっきのお姉さんじゃなく、もう1人のショー
トカットのお姉さんだった。

「ありがとう、わざわざ悪いねー。」

それじゃテーブルまで運んでくれる？」

「はい、あ、扉ありがとうございます。」

お姉さんが扉を押さえてくれてるから、そのまま中に入れてもらっ
てテーブルにトレーを置く。

横に座ってたさっきのお姉さんも、ありがとうございますってくれた。

「それでは、お食事がすみましたら廊下の方にトレーを出しておい
てくださいね。」

「ありがとうね。」

キミ、名前は何て言うの？」

「ふえ……えと、ミアです。」

「そっか、ミアちゃんは普通に接してくれるんだね。」

「はひ？」

「じゃ、食べたらトレー出しておくからよろしくね。」

「あ、はい、ごゆっくりです。」

何だかよくわかんないけど、下もあんまり空けてられないし、2人
にお辞儀して部屋を出た。

マリーさんはもう降りちゃったかな？

食堂が終わるまではまだ時間がありそうだし、早く戻らなきゃね！

72 お客様の秘密 その2

夜の食堂も落ち着いて、お客様もだいぶ減ってきたところでマリィさんに上の食器を片づけてきてほしいってお願いされた。

2階に上がると、廊下にトレーが出してある。

丁寧にお皿とトレーを種類ごとに重ねてあったから、回収も楽にできるって思ったんだけど、奥の部屋の方はまだトレーが出てなかった。

あとでもう一度見にこようかなって思ったそのとき、扉が開いて、ショートカットのお姉さんがトレーを持って出てきてくれた。

「あ、ミアちゃん、ちょうどよかった。

これ、お願いね。

あと、ちよつといいかな?」

「はひ?」

「まだ仕事もあるんだと思うけど、仕事が終わったらうちの部屋に寄ってくれないかな?」

お願いしたいことがあるんだけど。」

「お願い、ですか?」

何だろ?あとでじゃないとダメなのかな?

お姉さん、両手を合わせてお願いしてるし、お茶の時間にいけばいいじゃぶかな。

「うん、無理なら無理で構わないから、あとでお願い。」

「んー、わかりました。

片付けとかもあるからまだしばらくかかりますが、それでもいいですか?」

「あ、ありがとう!」

それじゃ待ってるね。」

お姉さんからトレーを受け取って、厨房に運ぶ。食堂を通ったときに結構お客様がいなくなって片付けるものが増えるのも見えたし、急いで回収に戻らなきゃね。

何度か往復しているうちに、お客様はみんないなくなってた。

あとは食堂と厨房のお片付けだけだから、あたしはいつも通り水場で洗い物。

途中からマリーさんも手伝いに入ってくれた。

「そだった…マリーさん、さっき上のお皿とか片付けるときに、お客様に片付け終わってからお願いしたいことがって言われたんだけど…」

「あら、何かしら？」

「わかんない、終わったら部屋に寄ってほしいって言われたの。」

「ふーん…それじゃあとで行ってみるわね。」

「あ…もしかしたらあたしが呼ばれたのかも…」

マリーさんはちょっと考えて、とりあえず2人で行ってみようかってことになった。

どうなるかわからないから、今日は終わった後にお茶の時間はとらないことに…

ちゃんと誰に用事なのか確認しとけばよかったね…

とにかく無事片付けも終わって、マリーさんとお客様のお部屋を訪ねることになった。

「でも、終わってからでも来てほしいってどういう用事なのかな？」

「何かしらね。」

まあ、考えるよりお客様に聞いてみましょうか。」

マリーさんが扉をノックすると、中から返事が聞こえた。
何かドキドキしてきた…

「はいはい、今開けるね。」

この声は、ショートカットのお姉さんの方かな？

扉が開いて、出てきたのはやっぱりショートカットのお姉さんの方だった。

マリーさんを見てちょっとびくりしたみたいだけど…

「あー、すみません、女将さんにも来てもらっちゃって。

ミアちゃんにお願いできればって思ってたんだけど…

ちょっと入ってもらっていいですか？」

あれ、やっぱりあたしに用事だったのかな…

マリーさんと顔を見合せて、とりあえず中に入れてもらった。

「女将さんにはうちのリーダーが話したと思うんですけど、レイアは…あ、この子は、鱗妖なんですよ。」

りんよう…？ショートカットのお姉さんは、もう1人のお姉さん…
レイアさん？を指差してそう言った。

マリーさんの方を見たんだけど、あとでねって言われちゃった。

そのとき、ショートカットのお姉さんがぼんと手を叩いた。

「そっか、ミアちゃん知らなかったんだね。

どつりであんまり反応なかったんだ。」

「ほへ？」

「レイアは、妖魔族の中でも、水に親しい種族の鱗妖なの。

だから、耳のところにヒレがあるでしょ。」

そう言われて、レイアさんの耳のそこをよく見てみると、確かに魚のヒレみたいになってる。

初めて見たけど、何だかきれいな飾りみたい…

「うん、やっぱりミアちゃんなら大丈夫そうだよ。」

「そうですね。」

「えっと…話が見えてこないんだけど…」

「あ、すみません、実はレイアが水浴びしたいんだけど、昼間は他の人の目が気になるから…」

それで、夜ならって思ったんだけど、ミアちゃんに案内してもらえないかなって思って。」

そっか、だからあたしに終わってから来てほしいって言ってたんだ。マリーさんは、しばらく考えてたけど、兄さんの紹介だし…ってつぶやいて、あたしに聞いてくれた。

「せっかくのご指名だし、ミアが行ってきてくれる？」

「うん、行きたいな。」

「それじゃ、暗いし気をつけて行くのよ。」

お2人の準備ができたなら、食堂に来てちょうだい。」

「はい。」

そう言うとマリーさんは下に降りて行った。

2人とも、マリーさんにお礼を言って、準備に取り掛かっている。

あたしは廊下で待つことにしたんだけど、すぐに2人は出てきてくれた。

「ごめんね、お待たせ。」

「よろしくお願ひしますね。」

あまりにつれしそうに言われたから、あたしも何だかつれしくなっちゃた。

「こちらこそよろしくです。

レイアさんと…」

「あ、ごめん、まだ名前言ってなかったよね。

わたしはエステルだよ。」

そういつて手を握られてぶんぶんとちよつとおっきな握手。

とりあえずあんまり遅くなると困るからみんなで食堂に降りてった。

「準備できたみたいね。

ミア、鍵を渡しておくから、帰ったらわたしたちの部屋に返しにきてね。」

「はい、いつてきまーす。」

マリーさんのお見送りで、エステルさんとレイアさんと3人で夜の街中へ出発〜！

73 お客様の秘密 その3

もうだいぶ遅い時間だけど、大通りまで出ると、まだ明るいお店があつたりもする。

昼間に比べるとだいぶ人は少ないけど、人通りもあるんだよね。

そういえば、エステルさんは普通の服だけどレイアさんは来たときと同じマントを着てフードをかぶってきてる。

もしかして、今までも妖魔族の人が来てたこともあつたのかな…？

「そういえば、ミアちゃんって妖魔族に会うのは初めて？」

「え、あ、はい…たぶん。」

ちよつど考えてたところにエステルさんの質問が来てちよつとびっくり。

「たぶんって？」

「だって、フードとかかぶってたらかんないし、レイアさんがフードをぬいでたあとも、あたし気付かなかつたから…」

「なるほどね…じゃあ、レイア見てどう思う？」

「ふえ？…えーっと、きれいです！」

そのとき、なぜか2人の足が止まっちゃって、次の瞬間、レイアさんがわたわたして、エステルさんが笑いだした…あれ？何か変なこと言つたかな…

「ほらほら、レイア、落ち着いて…ぷぷぷ。

それにしても、ミアちゃんサイコーだわ。」

「は、はひ…ありがとーございます…？」

何だかほめられたのかな…？

エスリアさんが、わたたしてらるレイアさんをつしるからぎゅってして、動きを止めたら、ようやくレイアさんも落ち着いたみたい。人通りが減ってるからか、あんまりあたたしたたちのことを気にする人もいなかっただけで、また川に向かって歩きだした。

「こっちの大陸だとね、やっぱり妖魔族は少ないから目立つのよ。特に内陸に行けばいくほどね。」

人によってはあからさまに訝しげな視線をぶつけてくる人とかもいるから、レイアも結構気にしちゃってて。

そこにミアちゃんあの感想だったから、ね。

ほんつとにレイアってばかわいいわー。」

「取り乱してしまってますみません…。」

そっか…大陸ごとに分かれちゃったから、あんまり見ることなかっただね。

でも、普通に仲良くできそうなのに、何でそんな風にみる人がいるのかな…

よくわかんないや。

「宿とかもだいぶ選んで泊まったりしてるんだけどね。」

あ、でも白枝亭はアンフィットにいたときにお世話になった人が進めてくれたんだよね。」

「そーだったんですか。」

それから、いろいろお話しながら3人で広場を越えて進んでった。

エステルさんたちはアンフィット大陸でグループを組んでただけで、こっちのリュシア大陸の遺跡についての文献について調べるために渡ってきたんだって。

何だかすっごい大冒険だよな。

そうこうしているうちに、川辺についた。
このあたりは割と浅くて、暑いときなんかは街の人たちもたくさん水浴びに来るところだけど、さすがにこんなに夜遅くには誰もいない。

「川下のほうに行けば、もうちょっと深いところもあるんです。そっちの方がいいですか？」

「ううん、ここで十分です。」

「ありがとうございます。」

レイアさんがそう言ったので、エステルさんもここにしようって。あたしもエステルさんも川辺で待ってるだけなんだけど、レイアさんはマントを脱いで、服の裾を持ち上げて川に入ろうとしている。両手がふさがってるから、明かりが持てないね…

「あー、レイアさん、明かりいりますか？」

「少しは見えるので大丈夫ですよ。」

「それに今は持てませんから。」

そういうとレイアさんはそのまま川に入っていく。川の底って、ぐらぐらしてる石とかあるから、踏んじゃうとこけそうになったりするんだよね。なんて考えてたら、エステルさんが耳打ちしてきた。

「妖族はね、闇に属する種族だから、暗いところでも割と周りが見えてるんだよ。」

「ほへー…すごいですねー。」

「うん、でもきつと今からもっとびっくりするかもよ?」

エステルさんが指さす先では、レイアさんが両手を組んで何か祈ってるような感じだった。

そして、次の瞬間、あたしは自分の目がおかしくなったのかと思った。

レイアさんの足が…長いお魚の尻尾みたいになっちゃったから！でも、何だかとってもきれいで、思わず見とれちゃっ…

「びっくりしたでしょ？」

鱗妖は2つの姿を持つてるの。

今の姿だと、水の中でもスイスイなの。

この姿が本来の姿みたいだから、足のまま長い間いると疲れるんだって。

だから、水がたくさんあるところだと水浴びしたくてしょうがないんだよ。」

「そっか…大変なんですね…」

「うん、でもレイアにもゆっくりしてもらいたいからね。」

レイアさんはしばらく川の流れに身をゆだねてたけど、また両手を組んで祈ってる。

そしたら、今度はまた足に戻っちゃった。

川から上がってきたレイアさんに、エステルさんが持ってきてた布を渡した。

レイアさんは受け取った布で足をふいてく。

「すみません、ずいぶんお待たせしてしまいました。」

「わたしはいいよー。」

「っていうか、誘わなかったらひどいんだからね。」

「わかっていますよ、ありがとうございます、エステル。」

「ミアちゃんもありがとうございます。」

「あたしも誘ってもらえてうれしかったです。」

ありがとうございます！」

いろんなお話も聞けたし、レイアさんのきれいな姿も見せてもらえたからよかったなって思ったただけだったんだけど、レイアさんはまた、わたし始めた…

そしてまたエステルさんがぎゅってして落ち着かせてる。

何だか最初はレイアさんの方がお姉さんっぽいつて思ったけど、エステルさんの方がお姉さんなのかもしれないね。

目的も無事達成したから、あたしたちは宿に戻ることにした。

帰りにエステルさんが、明日、もう1人の妖魔族の方も紹介してくれるって約束してくれた。

その人は翼族っていつて、その名前の通り翼を持ってるんだって。

仲良くしてもらえるかな？してもらえるといいな

74 旅立ちの日

レイアさんたちは、今朝の朝食もお部屋でとることになってる。

ちょっと遅くていいからってことで、食堂の方が落ち着いてから運ぶことにさせてもらったんだ。

ちなみに今日も食堂はいつも通りにぎわってる。

だいぶ落ち着いてきたところで、マリーさんと一緒にお食事を持って2階に上がる。

今回もマリーさんが3つ持ってくれているので、あたしは自動的にレイアさんとエステルさんのお部屋に行くことになった。扉をノックするとエステルさんの元気な返事が返ってきた。

「はいはい、今開けるねー。」

少し下がって待つてると、勢いよく扉が開いて、エステルさんが顔をのぞかせた。

あたしの持つてるトレーを見てすっごくにこにこしてる。

「やった、ごっはん」

「ミアちゃんありがとね」

「中まで持っていきますね。」

エステルさん、何か鼻歌歌って踊りながらついてくる…

レイアさん、ため息ついてるけど…

とにかくテーブルにトレーを置いた。

「ん〜、おっいしっそ〜」

「エステル、落ち着きなさい…」

「だつて、お腹すいたんだも〜ん。」

こんなにうれしそうだと、何だかあたしまでうれしくなっちゃうね。ご飯の邪魔しちゃうだめだし、下もまだお仕事あるからお辞儀して戻るうとしたんだけど、エステルさんが話しかけてきた。

「にあひゃん、あひよれ…」

「エステル、ご飯食べながらしゃべらないで…」

「もごもぐ…んぐ…ふひい…」

あ、えとねミアちゃんあとでうちの部屋寄ってね。

昨日行ってた子紹介するから。」

うん、それはわかったけど…エステルさん…ちょっとすごかったよ…食堂に降りるとお客様も減ってて、そのままあたしも片付けに回る。食器を水場に運んで食堂に戻って、っていうのを何度か繰り返しているうちに、お客様はみんないなくなってた。

「だいたい終わったわね。」

ミア、上もたぶん食事終わってるだろうし、食器回収頼んでいい

？」

「はい、いつてきます。」

階段を上がって見てみると、今朝はエステルさんとレイアさんの方だけトレーが出てる。

ついでに、扉も開きっぱなしだった。

トレーを回収しようとしたら、中からエステルさんの声か。

「あ、きたきた。」

ミアちゃんちょっとだけいい？

エミーを紹介してあげる。」

「ふえ？」

「昨日言ってた翼妖の子だよ。」

「もう、エステルってば…ミアちゃんまだ仕事ですよ？」

それに、エメットはその呼ばれ方あんまり好きじゃないのに…」

レイアさんの声をよそに、エステルさんは隣の部屋の扉をノックしてる。

いいのかな…

「わたしだよー、開ーけーてー。」

「エステル、周りに迷惑だからもうちょっと声を押さえて。」

いつの間にかレイアさんも隣に立ってた。

ちよつと間があつて、扉が小さく開いて、昨日見たリーダーの男の人が顔を出した。

「ねね、エミー呼んでよ。」

「…宿の人もいるじゃないか、それにその呼び方はやめてやれ。」

「ミアちゃんなら大丈夫よ。」

昨日もレイアの水浴びに付き合ってもらってるし。」

男の人はあたしの方を見て、ほお…って言って、エステルさんをじつと見てる。

そして、扉を大きく開けて中を指差してる。

「ありがとう、ミアちゃんおいで。」

「は、はひ…」

中に入ると、テーブルにはきつちりと重ねられたトレーがあつて、その周りで荷物をまとめてるお兄さんと、背中に大きな翼のあるお

兄さん、っていうか男の子？がいた。
エステルさんが、とてとてと走って行って、翼の生えた男の子を
連れてくる。

「何すんだよ！」

「もぐ、エミーったら怒らないの。」

「こっちこっち、ミアちゃんにごあいさつしてね。」

「エミーって呼ぶなって言ってるだろ……」

「で、ミアちゃんって何だよ。」

「うー……だいじょぶかな……」

「何だか忙しそうだし……」

「この宿の子だよ。」

「レイアもお世話になったんだ。」

「ミアちゃん、この子がエミーだよ。」

「あの……えと……はう……」

「お、おはよーございます！」

……

……何でこんなに静かになるんだろ……

……って思ったら、目の前の翼のある男の子……エメット……くん？がちよ
つと笑った。

それにつられてなのかな、周りのみんなも何となく笑ってる。
ちよつと恥ずかしい……

「あんだ、おもしろいやつだな。」

「ちよつと、エミーってばミアちゃんに失礼だよ。」

「はい、謝って。」

「何でだよ、おもしろいからおもしろいって言っただけじゃん。」

あと、俺はエメットだ、女みたいな呼び方するな！
「そこまでだ。」

後ろからリーダーさんの（さっきよりもちよっと低い…）声が聞こえた瞬間、エステルさんもエメットくんも、ピタッと動きを止めた。リーダーさんがゆっくりと2人に近づいてく。

「ようし、ちゃんと学習してるな？」

「はい……」

「レイアがこれだけ普通にいられるってことは、このお嬢さんではきた人だってことは間違いない。

が…仮にも仕事中のやつを捕まえてこの騒動はないわな。」

エステルさんとエメットくんが、そろって首を縦にぶんぶん振ってる。

リーダーさんは2人の後ろに回って、2人の首をつかんでぐっと押し下げた。

「お嬢さん、すまねえな、うちのやつらが迷惑かけてしまって。

まあ、エステルもこっちに来てからあんまりレイアやエメットにふつうに接してもらえることがなかったから嬉しかったんだと思うが、こいつはよく暴走するもんでな…」

「いえ、そんな…あたしも昨日誘ってもらって嬉しかったですから…」

「エメットもこんな口の利き方してるが、割と繊細なやつでな。

とにかく、仕事の邪魔しちまって申し訳ない。

お前らもちゃんと謝れ。」

「「ごめんなさい……」」

リーダーさんすい…

思わずあたしも固まっちゃったんだけど、レイアさんが肩をポンポンと叩いてくれて、ちよつとほつとしたら、まだ頭下げてる2人が目に入った。

もうリーダーさんは首を放してただけだ…

「えと、えとぜんぜんだいじょぶですから。」

「うありがと〜みあちゃ〜ん！」

エステルさんがちよつと涙目になってた…

エメットくんも荷物整理に戻ってる。

そして、リーダーさんはそろえたトレーを渡してくれた。

「これを取りにきてたんだろ？出すのが遅れてしまったな。」

「あ、ありがとーございます。」

それじゃ持っていけますね。」

「ああ。」

そうだ、エステルもレイアも準備急げよ。」

みなさんにお辞儀をして、とりあえずトレーを引き上げる。

ずいぶん長居しちゃった気がする…急がなきゃ。

水場の片付けが終わって、食堂でちよつと休んでたら、エステルさんたちが降りてきた。

レイアさんとエメットくんは来たときと同じフード付きのマントを着てる。

きつと出発するんだね。

カウンターにいるマリーさんに、あいさつしてるみたい。

ぼーっと座ってたなら、そのままみなさん、あたしのところまで来てくれたから、あわてて立ってお辞儀する。

「世話になったな。」

「帰りにまた寄らせてもらうことにしたから、そのときはいつらともどもまたよろしく頼む。」

「ふえ…は、はひ、ありがとうーございますー！」

エステルさんとレイアさんが前に出てきて握手してくれた。

「ミアちゃん、ちょっといつてくるね。」

「また帰りにね。」

「ありがとうーございました。」

「帰りに寄ったときも、ぜひ夜の散歩に付き合ってくださいね。」

「マリーさんもカウンターから出てきてたので、玄関でみなさんをお見送りする。」

みなさんの冒険がうまくいくように願いを込めて。

「ありがとうーございました！」

「いってらっしゃいですー！」

75 ギルドにおつかい

今日は冒険者ギルドにお使いにきてる。

白枝亭^{うっち}に依頼の申し込みがたまってきたから、まとめて登録に来たんだ。

今日はそんなに混んでないし、せっかくだからリゼルさんのところに並ぼつと。

「次の方どうぞー」。

あ、ミアさん、こんにちは。」

「こんにちはー」。

今日も白枝亭に集まった依頼の方をお願いしに来たんです。」

「はい、それではお預かりしますね。」

少し待ってもらえればすぐ行けると思います。」

「よろしくですー」。

リゼルさんが奥に依頼状を持って行ってくれた。

奥に審査してくれる人がいるみたいなんだよね。

ちよつと時間がかかりそうだから、どんな依頼があるか見てみようかな。

あたしもできるものあつたりして…

うーん、いろいろあるね。

森に住み着いた魔獣を倒してくださいとか、王都までの護衛とか…

あ、これって…逃げだした植物を探しています。球形、緑に黒のし

ま模様…ってあれだよ…まだいたんだ…

こっちは…金属素材を探しています…ラルフさん…？

そんな感じでいろいろ見てたら後ろから急に声をかけられた。

「あれ、ミアちゃん？」

もしかして依頼受けるの？」

「はひ…？あ、ユーリさん。」

違うよー、うちにきてた依頼をお願いしにきたの。」

「そっか、結構じっくり見てるから、てっきり依頼探しかなくて。」

受けれるのがあるかなって思ったのは思ったけど、ね…

あれ、ユーリさんは、依頼探しに来たのかな？

「ユーリさんは、もしかして依頼探し？」

「うん、前に植物の魔物の依頼受けたでしょ。」

「さっきそこに出てたよ。」

また逃げ出したのかな…」

「そうなの？！さすがにもう行かないわよ…」

あ、でもそのときの依頼者の研究仲間で、薬の研究してる人が薬草入手の依頼をよく出してるのよ。」

ほへ…薬の研究って何かすごそう。

どんな薬作るんだろ？

苦くない薬とか作れないのかな…

「錬金術師アルケミストたちは、それぞれにいろんな研究してるみたいなのよね。」

人によつては、自分で作ったもので戦ったりするようない冒険者もいるみたいよ。」

「作ったもので…戦うの？」

「苦い薬とか…？」

「ええっ?!…ふふふつ、まさかそんなことないと思うよ？」

もしかしてミアちゃん、よっぽど前の薬が苦かったのね。」

あたしの作ったのは、薬草を煎じて作ったものだけど、錬金術師が作るの、薬草だけじゃなくていろんなものを材料にするみたい。」

薬っていつても、ケガとか風邪を治したりするだけじゃないみたいだし。」

ますますどんなものを作ってるかわかんなくなってきた…

ん…あ、でも冒険者の人もいるってことは、もしかしたら白枝亭に泊まってる人にもいたのかもしれないよね。

これからも会う機会があるかもしれないし、もし会えたら聞いてみようかな…

「白枝亭のミアさん！」

「あれ、ミアちゃん呼ばれてるわよ。」

「はひっ？ちよっど行ってくるね。」

リゼルさんが呼んでくれたので、ちよっど駆け足でカウンターに急ぐ。

カウンターには、あたしが持ってきた書類がそろってる。

「お待たせしました。」

今回持ってきていただいた分はすべて受け付けたので、こちらで依頼に加えておきますね。

白枝亭でも掲示してもらえればと思います。」

「はい、よろしく願います。」

「あと、こちらの方は、ギルドの方からの依頼の分ですので、合わせて掲示してくださいね。」

「ありがとうございます。」

「今回はこれで全部ですね。」

お疲れさまでした。

またよろしく願いますね。」

リゼルさんが渡してくれた書類の束を受け取って、なくさないよう

に袋に入れてしまおう。
そして、あいさつしてカウンターを離れて、ユーリさんのところに戻った。

「あ、ミアちゃん、大丈夫だった？」

「うん、全部受け付けてもらえたみたいです。」

「そっか、よかったね。」

この後、宿にすぐ戻っちゃおう？」

「んと、あんまり混んでなくて早く終わったけど…」

「じゃ、ちよつとだけ待っててくれる？」

あたしも1つ依頼受けてきたら戻るから、帰りにうちに寄ってくれないかな？」

今もさつきと同じくらいであんまり混んでないから、ユーリさんの
もすぐ終わるよね。

それなら時間もだいじょぶなはず。

「うん、たぶんだいじょぶー。」

「よかった、実はまた新しいフレーバーのお茶ができたの。」

少し持って帰ってクルトさんにも味見してもらってほしいなって
思ってる。」

「わーい、新作ー！」

「もちろん、ミアちゃんの感想も聞かせてね。」

それじゃちよつと受付だけしてくるから待っててね。」

ユーリさんはそういうと、カウンターの列に並んだんだけど、あつ
という間に順番がまわってきそうだね。

新作のお茶、どんなのかな…？

早く飲んでみたいなー

76 代理見習い

お昼の後の片付けも終わって、どうしようかなくて食堂で考えてたら、扉が開いて誰が入ってきた。

「ただいま。」

あ、ミアちゃん、マリーさんどこかな？」

「フェリックスさん、おかえりなさい。」

マリーさん、下に降りてます。

多分すぐ戻ってくると思うけど……」

「じゃあ、戻ってきたら、ラルフが来てくれって言ってたって伝えてもらえるかな。」

「はい、わかりました。」

じゃ、ちょっと部屋戻ってるからって行ってフェリックスさんは上がってた。

ラルフさん、何か用事かな？」

あんまり遅いと、夜の準備もあるし、先に伝えに行った方がいいかな？」

マリーさんとラルフさんは、地下の倉庫で在庫の確認中なんだよね。やっぱり先に伝えに行こつと。

厨房の奥の階段を降りるとそこが倉庫の入り口。
上から声をかければいいよね。

「マリーさん。」

……

あれ？

「マリーさん!」

「ミアア? ちょっと待ってねー。」

あ、よかった、聞えたみたい。

すぐにマリーさん上がってきてくれた。

「どうしたの?」

「フェリックスさんが、ラルフさんが来てほしって言ってたのを伝えてほしって。」

「そう、ありがとう。」

「ちょっと待っててくれる?」

そういうと、マリーさんまた倉庫に降りてった。

そしてすぐに戻ってきたんだけど、エプロンを外してる。

「クルトにも言ったんだけど、鍛冶屋さんに行ってくるわね。」

「たぶん何もないと思うけど、一応カウンターに入っておいてもらえる?」

「下はクルトだけでいけるって言ってたから。」

「はい、いってらっしゃいです。」

マリーさんを見送ったあと、カウンターに入ってたんだけど、しばらく誰もこなくてちょっと眠くなったりする。

「ぼーっとしてたら、階段から誰か降りてくる音がした。」

「見てみるとフェリックスさんとレックスさんの2人が降りてきてる。」

「あれ、ミアちゃんがカウンター?」

「マリーさん、さっきの伝言聞いて、お出かけです。」

「そっか、ちょっと俺たちもまた出てくるわ。」

「はい、いつてらっしゃいますー。」

フェリックスさんたちを見送ったら、またぼーっとしちゃう。
マリーさん、普段ずっとカウンターに入っていたりするけど、眠くなったりしないのかな…

待つてるだけじゃなくて、もしかして何かしてるのかな？

なんてこと考えてたら、玄関の扉が開いた。

お客様かな？って思ったたら、酒屋のリユートさんだった。

「こんにちは…あ、いらつしやいましたか。」

「こんにちは、どしたんですか？」

「注文されていたお酒を裏に届けてあるんですけど、返事がなかったもので…」

あ、そっか、クルトさんまだ倉庫にいるのかも。
急いで呼んでこなくちゃ。

「すみません、すぐにクルトさん呼んできます。」

「はい、それでは裏に回ってますね。」

「お願いしまーす！」

リユートさんに返事して、倉庫に急ぐ。

おっきな声で呼ぼうとしたら、ちょうどクルトさんが上がってくる
ところだった。

「わふ…よかった。」

クルトさんあのね、今酒屋のリユートさんが、注文してた分を裏
に届けてくれるの。」

「ん？あ、そうか、今日だった。」

すぐ行くよ、ありがとう。」

「じゃ、カウンターに戻ってますね。」

ふい、よかった。

それにしても、夜に食堂に来るお客様、お酒頼む人いっぱいいるよね。

前に飲んだの、おいしかった気がするけど、覚えてないんだよね…
何でみんな平気なのかな…

あたしもおっきくなったらちゃんと飲めるのかな？

そんなことを考えながら、またぼーっとしてたら、階段からパタパタと音がする。

見てみるとアリサさんが走って降りてきてる。

「あー、ミアちゃんー。」

魔法士ギルドでー、約束してたのにー、すっかり忘れてましたー。

遅くなるかもーってー、マリーさんに伝えてくださいー。」

「は、はひ…お気をつけて行ってらっしゃいです…。」

そのままパタパタと走って、出て行っちゃった。

あんなに急いでるアリサさんは初めて見たかも…

あたし、こんなにボーっとしてていいのかな…

何かやることなかったっけ…

夜の準備、ちょっとでもやっておこうかな？

っていつても、テーブルふいたりするくらいしかできないけど…

結局どうしようかってまよってる間に、マリーさんは戻ってきた。

「ただいま、ごめんね、休憩時間もらっちゃって。」

「あ、おかえりなさいー。」

マリーさんは、何か布にくるまれた長いものを両手で抱えている。

何が入ってるんだろ…？

「ん…？どうしたの？ちょっと疲れた？

これだけ置いてきたら交代するから休憩してね。」

「う、ん…あ、でもだいじょぶだよ。」

何かお手伝いすることあったらするよー。」

「そうね…とりあえず置いてくるから。」

荷物を置いてマリーさんはすぐに戻ってきたから、報告だけすませ
ちやう。

「じゃ、リックとレックスとアリサが出かけてて、アリサは戻るの
が遅くなるかもしれないのね。」

「ご苦労さま、慣れてなかつたら疲れたんじゃない？」

クルトに、おやつ用意してもらってるから、奥で休んでらっしゃ
いな。」

「わーい、ありがとーです！」

厨房でクルトさんが果物を用意してくれてた。

クルトさんにお礼を言っただけ…お手伝いするって言
ったのにおやつにつられちゃった気がする…

それにしても、あの荷物って何だったんだろ…何だかちょっと気に
なるな…

77 荷物の中身は何ですか？

「昼間の荷物？

あれは剣なのよ…リックが気を使ってくれてね。」

今日も無事に食堂の営業も終わって、お茶で一息ついてるところで、気になってたマリーさんの荷物のことを聞いてみた。そしたらこんな意外な答えが返ってきたの。

「剣…？」

「そう、わたしが冒険者だったころに使っていた剣を、リックに引き継いだのは知ってるわよね。」

冒険者を引退することに決めたときに、少しでもあの子たちの力になればって思ってたね。」

「ふーん…どうして冒険者やめちゃったの？」

尋ねると、マリーさんちょっと赤くなって、ふふふって笑ってクルトさんを見た。

クルトさんも落ち着いてお茶飲んでるみたいだけど、ちょっと耳が赤い…よね？

「まあ…いろいろあったのよ。」

「いろいろ？」

「そう、いろいろ…ね。」

「えー、聞きたいよー！」

お願いしてみたんだけど、マリーさんはまた今度ねって…
むー…聞きたいなー…

「そうそう、剣の話が途中だったわね。」

実はラルフとお父さんが協力して作ったものなのよ。」

「ラルフさんが？」

「そうなの。」

リックたちが材料を持ち込んで頼んでくれたの。」

何でフェリックスさんたちがマリーさんの剣を頼むんだろ？

…もしかしてマリーさん、冒険に行っちゃうのかな…？

それ、困る…

「マリーさん、どっか行っちゃうの?!」

「え?別にいかないわよ…」

あ…違うわ、別にこの剣は、冒険者になるためのものじゃないわよ。

何ていうのかな、一種の備えみたいなものよ。」

備えていっても何の備えなんだろ…

剣って…戦うことにしか使えないよね…

やっぱり何だか危ない気がするけど…

「最近、いろいろあるみたいでしょ。」

だから一応、何か身を守るためのものがあつた方がいいんじゃないかって考えてくれたみたいなんだけどね。

わたしが使ってた「無垢なる白」インセント・ホワイトっていう剣は、とても珍しい素材で作られていて、普通に使われているような鉄なんかよりも軽いものだったの。

それと同じ形で、できるだけ近いものを作ろうとしてくれて、いろいろと材料を探してくれたみたいなのよね。」

そうなんだ…よかった、マリーさんがどっか行っちゃうんじゃないわ

て。

フェリックスさんたちも、マリーさん想いなんだね。
何だか素敵な関係だよね！

「でも、使わずにすめば一番いいんだけどね。」

「あ…うん、そーだよね。」

前に聞いたときからも、タレイアに悪魔が来たことはないみたいだからちよつと忘れそうだったけど、増えてるんだよね…

タレイアが襲われたりしなければそれが一番いい、みんなが平和に過ごせるのが一番いいよね。

それにしても、マリーさんってどれくらい強かったんだろ？

『プリマ・ホワイト白の舞姫』っていう名前でも知られてたみたいだし、ちよつと有名な人っぽいよね…マリーさん自身はこの名前、あんまり好きじゃないみたいけど。

「マリーさんって、フェリックスさんより強いのか？」

「ええっ?!急にどうしたのよ…」

「だって、フェリックスさんたちみんなマリーさんのこと尊敬してると思うし、レックスさんだってマリーさんのこと、すごい人みたいに言ってた気がするから。」

「さすがミアはうちでがんばってるだけあって、人を見る目ができているみたいだね。」

びっくりしてるマリーさんをよそに、クルトさんが嬉しそうにそう言ってくれた。

がんばってるなんて言われると、ちよつと恥ずかしいけど、嬉しいな。

「まあ、マリーは純粹な戦士ファイターではなかったし、比べるのは難しいかもしれないね。」

「ほへ？」

「強さだけで尊敬されたわけじゃないんだと思うよ。」

「マリー、そんなに膨れなくても、ミアなら別にいいじゃないか。」

「

もーって言って膨れてたマリーさんも、笑ってるクルトさんを見てふうつと息をついて、お茶をすすってる。

でも、にこにこしてマリーさんの方を見るクルトさんの視線に負けて、自分で言うわよって話し始めてくれた。

「わたしは魔法も使えないし、武器だってまともに練習したことなんてなかったの。」

兄たちとチャンバラみたいなのはしてたけどね…

だから、いざ冒険者になるときにどうしようかって思って、とりあえず最初は戦士として登録したの。一緒にいる間に、兄から剣の使い方なんかを教えてもらってたね。」

へー…それでもちゃんと冒険者してきたんだからすごいよね。

「ある程度、戦えるようになってきたところで、兄のいた冒険者のグループの人たちと一緒に連れて行ってもらえるようになったんだけど、そのグループに、舞踊士ダンサーがいたのよ。」

「舞踊士？」

「そう、その人に呪舞を教えてもらって、途中でわたしも舞踊士に変えたの。」

職業クラスって変えられるんだ…

途中で得意なことが変わっても平気だね。

あたしは変える必要もないと思うし、冒険するかどうかもわかんないけど…

「ま、そういうことで今日のお話はおしまいね。

遅くなる前に片付けちゃいましょう。」

「えー…」

マリーさんは、言うが早いか自分のカップを持って水場に行っちゃった…

何だか急いでる…？

前を見るとクルトさんが口に指を当てて、しーっしててる…あたしも口を押えてうなずいた。

「マリーが『白の舞姫』って呼ばれてるのは、舞踊士だったからなんだよ。

でも、恥ずかしくてその話をしたくなかったんだと思うから、これは内緒だからね。

さ、片付けに行こうか。」

そっか…何で恥ずかしいかはよくわかんないけど、今日はこれ以上お話聞けないっばいしお片付け行かなきゃね。

そいえば…ジユブって何だったんだろ？マリーさん教えてくれるかなー？

マリーサイド…田舎（前書き）

1話より少しだけ前の話です。

マリーサイド…出会い

ここタレイアで冒険者の宿を初めてそろそろ2年、常連さんも増えて、最近ようやく板についてきたかなって思ってる。

今日も誰かが元気に…っていつか多少乱暴に扉を開いて…

「マリーさん、ただいま！」

「こらリック、そんなに勢いよく開けたら傷むでしょ！」

「ごめん、でもいきなりだけど、ちよつとこの子を頼むよ！」

あとから続いてきたラルフの背中には、小さな女の子が背負われている。

ぐったりとした感じだけど、呼吸は乱れてない。

「その子、どうしたの？」

「帰りに街道沿いに倒れてたんだよ。」

服装も服装だし何かあったらと思っ、連れてきたんだ。

アリサ置いていくから、預かってもらえるかな？」

よく見てみると、女の子は質素なチュニツクを着ているだけで、靴もはいてない。

とりあえずラルフに指示して、ちよつと硬いけどテーブルの上に寝かせさせる。

「それで、あんたたちはどうするの？」

「詰め所に行つて、何か情報ないか聞いてくるからさ。」

慌てて入ってきた割りには、しつかりと考えて動いてるわね。

さすがはリーダーってことかしら？

現状で詰め所で聞くのが一番早いはずだから、リックの判断は間違っていない。

「わかったわ、行ってらっしゃい。」

「あ、マリーさん、俺は冒険者ギルドの方に話通してくるので…」
「了解、ラルフも気をつけて。」

入ってきたときのようにバタバタと3人が出ていく。

エリカはリックについていったのかしら？

さて、一応クルトにお願いしようかな。

「アリサ、2階の一番手前の右側の部屋に寝かせるから、ベッドだけ用意してきてくれる？」

わたしはクルトを呼んでくるから。」

「はいー、まかせてくださいー。」

アリサはこんなときでも緊張感ないわね…

まあこの子のおかげでみんなが落ち着いて行動できたりするんだけどね。

アリサに部屋のことを任せて、厨房に急ぐ。

もしかしたら、もう仕込みを始めてるかもしれないけど…

厨房をのぞいたら、クルトはまだ準備前みだった。

「クルト、ちょっと手伝ってもらえる？」

「どうしたんだい？」

「リックたちが女の子を連れてきたんだけど、意識がないのよ。それで上まで運びたくて。」

すぐに動いてくれたクルトと、女の子を上まで運んでいく。

アリサはきっちりベッドメイクしてくれてたから、そのままベッド

に寝かせてあげただけで、女の子は一見眠っているだけのように見える。

ただ、ずっとラルフに背負われてきて、今も階段を運んだのに、一向に目を覚ます気配がないのが気になる。

「アリサ、この子どういう状態なの？」

「よくわかりませんー」

見つけたときはー、少し意識もー、あつたんですけどー…

でもー、ケガをしているとかー、そういうことはー、ないようですよ。ー」

「そう…それじゃ、しばらく任せるわね。

もし何かあればすぐに下に知らせて。」

とりあえず、女の子をアリサに任せて、わたしとクルトは夜の食堂の準備をすることにした。

クルトが厨房で仕込みをしてくれている間に、わたしが食堂の準備。これは宿を始めたときからずっと決まった役割分担だから、もう体が覚えているようなもの。

イスは降りたままだから、夜の準備はテーブルを拭くことと、お酒を提供する準備をすることになる。

「ただいま。」

「あら、おかえり。

何かわかった？」

準備をしていると、リックとエリカが帰ってきた。

でも、その表情は浮かない。

どうも情報はなかったみたいね…

「だめ…でした…」

「そう…でも、もしかしたらこのあと何か情報が入ってくるかもしれないわね。」

「ああ、アリサは？」

「女の子についてもらってるわ。」

「2階の右側の一番手前の部屋にいるわよ。」

ありがとうと言って、2人は2階へ上がっていく。

困ったわね…ラルフの方で何かつかめればいいんだけど。

早いお客様がちらほらといらしたくらいに、ラルフも帰ってきた。こっちもあんまりいい表情じゃないわね。

「今帰りました。」

「おかえり、遅くまでごくろうさまだったわね。」

「それらしい話は何もなかったの、もし何かわかればここに知らせてもらえるようにしてもらいました。」

マリーさんとクルトさんには申し訳ないんですけど、何か情報が入ったら受け取ってもらっていいですか？」

「わかったわ。」

「とりあえず、みんなは2階の右側の一番手前の部屋よ。」

結局、食堂の営業が終わるまでに新しい情報が届くことはなく、女の子も目を覚まさなかつたみたいで、リックとラルフが食事を上でとりたいからって、4人分持っていったつきりだった。

食堂の方も片付けがすんだので、クルトと一度、様子を見に行こうかと話しているときに、エリカが降りてきた。

「マリーさん、あの子、目を覚ました。」

「ほんと？よかったじゃない。」

「でもね…ちょっと上に来てもらっていい？」

今から上がるところだったし、それは問題ないけれど、何かエリカの言い方に引っ掛かる。

問題でもあったのかしら？

クルトと顔を見合わせるけど、クルトもわかるわけないわよね。行ってみなきゃダメよね。

2階の部屋に上がってみると、ベッドの上で女の子は上半身だけを起こして、アリサに支えられてた。

少し乱れているけれど、きれいなシルバーグレイの髪が、アリサの魔法でつくった光に照らされてきれいに輝いている。

でもその眼はまさに寝起きそのもので、黒い瞳が半開きの眠そうな瞼の隙間から覗いている。

「あ、マリーさん、クルトさんもわざわざすみません…」

「いいのよ、それでどんな状態？」

「それが…名前はミアって言うらしいけど、他に何も覚えてないって…」

リックが相当に困った顔になってる。

それはそうよね…詰め所にも、ギルドにも情報がなくて、本人も覚えていないじゃどうしようもない。

アリサは引き続き、女の子にいろいろ聞いてくれているけれど、どうにも望みは薄いわね…

「リック、ちょっと下に来てくれる？」

「ん？俺だけでいいの？」

「ええ、あんただけでいいわ。」

クルトの袖も引つ張って一緒に降りてもらおう。

明日の朝、すぐに何かがわかればいいけど、あのくらいの年の子がいなくなつて、詰め所やギルドに情報が入っていないっていうことは、この街の子でない可能性も出てくる。

このままあの子が何も思い出さないうときは、身の振り方を考えておかなければならなくなる。

食堂のテーブルで、リックとクルトと3人で座り、わたしは考えていることを話した。

「……ということで、あんたたち、あの女の子をどうするつもり？」

「どうするって……思い出さなきゃ……孤児ってことだよ……」

「そうね……あんたたちが面倒みれないなら、孤児院にでも預けるしかないわ。」

「……孤児院、かあ……」

そこでリックは考え込んでしまった。

この街にも一応孤児院があるにはあるけれど、運営状況はあまりいいとは言えない。

子どもたちは、自分たちで畑仕事をしたり、街の仕事を手伝ったりしているが、それだけですべてを賄うことはできていないようだし、寄付も十分と言えるまでは集まっていないのが現状だから。

結局、リックはその場で結論を出すことはできずに、一度みんなで話したいと言つて上がった。いった。

クルトずつとは話を聞いているだけだったけど、何か考えているみたい。

次の朝、リックたちはいつもよりも遅めに朝食をとり降りてきた。女の子も昨日よりずっと元気になったみたいで、リックたちと一緒に降りてくる。

「おはよう。」

今日は少し遅かったのね。」

「ああ、マリーさん、あとでちょっと話があるんだけど、朝の片付けが終わった後でいいかな？」

「わかったわ。」

クルトにも声をかけておくわね。」

食堂の片付けがだいたい終わったところに、リックたちがまた降りてきた。

残念ながら、今のところ、女の子に関する情報は届いていない。とりあえずテーブルについてもらっておいて、クルトを呼んでくる。クルトもだいたい片付けが終わっていたみたいで、すぐに来てくれた。

「それで、結論は出た？」

「ああ、実はこの子をここに置いてもらえないかなと思って。」

とりあえず次の仕事が終わるまではお願したいんだ。

「この子の分は俺たちが払うからさ。」

うん、それはわたしも考えないではなかった案なのよね…ただ、宿代をリックたちが払うっていうとは思わなかったけれど。

女の子は、昨日と違って、黒目がちな大きな目をくるくるさせながらあつちを見たり、こつちを見たりしてる。

まるで昨日とは別人のように、年相応の元気が見えて、微笑ましい。

「それは構わないけど、それじゃ、問題を先延ばしにただけよね。そのあとはどうするのよ?」

「泊まっている間に、ここの仕事覚えてもらって、ここで雇ってもらったり…はできないかな?」

「この子にも聞いたら、そうしてみたいって言ったし。」
「へっ?!」

これにはわたしも驚いてしまった。

けど、意外といい案なのかもしれない。

クルトの方を見ると、リックの方を見てうなずいてる。

「クルト…いいの?」

「マリーはどう思うんだい?」

「うん、この子たちの想いはわかったし、いい案だと思ってるわ。」

「それなら、問題ないだろう。」

リック、宿代はいいよ。

仕事なんて、手伝ってもらっていく中で、徐々に覚えていってくれればいいさ。」

何だか、クルトはこうなることを予想してたみたい…

クルトには勝てないなあ…さすがよね。

それじゃ、しっかりとあいさつしておきますか。
きよるきよるしている女の子の手を取って、ゆっくりと話しかける。

「こんにちは、ミアちゃんだったけ？」

「あ…う…こんにちは…」

「元気がないわね」。

今日からあなたにはうちの宿でがんばってもらいたいなと思って
てるんだけど、どうかしら？」

「え、と…ここで働きたい…です。」

「そう、よかった。」

でもね、うちのお客様がたくさん来るから、元気にあいさつでき
る子じゃないとダメかな…

ね、だからもう一度、こんにちは。」

「こ、こんにちは！」

うん、素直ないい子みたい。

何か情報が入ってくるか、記憶が戻るまで、どっちかになるかもし
れないけれど、それまで一緒にがんばってくれそうね。

「はい、よくできました。」

わたしはマリーよ、よろしくね。」

「私はクルトだ。」

一緒にがんばっていいこうね。」

「えと、えと、ミアです。」

「よろしく願います！」

こうして、小さな女の子、ミアはうちの宿で働くことになった。

何だかこれから楽しくなりそうな予感がして、わたしは、そしてき
つと今ここにいるみんなも嬉しい気持ちでいっぱいになった。

今日から始まる新しい白枝亭はどんな風になるのかしらね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0160v/>

モノクロームの夢の中から

2011年10月12日14時53分発行